アバドゥータ　リーラ

バガヴァン スリ

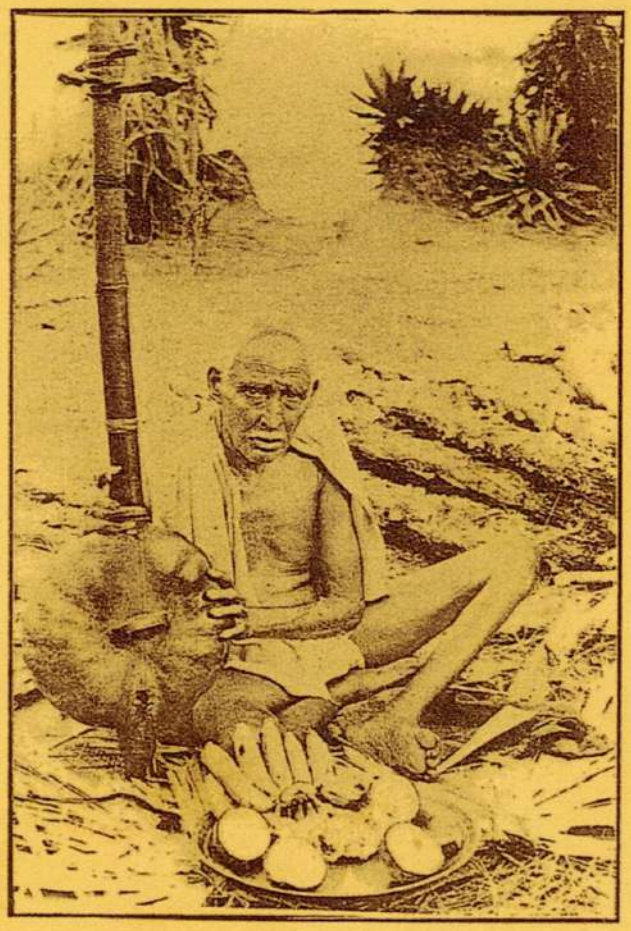
ベンカイア　スワミィの生涯

AVADHUTA LEELA

LIFE HISTORY OF

BHAGAVAN SRI

VENKAIAH SWAMY



E．バラドワジャ原著（テルグ語）　P．スッバラマイア著（英語版）

渡部英機訳　日本サイババ研究会発行

アバドゥータ　リーラ
バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィの生涯

AVADHUTA LEELA

LIFE HISTORY OF BHAGAVAN SRI VENKAIAH SWAMY

By P. Subbaramaiah

Copyright 1995 P. スッバラマイア

This book is produced with the permission of Mr. P. Subbaramaiah

この本の翻訳と出版は、P. スッバラマイア氏の許可を受けています。

This book is translated into Japanese and published by Hideki Watanabe at Institute of Bhagavan Sri Sathya Sai Baba in Japan

祈り

宇宙はグルの中にその存在を有している。グルは宇宙に（その真髄として）住まっている。グルは宇宙であり、彼以外に何も存在していない。そのようなグルに対し、ご挨拶申し上げます。

献辞

私の最大の感謝と献身を、私の霊的幸福について世話してくださり、祝福を受けるよう、私をアバドゥータ　スリ　ベンカイア　スワミィの許に派遣し、私が揃えた資料によって、スリ　ベンカイア　スワミィの生涯に関する最初の書を編集し、出版されたアチャリヤ　E．パラドワジャ　ガル　ガルの蓮華の御足の許に、またスリ　ベンカイア　スワミィのセバ（奉仕）をするよう私に祝福を与えて下さった、スリ　シルディ　サイババの蓮華の御足の許に捧げます。

次に、私に英語版の不相応な仕事を命じると共に、ささやかながら、その栄光を讃え歌うよう鼓舞して下さった慈悲深いバガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィの蓮華の御足の許に感謝を捧げます。

又、私に大学教育を与え、気高い教師の職業を授けて下さった母親P．セシャンマ兄ペサラ　ラマイアにも感謝を捧げます。

私の心からの感謝を、この英語版の編集で骨折って下さったスリ　P．V．スブラマニアン　MA（文学修士）に、又、この書の出版のために寄金をして下さった方々と、タイプ打ちで骨折って下さったスリ　G．ベヌゴパールに、また人々が純粋の道を歩む助けとなるよう、彼ら自身の家や公共の場所でサトサング（集会）を行う人達に対しても捧げます。

この最初の英語版の出版をするにあたり、助力して下さった全ての人に、スリ　スワミィが祝福を与えて下さいますよう祈ります。

教師は神であります(Acharya devo bhava)
私の師に対しお辞儀いたします

私の大きな感謝と心からの敬意を、父以上に私を愛して下さり、慈悲深いスワミィの蓮華の御足の許に派遣し、バガヴァン　スリ　ヴェンカイア　スワミィと帰依者達との体験を収集するよう私を指導し、「アヴァドゥータ　リーラ」の題でテルグ語のスリ　スワミィの最初の書を編集し出版して下さったアチャリヤ　スリ　E．パラドワジャ　ガルに捧げます。

私は英語の知識は豊かでありませんが、聖者方の生涯を帰依心をもって信者達で読む「サトサング」がサムサーラ（この世）から出る唯一の方法であるとの師のかけがえのない助言によって、私はこの書「アヴァドゥータ　リーラ」を英語に翻訳し、読者とサトサングの喜びを分かち合いたいと思うようになりました。アチャリヤ　バラドワジャ師の神聖な書物と談話は私を啓蒙し、多くの平安と満足感を与えて下さいました。私は慈悲深いスワミがこの書の読者方にスリ　バラドワジャ師の書物を読む機会を与え、また真のサダカ（修業者）の人生を平安と満足感をもって送るようにして下さることを祈ります。

スワミィのメッセージを伝達するあたっての文章上の欠陥の全ては、私の至らぬ英語力のせいであります。読者方が文章の要点を理解して下さり私の言語上の欠陥を大目にみて下さることを願うものです。

ジェイ　アチャリヤ
デヴォ　バーヴァ

P．スッバラマイア

PUJYASRI ACHARYA **E. BHARADWAJA**

目次

祈り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
グルの呼び声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
序文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
信仰的パラヤナ（１週間での完成）の方法・・・・・・・・9
１、バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィの生涯・・１１
２、プラクリティ（物質世界）とプルシャ（霊世界）・・３１
３、全知なるスワミィ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
４、ダルマ　ムールティ・・・・・・・・・・・・・・・・・・４９
５、全ての人の心からの呼び声に反応する・・・・・・・・６９
６、アバドゥータの振る舞い・・・・・・・・・・・・・・・７５
７、奇跡的視覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９０
８、ダクシナ（感謝の捧げ物）・・・・・・・・・・・・・・９７
９、ムクティ　ドゥワラム（解脱の門）・・・・・・・・・１００
１０、帰依者達の保護・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０３
１１、スリ　スワミィを信じない人達・・・・・・・・・・１１９
１２、数々の生涯の後での記憶・・・・・・・・・・・・・・１２１
１３、至高の医師・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２４
１４、罪人達の浄化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３４
１５、スリ　スワミィは謎・・・・・・・・・・・・・・・・・１３７
１６、太陽と月が存在する限り・・・・・・・・・・・・・・１４０
１７、スリ　スワミィの神聖火に仕えなさい・・・・・・・１６３
１８、帰依の道のための生活信条・・・・・・・・・・・・・１６３
１９、バジャナ（バジャン）・・・・・・・・・・・・・・・１６４
２０、スリ　スワミィの言葉・・・・・・・・・・・・・・・１６５
２１、グル　スマラナ：グルの思い出・・・・・・・・・・１６６
２２、サダナ（霊性修業）の秘訣・・・・・・・・・・・・・１６９
２３、スリ　サイとスリ　ベンカイア　スワミィ・・・・１７７
用語解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７９

グルの呼び声

１９６６年、私はアンドラ・プラデシュ州ネロール地方タルプール中学校（理科の）教師に任命された。その頃、スワミジはよく私の隣人の家を訪問していた。私はごく近くからスワミジを見ることができた。当時、私は彼の前にひざまずきもしなかったし、毎日彼に会う他の人達のように世俗的な目的をもって彼に近付くこともなかった。１９７５年、幸運にも神の恵みにより、私はパラマ　プジヤ　スリ　アチャリヤ　バラドワジャ　マスタージ（大先生）に会うことが出来るようになった。私は１週間に１度定期的に、そのための旅に２０ルピー使って師に会いに行った。１年間の師の説得にも拘らず、私は自分の村カリチェドゥで会うことのできるスワミジに、会うに値しないと考え近付かなかった。１年後、スリ　バラドワジャ師は無理に私に、「この世の神」であるスワミジの霊的力を試させ且つ彼に帰依させようとした。師はさらに私に、スワミジの霊的力を見出すあるヒントを授けた。

スリ　スワミィは、いつも仕えている１２人の従者の内の特別な３人以外の誰にも、自分に触れることを許さなかった。彼は誰からの何でも、自分自身の手では受け取ろうとしなかった。もし従者達がマットの上にタバコを置いたら、彼はそれを取った。このため、私はスワミィの所に行った時、心の中で「あなた様は全ての聖者の中にいることを実証されています。もしスリ　ベンカイア　スワミィがあなた様のように完全な聖者であるなら１０分以内に彼が私に、彼の足を油でマッサージするように言い、この少量のジャガリーとプルス（揚げたベンガル豆）を私が頼まなくても食べますように」と、サイババに祈った。

２人の従者が、訪問者達がスワミの御足に触らないよう、いつもスワミィの世話をしていた。数秒内に２人の従者とも用便に出掛け、スワミィだけになった。情深いスワミィはすぐに私に手をのばして、「あなたは、何か食べ物を施してくれませんか？」と言った。私は大喜びした。そして、プルスの粉とジャガリー（砂糖黍の搾り汁）を差し出した。スワミィはそれをとって食べた。更に、スワミィは私にオイルで足をマッサージしてほしいと言った。私はその御足ばかりでなく体中をマッサージし、油浴も施した。その日から、私は度々スワミジを訪問し、尊師の御傍で余暇を過ごすようになった。御側にいる間に、師は私が言葉に出さないまま抱えていた思いに答え、師に対して芽生えた私の信仰心を花開かせて下さった。

私がスワミィに家においで下さいと懇願する度に、スワミジは、「今は行かない。後で会うだろう」と答えられた。１９７７年、私は聖なるグル

プルニマの日にスリ　サイリーラムルタムを１３度目のパラヤナ（説明書を読むこと）を完了した。その日、私達は１２時間スリ　サイ　ジャパヤグナ（儀式的礼拝祭典）を行っていた。私達はサイナス（サイババ神）に、スリ　ヴェンカイア　スワミィの姿での働きの恵みを祈った。全く驚くべきことに、師は私達の祈りに応え、そのグルプルニマの日にわが家に来られた。師はその聖なる火でわが家を、又ジャパ　ヤグナが行われていたスリ　セシュギリ　ラオの家をも訪問された。このようにして、スワミジは、彼御自身がシルディのスリ　サイナスその方であることを実証されたのだった。

ある夜、スリ　サイリーラムルタムを夢中で読んでいる間に、私はあらゆるもの（財産）を失ってスリ　ヴェンカイアア　スワミィに助けを求める夢を見た。グルプルニマの日に、スワミィがわが家を訪れた時、師は不明瞭な言語で私の先の夢のことを話したが、詳しくは言わなかった。

１９８０ー４ー１３、私はタルプール村でスワミィのダルシャン（見ること）を受けた。師は「先生はマタムをしなければならない」と告げるメモを私に手渡した。その時、私はその言葉の意味が解らなかった。しかし、１９８３年１２月にスワミィが私にゴラガムディのアシュラムにずっと居るよう命じた時、３年前にメモで与えられた祝福の意味が解るようになった。

別の日の夢で、スワミジは私に「油なしで木を燃やせ」と命じられた。私は油ものを食べると必ず、喘息の発作がひどく起こるようになった。段々私は夢の指示の意味が理解できるようになり、食事で油ものをさけるようになり、慢性の喘息が軽くなった。

ある日、私はスワミジに、暫くの間師のお側でお仕えしたいと願い出た。スリ　スワミィは「君が自分の食事を用意するなら、いてもよろしい」と言われた。その日から、私はスワミィを訪問した時はいつも自分で食事を作って食べることにした。

ある日の夢で、スリ　サイナスが私にチリ（冷たいもの）とタマリンドと塩を食べないようにと命じられた。この指図に従うため、私は自分の食事を別々に作らねばならなくなった。このようにスリ　スワミィの姿で、スリ　サイナスは私に彼の指図に従わせたのだった。

１９８２年8月２４日のスワミィのマハサマディの後、私は頻繁にはスリ　スワミィのサマディを訪ねなかった。１９８３年１１月に、私は友人の家で食事をして、スワミィの指示に違反した。その結果、次の瞬間から私は酷い喘息ばかりか、咳とひどい寒気で１ヵ月間苦しんだ。同毒療法を含めたあらゆる医療も効き目がなく、医者達は、マドラスに行って治療を

受けるよう勧めた。液状や固形のどんな食事をとっても、私の苦しみは増大した。そのため１月も経たぬ内に、私は骨と皮ばかりになった。私はマドラスに行く前に、ゴラガムディのスワミィのサマディ（墓所）に３日間滞在しようと思った。奇跡が起こった。私がゴラガムディへ行くためにバスに乗った瞬間から、私の全ての障害は魔法のように忽ち消えてしまった。私はゴラガムディに３日間滞在し、よく食べぐっすり眠った。３日の内に体重は普通に戻り、目にも顔にも生気が蘇った。３日目の夜、翌朝の出発のため荷作りすると、忽ち以前の喘息の症状その他の全てが再発し、私は１時間半の間苦しんだ。バリガラ　ナガイアの助言で、私はスワミィに、日中の勤務を終わってから毎晩サマディを訪問しますと誓い、慈悲を祈った。数秒内に、私の全ての苦痛は消えた。

その日から私は毎日約１４０キロの凸凹の道を旅して、ゴラガムディのスワミィのダルシャンを受けることにした。このような旅を、私は１年間行った。しかし、私の生地カリチェドゥを離れるようにとのスワミジの指図はなかった。そのため、私は家族をゴラガムディに連れてきて、毎日生計のために凸凹の道を旅することを続けた。１９８９年の３度めの１１月に、スリ　スワミィは私に教師の仕事を辞職して、自分に仕えるようにと命じられた。私はそうして、バガヴァン　スリ　ヴェンカイア　スワミィに仕えて毎日を過ごしている。

スリ　スワミィの祝福とアチャリヤ　シュリ　Ｅ．バラドワジャの助言で、私は帰依者達のスリ　スワミィとの体験談を集め、編集し、「アヴァドゥータ　リーラ」の題のテルグ語の書を１９８４年にアチャリヤ　Ｅ．バラドワジャ　ガルに出版して頂いた。英語の本書は、アチャリヤ　スリ　Ｅ．バラドワジャ　ガルのテルグ語の「アヴァドゥータ　リーラ」の原本の純然たる翻訳である。

現在、私は苦しみも姿を変えた一種の祝福であると信じている。私は苦しむことによって、師のサマディのダルシャンを受ける人々の苦しみを取り除く輝かしいサマディ　マンディールに仕えるという祝福を与えられているのである。

序文

苦しんでいる人々を救い、サダカ（霊性探求者）達を導くために、パラマートマ、即ち（姿も名も持たない）神は、人の姿をとり、私達の中でサドグル（真のグル即ち霊性指導者）として生きる。サドグル達は遍在で、

全知で、全能でなければならない。これらのホールマーク（品質証明）がなければ、彼らは偽グルと見做されるだろう。ゴラガムディのバガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィは、そのような第１級の聖者で、現代インドのサドグルであり、１９８２年８月２４日まで、この世に生きていた。帰依者達の体験談は、彼が遍在で、全知で、全能であることの真実を確証するものである。

「シッダプルーシャ（超能力を有する聖者）は決して死なない。彼らは死を超克している。彼らは、ずっと生き続けており、全てに行き渡っている。彼らは、いつでも、どこの場所の帰依者達の呼び声にも反応する」バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィの帰依者達の体験談は、上記の声明の証明である。

スリ　スワミジの恵みを獲得するためには、カーストや人種の制限はない。あらゆるカーストと宗教の人々が彼を崇拝しており、霊的にも物質的にも恩恵を受けてきている。

サドグルのことをいつも思うことは、カルマの拘束力（カルマの結果の拘束力）を無効にすることと、アートマ　グナナ（アートマの知識）の獲得へと導くだろう。私は師の日常生活と話の詳細を記載した。これは私達が揺れ動く心を師に集中させるために役立つでしょう。師の生涯はサムサーラの海（この世という海）を航海する人々を導く北極星である。全ての動物への愛、質素純朴、目標に向かってのシュラダ（不屈堅実さ）、目標を成就するための献身的生き方、バイラギャ（無執着）、ダルマ（正しさ）への固執、感覚的欲望の統制が、彼が私達に生前実行し、教え示した道の幾つかである。

私達はスリ　ラマナ　マハルシとシルディのサイババに会ったことはないけれども、１９８２年まで生きていたスワミジに会うことができる程十分に幸運である。彼はマハサマディの日まで、非常に巧みに自分の霊的力を隠していた。彼は不必要に知れ渡ることを避けた。マハサマディの後になってやっと、帰依者達はお互いに自分達の体験を思い切って明かし、その感激に浸った。

この世での使命の１部として、慈悲深いスワミィは人々に彼の書を出版するよう鼓舞している。この目的のために、彼は遠近から人々をゴラガムディに引き寄せ、彼らの体験を集めるよう私を鼓舞した。例えば、慈悲深いスワミジは、ある時スリ　チャラマナイドゥの牡牛の命を虎の爪から救った。私はこの経験を記録した。しかしスワミジの古参の従者ロシ　レディはそれを架空の報告であるとして、記録からそれを削除するよう私に要求した。皆が驚いたことに、３日目に上記の経験をチャラマナイドゥから

直接聞いたある男が、数百マイルも離れたチックマンガルルから遥々やってきて、スリ　ロシレディの前でその経験の真実であることを確認した。そのため、その経験は現在の書に入れられた。一体、誰がその男を遥々チックマンガルからゴラガムディに行くようにさせたのか？スリ　スワミジ以外の誰がそれが可能であろうか？このように、彼は自ら無知な人々をスブラマルガ（正しい生き方）へと導くために、この書を通して世界に彼のリーラ（奇跡）を説明した。

ある時、スリ　スワミジはこのゴラガムディのことを「アイッヤ！コネル（池）とアンジャネヤ　スワミィの寺院の間の、７ジャンマ（ガータ）ータ）の間に、巨大な食料の山がある。誰もそれに手を触れたことがない」と話した。ここでの「巨大な食料の山」とはスリ　スワミジの豊かな力い苦行を意味する。この栄光の地に歩を入れた人々への私の助言は、少なくともここゴラガムディにいる間は世俗的な会話をせず、スワミィの愛と霊的力を思い出し、彼の祝福を喚起するようにしてほしいことである。

信仰的パラヤナの方法

もし私達が帰依心をもって一定の方式でこの書を読むならば、スリ　スワミィの広大な恵みを容易に呼び起こすことができるでしょう。それがダッタ（シバ神の化身）の伝統である。

この書は、誰でもが時間のある時にサプタハ　パラヤナ（１週間以内にこの書を読了すること）をすることができるように作成されている。パラヤナの間、スリ　スワミィの写真を礼拝しナイベディヤ（供物）を捧げることは、スリ　スワミィの恵みを呼び起こすために大いに助けとなるでしょう。そのようなパラヤナの終了毎に、スワミィにココヤシと花を捧げることと、１、２人の人をスリ　スワミィの写しであると考えてその人達にダクシナ（捧げ物）をすることはよいことです。

そのようなことのできない人達は、スリ　スワミィの名で家の外に多くの食物を置いておくとよいし又自分の力に応じてゴラガムディ　アシュラムにダクシナを送るとよいでしょう。

生理の間は、女性達はこの書を読むべきではない。もし悲しみに打ち拉がれなければ、ミラ（人の死によるスタカム、喪中）はパラヤナの障害ではない。

もし可能なら、１週間で１度パラヤナを完了するのが望ましい。他の日数でパラヤナを行うのもよい。

もし私達がゴラガムディのスリ　スワミィの御前でパラヤナを行うならば、それは素晴らしくよいことである。

アラダナの時間、即ち８月２４日にセバを捧げることは帰依者達にとってよいことである。

この書のパラヤナをある回完了した後は、この書の中に述べられている聖者達の伝記を読むことが有益でしょう。７月にあるグルプルニマの前と１２月にあるダッタジャヤンティ（ダッタトレヤの誕生日）の前にパラヤナを完了することと、これらの祝祭を祝うことは帰依者達にとって大いによいことである。これらの祝祭の前にスリ　グルチャリトラとサイリーラムルタムのパラヤナを行うことはもっと有益でしょう。その期間中もしグルギータの詞句を読み、詞の意味を記憶するならば、私達はきっとサドグルの恵みを受けることでしょう。

スワミィへの奉仕の特別な方法が、スリ　グルチャリトラとスリ　サイリーラムルタムの中で、またスリ　サイ　プラボーダムルタムの中に説明されている。

アチャリヤ　Ｅ．バラドワジャ（原文はテルグ語）

1、バガヴァン スリ ベンカイア スワミィの生涯

タルプール・チェロパリはインド、アンドラ・プラデシュ州ネロール地方の村の１つである。その年、１粒の雨も降らなかった。村の灌漑用タンクは完全に干上がった。飲料水の確保が村の主要問題となった。不安で陰鬱な事態が村人達に覆い被さった。もし雨期が来ないならば、神の他に誰が人間を救うことができようか？

その切羽詰まった村で、ある日村人達の間にはしゃいだ騒ぎが起こった。多くの人が「スワミィが来られた、スワミィが来られた」と叫びながら、ある場所に駆けつけた。一人の痩せた老人がバクタ達の群れの前のパルミラヤシの葉の上に座っていた。丸太の薪の火が老人とバクタ達との間で燃えていた。老人はオーカローブ（黄土色の上着）も数珠も杖や三叉矛などの人を引き付けるような派手な表象を何ももっていなかった。彼は非常に質素で、私達は彼がスワミィであると信じることができなかった。彼は、丁度遊びに夢中の子供のように、自分の世界を楽しんでいた。彼は周りの群集に気付いていないかのようだった。彼は何事かをつぶやいており、指で何かを数えていた。丁度その時、村の年長者の数人が彼に何かを話そうとしたが、そのような老人の様子を見て、話し掛けかね黙って立っていた。老人は急に、少し離れた所で肩紙を食っている牛を見つめた。少しの間鋭く観察すると、「アイヤ！（呼び掛けの言葉）」と叫んだ。呼び声に応えて、１、２人の従者が近付いてきた。老人は命じた。「貯水池に行かねばならない。さあ、行こう」従者達は、「何のためにですか、スワミィ？」と尋ねた。

スワミは答えた。「彼らがそこに行くよう命じた。だから、すぐに行こう」従者達は驚いて顔を見合わせた。他に方法もなかったので、従者達は老人を担ぎ籠（ドリー）で貯水池まで運んだ。池に着くと、彼は従者にそこで止まるよう命じ、そこに座ると従者達に火を燃やすよう求めた。数分で火が燃え上がった。彼は火の前に数時間座っていて、それから担ぎ籠で村に戻った。

彼が元の所に到着するや否や、雨がひどく降りだし翌日まで続いた。すべての貯水池が一杯になった。村人達の喜びの声は一晩中、蛙のようにこだましていた。皆が彼のことを、自然の５大元素を支配できる方だと大いに誉め称えた。母なる自然は慈悲深いスワミィに感謝して緑の野を歓呼して迎えた。

しかし、彼は人々のストートラ（神聖な出来事を話すこと）や称賛を喜ばないのだろうか？彼は人々の称賛を気にすることなく、従者達と一緒に村を出て行った。

時間の車輪（カラチャクラ）は素早く回った。丁度その日黙ってタルプール村を去ったように、この慈悲深いスワミィは１９８２年８月２４日にこの世を去った。

この悲しい報せは野火のように地域一帯に広まった。皆はスリ　スワミィとのこの別れに涙を流した。しかし、スワミィの約束「私は太陽と月がある限り存在し続ける」は、悲しみに打ち拉がれた人々の支えである。

１９８２年、ゴパーラム地方は雨不足のせいで飢饉に喘いでいた。牛はかいばと水を求めて大いに苦しんでいた。スワミィの従者の一人パラコンダ　スッバレディはバスで旅行していたが、「スワミィ、あなたは血と肉の体でおられた時は、私達の苦難を救って下さっていました。でも今、私達は誰に苦難を訴えればよいのでしょうか！雨が降らないため、牛達は飼い葉と水がなくて死にかけています」と祈った。慈悲深いスワミィが彼の霊眼に現われて、こう言った。「アイヤ！汝の嘆きは世のためであり、汝自身のためではない。だから、３日の内に雨が降るだろう」スワミィの言葉は本当だった。その日から雨が降り始めた。その年、雨はそれ１度だったが、全ての貯水池が完全に満杯になり、農作物はよい出来となった。

肉体上では、彼は私達の間にいないかもしれない。而も彼は遍在で全知で全能の霊魂として、どこにでもいつでもいて帰依者達の呼び声に応えられる。彼は神と人との間の橋である。

彼はインド、アンドラ・プラデシュ州ネロール地方の小さな村ナグラベラトゥールの敬虔な夫妻スリマティ　ソマパリ　ピッチャンマとスリ　ペンチャライアの間の長男として生まれた。彼には２人の弟と一人の姉がいた。現在は誰も生きていない。スリ　スワミジの正確な誕生の日時は判らない。スワミィは、自分はダツ（テルグ年の名）の大飢饉の時に１３才だった、と言っていた。だから、１９８２年には彼は百才以上だった（ネロールの老弁護士の話によれば）。

彼は少年時代、同年の他の少年達と似ていなかった。数日間ずつ彼はスリ　シッディラジュ　ラマイアの許に夜間の個人教育を受けるために行っ

た。１、２ヵ月後、貧しさのため、彼はその勉強を中止した。彼は５才頃から孤独を好んだ。遊び友達が一緒に遊ぼうと誘った時、彼はよくこう言った。「あのね！僕は盗みをした。きっと警察が僕を捉まえにくるだろう。もし君達が僕と一緒にいたら君達も一緒に捉まえられるよ。だから、僕から離れていた方がいいよ」子供達がいなくなると、彼は戸の後ろに瞑想のために座った（スワミジに殆ど３０年仕えた従者コマリギリ　ラマイアの話）。

スワミィは友達と一緒にナツメヤシの実等を取りに、よくジャングルに入って行った。彼は茂みの後ろに座って、瞑想をした。もし友人の誰かが邪魔をしそうなら、同じことを言って友達を追いやった。彼の妹マンガンマはゴラガムディで１９８９年に亡くなったが、彼の少年時代のことを次のように話していた。

彼は１６才の時、薪を切って２輪牛車に乗せてネロールに持って行って売っていました。また、皿に使うバンヤン（ベンガル菩提樹）の葉を採り、ネロールで売りました。彼は１２才で、その年では不可能な耕作の仕方を身につけました。彼は年長者達が十分満足するほど全ての農作業を行いました。彼は大きな関心をもって全ての作業を行ったので、見ている者達は彼の農作業の正確さを誉めました。溝は本当に真直ぐで、一方の端に置いた卵が他の端から見えるほどでした。それらは定規を使って紙の上に引いた線のようでした。彼は収穫物を大変几帳面に刈り取り、機械で刈り取ったようでした。収穫物は同じ高さに刈り取られ、その山は全て同じかさで、一本も散らばっていませんでした。恐らく彼は、小さな作業でも勤勉に行うことがヨガ修業そのものであることを、私達に示したかったのでしょう。彼は賃仕事のためにも畑でよく働きました。両親は彼のことを大いに尊重しました。それで両親は、彼が得た報酬の穀物の束を、他の労働者達のように、彼の頭に乗せて運ぶことをさせませんでした。両親はスワミィの妹や弟達に小さな籠を持って行かせ、彼の毎日の報酬の穀物をそれらに入れて持ち帰らせました。

彼は幼い５才の時、家の周りにタマリンドやマルゴーサ等の種をまきました。両親はそのことを余り気に掛けませんでしたが、それらは強大な木に成長しました。その頃、私達はそれがヨギの奇跡的な技であることに気が付きませんでした。

彼は子供の頃から大変利口で、尊重されていました。私は彼よりずっと若かったのに、彼は私を簡略名では決して呼びませんでした。いつも私を正式名で呼びました。私は彼を遊び友達のように「ベンカンナ」と呼んで

いました。でも彼は、「妹よ、私を他の少年達のように、『ベンカンナ』と呼んではいけない。私を『兄さん』と呼びなさい。私を名で呼んではいけない」と言って、私をいましめました。彼は遊び仲間達の指導者でした。友達は彼のところに、喧嘩をかたづけてもらうためにやってきました。私が結婚する頃までは、彼は気違いと思われてはいませんでした。母は私を遠方の村ラジャパドマプラムの人に嫁がせようとしました。彼は私（独りの妹）をそのような遠方にやることに反対でした。そして、このことで母と喧嘩をしました。でも、母は頑固で、その取り決めを変えませんでした。彼は結婚式に出ず、不満を表すため野原で寝起きしました。

ある日、家の人達が倉庫から穀物を取り出そうとしていた。乞食が施しを求めてやってきた。彼の母親は、家には一粒の穀物もないと言った。即座に、スリ　スワミィは乞食に、１時間後に来なさい、そして穀物をもって行きなさいとはっきり言った。彼はうそを言うことが嫌いだった。

気狂いと誤解された

２０才の時、彼は１週間ひどい熱病に冒された。当時は今日のような病院も薬もなかった。断食が当時の唯一の治療法だった。彼は僅かの落花生を食べて、ベッドに寝ていた。ある日、驚くべきことに、彼は気違いじみた言葉を話し始めた。「私達の家はせりで売り払われようとしている、私達はどこに住むのですか？」と両親に尋ねた。彼の家族には何の負債もなかった。どうして家が競り売りされなければならないのか？そのため家族は、彼は高熱のせいで頭がおかしくなったのだと結論を下した。１ヵ月後、彼は「マンガル（床屋）ヨガ、チャカラ（洗濯屋）ヨガ、ザッカラ（人々のグループ）ヨガ、ダブダック、ダブダック」と叫びながら、道路を走り回り始めた。

彼は寂しい所ばかりに行った。２、３日間食事もせず水も飲まなかった。彼は家に帰らなかった。両親は布切れに包んだ食事をクーリー（人夫）にもたせて、彼の許に送った。スワミィはクーリーの後について家に帰ってきた。そして、食事を食べると、急いで走り去るのだった。

彼は、ドービ（洗濯屋）や床屋やハリジャン（不可触民）その他の低いカーストの人々の食物を少量とって食べることがよくあった。当時はカースト意識が強く行き渡っていた。そのため、村の年長者達は彼に最大の汚名を着せた（とある人達は言っており、他の人達はこれを否定している）。何日も続けて、飲まず食わずで森をぶらつくことのため、彼の衣類は引

き裂かれてぼろぼろになった。家に帰ってくると、母親は彼に豪華な食事を食べさせ、新しい衣服を着せた。彼は新しい衣服を着ると、走って森の中に入って行った。この状態にある時、皆は彼のことを気狂いベンカイアと呼んだ。村の少年達は、「ドービ　ヨガとは誰のことですか、ベンカンナ？」と尋ねた。スワミィはよく自分の母方の伯父の姓を言った。

両親は時々彼の手足を柱にしばりつけ、種々治療を施したが、何の効果もなかった。柱に縛り付けられると、彼は少しも抵抗せず、何時間でも静かに座っていた。彼の状態に何の改善も見られなかったので、母親は息子が牡牛のように柱に縛り付けられているのを見ておれず、彼を解放した。た。

彼はラジャパドマプラムで生活している間、妹の家で時々食事をとっていた。ある日、村の子供達がスワミィに「ベンカンナ、どうか私達にお話をしてください、サンカティ（ラギの粉で作った半固形物）をあげましょう」と言った。スワミィの歯切れのよい返事は、「もし米を食べたら、目が悪くなる。だからサンカティだけをください」だった。子供達はこの返事を聞いて、彼は全然気が違っていないとの結論を下した。彼は誰も忌み嫌わず、誰も選り好みしなかった。彼は決して不作法な言葉を遣わなかった。彼は食物を自分に与える人達にだけ、施しを求めた。彼は少しも休むことなく、独りでぶらつくことを止めなかった。

彼のオカルト　パワー（超能力）

ある日、スリ　スワミィは病気の母親に会わせるため、マンガンマを生地ナグラ　ベラトゥールにつれて帰るため、彼女の許にやってきた。彼女は思った。「もし私がこの気狂い青年と一緒に行ったら、彼はどこか途中で私を置き去りにするかもしれない。さて、どうしようかしら」即座に、この全知の若者は彼女の思いに答えた。「なんと妹よ！私はあなたを途中で置き去りにするような気違い青年ではない」これは青年期の彼の超人的能力を示すものだった。

ある日、マンガンマの息子がひどい病気になった。彼女は心配して泣いていた。すぐに、スワミィはその子の顔の上で手を振り、こう言った。「妹よ！心配いらない。子供はよくなるから」不思議なことに、その瞬間から、子供は段々回復しはじめた。

彼が子供の頃からオカルト　パワーを具えていることを証明する数多くの出来事があった。しかし、残念なことに、誰も彼のパワーを信じることが出来なかった。

ヨガ修業

気狂いの間、彼は井戸の中に突き出している木の枝に両足を巻き付けて、頭を下に向けてぶら下ることがよくあった。両足の力が弱ると、彼は井戸の中に頭から落ちた。彼は井戸から泳ぎ出ると、再び同じやり方でぶら下がるのだった。

このサダナの方法は、霊性の師によってサイババ（シルディ　サイババ）に与えられたし、多くの聖者によっても行われた（サイ　リーラムルタム）。スワミィの弟は、自分が見たことのあるそのようなスワミジの習慣を幾つか語った。もし２頭立ての牛車が道を進んでいると、スワミィは牛車に両足を巻き付け、頭を下にしてぶら下がった。もし誰かがそれに気付くと、彼はひょいと牛車の上に上手に座った。

彼は２年かそれ以上の間、彼の村の中を気ままにうろついた。ある日、彼は村から姿を消した。誰も彼の行方を知らなかった。両親は近くの森や村々を探したが、見付けられなかった。彼らはあきらめ、探すことを止めた。この時の彼の年令は２０才だった。

４、５年たって、彼は再び近くの村々に現われた。しかし、今度の彼はもはや気狂いではなかった。彼はスリ　ベンカイア　スワミィと呼ばれていた。皆は彼を大きな敬意と尊敬をもって遇した。この時には、彼はある言葉や、糸の一切れや、香料をもちいて、どんな不治の病気でもなおした。

スリ　スワミィの弟はこう言っている。スワミジは神聖な火から４インチくらいのところによく座っていた。私達なら、そのような近くでは、火の熱さに堪えられない。

農夫達は自分達の畑の近くに穴を掘り、ペンナル川の水を満たしていた。彼らは水を汲み上げる梃子（エタム）を使って、畑に灌漑していた。スリ　スワミィはその水の半分を川に放出させた。水の残り半分でも十分多く、畑に灌漑するのに一人でなく二人を必要とした。

母親の死去の悲しい報せを聞いた時、彼は言った。「母はそこにいる。母は死んではいない」同じく、弟が亡くなった時、彼は「弟は死ななかったのだ。彼は生きている。彼は又くるだろう」と言った。死とは、５元素（土水火空気空間）から造られた肉体にとってのみ存在する。賢者は誕生と死を超えている。生き物は死に、死んだ生き物は生きるために生まれる。この真理を知っている人は泣かない（バガバッドギータ）

気違いじみたうろつきを行っている頃、スリ　スワミィは警官によって容疑をかけられ警察署に留置された。彼は黙って警察署の中に座っていた

。２日後に解放された。彼は真直ぐラジャパドマプラムの妹マンガンマの所に行った。そして、マンガンマにそのことを話し、泣きだした。スリスワミィが泣くのを見て、マンガンマも泣きだした。それを見た人達は何が何だか判らなかった。どうにか、彼らはその事を聞き出すと、警察署にスワミィを連れていった者を懲らしめてやるからと言って、スリ　スワミィを慰めた。すると、スワミィは小さな子供のように泣き止めた。

彼は日中ぶらついた後、妹の所に食事をしに行った。もし妹の夫が、彼の食事を不経済だと冷ややかに見ていることに気付くと、彼はもうそれ以上そこにいなかった。彼が家に来た時に、もし私達が黙って彼に食事を出して部屋から出て行くと、彼は食べた。もし私達がその場に立っていたなら、彼は一人にしてほしいと言った。

彼は森や畑をうろついた後、落花生を２キロ集め、それを妹に与え、彼女達の家で食事をした。恐らく、彼は妹達に恩を受けてはならないと思ったのであろう。

彼は生まれ故郷ナグラベラトゥールから立ち去って後、二度とその村に戻らなかった。ある日、彼の弟が彼を村に連れ帰った。しかし、彼は村の中に入らなかった。その時、彼の家族はトウモロコシを刈り取り中だった。彼はいつものスローガン「チャクラ　ヨーガム、マンガラ　ヨーガム」を叫びながら、それを刈り取り始め、２倍の仕事をし、４日かかる仕事が２日で終わった。

彼が「スワミィ」の敬称で呼ばれ名高くなった頃のある日、母親がやってきて彼に食べ物を差し出した。スワミィは母親に、周りの帰依者達にそれを配るよう求め、自分は最後に少量を食べた。その後、それを粉にして蟻達に与えた。

ある日、夕食後少したって彼は義弟の所に戻ってくると、妹マンガンマが彼の食事にある薬を混ぜていて、その結果、体中「突き刺すような」又燃えるような苦痛を味わったと不平を言った。そして、彼は食事を求めた。もう夜遅かったので、家に食べ物はなかった。家の人達は彼に朝来て下さいと言った。すると、彼は彼らからラギ（穀物の１種、ラグル）を少量受け取り、それを蟻達に与えた。恐らく、蟻達の空腹が満たされたならば、彼の空腹は満たされるのだろう。

ペンナル川の幅はペンナバドウェルではほんの２０フィートしかない。スリ　スワミィは自分自身の手で砂を運び、川の流れを堰き止める砂のダムをよく造った。その時、ジャヤラム　ラジュとベンガイアが、その砂のダム造りをするスワミィを手伝った。流れが止まると、彼は水路を作り、

川の反対方向に数ヤード水が流れるようにしてから水が川へ戻るようにした。彼は水の上に枯れ枝を多く浮かべ、燃えているロープで火を点けた。枯れ枝が燃えている間、彼はムンタ（小さな容器）で火の両端に水をかけた。彼はよくこう言った。「アイヤ、君はこの水の価値を知っているかね？1ツーラの水は3百クロア（1クロルは1千万）する。世界中の1日の支出額より大きいだろう」従者達は尋ねた。「どうしてこのようなことをするのですか、スワミィ？」彼は、「これは天然痘やコレラやその他の病気を世界から取りのぞくためです」と答えた。

彼はこの仕事に没頭している間、決して誰も近付けなかった。彼は何日間も続けて砂のダム造りに没頭したので、その両手両足は菌の感染でひどい状態になっていた。そのような菌のひどい感染状態で、どうして彼は濡れた砂の仕事が出来たのか、不思議である！

サドゥのとがめ

ある時コティテールタム村で、非常に大きな丸太が河の洪水のために、土手に流れ着いた。多くの若者がそれを家に持ち帰ろうとしたが、余りに重くて出来なかった。しかし翌朝、この丸太はスリ　スワミィの神聖な火で燃えていた。皆は、どうしてスワミィはそのような重い丸太を運んだのかと不思議に思った。村人達は役に立つ丸太を燃やしたと言って、スワミィを咎めた。村人の一人はスワミィを平手打ちした。その人が家に帰る迄に、彼の家は燃えていた。村人皆はスワミィに許しを請い、被害から守ってくださいと懇願した。慈悲深いスワミィはこういって皆を祝福した。「罪人は燃やされ、他の人々は救われる」その無頼漢の家は燃えて灰になったが、他の人々の家は無事で何ともなかった。無頼漢はスワミィの足元に平伏し、許しを請うた。

驚くべき超能力

当時、スワミィのダルシャンを受けに来る人の数は非常に少なかった。大抵の人々は、彼の火とパルミラ椰子の葉や黄麻布の袋やアルミの器具と埃っぽい身なりを見て気狂いだと思い、近付こうとしなかった。個人的な体験をもつ人達だけが、「この世の神」スリ　スワミィのダルシャンを受けにきた。

リシケシのシバナンダ　アシュラムのスリ　チダナンダ　スワミィ、デーバナンダ　スワミィ、マダバナンダ　スワミィがスリ　スワミィのダルシャンを受けに来ることになった。この情報を知って、何千という人がリシケシのスワミジのダルシャンを受けるために、ゴラガムディにやってき

た。午後４時３０分（予定の時間）がきても、これらの聖者達は現われなかった。人々は聖者を見たいと熱望していたので、大変落胆した。スワミィは言った。「アイヤ！あの方達は来ようとしているが、もう少し時間がかかる」その言葉の通り、スワミジ達は数分内にタクシーできた。スワミジ達は到着した時、「ナラーヤナ、ナラーヤナ」と神の名を唱えることに没頭していた。そして、直ちにスリ　ベンカイア　スワミィの足元に平伏した。その場にナラーヤナ　マントラの唱名が響き渡った。人々はびっくり仰天し、「なんと！私達のスワミィはリシケシの聖者方よりえらいらしい」と言い合った。無知な人々は眼をむくほど驚いたのだった。スワミジ達はスワミィにお菓子類を捧げ、食べて下さいと願った。スワミィは言った。「アイヤ！お菓子を食べることは毒を食べるのと同じです。ここには大変多くの人がいます。もしあなた方がその人々にお菓子をあげるなら、私はそれで十分です」この言葉を聞いて、スリ　チダナンダ　スワミィは自らの誤りを詫びた。

スワミィはスワミジ達を祝福し、スリ　チダナンダ　スワミィは海を渡る旅行をするだろうと言った。彼が全く驚いたことには、スワミジ達がリシケシに帰てくると、彼に対してアメリカ旅行の招待状がきていた。

ある日、名高い２人の魔術師がゴラガムデイにきた。彼らはアシュラムの正面の木の下に午前１０時に座った。そして、午後４時まで動かなかった。彼らはアシュラムの誰とも口をきかなかった。その間、スワミィは彼の火により多くの薪を足し、炎を高めた。午後４時に、スワミィは従者達に、２人はその日の仕事で大変疲れているから、食事と２ルピーを各に与えるよう命じた。スワミィの従者達は命じられた通りにした。魔術師達は立ち去る時に、「私達はスワミィの名声が羨ましく、スワミィに何か魔術をかけてやろうと考えていた。でも、私達はその目論みを忘れてしまい、このように座ったままだった。なんと奇妙なことだろう。これはスワミィの偉大さのせいだ。私達は悪い企みを持ってここに来たのに、慈悲深いスワミィは思いやりと愛情をもって扱って下さった。私達にはスワミィの愛を受ける資格がありません」と言った。彼らは自分達の悪巧みを、心の底から後悔し、スワミィの前に平伏した。

ある日、スワミィは酷い喘息に苦しんでいた。従者達は、治療のためにスワミィにニンニク　エキスを小さなコップ（１００ｍｌ）で飲ませた。そのせいで、脈拍が下がり（殆ど零）、脈が分からなくなった。従者達は、スリ　スワミィは肉体の衣を脱ぎ捨てようとしていると思い、悲しみに打ち拉がれて泣きだした。皆は夜中にうたた寝していた。目を覚ますと、

スリ　スワミィはそこにいなかった。彼らはその場のあらゆる所を探した。暫らくして、スワミィが川で沐浴した後、笑みをたたえながら戻ってきた。スワミィが大変健康であるのを見て、従者達はスワミィの以前の苦しみは本当だったのか、それとも自分達の錯覚だったのかといぶかった。

ある日、雨がひどく降っていた。スリ　スワミィは木の下で神聖火を守っていた。雨粒が木の葉から落ち、火が消えそうだった。しかし、強力な決意と努力で、スリ　スワミィは火に乾いた細い枝を焼べることで、火を燃やしていた。帰依者達はスリ　スワミィに、火を寺院の中に移すよう懇願した。「アイヤ！それは墓穴を掘ることになる」とスワミィは手短に答えた。帰依者達はこの言葉の意味が理解できなかった。スワミィの言葉の意味はこうだったのであろう。「困難のせいで、もし私達が自分達の原則を破るならば、スワダルマ（その人自身の義務）と呼ばれる寺院の屋根は破壊されるだろう。スワミィの燃え続けるダルマ　ニシュタ（ダルマを守うとする確固とした心情）も、雨の中の火のように、消されてしまうだろう。たとえ、火を寺院の中に移したとしても、彼の火を消すと神が決めたなら、寺院の屋根の雨漏りによって、きっと火はけされるに違いない。だから、場所を変えずに火を守り続ける方がよい」

ある日、金持ちが、スワミィが受け取りを拒んだにも拘らず、高価なベッドシーツをスワミィのために置いて行った。スリ　スワミィの従者達がそれを保持した。暑い夏の午後１時、スリ　スワミィはシッダライア　ヒルから下りて行こうとした。途中、スリ　スワミィはある場所で従者達を止め、新しいベッドシーツを要求した。従者達は喜んで、金持ちの新しいベッドシーツを差し出した。スリ　スワミィは、それを小さな６インチ幅の布にするよう命じた。従者達がそれを切って小さな布を作ると、彼はそれらを病人達のベッドシーツの１部にするようにと言った。それは、病人の苦痛を和らげるものになった。

彼はいつも黄麻袋とパルミラ椰子の皿とマットと陶製の壺とアルミ製の器具を使っていた。彼は従者達が高価な品物を持つことを決して許さなかった。

ある日、金持ちが、スワミィが拒否したのに、スワミィの近くに高価な袋を置いて行った。従者の一人がそれをとって、その中に自分の衣類を入れた。真夜中、皆が眠っている時、スリ　スワミィはその袋を杖を使って火の中に焼べた。従者達が目を覚ました時、その場は煙でもうもうとしていた。袋を受け取った罰として、その従者は自分の衣類を無くしてしまったのだった。

ビクシャ（施し）による生活

シュラダ（信仰心）と帰依心なしに、もし金持ち達がお金を差し出したなら、スワミィはそれを拒み、祝福を与えなかった。何の捧げ物もなしでも、誠実な帰依心とシュラダをもった人々は、紙片に書かれた彼の祝福を得た。彼はいつも真面目な帰依者達によって差し出された食物（施し物）に頼っていた。人々の望みがスワミィの祝福で叶えられた時、人々はスリ　スワミィの前でアンナサンパルタナ（祝宴）を行った。ある人々はそのような祝宴を、祝祭中に行った。そのような時でも、彼の従者達は村人達に食物の施しを受けに、出掛けて行かねばならなかった。スワミィはよくこう言った。「アイヤ！もし私達がこの祝宴をしている人々のせいで、ビクシャを貰いに行かないならば、明日は村人達はビクシャをくれないだろう」

ある日、スリ　スワミィは従者達に、担ぎ駕籠でシッダライア　ヒルの天辺まで連れていくように言った。その道は灌木と丸石だらけで踏み段がなかった。従者の一人がスワミィを背負って運んだ。スリ　スワミィは言った。「アイヤ！『モーラ（1フィート半）』毎に3千と書きなさい」スリ　スワミィは、丘の天辺まで自分を背負って行った従者に、莫大なプニヤ（功徳）を授けた。

保証：従者達はスリ　スワミィに、彼のサマディに仕え、施しによって生きて行けるよう祝福を与えて下さいと懇願した。慈悲深いスワミィはこう話した。「あなた達は物乞いをする必要はない。あなた達は、たとえ森の中にいても、食物を得られるだろう」

別の折、従者達が同じことを頼んだ時、スワミィは言った。「全ての物事は、私がここにいる如く、うまく行くだろう。だから、あなた達は食物を求めて何処にも行く必要はない」

別の折、従者達はスワミィに、「スワミィ！あなた様が亡くなられた後、私達はどうなるのでしょうか？」と尋ねた。慈悲深いスワミィは「私は何処にも行かない。私は太陽と月が在るかぎり存在し続ける」と保証した。スワミィのこれらの言葉は、「私のマッティ｛土｝や埃は答え、私の墓は話し、動くだろう」と言ったスリ　シルディ　サイの言葉と似ている。

ある日、誰かがスリ　スワミィの従者達を、食べ物の施しを求める偽サドゥ達だと非難した。従者の一人はその人をこづき回そうとした。すぐにスリ　スワミィはそれを止め、「気を付けなさい、もし私達がそのような悪口に我慢しないならば、その時こそ私達は真のサドゥと思われなくなる

だろう」間接的に、スリ　スワミィはその従者を「あなたは寛容さをもっていないから、偽のサドゥだ」と叱ったのだった。

スリ　スワミィは貧乏な人と金持ちを決して区別しなかった。彼は有徳の人達を大変好んだ。彼はこのような人達に対し特別な敬意を示した。彼は、真の帰依者達が貧しくて彼を招かなかったのに、その人達の家を訪問した。人々が金を差し出そうと用意していても、彼はその人々が利己的で富を自慢していたので、決してその家を訪問しなかった。

彼は従者達が悪い思いや怒り、悪口等で汚れている時には、従者達の奉仕を受け入れなかった。ある日、グラバイアは同僚達が他の人達を批判しているのを耳にした。その従者（グラバイア）がスワミィに粥を持っていくと、スワミィは「あなたは批判を聞いてからここに来た。私はあなたからは粥を受け取れない」と言った。

１９７８年まで、スリ　スワミィは決して誰からも新しい衣類を受け取らなかった。彼はいつも、施しによって与えられた自分のぼろ服と破れたベッド　シーツで満足していた。また彼は従者達が他の人達から新しい衣服を受け取ることを許さなかった。

時々、スリ　スワミィは従者達に、道がどれほど困難であっても、自分をある地に真直ぐ連れて行くよう求めた。道が石ころや灌木に阻まれていても、彼の旅は文字通り真直ぐでなければならなかった。従者達は決して靴を履かなかった。バリゲラ　ナガイアはこのことについてこい言っている：スワミィの命で、私達は大声でオムカールを唱え、茨や岩を踏み付けて真直ぐ歩いた。スリ　スワミィの恵みにより、私達の足には１本の棘も立たなかった。私達は正午から午後３時まで少しも休まず、そのような険しい道をスリ　スワミィを運び、時折は焼けるような砂地を横切りましたが、少しも疲れたり嫌になったりしなかった。スリ　スワミィは、「アイヤ、天の神々が３０クロール支払って、領収書を持って行った」と言って、私達を祝福した。

ある日、スリ　スワミィは彼の神聖火を指差して、言った。「アイヤ、ここでは１クロール（１千万）のリンガの礼拝がとり行われている」ある日、従者達がティルパティでのヤグナのことを口にした。スリ　スワミィは言った。「彼らが４０日で成就する成果は、私達のグンダム（火の場）では４時間以内に得られる」

ある日、スリ　スワミィは言った。「アイヤ！あなた達は、あなた達が本当だと思った全てのことを信じますか？」

パラコンダ　スッバ　レディはこう言っている：「ある時、スワミィはムディゲドゥ村に滞在していました。毎日、河で沐浴して帰ってくると、

スワミィは私に乾いた胡麻殻の束を持ってくるように言いました。１ヵ月内に、A．ベンカタ　ラミ　レディの邸内は乾燥した胡麻殻で一杯になりました。ある日、私はスワミィに、『スワミィ、これを何のためですか？』と尋ねました。スワミィは答えました。『アッヨ！１ヵ月後に何日間も土砂降りの雨が降るだろう。その時、この殻が私達の火のための唯一の薪になる』実際、土砂降りが続きました。木の丸太は藁葺き小屋に置かれていました。これらの乾いた胡麻殻は丸太の上に置かれました。火は燃え続けました。雨水は木の丸太の下を流れました」

１９７４年６月２０日、スリ　スワミィはひどく弱った。デブドゥラ　ベンカタイアは、スリ　スワミィは長くは生きていないだろうと思った。即座に、全能のスワミィは彼の疑問に答えた。「アイヤ！私は今は死のうとしていない。私は８年と２ヵ月と４日間ここにいるだろう」正確にその日、スリ　スワミィはマハサマディに至った。

マハサマディの１年前から、スリ　スワミィは度々木草履を求めるようになった。彼は生涯草履を使わなかった。だから、彼は自分のパドゥカ（履物）を帰依者達のために自分の身代わりとしたかったのかもしれない。彼の従者達は、白檀でパドゥカを作りたいと望んだ。しかし、彼らはそれが間に合わなかった。ある日、スワミィは続けて「チャッパル、チャッパル（草履）」と叫び続けた。全能のスワミィは不思議にも、ロシ　レディのの息子に木製のパドゥカを差し出すよう命じた。そして、彼はその日それをもって来ていた。スリ　スワミィは、それを手の中に入れて、胸に抱き締め、数時間それを手離さなかった。現在、そのパドゥカはスリ　スワミィが肉体を去って、マハサマディに入った藁葺き小屋で礼拝されている。

１９８２年４月のスリ　ラーマ　ナバミに、彼の親密な従者スリ　グルバイアは夢を見た。夢の中で、スリ　ラーマがシータとラクシュマナと一緒に来て、スリ　スワミィに「あなたの時間は終わった。肉体を脱いで、私達と一緒に来なさい」と要求した。

そのスリーラーマ　ナバミの日に、スリ　スワミィは体が悪くなり横になった。帰依者達は、彼がその縁起のよい日にこの世を去ろうとしていると思った。彼は肉体の痛みに大いに苦しんだ。しかし、翌日には彼は完全によくなっていた。

マハサマディの２月前、スリ　スワミィは喘息で大いに弱った。ある日、彼は帰依者達に、「私は去ろうとしている」と紙片に書くよう求めた。彼は数時間意識を失った。全ての帰依者が、スリ　スワミィはマハサマディに入ろうとしていると思った。従者達は大変悲しんだ。しかし数時間後

、彼は目を覚まし、真直ぐ座ると、こう言った。「アイヤ！神々は同意せず、私にもう暫らくここにいるように言われた」

シルディサイもまた同じように、７２時間後に意識を取り戻した（シルディサイの伝記）。

時々、スリ　グルバイアは、スリ　スワミィの後ろに８つの頭のナジェンドラが見えた。１９８２年８月２３日、スリ　グルバイアは、８つ頭のナジェンドラがスリ　スワミィから離れようとするビジョンを見た。

マハサマディの４日前、スリ　スリ　グルバイアは、夢（ビジョン）を見た。天界の馬車が下りてきて、スワミィの前で止まった。スリ　スワミィは馬車に乗った。グルバイアも、それに乗ろうとした。しかし、馬車の人達は彼が中に入ることを許さなかった。馬車は天空に昇り、見えなくなった。

現在のサマディ　マンデイールは、スワミィが私達の間にいた時に建設された。彼自身の手で、スリ　スワミィはその礎石を据えた。バリゲラナガイアは、私達のスワミィの写真と一緒に全ての神々の絵を保管し、毎日礼拝していた。マハサマディの３日前、スリ　グルバイアは、夢（ビジョン）を得た。サマディ　マンディールにあったスリ　スワミィの写真が、スリ　スワミィが住んでいる藁葺き小屋の中に入り、シルディサイの写真のそばに立った。それは、今後彼の帰依者達が、丁度彼らがサイを礼拝しているようなやり方で、スワミィの写真を礼拝すべきことを示すものだった。

マハサマディの数日前、スリ　スワミィは「日暮だ、日暮だ」と続けて叫んでいた。それは一方で、彼のこの世での自分のアバターとしての使命の終が近付いていることを、他方で、人々に深いまどろみから目を覚ましてムクティ（モクシャ、解脱）の悟りのために、貴重な時間をサダナに使うようにとの促しを意味していた。

スリ　スワミィは既にロシ　レディには、数日間連続する生々しいビジョンによって、自分のマハサマディを予告していた。そのビジョンで、レディは「すばらしく明るい日没」を見たのだった。

コラクティ　ブジャイアは、藁葺き小屋でまずスリ　スワミィに礼拝して樟脳の火を点け、それから聖者達と神々の全ての写真と絵に礼拝を捧げることにしていた。

１９８２年８月２４日正午のアラティの時、スリ　スワミィはベッドに横向きで寝ていた。ブジャイアがアラティを振ると、スリ　スワミィは仰向けになり、最後の祝福の徴として、アラティに対して掌を向けていた。これが、スワミィが私達の間にある時のスワミィへの最後のアラティだっ

た。

その日（１９８２年8月２４日）、スリ　グラバイアは、マダバダスの伝記を、信仰心をもって読むことを完了した。その伝記の中では、天界の馬車が、マダバダスを天界に連れて行った。

スリ　スワミィは１９８２年8月２４日に、肉体を脱ぎ捨てた。従者達と帰依者達は、スワミィはヨガの眠りにあるので、再び目を覚ますと思った。希望をもって彼らは3日間待った。その肉体は大変膨れていた。3日目、グルバイアは、トランス（神懸かり）的状態になり、スリ　スワミィが自分にその日サマディに安置するよう命じられたと言いながら、スワミィの遺体を藁葺き小屋からサマディ　マンディールに運んで行った。

パラム　レディ　クリシュナ　レディは、「スリ　スワミィは疑いもなく偉大な聖者である。なのになぜ彼の遺体は普通の人の遺体のように膨れたのだろうか？」と思った。

クリシュナ　レディはシャツを脱ぐと、サマディの穴に入った。彼はスリ　スワミィの遺体を穴に下ろした。彼が穴から出た時、彼の胸全体に鮮血が付いていた。それは彼の血ではなかった。それはスワミィの遺体からの血だった。グラバイアが両手でスワミジの遺体を運んで生垣の門を抜ける時に、棘がスリ　スワミィの肩に刺さり、恐らくその刺し傷から血が流れたのである（死後3日の死体の傷口から暖かい血が流れだすとは、全く途上もない事である。正にそれはクリシュナ　レディの疑いへの回答だった）。

１９８０年、レンガを積んだ最初のトラックがゴラガムディのアシュラムに来た。その夜、スリ　スワミィは従者達全員にサマディ　マンディールの予定地で眠るよう命じた。更に彼はこう言った。「ペンチャラ　スワミィ　ヒルのように大きいマスジッド（モスク）ができるだろう」１９８１年の終までに、スリ　スワミィの言葉は本当であることがわかった。1年以内にスワミィのため、大きなサマディ　マンディールが建てられた。

スワミィは彼のサマディ　マンディールをなぜマスジッドと呼んだのだろうか？

確かに、スリ　スワミィは彼自身の言葉で、彼がシルディサイと一体であることを確言している。数多くの帰依者達の経験もこの真理を証明している。

ドゥワラカマイは、シルディ　サイババが６０年間住んだマスジドに対して、彼が付けた名である。このマシジッドはこの世で独特である。なぜぜならば、この世でシルディのサイババのマスジッド以外のどのマスジッ

も、そこで全ての宗教の人々が彼ら自身の宗教儀式に従って礼拝することを許さないからである。スリ　スワミィもまた彼のサマディ　マンディールをマスジッドと呼んだ。彼の言ったことは本当になった。なぜなら、今日全ての宗教の人々がスワミィを礼拝し、彼らの困った事柄に慰めを得ているからである。

彼は肉体を脱ぎ捨てたけれども、その霊的肉体はなお生きており、インドばかりでなく世界中の忠実な子供達の苦しみを救い続けている。そればかりでなく、彼は太陽と月が存在する限り存在し続けるとの意欲的な言葉で保証した。もしそうならば、彼の真の本性はなにか？彼自身の言葉の中で、それを見てみよう：

ある時、スリ　スワミィはこう言った。「ラーバナはダサラタ王の息子ラーマによって殺されたのではない。殺したのは私だ。彼は３回の攻撃で倒れた。プララダの役を演じたのは私だ。全ての人を包み込んだのは、私だ」これは、彼がそれら全ての姿で、宇宙の幸福を常に世話している永遠なる霊であることを意味している。同じ考えは、スリ　ラマクリシュナパラマハンサによって、「ラーマとは誰か、クリシュナとは誰か、それはこのラマクリシュナだけである」と表現されている。

スリ　シルディサイは帰依者達に、彼が全ての聖者と全ての神々の顕現であることを証明する場合、同じ表現をしていた。もし神性霊がダサラタ王の息子ラーマの中にいなかったならば、彼は普通の人間だったであろう。そして、ラーバナは殺されなかっただろう。だから、ラーバナは永遠なる（宇宙的）霊によって殺されたのである。スワミィは、自分は永遠の霊であると言っている。

別の折、彼は「私は全ての生き物の中にいる」との保証を書いて与えた。ある時、帰依者達はムンミディバランのスリ　バラヨギのことを話した。スリ　スワミィは、「アイヤ！彼は彼自身の仕事を成し遂げて、行くだろう。彼は他の人達の問題には関心がない。しかし、私は全ての人のことを勘案しなければならない」と言った。この使命故に、老齢でも１９７９年まで、彼は村々の帰依者達を訪問し、人々の霊的と世俗的な必要を満たした。彼はそれらの旅でどれ程の苦労と不便を経験したことであろうか、私達は想像することもできない。彼と従者達は相応しい時間に食事をすることはできなかった。彼は生き物達に大きな同情心を持っていたので、今日ゴラガムディのアンナ　サンタルパナ（食事の施し）プログラムは何千もの人々のために途切れなく行われている。このアンナ　サンタルパナプログラムは、スワミジに対する帰依者達の帰依と全託の証拠である。

私達は彼がその計り知れない程に貴重な能力（タポ　シャクチ）を使っ

て、どれほど数多くの方法で人々を助けたか、説明することはできない。私達は、彼が日照り続きの期間に雨を降らせた例を数えきれない。

マラパティ　チェンチャンマは、スワミィのマハサマディの時スワミィを訪ねることができなかったことを大いに悲しんだ。慈悲深いスワミィは、その夜彼女の夢に現れて、「私は何処にも行っていない。私はそこにいる。目標を達成するには多くの時間がかかる」と言った。

スリ　スワミィがマハサマディに入ったその日の夜、スリ　ノーテティスリー　ラマイアは彼の庭の小屋でスワミィの写真を礼拝していた。スリ　スワミィが閃光となってやってきて、その小屋の周りを走った。翌朝、彼はスリ　スワミィが前日にマハサマディに至ったという報せを受け取った。

ある時、スリ　スワミィはこう保証した。「私は何千匹の羊の中からでも、私の小羊の足を引き出すだろう」この言葉は、スリ　スワミィは彼の帰依者がどこにいても、何かの手段で、帰依者を彼の方に引き付けることを保証するものであることを、意味している。サイババも同じ保証を行った。

曾てスワミィはベルル　ラマナイドゥに言った。「アイヤ！あなたは私が他の全ての人達のように、母親ピッチャンマと父親ベンチャル　ナイドゥに生まれたと思うかね？」自然が彼の母親であり、全能の神が彼の父親だった。

ある日、チャラマ　ナイドゥはスワミィに尋ねた。「スワミィ！スリ　ラーマとスリ　クリシュナもまたグル（霊性教師）を持っていました。でも、あなたはもっていません。何と残念なことでしょう！」

「あなたは何も知らない。もしあなたがベンカイアの名で何かを望むならば、直ちにそれを手に入れるだろう。なぜ私の頭の上に再びグルが必要だろうか？」その夜、チャラマ　ナイドゥの妻は夢を見た。黄金の肌をもち金の装飾品を身に着けた神性淑女が、スワミジを普通の女性に紹介していた。淑女はこう言っていた。「この方がベンカイア　スワミィです」チラマ　ナイドゥの妻は夢の中で叫んだ。「彼女が御出でになった。御出でになった。お辞儀しなさい」家族は彼女を起こした。彼女は、見た夢のことを物語った。チャラマ　ナイドゥはスリ　スワミィの偉大さを信じ、翌朝スリ　スワミィの名でバジャン会を開くために人々を呼んだ。

上記の会話の中で、スリ　スワミィはこう言った。「なぜ私の頭の上に再びグルが必要だろうか？」この言葉は、彼が最初から全くグルをもたなかったという意味ではない。しかし彼の現在の状態（非２元論的）では、グルは必要なかった。曾て人々が、ある聖者が舌に神聖マントラを刻みつ

けていたというのは本当ですかと尋ねた。スリ　スワミィは言った。「私達が道の途中でマイソールのマハラジャを見た時、どんな利益があるだろうか？私達は不断の努力即ちサダナに頼るしかないだろう」

この言葉から、私達は、彼は過去には確かにグルを持っていたと推測できる。彼は間接的に、もし私達が前の数々の誕生で多くのプニヤ（罪の反対）蓄積していなかったならば、そのような偉大な人物即ちサドグルに会うことは出来ないことを示唆しているのである。

ある日、スリ　スワミィは言った。「バガヴァッドギータは６４番以下の視野の人達にのみ有益である！」

ある時、スワミジは一人の従者に言った。「ある時、私はペンチャラコナの森で３日３晩過ごした。私は世間の事を意識しなかった。私は食物も飲み物も欲しくなかった。食べたいと感じた時、私はゴヌパリ村の数軒で物乞いをしたものだ」

時折スリ　スワミィは私達に空中を歩いているリシ（聖仙）を見るよう言った。しかし、私達はそこに誰も見えなかった。同じように、パカラパティ　グルブガルは森の中で、アシュラムの住人達がいると指差した。しかし、私達はそこに何も見なかった。

ある日、スリ　スワミィはグルバイアに、こう言ったことがある。「私は、バラモン　ガル（バラモン階級の人）のように、穴の中に座らないだろう。私は、全ての人のために全ての準備をして、それから行くだろう」現在ゴラガムディでは、スワミィが言った通りに、あらゆる事が進行している。

スリ　スワミィは紙に彼の祝福を書かせることによって、祝福を与えていた。スリ　スワミィは右の掌を頭に置き、それからその紙に触れ、それを祝福の印として帰依者に与えた。例えば、スリ　スワミィの口述文は次のようだった。「パダガルの１万クロール（１００ラック）。５ラック（１０万）のモンド　。１０００ラスル（山）」

帰依者達はスワミィに、言葉の意味がわかりませんと言った。スワミィは言った。「これは１６の言語よりまさる言語である。これはデーバナガラ語と呼ばれる。これは上の世界の計算書である。これはカリユガの神々には理解できない。どうして、あなた達が理解できようか？」

彼はある帰依者のことを、「彼は１０番目の視野をもった人だ」と言った。時折、彼は「それは１０番目の視野で書かれている」と言った。帰依者達が、その１０番目の視野とは何のことですかと尋ねると、彼は「それは神々の視野である。この視野は海上で限界がない」と言った。別の折、彼は「カリユガの神々は６ラックの視野をもっている。私達は６ラック

の視野になることができる。パラヨギ（若いヨガ行者）は４ラックの視野がある」と言った。

ある日、スリ　スワミィはネロール出身のレディに神秘的な言語で書かれた紙片を与えた。彼がスワミィにそれを普通の言語で説明して下さいと頼むと、スリ　スワミィは、「それは神々の言語である。それは明かされてはならないものだ」と言った。しかし、レディは執拗にスワミジに説明を求めた。彼は、もしその言語を説明して下さるなら、いくらでもお金をお出ししましょうとせがんだ。スリ　スワミィは４ラックを要求した。次の瞬間、レディはその場からいなくなった。非常に多くの人がスリ　スワミィに、その神秘的な言語を説明して欲しいと懇願した。彼は言った。「これは神の言語である。もしあなた達がこの言語の意味を知りたいなら、、誰かがそれを説明するために降りて来なければならない」それがスワミィの真の本性だった。

その頃、ザミンダール（インド人地主）の一人スリ　ベンカタ　ラマラジュがヤグナ（儀式的礼拝）を行おうとした。彼は、マダバ　ダスのように、鐘を舌を使わずに鳴らせる聖者を探した。彼は、スリ　スワミィの噂を耳にした。そこで、彼はヤグナのために、スリ　スワミィを招こうと、人を派遣した。返事として、スリ　スワミィは、ラマラジュの誕生の年月日を紙に書かせ、それを彼に送った。スリ　スワミィが、彼の誕生の正確な年月日を報せた時、ラマラジュはスワミジの偉大さに大いに感じ入り、ヤグナの招待のために、妻を伴って自らスワミジの許を訪れた。彼ら夫妻が来るまでに、スリ　スワミィは泥の穴の中に入り、体中に泥を塗り付け、気狂いのような様相をしていた。しかし、ラマラジュと細君はその泥の穴に入り、衣服のことや自分達の立場を気にすることなく、穴の中のスワミィの前に平伏した。二人の誠心に満足したスリ　スワミィは、ヤグナに出かけて行き、舌なしで鐘を鳴らした。

バドラチャラムで、ベンカンマという名の帰依者がスリ　スワミィに食べ物を差し出した。スワミィは数分でざるの食べ物を平らげた。彼女はその足元に平伏し、彼の前でアンナ　サンタルパナ（食物の施し）をさせてほしいと懇願した。客人達のためには、ほんの少ししか食べ物は残っていなかった。スリ　スワミィの命令で、彼女はスワミィが残していたのと同量の食物を給仕し始めた。彼女は数百人にその少量を給仕したが、決して食物はなくならなかった。

ある日、ゴラガムディ生まれで６０才になるK．マスタンの父親が河岸に行った。数分の内に土砂降りで洪水になった。父親は３日間家に戻って来なかった。マスタン達は父親を限無く捜した。彼らはスワミィに、父の

行方を教えて下さいと懇願した。スリ　スワミィは言った。「アイヤ！彼は着物を変えた。明日、あなたは彼の骨格を持ちかえるだろう」翌朝、彼らは貯水池に死体があるとの報せを受けた。死体の肉は魚によってきれいに食われていた。彼らは死者の衣服によって身元の確認をした。彼らはその骨を持ち帰り、モスリムの伝統に従って埋葬したのだった。

ある時、スリ　スワミィはチッテパリにいた。その時、コッラクティブジャイアは病気で、幾つかの食べ物を制限されていた。もし彼がスワミィの許に行ったら、彼は相応しい食事をすることが出来なかった。そのため、彼はスワミィの所に行かなかった。彼は、もしスワミィの従者の一人ラマナイドゥが自分と一緒であれば良い友達になれるのに、ゴラガムディィにはあのような人はいないと思った。彼は心の中でスリ　スワミィのことを思い、失望を感じた。その同じ時、スリ　スワミィはラマナイドゥにゴラガムディに行くよう命じた。ラマナイドゥはスリ　スワミィがなぜ自分をゴラガムディに行かせたのか、そこに着いてブジャイアに会うまで分からなかった。

マヒマルールで、スリ　スワミィはムニクティ　ラマイアの家にいた。村人達はスワミィに自分達の家にも来て下さいと懇願した。スリ　スワミィは「アイヤ！道が茨の枝でふさがれている。だから、誰の家も私は訪ねることができない」と言って、彼らの招待を断った。恐らく、私達の心の中の不道徳が、道の茨の枝なのだろう。

ナグラベラトゥールの数人の農場主が、マダパリ村でスリ　スワミィに会い、自分達の農作物はその年豊作になるかどうか尋ねた。スリ　スワミィは、「１本に二人ずつ」と言った。それがスワミの返事だった。彼は農場主達が豊作を獲るとか獲ないとは言わなかった。１０日以内に、全作物１本毎に２匹の虫に食われた。完全に、全ての農場が損害を蒙った。

ある時、スリ　スワミィはソマシラの小さい丘に留まっていた。彼はいつも小屋の中でオイルランプを灯し続け、夜じゅうエカタラやタンブーラを奏していた。ある夕、スリ　スワミィは従者チャラマナイドゥに、その夜の２人の客のために食事を持ってくるよう命じた。チャラマナイドゥは村人達に、そのスワミィの言葉を報せた。村人達は喜んでお菓子とバダを添えた食べ物を差し出した。チャラマナイドゥはスリ　スワミィの言葉が理解できなかった。午後７時に、（タルプールの）ペンマサニ　マスタナイアとその友人が、スリ　スワミィのダルシャンを受けにやってきた。全知のスワミィは、客人が到着する前に、食べ物を準備したのだった。

ある時、トゥピリ　ピッチャンマがゴラガムディの彼女の家でバジャン会を行おうとした。その時、スリ　スワミィはゴラガムディから離れたど

こか余所にいた。彼女はバジャン会にスリ　スワミィを招くことができないことを非常に残念に思った。その日、スリ　スワミィは従者達に、大変すばらしいバジャン会があるのでゴラガムディに行くよう命じた。こうして、全てのことをご存じのスワミィは、彼女の心からの祈りに応えて、彼女のバジャン会に出席し、彼女に祝福を与えたのだった。

2、プラクリティ（物質世界）とプルシャ（霊世界）

諸聖典は、宇宙の根源は名をもたず、姿をもたない普遍的意識、即ち普遍霊、即ちパラブラフマンであると宣言している。それ自体が様々な姿に現れようと神性意志に活動が生じた。（多くの姿に現れる）パラブラフマンの動的な様相は、プラクリティとかデービ（神性母）と呼ばれる。宇宙自体が神性母の表現である。丁度、私達の体が脳の支配下にあるように、脳はアートマによって支配されている。全宇宙はパラマートマの支配の下ある。サドグルは、ブラーマ神とビシュヌ神とマヘシュワラ神の三位一体である。換言すれば、サドグルはパラブラフマンである。全宇宙は彼の支配の下にある。この真理は、サドグルの周囲で起こる数々の奇跡によって理解され得る。普通の人達は神を信頼したいと望むけれども、彼らの信仰は、サドグルの助けを求めるまで、確定しないだろう。宇宙も毎日の出来事も、神の意志に支配されている。この真理を深く信じることなしには、人は啓蒙も、冷静さも、ダルマの生活も発展させることはできない。この章では、サドグル　スリ　ベンカイア　スワミィの幾つかのそのような奇跡を紹介する。

ある日、スリ　スワミィはタクシーでタルプールへ行こうとしていた。突然、スリ　スワミィは、「アイヤ！ひょうっとしたら喉を切る」といった。誰もその言葉が何を意味しているのか判らなかった。数分後、スワミジは大きな金切り声をあげた。急に車はブレーキを踏まずに止まった。次の瞬間、一匹の山羊が車を横切ってジャンプした。もし車がそのように急停車していなかったら、山羊は死んでいただろう。この出来事があって、それまでスリ　スワミィに無関心だった運転手マスタナイアは、忠実な帰依者になった。

タルプール村に、「D」鉱山と呼ばれる雲母鉱山があった。ある日、スリ　スワミィはその鉱山にいた。今にも大雨が降りそうだった。その付近

一帯を、厚い雲が覆っていた。従者達はスリ　スワミィに、「スワミィ！雨が降りそうです。全ての物がびしょぬれになるでしょう。近くには、家は一軒もありません」と訴えた。スリ　スワミィは数分間エカタラを奏し、「何と、ベーララガブル！あなたは私達がここにいることをご存じないのですか？私達の荷物と従者達はどうなるのでしょうか？一体それがあなたの御意志とご希望なのでしょうか？」と怒鳴った。数分内に、全ての雲は散らされ、はっきり太陽が現れた。

同じように、ある時、シルディで嵐があった。帰依者達は自分達の家に帰れるだろうかと心配した。その時、サイナス（サイババ）はマスジッドから外に出ると、「おー　アラー！私の子供達が安全に早く家に帰りたいと望んでいる。雨を止めなさい」と怒鳴った。忽ち、雨は止んだ。

従者の一人がスリ　スワミィについて奇妙な事を話した。「私達がスリ　スワミィをドリで運んでいる間、彼は大変軽い」ある日、ドリに乗っている時、彼は非常に重かった。その従者はスワミィを見つめた。スリ　スワミィは微笑んでいた。次の瞬間、ドリは大変軽くなった。従者は、スリ　スワミィが自分の意志で体重を増やしたり減したりできることを知った。これは「アシュタ（8）シッディ」と称される８つのシッディ（超能力）の１つである。

曾て、マドラス州から数人の帰依者がやってきて、スワミジに彼らの地方では最近２年間全く雨がありませんと訴えた。スリ　スワミィは従者達に、神への訴えを書くよう命じた。彼はその紙を腿の下に置き、食事も水も摂らず、眠りもせず、４日間その上に座っていた。５日目に、マドラス州で激しく雨が降り、全ての貯水池は一杯になった。その時やっと、彼は断食を止め、粥を食べた。

同じく、ある時、カリチェドゥ地方が酷い旱魃で、牛達は食べる草がないので、紙屑や木の枯葉を食っていた。この可哀相な情景を見て、スリ　スワミィは眠らずに２日間断食を続けた。彼はその間姿勢さえ変えず、真っすぐ座っていた。彼は「貴様達！車を止めよ。腕白小僧達がすぐ後に迫っているぞ。何回言えばいいのだ？もし貴様が俺を怒らせるのなら、必ず罰してやる」と叫び続けた。３日目に、彼は断食を止め、沐浴して粥を食した。忽ち、雨が降り出し、貯水池が一杯になるまで降り続いた。

ある日、「タティボルグ」と呼ばれる毒蛇が這ってきて彼の腿の下に入った。従者達は恐れて、スワミィに蛇のことを告げた。スワミィは、「もし私達が危害を与えなければ、蛇は私達を害しない」と言った。少しして、蛇は自発的に去って行った。この事態は、蛇達がサイナスやスリ　ラマナ　マハリシの体の上を這った出来事を、私達に思い出させる。

ある夜、ロシ　レディは窓敷居に置いてある数枚の紙を取ろうとして、蛇に指を噛まれた。即座に、スリ　スワミィはレディの指を腿と掌の間に入れて、数分間押さえていた。彼の指の痛みは消えた。スワミィは言った。「アイヤ！君の体はサンジービニ（蛇毒に打ち勝つ）となった」その時から、レディは何度蛇にかまれても、蛇毒の痛みに苦しまなくなった。

ある時、稲の苗が雨不足のせいで乾きかけていた。カトゥバディパリ村の農場主達はスリ　スワミィに、彼らの苦境について話した。スリ　スワミィは言った。「神に懇願を送ろう。明日から、雨が２インチ降るだろう」スリ　スワミィは上の言葉を紙片に書かせ、その紙を祝福の徴として農場主達に与えた。その夜から、激しく雨が降り、１２時間以内に全ての貯水池は一杯になった。農場主達皆はスワミィの許にきて、感謝してその前に平伏した。

ある時ヤルラパドゥ村で、何の原因もなく人々が死んで行った。村人達は悪霊が村に入って悪さをしているのだと考えた。誰も日没後は戸をしめて外に出ようとしなかった。数人の村人がスリ　スワミィに頼み込み、村に連れてきた。彼らが村に着くまでに、夜になった。そのため、悪霊が戸を叩いているのだと思った村の人達は、誰も戸を開けなかった。やっと１人の老婦人が勇気を奮って戸を開けた。彼女は、スワミィの到着を大声で報せ、村人達皆そこに集まってきて、スワミィを歓迎した。

スリ　スワミィは村で神聖火をもやし、数日そこにとどまった。その後、村では時ならぬ死亡はなくなった。

１９７４年の焼け付くような夏のことだった。ゴラガムディのアシュラムが火事になり、火は辺り一帯に広まり、西風が強かった。近くに水はなかった。従者の一人ラマナイアはスリ　スワミィに祈って、小さなバケツの水を炎にかけた。火事は消防隊でも手に負えなかったのに、その少量の水で下火になった。それはスリ　スワミィのお陰に他ならなかった。

ある時、スリ　スワミィはタルプール村のシバ神寺院にいた。スワミジと一緒にいたのは、従者一人だけだった。雨が降りだし、空は厚い雲で覆われ、雷が鳴った。従者はスワミィに、「スワミ！雨がひどく降ってきそうです。あなたを中に運び入れる人は誰もいません」と訴えた。従者はひどく心配した。スリ　スワミィは彼に、前にマットを敷くよう命じた。従者は再度訴えた。「スワミィ！雨が降っています。もしあなたが進もうとされても、私はあなたを寺院の中に運び入れることができません」

スワミィは言った。「雲は、縛りあげられねばならない。少しの間は、我慢しよう」

スリ　スワミィはマットに座り、暫く雲を睨んでいた。数分すると、雲

は散り、雨は止んで、空は晴れた。

ある日、スリ　スワミィはカリチェドゥのナラサ　レディの家にやってきた。彼は家の人達に、台所の屋根用に数枚のトタン板を用意するようにと言った。ナラサ　レディの妻は、それを買うだけのお金がありませんと言った。スリ　スワミィは、「心配いらない。それらは自然にうまく行くだろう」と言った。５日目に、彼女はバダを料理していた。突然、油の容器に孔が開き、全ての油がかまどの火の方へ流れて行こうとした。直ちに、彼女はもう１つの容器を取って、残っている油を全部それに移した。その時彼女は、油が竈の火に落ちていたら、ひどく燃え上がり、藁葺きの家は火事になっていただろうと思った。しかし、何事も起こらなかった。その時やっと、彼女は５日前のスリ　スワミィの言葉「それらは自然にうまく行くだろう」を思い出した。スリ　スワミィのその言葉が、火事から彼女の家を救ったのだった。

ある時、スリ　スワミィはタルプールにいた。バリゲラ　ナガイアが尋ねた。「スワミィ！いつ雨は降りますか？」

スワミィ：アイヤ！今年はたった３度しか雨は降らない。最初の雨は１ヵ月半後に、２度目はそれから２ヵ月２４日後に、３度目はそれから３月月５日後に降るだろう。これが、神々が与える雨の全てだ。

ナガイア：スワミィ！もし１ヵ月半もの間雨がなければ、牛も人も死ぬでしょう。

スワミィ：もしそうなれば、私達は骨折って雨を手に入れなければならない。

ナガイア：スワミィ！時間がきました。お粥をお食べください。

スワミィ：アイヤ！私達は目的の課題が完了してから、水を飲むべきである。

この後、彼は６日間粥も水も摂らなかった。彼は６日間、姿勢も変えずに座っていた。夜も眠らなかった。

今まで、彼はよく長い間横になっていた。帰依者達は、スリ　スワミィは体力を回復するには余りにも年寄ったと考えていた。しかし、この出来事は皆の目を見張らせ、彼らはスワミジの力とスタミナに気付くことができた。６日目に、彼は沐浴し、アサナ（ヨガの姿勢）で座った。直ちに、雨が降りはじめ、翌日の朝までに全ての貯水池が一杯になった。

私達はプラナの中で、聖者達がヤグナや苦行によって雨を適時に降らせたことを読んだことがある。今日、私達はスリ　スワミィが同じことをしたことを知っている。そのような能力のある人物達はブスラと称される。

ある人々はこう言うかもしれない。「もしスリ　スワミィがそのような

有能な聖者であったのならば、雨を降らせるのに、どうして6日もかかったのだろうか？」聖典は、その地方の人々の罪の合計が、その地方の旱魃の原因であると明言している。人々の悪いカルマを苦行で埋め合わせるために、彼は一定の時間を必要とした。この旱魃のような自然の悪い影響は、神への信仰と人々の日常生活の中の、ダルマ（正義）の欠如の結果だった。そのせいで、人々は神にプジャ（礼拝）とバジャンを行わない。このため、人々はこのように自然の激怒（天罰）に直面することになった。

１９８４年の収穫時に、ネロール地方を巨大なサイクロンが襲った。スラーペット、ナイドゥペット、グドゥール、ネロールで全ての作物が、洪水で流された。しかし、ネロールから８キロ離れた村ゴラガムディでは、村人全員が、スリ　スワミィの名を大声で唱えながら畑で働いた。周辺の村々に酷い雨が降っていた３日間、厚い霧が出たが、雨は降らなかった。そのため、ゴラガムディ村の農夫達は全ての作物を、安全に収穫することができた。これはひとえに、スリ　スワミィの名のアンナ　サンタルバナの行いによるものである。「聖典は決してまちがっていない。ただ、私達がそれを間違って理解しているだけである」（シルディサイ）

ある日、パラコンダ　スッバ　レディがチャカラ　グンタで、大きな木を切った。スリ　スワミィは彼に、幹を頭に乗せて運ぶように言った。それは彼が頭で運ぶには、余りに重かった。スリ　スワミィは彼に、それを地面に投げ下ろすように言った。彼が幹を投げ出すと、スリ　スワミィは杖でその丸太を突いた。それから再び、スリ　スワミィは彼に丸太を運ぶように言った。その時には、丸太はごく軽かった。スッバ　レディは、スリ　スワミィはもし意志すれば何事でもできるらしいと思った。

ある日ボヤナパリで、人々がブラフマンガル（バラモン）の妻ゴビンダンマの噂をしていた。人々は、彼女が油なしで水でランプを燃やしたと言い、彼女の偉大さを称賛した。スリ　スワミィはこれを聞くと、人々に器に入った水を渡し、その水でランプに火を灯すようにと言った。全く驚いたことに、全てのランプがその水で明るく燃えた。スワミィが私達の間にいた間は、彼はそのような驚くべきことを人々に告げ報せることを決して許さなかった。彼は人々に、それらのことを黙っているよう命じた。

彼は森を独りで放浪していた頃、真夜中に食物を求めてＰ．セシャイア　ナイドゥ（チェロパリ村）の家に行くことがよくあった。セシャイアの母親は、スリ　スワミィの熱心な帰依者だった。彼女はバクティ（帰依心）と尊敬をもって、恭しくスリ　スワミィに食事を給仕した。

１９７７年、このセシャイア　ナイドゥが道を歩いていた。スリ　スワミィは彼を呼んで、書き付けを与えた。それによって、スリ　スワミィは

、彼の命は１年４ヵ月と６日後に危なくなるだろうが、スリ　ティルバルル　ベーラ　ラガバ　スワミィが、その危険から彼を救うだろうと告げた。長らく経ったある日、彼は電気モーターで田に水を入れ、耕し始めた。直ちに、牡牛の一匹が田の水の中に倒れ、足を激しく震わせだした。セシャイア　ナイドゥは牛の尻尾をつかんで、引っ張ろうとした。彼の足も水の中の電流を感じた。彼は、電源スイッチを切ってほしいと叫んだ。しかし、付近の人が電源を切るまでに、その牡牛はその場で死に、別の牛は死を免れた。彼は牡牛の死の原因についてよく考えた。検電器で田を測定した友人は、田圃中で電流を探知した。それで、彼は牡牛の死が、電気ショックのせいだったことを確信した。しかし、死んだ牛と一緒に裸足で水の中にいたナイドゥが生き残ったのは、皆にとって不可思議なことだった。

不意にナイドゥは、ずっと前にスリ　スワミィに渡された書き付けのことを思い出した。彼はそれを捜して、見付けだした。その書き付けによれば、この恐ろしい事故は、丁度その日起こることになっていた。彼は、スワミィの祝福がなければ、自分はきっと牛と一緒に死んでいたに違いないと思った。

ある時、スリ　スワミィの一人の従者が、「スワミィ、シッダライア　ヒル（丘）で、ある聖者が割れた石を合わせたというのは事実ですか？」と尋ねた。スワミィは話した。「そう！それは可能だ。ある時、私はこの寺院のシバリンガムの前で大きな火をもやし、扉を締め、扉の隙間から見ていた。火の熱のせいで、床張りの石が全部細かく砕け、炎と一緒に空中に上がった。その時、私は不図思った。朝、村人達はこの状態をどう思うだろうか？直ぐに、全ての石の欠片は下に落ちて一緒に合わさり、元通りになった」この言葉は、意志の力によって、割れた石の欠片が元に戻ることが可能であることを認めるものである。

ある日、スリ　スワミィは牛車でシッダライア　ヒルに行こうとしていた。途中で、厚い雲が出て雨が降りだした。従者達はスワミィに雨のことを話した。スリ　スワミィは空に向かって掌を見せ、雨を止めるよう合図した。驚いたことに、彼らが目的地に着くまで、雨はふらなかった。

ゴラガムディのアシュラムに、大きな石があった。それは大変重く、二人でも持ち上げられなかった。ある日、スリ　スワミィはそれを、誰の助けを受けずに頭にのせて、西の方にもって行った。彼は３時間後に戻ってきた。帰依者達が丸石のことを尋ねると、彼は、石はそこにない方がよいと答えた。

同じく、一人の村人が自分の家の建築に使うために、一本の重い丸太を置いていた。ある夜、スリ　スワミィはそれをもってきて、火にくべた。

翌朝、丸太の持ち主がスリ　スワミィの所に来て、木がなくなると叫び訴えた。スリ　スワミィは彼に、斧でその木を割ってみなさいと言った。木の中には大きな蛇がいた。「バストゥ・サーストラ」によれば、もし私達がそのような材を用いるならば、家の持ち主は大きな災難に遭遇し、滅びると言われている。

ある日、サッテンマはスリ　スワミィを夢で見た。スリ　スワミィは口から大きな炎を出していた。彼女は、スリ　スワミィが来ようとする道をきれいに掃除していた。スリ　スワミィは彼女にこう話した。「私は、私の名で１口の食物を差し出す人々の幸福の世話をするだろう」

ある日シッダライア　ヒルで、ムニカンネカル（悪霊達）が、マリカ　ベンカイアに、新しいもっと偉大なグルの所に行くから、自分達について来なさいと言った。彼は自分のグルから離れることを拒否し、彼らに去れと命じた。同じやり方で、これら悪霊達は彼を何度もからかった。ある日、スリ　スワミィは彼の胸を平手でぴしゃりと打ち、「これからは、君を彼らが悩ますことはないだろう」と言った。悪霊達はその後は２度と彼を悩ませなかった。ある日、スワミィは彼に、ある木の葉の丸薬を造り、それらを彼の慢性病に使うようにと言った。丸薬は彼の生涯でずっと有効だった。

ある日、スリ　スワミィはベンカイアに、「もしなにか悪い霊が君の命令に従おうとしないならば、神聖火の柱を掴めと命じなさい。君が私の教えに従う限り、君はどんな悪霊も恐れることはない」と話した。

ある時、（ゴラガムディから３キロメートルの距離にある）カンテパリ村の全ての牛が、足が腫れる病気に罹った。マリカ　ベンカイアは、グルデーブ（スワミィ）の囲炉裏で焚く薪を森に取りに行くのに、必要な牛車を使うことができなかった。マリカ　ベンカイアはグルデーブに教わった特別なマントラを唱えて、牛にその病気を起こした神ポレランマを呼び出した。ポレランマは、目が沢山散らばり長い髪で姿を現し、彼を脅そうとした。疫病神は、その幽鬼のような外見で彼をびっくりさせようとした。しかし、彼は少しも恐がらなかった。それどころか、彼はこう怒鳴った。「ここには、お前のいる場所はない。直ぐに、カンテパリから立ち去れ。さもなければ、私のグルデーブの火の柱を抱かせてやる」彼女は許しを請い、３日目の朝までには村を立ち去ると約束した。彼女は約束を守り、全ての牛は病気から回復した。農夫達は、スリ　スワミィの神聖火のために、自分達の牛車で薪を運んで行った。

ある日の早朝４時、マリカ　ベンカイアは牛車で、森から薪を持ち帰ろうとしていた。途中で、コブラが鎌首を広げて尻尾で立ち、荷車を止めた

．ベンカイアは荷車から飛び降りると、斧でコブラを殺そうとした。蛇はシュッという大きな音を出し、怒ってあっちこっちと逃げた。しかし、蛇はベンカイアにも牛にも危害は与えなかった。彼は蛇を殺そうとするのを止め、スリ　スワミィに教えられた神聖マントラを唱えた。コブラは直ちに鎌首をすぼめると、茂みの中に逃げ去った。

N．スリーラーマ　ナイドゥは井戸を掘っていた。１８フィートの深さで、彼らは硬い丸石にぶつかり、それ以上掘り進めなくなった。その地方では、水は３０フィートの深さでないと得られなかった。彼はこの難問をスリ　スワミィに説明した。スリ　スワミィは彼に、彼らの料理の最初の１部を４日間その井戸の中に捧げなさい、そしてもう４日間はその作業を休み、どうなるか見なさいとの助言を与えた。彼はスリ　スワミィを強く信仰していたので、スワミィの助言を実行した。不思議なことに、８日目に彼が作業を始めた時、あの硬かった岩はごく軟らかい石になっており、全ての作業が数日で完成した。

N．スリー　ラマイアのライム果樹園は、予定の５年がたっても１年も果物がならなかった。彼はスリ　スワミィに、自分の果樹園に祝福を与えて下さいと懇願した。スリ　スワミィは彼に、村の貯水池の近くの池の水をコップ１杯もってきて、その水を少しずつ果樹の幹にかけ、一粒の水も地面に落とさないようにしなさい、と助言した。彼は忠実にスリ　スワミィの助言を実行し、残った水は井戸に注ぎ入れた。全く驚いたことに、２週間以内に、彼自身の果樹園ばかりでなくその井戸の水を使った全ての果樹園が、非常によい収穫をもたらした。

ある日、スリ　スワミィは昼食を摂ろうとしていた。スリー　ラマイアがダルシャンを受けに来た。スワミジは、昼食を一緒に食べようと彼を誘った。もし彼が食べたならば、その食事はスワミジには足らなくなりそうだった。そのため、スリー　ラマイアは食べるのを断った。スリ　スワミィは言った。「アイヤ！あなたはこれをただの米だと思っているのかね？将来、その効果がわかるだろう」スリ　スワミィは両手に食事を乗せて、彼に食べるように、そして帰り道の陶工の家で水を飲むようにと言った。彼はスワミィの命じた通りにした。数年後、スリー　ラマイアは自分の家を出て、ゴラガムディに来て、スリ　スワミィへの奉仕に加わった。彼は生涯の最後まで、近くの村アニケパリにビクシャ（施し）を受けに行った．このように、スリ　スワミィの言葉は本当だった。

曾て、スリー　ラマイアの家族は不健康と内輪揉めで大変苦しんでいた．その頃、彼はスリ　スワミィから、ラクシュミナルス氏の家の反対側の彼の敷地に埋まっている骸骨の遺体を取り除けるようにとの手紙を受け取

った。掘ってみると、多くの炭と骨が出てきた。それらを取り除けると、彼らは仲のよい平安な生活を送ることができた。

モプル　ダサイアとコマラギリ　ラマナイアは、大きな木を切り倒した。彼らは木の幹を牛車に縛り付けようとした。しかし彼らは、綱を用いても木を持ち上げることができなかった。そこで、彼らはこの問題をスリ　スワミィに話した。スリ　スワミィは、「パラーブを食べる人達を呼びなさい」と言って立ち去った。彼らは仕方なく、もう一度木の幹を持ち上げようとした。今度は、木は非常に軽かったので、簡単に持ち上げることができた。

ある日、スリ　スワミィは川の水面に数本の乾いた木の枝を浮かべ、ロープで火を点けた。彼はその火に水をかけていた。火は消えないで、炎をあげて燃えていた。この出来事は、マタージ「バカンマ」の話によるものである。同じ奇跡は、スリ　アカルコタ　スワミィの伝記にも見出される。

数人のアメリカ人が初めて月に着陸し、みごとに戻ってきた。世界中の人々が、彼らの科学と技術の進歩に拍手喝采を送った。ある日、ノーテティ　アウデイアはスワミィに、「スワミィ！アメリカ人達が月に着陸して、見事に帰ってきました」と話した。これを聞いて、スリ　スワミィは「月はなんと小さいことか！月は橋ほどもない」と言った。大きさと距離を、もし私達が月を宇宙や惑星と比較するならば、確かに月は小さなものである。スワミィは宇宙的霊であるので、この途方も無い出来事をそのように軽く評したのも、驚くべきことではない。

クルル　ラジュパレムで、エルカラ　ラジュの井戸は夏の間は干上がり、雨期には水は酷い臭いがし、汚い虫が一杯いた。ある日、スリ　スワミィはその井戸で沐浴をした。この後、その水はきれいで飲めるようになり、夏期の間も水が不足しなかった。

ある時、マングパリ村で、人々がコレラで死んでいた。河は洪水だった。そのため、村人達は河を渡ることができず、スリ　スワミィの所にきた。スリ　スワミィは火の点いた松明をチャラマナイドゥに渡し、彼の注意をその松明に集中して河を渡るようにと命じた。河は洪水だったが、彼らは河を渡り、マングパリに着いた。彼らが河を横切っている間、河は膝の深さしかなかった。スリ　スワミィはその村のはずれに、紙切れを付けた棒を立てて、戻ってきた。その後、一人の人も村では死ななかった。

チンタラパリ（ビシャカパトナム）の森に住んだパカラ　パティ　グルプ　ガルもまた、このようにしてある村を守った。

３、全知なるスワミィ

偉大な聖者達の恵みを受けて、「私は肉体である」との錯覚から目覚めた人、即ち完全なアートマグナナ（アートマの知識）に至った人は、サットプルシャと呼ばれる。彼らの殆どは普遍霊との一体化に達しており、至福の喜びに浸っている。これに加えて、彼らの幾人かは、世界中で起こっているあらゆることに気付いており、いつ何時でも帰依者達を救う。

このようなマハトマ（偉大な魂）達の中で、スリ　シルディ　サイババは宇宙の中で、そのようなグルの帝王であると考えられている。アバドゥータ　ベンカイア　スワミィもまた、この部類に属している。スリ　スワミィはサイナスのことを、よくこう言った。「アイヤ！やはり神聖火を崇拝する私の兄弟が、北方にもいる」恐らくこの関係が、スワミィがビジャヤナガールのサイババ　マンディールを訪問した理由の１つであろう。でなければ、なぜ彼は通常の訪問の範囲を越えた所にあるマンディールを訪ね、そこに５日間も滞在したのだろうか？この章では、彼の全知を示す数例を見てみよう。

ある日、ゴウニ　ペンチャランマはスワミィに、いくつかのベテルの葉と実を差し出した。彼の従者達は彼女の贈り物を拒絶し、それらを投げ捨てた。彼女は感情を害して、離れたところで横になった。すぐに全知のスワミィは彼女の方を指差し、何度もベテルの葉とナットを求めた。従者達はペンチャランマに頼んで、彼女からベテルの葉とナットを貰って、それをスリ　スワミィに差し出した。スリ　スワミィは差し出された品物の値ではなく、差し出す者の背後の思いを重視する。

ある日、スリ　スワミィはコドゥル　ベンカンマの家にいた。スリ　スワミィは、全ての客人達が食事を済ました後でのみ、食事を摂ることにしていた。ベンカンマはスリ　スワミィを昼食に招いた。

スワミィ：「４０人の人が昼食に来ようとしている。時間を無駄にしてはいけない。行って、その人々のための用意をしなさい」数分の内に、正確に４０人の人がスリ　スワミィのダルシャンを受けにやってきた。食事は用意され、その１団に出された。

ある日、スリ　スワミィはインドゥクルペットのアートマクル　ベンカイアの家に行った。スワミィは彼らの牛車を見ると、「アイヤ！この牡牛は脚の病気になるだろう」と言った。しかし彼は、それに対する治療法は告げなかった。数日後、平らな道で荷車を引いていたその牡牛の脚が、音を立てて折れ、牡牛は片足が悪くなった。あらゆる治療にも拘らず、彼らは脚を治すことができなかった。そのため、彼らはその牛を売り払った。

ある日の早朝４時、コマラギリ　ラマナイアとＰ．スッバ　レディは薪を取りに森に行こうとしていた。スリ　スワミィは繰り返し４・５度も、カンテラをもって行くように言った。スリ　スワミィの指示に従って、彼らはカンテラをもって出かけた。途中で、彼らはコブラが道を横切っているのを見付けた。コブラはカンテラの光を見ると、茂みの中に這い込んで行った。全知のスワミィは、宇宙の中のあらゆる生き物の所在と動きを知っていた。

ある日、スリ　スワミィはＰ．スッバ　レディに、「アイヤ！海が膨れている。あなたは直ぐに家に帰りなさい。ここにいてはいけない」と告げた。スリ　スワミィの指示に従って、彼は家に帰った。その夕、彼の兄が、家族を顧みることなく長い間スリ　スワミィに仕えていたスッバ　レディを連れ戻すために、スリ　スワミィの所にやってきた。勿論、彼らは互いに会うことができなかった。サムサーラ（この世）の海は、中に浸かることによって私達の罪を償ってくれる通常の海よりも、ずっと危険である。

スリ　スワミィは、１０年前にソマシラ　ダムの礎石の敷設を予言した。ある日、スリ　スワミィは神聖火から離れると、暫くして戻ってきた。従者達はスリ　スワミィに、一体どこに行っていたのですかと尋ねた。スリ　スワミィは彼らにある場所を示し、「将来、そこに寺院ができるだろう。そのための印をつけておいた」と言った。数年後、ソマシラ　ダムが建設され、そこに寺院も建てられた。

ある時、イヌクルティ村のカリ　ラマスワミィは鼻と口からの出血で苦しんでいた。ネロールの医者の誰も彼を治すことができなかった。最後の拠り所として、彼は自分の苦境のことをスリ　スワミィに話した。スリ　スワミィは指示して祝福を紙に書かせ、こう言った。「君は明後日治るだろう。君は４４日目に命に関わる事故に遇うだろう。しかし、神の恩寵で、君はその危難からも免れるだろう。君は７２年２ヵ月間生きるだろう。君はティルパティとカンチとティルバルールを訪問しなければならない。その各聖地で、沐浴し、ココヤシを捧げ、その夜はそこで眠って、帰って来なさい」スリ　スワミィの恵みにより、彼は何も薬を用いずに３日目に出血が治った。長い間、彼は感謝してスリ　スワミィを訪問していたが、スリ　スワミィに命じられた場所には行かなかった。ある日、彼はタルプールにスリ　スワミィを訪ねた。即座に、スリ　スワミィは彼に、直ちに指示した聖地に行くよう命じ、もし必要ならある人から借金をしなさいと言った。

彼は生地に帰らずに、ある人から借金して、直ちにティルパティへと出

発した。各地で、彼はスリ　スワミィの指示通りの全ての事を行い、無事に帰ってきた。２日目に、彼はマスタン　バリ　ダルガ（ネロール地方の名高い巡礼地）を訪問するため、カスムールに行った。途中の貯水池の堤防で、巨大なコブラが彼を攻撃した。蛇は１時間半彼を脅した。彼はただ目を閉じ、スワミィに祈った。すると、蛇は茂みの中に入って行った。翌日、彼はスリ　スワミィの許に行った。彼を見ると、スリ　スワミィは言った。「昨日、君は４４日目の危難を免れた」スリ　スワミィは帰依者達の迫っている危難を予言するばかりでなく、彼らをそれらの危難から救ったのである。

ある日、ジャヤラム　ラジュは料理の器を戻すために、隣村へと出かけた。スリ　スワミィは彼に翌日行くよう命じた。彼は、帰って来るのに十分な時間がないのでスリ　スワミィはそのように命じられたのだと思った。それ故、彼は早く戻るため道を急いだ。途中で、コブラが彼を攻撃し、彼を通さなかった。彼は落胆した。遂に彼はスリ　スワミィの言葉を思い出し、許しを願った。すると、直ぐにコブラは茂みの中に入って行った。こうして、彼はスリ　スワミィの警告の深さを経験したのだった。

ゴパラム村のパラコンダ　スッバ　レディは、自分の耕作地に井戸を掘るので、スリ　スワミィの祝福を願った。スリ　スワミィは、それは海だと行った。井戸が完成してから、５馬力のモーターで水を汲み出しても、井戸の水位は１インチも下がらなかった。

パラム　クリシュナ　レディは耕作地で稲を育てた。最終段階での水不足のせいで、金色の稲穂は籾殻になってしまった。予想的計算では、もし２００キロの収穫があればよい方だった。もし少なくとも千キロの収穫がなかったら、彼は耕作に使った費用が得られなかった。そこで彼は、もし千キロの稲が収穫できたら、百ルピーを差し出しますとスリ　スワミィに誓った。収穫の日、スリ　スワミィは彼に稲千キロの収穫の祝福を与えた。しかし、彼は自分の経費のために３０ルピーを使い、７０ルピーをスリ　スワミィのマットの下に入れた。即座に、スリ　スワミィは、「誓いの通りでない。不十分だ。まだ３０ルピー残っている。その金額も払いなさい」と言った。従者の一人がスワミィに、「彼は、帰りの旅費がありません。彼は、後で払うと約束しています」と話した。スワミィ：「彼は払わないだろう。君が彼の代わりに払うと約束するかね？」従者は払うと答え、その金額はスワミィに受け取られた。時の経過と共に、スワミィの予言は本当であることが判った。彼も彼の友人もその金額を支払わなかった。

ある日、スリ　スワミィはウンパを朝食で給仕されていた。彼は少し食べると、残りをマリカ　ベンカイアに与え、それを犬達に食べさせなさい

と言った。しかしベンカイアは、犬達に食べさせないで、自分がそれを食べた。彼は、スワミィが自分を叱らなかったので大いに喜んだ。彼は同じことを４日間繰り返した。５日目に、スリ　スワミィはそれをベンカイアに与えないで、神聖火に投げ込んだ。スワミィは言った。「２本脚の犬が毎日食べ物を飲み込んでいる」直ちに、ベンカイアは自分の罪を後悔し、スリ　スワミィの許しを祈り求めた。

ある日、バカンマはビジョン（幻）を見た。一人の婦人が彼女にクムクムの入ったブリキ缶を与えようとし、彼女はそれを拒んでいた。すると、婦人は無理に彼女の頭に油をつけた。翌朝、バカンマは額に数個の出来物ができた。彼女の状態を聞いて、スリ　スワミィは言った。「彼女は幸運だ。彼女はこの世に２度と生まれてこないだろう。彼女は柱のようになるだろう」従者達はスワミィに、彼女の頭の出来物のことを話した。再び、スリ　スワミィは同じことを繰り返した。

ティルパティのピリゴル　ベンカタムニ　レディはイヌクルティに来て、スリ　スワミィの偉大さを耳にした。次の日、彼はゴラガムディのスリ　スワミィを訪ねた。スリ　スワミィは彼に、「２１日目に暴動があるだろう。だが、あなたには被害ないだろう」と記した書き付けを与えた。本当に２１日目に、彼の地域で暴動があり、そして殺人まで起こった。しかし、スリ　スワミィの恵みのお陰で、彼は対立者達の最大の挑発にも忍耐強く冷静で、口を開かなかった。この事件の後、彼はスリ　スワミィに与えられた書き付けを偶然見た。その事件は、正確に２１日目に起こっていた。このため、スリ　スワミィへの彼の帰依心は、強められた。彼は生涯ずっと、祝福を求めてスリ　スワミィの所に通った。こうして、スリ　スワミィは、自分の群れの中にさらにもう一匹の羊（帰依者）を引き込んだのだった。

ある日、従者達はスワミィに、Ｐ．Ｖ．Ｍ．レディが彼のために新しい衣服を持ってきたことを告げた。スワミィは、「アイヤ！彼は多くの困難から免れるだろう」と言った。

ある日、スリ　スワミィはパラコンダ　スッバ　レディに、「あなたの村と隣村との間でもめ事が起こるだろう。もしあなたが一言発したら、そのもめ事は収まる」と言いながら、書き付けを渡した。この言葉を聞いて、スッバ　レディはスリ　スワミィに、「どのようにすれば、私はそのような大きなもめ事を扱うことができるのでしょうか？人々は私の助言に耳を貸すでしょうか？」と尋ねた。スワミ：「あなたはここから行こうとしているから、全ては一言でよくなるだろう」

本当に論争の起こった日、２つの団体は村はずれで、命を狙う武器を用

意していた。P．スッバ　レディはスリ　スワミィの言ったことを覚えていて、そこに行き、「他の人達を論す筈の有能なあなた達のような年長者が、このような格好をしているのはよくないことです」と言った。私達はこれらの言葉の効力を想像できない。しかし、双方は直ちにその場から立ち去った。それはスワミィの命令だったのではないだろうか？

N．スリー　ラマイアとV．ゴビンダイアは、彼らの（生まれる子）胎児の性別を知りたいと、スリ　スワミィの許にやってきた。彼らが口を開く前に、スリ　スワミィは彼らを嫌い、「あなた達両人は、男児をもつだろう。帰りなさい」と言った。彼らは男の子を持った。

しかし、なぜ私達のスワミィはいつものように彼らに優しく話さなかったのだろうか？それは、彼らがスリ　スワミィの偉大さを理解していなかったからである。スリ　スワミィはある時こう言った。「人は焼かれて灰になるが、もし私達が彼に来るよう命じるならば、彼はこの世に戻って来るだろう」彼らは長年スリ　スワミィと接してきたにも拘らず、スリ　スワミィの偉大さを、理解できなかった。この理由のために、スリ　スワミィは、彼らの愚かな質問に、憤慨したのだった。

数年前、アメリカの科学者達は、宇宙船で空にスカイラボ（空の実験）を打ち上げた。科学者達は、その寿命がきたら、それはインドのどこかに落下するだろうと公表した。従者の一人がスリ　スワミィに、スカイラボの落下について質問した。スリ　スワミィは、それは海のどこかに落ちるだろうと答えた。後日、スワミィの言葉は本当であったことが判明した。スカイラボは、インド洋のどこかに落下した。

１９７８年中、一人の赤子が血を吐いて、大変苦しんでいた。多くの医者がその子を治療しようとしたが、できなかった。遂に、両親はスリ　スワミィの所にきた。スリ　スワミィは赤子の体を首から爪先までマッサージした。そのときから、赤子は元気になった。感謝した両親はスワミィに、２５０ルピーのダクシナ（布施）を差し出した。彼らの何度もの願いにも拘らず、スリ　スワミィはその申し出を断った。遂に、スリ　スワミィは、「４ヵ月後にダクシナをもってきなさい」と言った。正確に４ヵ月後、その子は死に、両親は金をもって来なかった。

カリラーマ　スワミィの娘が、女神カマクシャンマに取り憑かれた。プジャの間、娘は意識を失うようになった。家の人達は５年間、カシミール、ナブール、アナサムドラム　ペタの聖地を訪問した。しかし何の効果もなかった。到頭、彼らは娘をスリ　スワミィの許に連れてきた。スリ　スワミィは「彼女はジョンナバダ　カマクシャンマに取り憑かれている」と言った。彼女はその女神に憑依されている時、帰依者達の質問に答え、問

題の回答を与えていた。そのため、その家はいつも帰依者達で満員で、家族に大きな不便を齎らしていた。スリ　スワミィは、金曜日以外は娘に出てきてはいけないと書いて、女神に命じた。私達のスワミジの指令は実行された。その日になると、群集がその家につめかけ、家人達に大きな迷惑となった。彼らはスワミィに、カマクシャンマが娘に永久に取り憑かないよう、女神に命じて下さいと懇願した。スリ　スワミィは紙に命令を書かせ、それを彼女に与えた。その日から、娘はその厄介から解放された。今、彼女は結婚し、子供達もいる。神々でさえ、サドグル（真のグル）の命令には従うのである。

ある時、コッラクティ　ブジャイアは現金を極度に必要とした。彼は羊を肉屋に売ろうとした。その夜、夢にスリ　スワミィが現れて、「羊を肉屋に売るのは最も大きな罪だ」と言った。すぐに彼は目を覚ました。「スワミィが言われたことは本当だ。しかし、この差し迫った時にどうすればよいのだろうか？どうなっても、スリ　スワミィは私の唯一の救い主だ」と、彼は考えた。翌朝、彼は羊をネロールに連れて行き、肉屋の店にそれらを繋いだ。非常に多くの人々が往き来していたが、誰も羊を買おうとは言わなかった。最後に、隣村の人が来て、もし譲歩的な値段でよければ羊を買ってもよい、自分は羊に餌をやって育てると話した。直ちに、彼はその村人に、譲歩的な値で羊を売り払った。こうして、スリ　スワミィは肉屋から羊を、また彼の帰依者を罪の重荷から救ったのだった。

ある日、スリ　スワミィはパンチャリンガラ　コナに行った。従者達は休息をとるため、ある場所で止まった。スリ　スワミィは彼らに、その場所には危険があるから、これ以上留まってはならないと言った。すぐに、一行は道を先へ進んだ。帰りの旅の途中、彼らはその場所で、丘の巨大な片面が崩れているのを見た。従者達はスワミィの言葉の意味が判ったのだった。全知のスワミィは、世界中のあらゆることを知っていた。

２５日間の捜索にも拘らず、スッバ　レディは彼の牡牛を見つけ出すことができなかった。最後に、スリ　スワミィに牡牛のことを尋ねた。スリ　スワミィは彼に、牛を探しに行かないように、牛は自分で戻ってくると言った。彼が家に着くまでに、牛は彼の家に戻っていた。同じく、私達は、シルディ　サイババがチャンドパテルの馬の行方を報せたことを知っている。

ある日、スリ　スワミィはスッバ　レディに、彼が土地の形の財産を得るだろうと記している書き付けを与えた。数か月内に、彼は土地の権利書を得た。しかし、村のカラナム（収税人）が彼に反対し、その権利書を無効にした。しかし、スリ　スワミィの恩寵により、その土地は彼のもので

あると確証された。罰則として、カラナムは職を失った。スワミィの言葉は本当になった。

A．ニーラカンタ　ラジュはチェーララで教師をし、彼の細君はカリチェドゥで働いていた。もし彼がカリチェドゥで仕事を得たならば、夫婦が同じ所で生活することができた。そこで、二人はスリ　スワミィの祝福を求めるために訪れた。スリ　スワミィは、彼は数か月以内にカリチェドゥで任命されるだろうと言った。その時はそのような可能性は全くなかった。なぜならば、カリチェドゥ中学校にはサブジャンと言う名の若い教師が既にいたからだった。しかし、数か月内にサブジャンは生まれ故郷ラプールに職を見付け、カリチェドゥでの職を辞めた。そのため、スリ　ラジュはその空いた職に任命された。

A．N．ラジュの娘パドマジャは度々の引き付けで苦しんでいた。スリ　スワミィは彼女に祝福を与え、９才になったらその苦しみはなくなるだろうと言った。正確にその日に、パドマジャはその病気がなくなった。今、家族達はスリ　スワミィの信心深い帰依者である。

ダチュール生まれの人カスツーリ　アンカイアはこのように報告している。「１９６０年中に、スリ　スワミィは両膝の関節の痛みで、脚を伸ばすことができませんでした。彼はどんな治療も受けることを固く拒否しました。ある日私は、スリ　スワミィが私が願わないのに脚の治療のことを話すまで、スリ　スワミィの許から離れて家に帰るまい、と決心しました。私は脚の治療の準備をし、スリ　スワミィを歩けるようにしなければと思いました」

「その夜、皆がバジャンを行っている時、私はスワミィの前に座って、自分の目論みを深く考えていました。スリ　スワミィは、『なぜこのように頑固なのか。どして君はそのように座っているのかね？』と言いました。私はバジャン会に行き、暫くして戻ってきて、スワミジの前に座りました。前の計画が心に浮かんでいました。午前２時半頃、スリ　スワミィは、『そのことを求めてはいけない』と言った。私は彼の意向に不同意を示して、首を振りました。即座に、スリ　スワミィの声は高くなり、『もしそうならば、もう一度きなさい！それは大変よくないことだ。そのようなことを求めてはならない』と叫びました。私は彼の許しを願い、立ち去りました」

K．アンカイア氏はもう１つの出来事をこう話している。「私の孫バラジは３才で、弟スバンナは１８ヵ月でした。スバンナが幼い時、スリ　スワミィは、前世で彼はスバンナという名の商人だったと言いました。そのため、スワミィは彼をスバンナと名付けたのでした」

「ある日、このバラジとスバンナは家の近くの井戸に下りて行きました。水を飲んでいる時、スバンナは足を滑らして深い井戸の中に落ちました。バラジは泣きながら走り、父親がその場に駆け付けて、５フィートの深かさの水に浮いていたその子を助け揚げました。息子を救いあげている間に父親の衣服はずぶ濡れになりました。どうしてその子は、そのような深みに沈むこともなく水も多く飲まず、浮いていたのでしょうか？それは村人達にとって大きな驚きでした」

彼らは、ずっと以前にスワミィに与えられた書き付けのことが本当であったことを知ったのだった。それにスリ　スワミィは、その少年の生命は水の危険に遭うだろうが、ティルバルールのベーララガバ　スワミィの恩寵によって救われるだろう、と書いていた。その書き付けに記されていた年月日は、少年が滑って深みに入ったその日と正確に一致していた。

カリチェドゥ村の、カリヤンラム雲母鉱山の監督官ポリレディ氏は、その鉱山の生活共同組合のもめ事に巻き込まれた。彼は、スワミィの祝福と救済を求めに行った。彼が言い出す前に、スリ　スワミィは彼を近くに呼んで、「あなたはパタラロカの支配人になるだろう。彼らは幾つかの障害を設けているが、それらは神によって取り除けられるだろう」と言った。

その頃の鉱山では、支配人の職は空いていた。ベンカタギリのラジャ（王）が任命権者だった。ポリレディはその職に着く資格があったが、共同組合のもめ事のせいで、その地位を申し出なかった。王は、関係の役員に、支配人に相応しい人物を推薦して欲しい、と言った。全ての役員は、ポリレディの名をあげた。数日内に、ベンカタギリのラジャは彼を鉱山の支配人に昇進させる命令を出した。こればかりでなく、生活共同組合の問題も、スワミジの恩寵で解決された。このため、今日でも、彼は毎月２５ルピーのダクシナを送り続けている。

ポングルのＰ．ダサラダ　ラマイアは中学校で勉強中から、スワミィの祝福を受けに来ていた。ある日、スリ　スワミィは彼を祝福して、彼は視学官補になるだろうと言った。時がたつと、彼は軍隊に入り、カシミールで視学官補になった。

ネロールでのある日、スリ　スワミィは従者達に、すぐにナラシンフル　コンダ　バスに乗るよう急がせた。彼らはバスの料金を持っていませんと告げた。スリ　スワミィは従者達に、まずバスに乗るようにと言い、お金は後でやってくると話した。従者達はいぶかりながら、バスの中に座った。バスが出発しようとした時、親密な帰依者の一人ベンカタ　ラオが、スリ　スワミィを見ると、５０ルピーをダクシナとして差し出し、立ち去って行った。

ある日、スリ　スワミィはチャラマ　ナイドゥに、どこにも行かずに自分と一緒に留まるよう命じた。しかし、チャラマ　ナイドゥはいつものように友人の家に行った。完全に酔っ払っていた友は、彼をひどく殴った。チャラマ　ナイドゥは地面に倒れ、歯を２本失った。彼の首ははれた。その時、彼はスワミィの言葉の意味に気付いたのだった。

ある日、あるタハシルダール（タルカ国税局の役人）がスワミィの許に来て、「スワミィ、全ての人々があなたは偉人であると言っています。どうか、私にあなたの力を見せて下さい」と言った。彼はその願いをくり返し続けた。スワミィは長いこと黙っていた。遂に、スリ　スワミィは彼に、彼は昼食を食べないだろうと書いた紙片を与えた。そのタハシルダールはその紙片を見て笑い、ネロールの自分の家に真っすぐ帰った。彼は、家に鍵が掛かっていることに気付いた。隣人達は、彼の細君は腹痛に苦しんで、病院に連れて行かれたと告げた。彼らは病院の正確な名前を知らなかった。彼は大変不安になり、午後４時まで病院を探していた。４時頃、彼は細君が入院している病院を、捜し当てることができた。その時間には、どこのホテルでも食事はできなかった。そこで、彼はパンとお茶をとった。こうして、スワミィの言葉は本当であったことが分かった。翌朝、彼は来て、スワミィの前に平伏し、自分の間違った行い（スワミィの力を試そうとしたこと）の許しを請うた。マハトマ（偉人）達の偉大さを試そうとすることは、私達を嘆かわしい状態に置くことになるだろう。

ヌテティ　スリーラマイアの伯父は、男児がいなかった。彼は自分の全財産を娘に譲ると、スリーラマイアの家から出て行った。スリーラマイアは、伯父の行方を知りたくて、スワミィの許に来た。スリーラマイアが口を開く前に、スリ　スワミィは「彼は頭に包みを乗せて、やってくるだろう」と言った。奇妙なことに、スリーラマイアの伯父は、丁度その日、頭に衣服の包みを乗せてやって来た。

このスリーラマイアは、ある時伯父に喧嘩をふっかけ、独断で彼の土地を耕作した。彼はこの収穫物を売り、伯父に対する告訴状を提出した。スリーラマイアは、その裁判に勝てるよう、スワミィの祝福を求めに来た。スリーラマイアを見ると、スリ　スワミィは「あなたはチェンナパナイドゥのようになった。あなたは妥協するだろう」と言った。その訴訟は、スワミィに言われた通り、妥協して終った。チェンナパナイドゥは、その独断的な取引でよく知られている。

ある日、スリーラマイアはラジュパレムにいたスリ　スワミィの許に来た。彼は、自分が伯父の財産を得るかどうか知りたいと思ったのだった。彼が何かを問おうとする前に、スリ　スワミィは「もし君が梁を上げるな

らば、なくしたものを得るだろう」と言った。彼はその時は、この言葉の意味が理解できなかった。その後、彼は家を建てる時に、梁を上げようとしていた。その日、裁判所は、彼の伯父の財産は彼に譲り渡されるべきである、と命じた。

モプール　ダサイアと彼の隣人は、境界のことでもめた。そこにある壁は境界を設けるために、取り除けられた。双方はスリ　スワミィに、両者の間の境界を決めて下さいと頼んだ。スリ　スワミィはにこにこしながら、「太鼓のばちの木とニガウリが喧嘩をした」と言った。誰もその言葉の意味が理解できなかった。スワミィは足で線を引いて、「これが境界である。あなたは線のこちら側で、彼は線のあちら側になる」と言った。皆は、スリ　スワミィが以前壁があった所に正確に線を引いたので、不思議に思った。さらに目立ったことは、一方の家には太鼓のばちの木があり、他方の家には苦瓜があったことだった。スリ　スワミィはこれを、２つの木の間の喧嘩と表現したのだった。２つの木は、同じ土地に芽を出し成長した。そのような場合、両者の間の喧嘩を取り上げるのは無意味なことである。同じスワミィの帰依者の間のもめ事をとり上げることは、全く無意味なことだった。これがスリ　スワミィの意見だったようである。

ある日、１夫婦がココヤシを割り、それを神聖火に捧げて、立ち去った。彼らが立ち去った後、スリ　スワミィは「アイヤ！火からあのココヤシの割れたのを取り出しなさい。それは、犬も食わない」と命じた。従者達はそれを取り出して、投げ捨てた。奇妙にも、犬達さえそれらに触れなかった。

４、ダルマ　ムールティ

ダルマとはなにか：人生の目的の明確な理解と、自分自身の人生のためと社会のために奮闘努力すること、このようにして目標を達成することが、「ダルマ」と称されている。自然の中の全ての生き物は、ダルマ　スートラ（ダルマの法則）に従って生きている。自然の中のあらゆる生き物は、数多くの方法で自然の中の他者を助けて、それ自身の生を送っている。しかし、考えて行動する能力を持つ人間は、利己的目的を発達させた。アハンカーラ（エゴ、利己心）や嫉妬などのため、人間はダルマに従った生活を送ることができなくなった。毎日の生活の中で、人は非常に数多くの心配事に巻き込まれているばかりでなく、社会生活上でダルマ　スートラを無視する。人は、自分はダルモランガナ（ダルマの法則を破ること）をしても、善を達成することができる、と錯覚している。実際、人は平穏な

生活を送り、平穏な社会に生きることを望んでいる。そのような人々のために、何度も何度も、神は人間にダルマを説き、且つそれを実行して見せるために、マハトマの姿で顕現する。ダルマを実行するためには、私達は純粋な心をもつ必要がある。そのようなマハトマ達との交際は、人々の心を純粋にし、人々はダルマ的生活を送ることができた。その故に、バガバッドギータのような聖典は私達に、そのようなマハトマに頼るよう命じている。そのようなマハトマ達に頼らないでは、ダルマチャラナ（ダルマ的生）は、不可能である。このことは私達の周りの社会でよく見られることである。しかし、これらマハトマ達は、常に実際的な例示によってのみダルマを教えている。彼らは、私達が求めた時にのみ、口で告げるだろう。

アバドゥータ　スリ　ベンカイア　スワミィによるダルマの教えが、この章で述べられている。彼は私達に少数の原則を教えただけだったが、もし私達が真の大局的見方でそれらを理解するならば、ダルマ　スートラの残りは容易に理解されるだろう。しかし、人生でそのようなダルマを実行するためには、人は彼と十分に交流すべきである。このことは、彼と交流していた人達に齎された変容から言えることである。

さて、近頃、私達は彼の直接の存在に接することはできないが、彼の伝記を信仰心をもって読むとか、彼の教えを心に留めているとか、この偉人のことを絶えず思うことによって、交流することができる。こうすることによって、私達は努力なしでも、心の中にサドゥ　ジーバン（聖者の知恵）を成長させることができる。そればかりでなく、私達はサドゥの衣服ふりをしている偽サドゥの罠にはまることから、守られるだろう。

コラクティ　ブジャイアは、スリ　スワミィの近辺で、殆どの時間を過ごすことにしていた。ある時、彼は村にいる時でも、スリ　スワミィのダルシャンを受けに来ず、おしゃべりで全ての時間を使った。１１日目に、彼がスワミィのダルシャンを受けに来た時、スリ　スワミィは彼を他の人達に示して、「アイヤ！彼は誰かね？」と言った。ブジャイアは、自分の振る舞いを後悔した。サーストラ（道徳律）は私達に１日に１度、２週間に１度、月に１度、少なくとも６ヵ月に１度は、サドグルのダルシャンを受けるようにと助言している。この助言は、彼のマハサマディの後でも、有効である。サドグルは生と死の輪廻を超越している。だから、彼の帰依者との触合いは、そのマハサマディ（死）の後でも続くのである（とラマナ　マハリシは言っている）。スリ　スワミィは、太陽と月が存在する限り、そこにいると約束した。だから、彼のサマディ（墓所）のダルシャンとできるだけサマディで多くの時間を過ごすことは、私達にとって本当に

有益なとである。

スリ　スワミィの妹マンガンマは、シバラトリの日に断食をすることを続けた。スリ　スワミィは彼女に、食事を持って行き、全ての人に給仕して来なさいと言った。しかし彼女は、シバラトリの日なので、私は断食していますと言った。「いやいや、食事は私達の前にある。だから、あなたの食事を済ましてきなさい」と、スリ　スワミィは言った。この言葉は、私達が食べたいとか空腹になるとかの意図をもっている限り、食事を食べる方が断食することよりよいことを意味している。彼女はスリ　スワミィの指示通りに食事を摂った。もし私達のジバートマ（個人、魂）が空腹で苦しんでいるならば、それは食事をするのと同じことなのである。もし私達が食事のことを何も考えず、神のことを思うことで時を過ごすことができるならば、その時こそ、断食は有効なのである。でなければ、断食は間違った習慣となるだろう。いつ、私達は自分達のカルメンドリヤス（感覚器官）と、楽しみの対象を追い求める心を統制しようとするのだろうか？（バガバッドギータ）。

１９８０年の１月中、スリ　スワミィはマタジ　トゥラサンマに、１１枚のベッドシーツを差し出すよう求めた。サイババは何か霊的原理を教えようとした時にはいつも、ダクシナを要求した。この要求は、彼の帰依者達の不運を取りのぞくことを意味した。スリ　スワミィはトゥラサンマに、彼女の５つの内的感覚器官と５つの外的感覚器官と心（全部で１１となる）を差し出すよう求めたのだった。これら１１の層は、アートマグナナ（アートマの知恵）を取り囲み、私達をアートマから切り離している。これら１１器官を犠牲にすることによって、彼は私達をアートマに再結合させようとした。

ある日、スリ　スワミィはコッラクティ　ブジャイアに、「アイヤ！君は私の世話をする人達の世話をするべきだ」と話した。そのため、スリ　スワミィのマハサマディ後、彼はスリ　スワミィに仕えていた人達に仕えている。真のサドグル　セバは、サドグルのマハサマディの後も続くだろう。それ故、私達のサーストラは、ナスティカ　バチャラー（偉大なニシュタ《不動心》をもって生涯独身をとおす人）はグルと常に一緒にいるべきであり、グルがニルバーナ（涅槃）に至った時には、グルの代わりにグルの聖火を受け持ち、生涯その火に仕えるべきである、と説いている。スリサイはその原則に従った。スリ　スワミィもまた同じことをした。恐らくこれが、スワミジがサイのことを兄弟と言った理由である。同じように、価値ある弟子は全てのグル　バンドゥ（スリ　スワミィの帰依者）達を、愛と思いやりをもって遇するべきである。私達は、スリ　スワミィ　ビ

ベカナンダがこの原則に従ったことを知っている。

スワミィ：私に私の９枚のベッドシーツを渡しなさい。

Ｂ．ナガイア：スワミィ、あなたは６枚しかベッドシーツを持っていません。どうして、９枚あるでしょうか？ここにあなたの６枚のベッドシーツがあります。どうかこれらを受け取って下さい。

スワミィ：いや、違う、私の９枚のベッドシーツを取りなさい。

ナガイアは、ベッドシーツに３枚のタオルを加え、９枚にして渡した。

スワミィ：これは何だね？君は腰巻きを私に渡すつもりかね？私のベッドシーツはもっと大きいものだよ。

ナガイアは、自分のベッドシーツとグラバイアのベッドシーツとロシレディのベッドシーツを集めて、９枚にした。

スワミィ：ヤ、それで全部だ、それで全部だ。

５元素に心とブッディ（知性）とアハンカラ（エゴ）を合わせると８つになり、これに宇宙の創造者を加えると、９になる。あのことは、あらゆるものをスリ　スワミィであると思うことが、彼に９枚のベッドシーツを差し出す場合のスリ　スワミィの意図であるとの気付きを意味している。曾てスワミィは帰依者達をハリジャンと呼び、彼自身をマディガ（低カースト）と呼んだことがある。

同じく、アカルコタ　スワミィは、自分はカシャパサ　ゴトラ　バラモンであると言い、同時に彼は、自分はハリジャンで、なめし皮の仕事が職業であるとよく言った。このようなことを言う場合のマハトマ達の意図は、現在のカースト制度が無意味であることを教えるためである。

別の折、彼はトゥラサンマに、神聖火に６枚のベッドシーツをくべるうにと言った。カーマ（肉欲）、クローダ（怒り）、モハ（妄想）等のアリシャドゥバルガ（６つの欲望）は、人間の６つの敵である。それ故、スワミィは彼女に、ベッドシーツを神聖火にくべることによって、それらを燃やして、灰にしてしまうように命じたのだった。

ある日、スリ　スワミィはロシ　レディに、「アイヤ！私は全部の作物を結実させた。泥棒達が作物を盗まないよう気を付けなさい」と言った。それは、スリ　スワミィが彼ら全てを霊的に祝福したことを意味する。彼らは、それを内心の敵から守るねばならない。

ある日、スリ　スワミィは、「空腹の人達には食物をあげなさい。でも、げっぷをしている人にはあげなくてよい」と言った。

ある日、従者達は、「スワミィ、もしあなたがいなくなったら、私達は何を支えにすればよいのでしょうか？」と尋ねた。

スワミィ：私がどこへ行くだろうか？私は、太陽と月がある限りここにいる」

従者達が彼の指針や教えに従わず、喧嘩をしていた。スリ　スワミィは、胸の張り裂けるような言葉を発した。「情けない人達だ、ムンダス、ランダスよ。皆は貧困者になろうとしている。彼らは１パイサでも稼ぎたいだろうか？サドグルは、宇宙の被造物全ての支えである。彼らはこの真理とサドグルのことを忘れ、心を他の思いに譲っている」スリ　スワミィはこのことを修業の生活を捨てることであるとして話した。

ある時、スリ　スワミィは、「私とジャヤラマ　ラジュは６枚の鋤で耕した。ジャヤラマ　ラジュの鋤はウダヤギリの丘まで行って、止まった。私の鋤は容易に進んだ。北の海水が南の海に流れこんだ」と話した。ここで、６枚の鋤での耕作とは、アリシャドバルガ（６つの敵、即ち肉欲、怒り、貪欲、執着、傲慢、嫉妬）を抑制するサダナを意味する。海の融合とは、「あらゆるものの中のブラフマン」を意味する。ジャヤラマ　ラジュは、サダナを止め、サムサーラ（俗世間）の罠に捕まった。これは、彼が耕作を止めたことについて言及しているのである。

ラガバ　レディは不治の病に苦しんでいた。医者達は治すことができなかった。彼はスリ　スワミィの許に行った。スリ　スワミィは彼と話をしなかった。レディはスワミィの従者達に、「もし自分の病気が治ったら、貴方達に沢山お金をさしあげます」と話した。即座に、スリ　スワミィは言った。「それが何だね？私達はあらゆるものを与えているが、彼が私達に与えるものは何かね？」本当に、創造物のあらゆるものはスリ　スワミィのものである。この真理を忘れ、「私はこれを他の人達に与えようとしている」と考えるのは、無知なのである。もし私達がこの真理を認めないならば、私達のバクチ（帰依）は決して確定されないだろう。その時、スリ　スワミィは、帰依者の捧げる祈りにどのように応えることができようか？

通常では、スワミィは誰の家にも行かない。１９７８年、スワミィはナラサレディ（カリチェドゥ村）の家に滞在し、家の真ん中で神聖火をもやし、そこに座った。これは特別なことである。４日目に、彼はシッダライヤの丘に行くために牛車をもってくるよう命じた。従者達は荷物を全て積んでから、スワミィに出発しましょうと言った。しかしスリ　スワミィは、今出発はできないと言い、御者に６ルピー与えるように言った。彼は同じことを４・５度くり返した。彼らは、牛車で旅をしていないのに、なぜ金を支払うのか分からなかった。通常、その牛車の御者は鉱山に行って、賃金を貰っていた。しかしその日は、彼は鉱山の仕事を休んでいた。その

ため、スリ　スワミィは彼にその賃金を与えねばならなかった。それがスリ　スワミィの考え方だった。スリサイは、「他者の労働を無料で受けてはならない。私達は、彼らを利用することにした場合、どんな奉仕に対しても気前よく支払いをすべきである」と言った。

この出来事は、いかにスリ　スワミィが上記の原則に厳密に従ったかを説明している。スリ　スワミィは何度も彼らに、牛車の料金の支払いのことを尋ねた。従者達は彼に6ルピーを渡し、明日牛車をもってくるように言った。しかしスリ　スワミィは、もし彼らがその日にも牛車の料金を支わないならば、彼らをそのままにしておくだろうか？

その日、セシャダリという名の帰依者が、スワミィのダルシャンを受けにビジャヤナガールからやって来た。皆がなぜスワミィが突然その日の旅を止めたのか知ったのは、その時だった。セシャダリはビジャヤナガールを出発しようとする時、サイナスに、スリ　ベンカイア　スワミィの姿の彼のダルシャンを与えてくださいと祈った。正確にその時間に、スリ　スワミイは彼の旅を延期した。だから、サイとスリ　スワミィは、お互いに別々ではないのである。

スリ　スワミィは大抵赤い芥子チャツネと一緒に食事を食べることにしていた。彼はバターミルクを出された時は飲み、出されなければ何も飲まなかった。彼は食べ物の味や料理のことには、決して文句を言わなかった。ある時、従者達はサザ　サンガティを用意していた。それはまだ十分蒸せていなかった。それでも、スリ　スワミィは彼らにそれを自分にも求めた。彼はまたサンガティに赤い唐辛子の粉を入れたものを求めた。彼はそれをおいしそうに食べた。食事は空腹のためであり、味覚のためではない。これが医学とサダナの原則である。ある時、スリ　スワミィは、マントラを授けてほしいと求めた帰依者に対して、「マントラとタントラはどこにあるだろうか？識別力をもって進むことが、唯一必要なことである」と話した。完全な知識を具えたサドグルは、決してマントラの教えを授けないだろう。スリ　サイナスとスリ　ラマナ　マハリシはその典型である。何故ならば、絶えず「サドグル　バクティ」を続けることがあらゆるサダナに勝っており、それには何の妨害もないからである。

スリ　スワミィの妹マンガンマは大きな情愛をもってスリ　スワミィの世話をした。彼女はスワミィのために食事をとっておき、真夜中までスワミィが来るのを待っていたものである。そのお返しに、スリ　スワミィは兄弟達に、自分の財産分を彼女のために譲るよう求めた。兄弟達はその通りにした。スリ　スワミィは、人はどのように感謝を表すべきかを、私達に実際に示したのだった。

彼はダルマを実行したばかりでなく、親密な帰依者達にもダルマに従うよう命じた。コラクティ　ブジャイアの妹は、大きな情愛をもって未婚の兄の世話をした。ある日、スリ　スワミィはブジャイアに、「私が妹にしたことを、君もあなたの妹にしなさい」と言った。ブジャイア　ガルは生涯独身だったので、スリ　スワミィは彼の財産分を妹に与えるように言ったのだろう。

皆がひげそりに対して５０パイサ払った時、スリ　スワミィは髭剃の度に床屋に２ルピー与えた。同じく、彼は洗濯屋に２倍の報酬を払った。スリ　サイババもまた髭剃の度に、バラナイに２ルピーを与えた。ある日、彼は同じ額を、彼のために梯子をもってきた人に与えた。当時、１袋の米の値段は２ルピーだった。帰依者達はババに、なぜそのような簡単な奉仕に対し多くの額を払ったのですかと尋ねた。ババは、「私達はどんな奉仕に対してもけちけちせず払うべきであり、誰の奉仕でも無料にしてはいけない」と忠告した。このように、それはマハトマ達の原則なのである。

もし人々がこの原則に従うならば、社会に経済的な平等性が出来上がるだろう。ある日、スリ　スワミィは、「アイヤ！私達はベンカイアの名で一口の食べ物を与える人達の幸福の世話をしなければならない」と言った。人々は少量の食べ物をスワミィに施した後、スワミィのことを忘れる。しかし、このダルマの主は、目蓋が眼球を守るように、日夜その人達を守だろう。

ある日、数人の無知な農夫がスリ　スワミィのことを、こいつらは皆偽サドゥだ。しんどい仕事をしたくない奴が、サドゥの服を着ているのだ」と言った。スリ　スワミィの従者の一人が、彼らに反論しようとした。スリ　スワミィはそれを叱り、「それがどうした。彼らはそう言うが、本当のサドゥは忍耐をもって批評を受け取らねばならない。もし君達が彼らのことを怒るならば、どうして真のサドゥと言えるだろうか」と言った。このように、スリ　スワミィは従者に穏やかに教えを説いた。

モプール　ダサイア（ペヌバルティ土着の人）は言った。「スワミィ！あなたは丘や森を放浪します。私は度々あなたのダルシャンを受けることができません。どうすればよいのでしょう？」

スワミィ：おー！何があっても、丘を登り、石の上に鏡を乗せて、真っすぐ見なさい。あなたと私の距離はたった３インチでしょう」ここでの丘とは、体の上部の脳を意味する。石の上に置いた鏡を見るとは、心は世俗的な思いにいつも携わっているが、私達はこれらの世俗的な考えから暫く脳を解放し、スリ　スワミィに脳を集中しなければならない。体の中で、高めの石とは脳のことである。その上にはサハスララムと呼ばれるヨガ中

心点があり。そのヨガ中心点には、サドグルの聖なる御足がある（とサーストラは言っている）。

だから、スリ　スワミィはたった3インチの距離しかないと言ったのだった。それはスリ　スワミィが、彼自身をサドグルであると、公然と宣言したことを意味している。

ある人達は、スリ　スワミィの前にやって来ただけでサソリに刺された傷を癒された。他の数人は、スワミィを何回かプラダクシナ（周りを回ること）するだけで、直ちに安心を得た。別の人達は、スリ　スワミィの恵みを祈っただけで、直ちに救済を得た。「あなたの恵みの、このような違いの原因は何ですか、スワミィ？」とある人達が尋ねた。「私は人の信仰に従って反応する」とスワミィは答えた。別の折、スリ　スワミィは次のように諸け合った。「死も生もない。人は死んで灰になるが、もし来ることを命じられたなら、生まれて戻って来る」

スリ　スワミィは親密な従者達と真の帰依者達には、世俗的な心の人達とは交際しないよう警告した。ある従者は暫くの間、大きな献身の心でスリ　スワミィに仕えた。その後、彼は一層親密になったせいでスリ　スワミィへの奉仕を怠るようになり、機会ある毎に、世俗的な心の人達と交際し始めた。以前には、スリ　スワミィはその従者以外の誰からも食物を受け取らなかったが、今やスリ　スワミィは彼の差し出す食物を拒否し、他の従者に食事を求めた。従者達がその理由を尋ねると、スリ　スワミィは、彼は世俗的な心の人の方へふらふら進んでいる、と言った。

初めの頃、親密な従者グラバイアがスリ　スワミィの許を暫く離れようとした時、スリ　スワミィは「君はあの人達と親しくなろうとしているのかね？」と言って、彼に忠告を与えた。これは、サダカにとって世俗的な心の人達と交わることは好ましくないことを、意味している。

人は6つの敵と関わっており、且つ感覚的喜びに魅せられる。だから、この人はサダカに向かないし、サダカと交際するにも不適である。牛や鳥はこれらの敵をもたない。スリ　スワミィによれば、全ての動物は3つの部類に分けられる。1）サダカ（求道者）、2）動物（四足獣）と鳥達、3）人間。もしある人が連続してサドグルに仕えるならば、その人はサダカとなるだろう。サドグルへの奉仕は、何も返礼を求めないで為されるセバ（サービス）を意味する。

ある時、数人の帰依者がアバドゥータ　ピチェンマを巡礼に連れて行った。ある日、帰依者の一人がマタジ（ピチェンマ）に、ボンベイのような都市と森と、どちらが気持ちがいいですかと尋ねた。その時マタジはにっこりして、「これらの自然の森の方が、あの森（都市）よりずっと快適で

す。ここの野性の動物たちは、都市にいる動物たち（世俗的な心の人間達）よりもずっとよい。彼らは私達によって傷つけられた時以外は、ここの誰も害しない。しかし、都市の動物達はそのようではない。私達が害しなくとも、その動物達は他者の幸福に我慢できず、隣人達に何か害を与えようと、いつも計画を練っている」と答えた。

それ故に、サダカ達は世俗的な心の人達との交際に落ち込むだろう。この故に、サーストラはサダカに、世俗的な心の人達から離れていなさいと警告している。彼らはスリ　スワミィの従者達を見るや、特別な尊敬と好意を払うだろう。その時、その従者にはアハンカーラ（エゴ、自惚れ）をもつ危険が生じる。これに加えて、世俗的な心の人達との交際によって、従者のグルへの間断ない思いは逸らされる。そして、彼はよくない本能を呼び起こす危険に落ち込むだろう。

ある日、ダクシャディ　ラマナイアとポル　マスタナイアが、スリ　スワミィの前にいた。ラマナイアは、「オーレイ！マスタナイア、ここに来なさい」と呼んだ。マスタナイアは返事しなかった。そのため、ラマナイアは何回も同じやり方で呼び掛けた。ラマナイアが卑しい風変わりな言葉（オーレイ）で自分を呼んだので、マスタナイアは感情を害し、アシュラムから外に出たら、懲らしめてやろうと思った。即座に全知のスワミィは、「誰がオーレイと言ったのかね？」と尋ねた。

マスタナイア：ラマナイアです、スワミィ。

スワミィ：「３百の罪」が彼に加わるだろう。

ラマナイア：スワミィ、どうすれば、私はその罪を取り除くことができるでしょうか？

スワミィ：その罪の結果を経験することによってだ。

マスタナイアは、自分を侮辱したことでラマナイアが苦しむことを知り、怒りが収まった。

私達が些細なことと思う誤りは、決して小さな誤りではない。外見上弱々しい乾いた草も、一緒にして撚り合わされ綱になると、象を縛ることができる。同じく、私達のカルマは私達を束縛し続けるだろう。

そのため、ある日スリ　サイナスは帰依者に、彼の同胞達を批判することは、排泄物を食べる豚と同じだと言った。ある時キリストは、「私達は、もし人を『馬鹿者』と呼ぶならば、地獄に行かねばならない」と言った。リシ達はこれを、舌の統制とか穏やかな言葉の修養と言った。サイナスの同時代人で偉大なマハトマ、ナグプールのスリ　タジュディン　ババは、「あなたはカーバ神殿に損害を与えたり、コーランを焼いたり、ワインを飲んだり、神像が礼拝されるマンディールに居残っていてもよい。しか

し、人の心を傷つけてはならない。それは第７天であり、私達の神の住まいである」と言った。これが、ある日スリ　サイナスが友人を批判している帰依者を、厳しく咎めた理由である。ババは、彼のことを大便を食う豚に準えた。更に彼は、「もし君がこのようなことをするなら、遥々シルディに来たことで、何の利益が得られるだろうか？」と言った。

ある日、スリ　スワミィは居場所を変えようとして、従者達に直ちに出発するよう命じた。従者達は、正午１２時頃に昼食をせずに出発したくなかった。彼らはスワミィに、昼食後か夕方に出発しましょうと話した。しかしスリ　スワミィは自分の決定を強く要求した。１、２人以外の従者全員は出て行った。従者の一人バリガラ　ナガイアは心中で、「なぜこの人達はスワミィと一緒にいるのだろう？彼らはスワミィの指示通りにしない。これらの人達が出て行こうとしている時、スワミィは彼らに厳しく命じようとしないのは、どういうことだろうか？」即座に、この全知のスワミィは言った。「彼らは好きなように行かせなさい。立ち止まるものは誰もいない」

偉大な魂達だけが私達に忠告を与える。しかし、強制はしない。もし私達が彼らの忠告に従わないならば、彼らは私達を運命に任せる。私達は禁じられている事柄を犯し、「スリ　スワミィが全てを世話して下さるだろう」と言う。こう言うのは愚かなことである。本当に、彼は全てのことを見ている。彼はどんな依怙贔屓もなしに、善はよいカルマ、悪は悪いカルマとするだろう。

ある時、シルディサイは７百ルピーを、隣の人に渡すようにと少年に与えた。しかし、この少年は２百ルピーをごまかし、５百ルピーだけを渡した。サイはこのことを知ったが、少年を叱らなかった。

シャーマが２百ルピーを土の中に隠した時、サイは何も言わなかった。やがて、私達は彼らが行いのせいで、その結果を受け取るのを見た。これが、私達が「神は依怙贔屓しない」と言っている内容である。この原則を理解することなく、帰依者達が間違いをした時、グルは咎めなかったと批判する多くの人がいる。長年の経験を通して、人は神やサドグルの命に厳密に従うことを学ぶべきである。しかしもし強いられるならば、精神の開花する過程は、前進することなく、混乱するだろう。病人が医者に自分を治療する方法を言うならば、それは何と馬鹿げたことだろう！

ある日、スリ　スワミィはグラバイアに、「マラ、マディガ、ジョギ、ジャンガムがあなたに入らないように気をつけなさい。サドグルにサンパンナトバム（よい特質）をもって仕えなさい」と助言を与えた。ここで、マラ、マディガ等はカーストの呼び名ではない。それは、貪欲、怒り、自

惚れ、感覚的な喜びの追求のような私達の内心の敵、即ち本能のことを言っている。

同じ用法は、サイナスによって、「私達の中には低カーストの奴がいる。私達はそれを追い出さねばならない」と言った時に、用いられた。

ある日、スリ　スワミィはグラバイアに言った。「もし罪が犯されるならば、人は『バディドンダ』虫（害虫）に苦しむだろう。彼らはマディガ　カーストに生まれるだろう。数多くの誕生後も、彼らは私の許に来ることはできない」ここでマディガは、マディガ　カーストのことを言っているのではない。それは、人がサダナや魂の向上のために相応しくない、悪い情況の中に生まれることを意味している。

アニケパリ村のスリマティ　カンタンマは籾を貸し付け、利子の名目でより多くの籾を集めた。ある時、彼女の家に火事があり、多くの籾を失った。ほんの２・３袋の籾だけが、隣人達によって助かった。ある日、彼女がスリ　スワミィに泣き言を言うと、彼は「利子がなくなっただけだ。元手は助かっている筈だ」と言った。

ある時、サイは「おー！あなたは家に帰りなさい。損失は別の仕事で償われるでしょう」と言った。スリ　スワミィの人々を扱うやり方は、サイナスの方法とよく似ている。

最長老ロシ　レディは、多年スリ　スワミィのために奉仕をしていた。現在は老齢のため、彼は薪を取ってくること等のような力仕事ができなかった。ある日、彼は誰かが自分の悪口を言ったので、スリ　スワミィの奉仕を止めて、家に帰ろうと思った。スリ　スワミィは彼一人を呼んで、「あなたは実りの畑を捨てて、屑を集めたいのかね？」と言った。その言葉で、彼はスリ　スワミィの許を出て行こうとの思いを止めた。サドグルの身近にいることは、「実りの畑」である。華やかな世界で生活しサダナを行うことは、屑を集めるようなものである。

ある日、彼の息子と娘婿がロシ　レディを、１０日間彼らの家に連れて帰ろうとやってきた。しかしその時、ロシ　レディは目が見えず、一人でで動くことができなかった。しかし、その日、スリ　スワミィは彼に、「「前に進みなさい」と命じた。ロシ　レディはサドグルの命令に絶対の信仰をもっていたので、自分の老齢のことも目が見えないことも気にしなかった。彼の唯一の目的は、グルの命令を実行することだった。彼は仲間達には報せず、彼一人で出発し、交通量の多い道路を８キロ歩いて、安全にゴラガムディに到着した。彼の息子と娘婿は、彼が到着する前にバスでゴラガムディに着いた。彼らは彼の安否を尋ねると、彼に会うこともせず、帰って行った。

もし全知のスワミィがロシ　レディにそのように助言していなかったならば、彼は娘婿と息子の甘い言葉に屈して、「肩を集める」（サダナ）の作業に落ち込んだことだろう。この世の渦に巻き込まれることなく、サドグルの奉仕を続けることが、「前に進みなさい」との言葉でスワミィによって指示された。同じ真理は、イエスによって「私は道である。私は真理である。私は永遠の命である」と話された。別の折、帰依者がスワミィに、「どのようにして私達はサムサーラ（この世）の海を渡ればよいのでしょうか？」と尋ねた時、スリ　スワミィは「そこには何がありますか？真っすぐ見て、真っすぐ進みなさい」と答えた。この言葉は、私達はサドグルの奉仕をして、その道を進まねばならないことを意味している。

もう１つ別の折の私達の会話でロシ　レディによって為された言葉は、サダカ達にとって注目に値する。私（著者）は彼に尋ねた。「なぜあなたはスリ　スワミィに、あなたが行くべき場所を尋ねなかったのですか？」

ロシ　レディ：もし私達がサドグルの命令に疑問をもち始めたならば、私達は数多くの疑問と疑いをもつようになるでしょう。彼はすべての疑問と疑いを説明してくれるでしょうが、私達は正しい観点で彼の説明の意味を把握することはできません。加えて、それを間違って理解する危険もあります。だから、最善の方法は、サドグルの御足の許に身を任せ、私達が彼の命令に従うよう、正しく私達を導いて下さいと願うことなのです。彼は私達のような普通の人間ではありません。彼の物事を扱うやり方は、想像を絶しています。彼は私達を目標に連れて行くために、非常に素晴らしい方法で物事や私達の心を操作することができます。しかし、彼が十分に働いて下さるようにするためには、私達は心のそこから彼の御足の許に全てを任せ、私達自身の低級な知的な能力に頼ることなく、私達の唯一の救い主である彼に頼るべきなのです。

「だから私は、スリ　スワミィによって前進しなさいと命じられた時、彼がもっとも満足するように、私が彼の命令を実行できるよう導いて下さいと、その御足の許で祈りました。残りのことは、全てに遍在しているスワミィによって成し遂げられました。本当のことを言うと、私は８キロの距離を歩けるほど丈夫ではありません。加えて、私はネロールのような交通量の多い道路を歩けるような視力はありません。どのように、歩いたのでしょうか？それは本当に奇跡です。私はこれ以上のことを説明できません」

ある日、モプル　ダサイアはスリ　スワミィに、「スワミィ！あるリシが森で貴方に会って、貴方の舌に、ある神聖なマントラを書いたのいうのは、本当のことですか？」と尋ねた。

スワミィ：「もし私達が道の途中でマイソール　マハラジャに会ったならば、どんな利益が得られるだろうか？私達は努力して行ったことを手に入れるだけだ」この言葉は、もし私達がプジャ、ジャパ、瞑想、パラヤナ、ダルマ・チンタナを毎日の生活で行うとかサドグルの奉仕をしないならば、私達はサドグルであるマイソール　マハラジャの恵みを得ることはできないことを意味している。私達は、上記のサダナを実行し、ある完全状態に到達すべきである。丁度、マハラジャがその謁見の間に詩人のような何か優れた人物達だけを招き、謁見するように、グナニ（賢者）もまたその恵みをもってきっと私達に祝福を与えるだろう。

王は大きな権力を持ち独立しているが、完成や特殊性に到達していない人達を招いて、報酬を与えることはしない。だから、私達自身の努力が、サドグルの恵みを得るためには必須である。

ある日、カンテパリ村の農夫が、森から荷車一台の薪をもってきて、マリカ　ベンカイアから４ルピーを貰った。これに加えて、彼はベンカイアから、彼の耕作地の収穫期の１日の農作業賃を手に入れた。ある日、その農夫はスリ　スワミィのダルシャンを受けにやってきた。誰も彼のことをスワミィに紹介しない前に、スワミィは「彼はあの荷車の人かね？彼は私達に１５０ルピーの支払いがある。償いとして、彼はティルパティを訪問して来なければならない」と言った。スワミィはこの指示を書いた紙切れを与えた。彼はティルパティに行き、１５０ルピーを盗人達によって盗まれた。正当な返礼なしで行われた奉仕は、無駄にはならない。それらの奉仕は、戻ってくるだろう。さらに、スリ　スワミィの従者達は全能の神、主の財産である。だから、その負債は神に関わっている。グルや従者達に対して支払われない負債は、何かの形で償われ、そのような奉仕の受け手は、このような方法で償わねばならないだろう。

コドゥル　ベンカンマは１５才で夫を失った。彼女は悲しみに打ち拉がれた。スワミィはその素晴らしい霊的教えで、彼女の悲しみを取り除いた。スリ　スワミィは言った。「マー！もしマンゴーが膿瘍に侵されたならば、それはどれだけの収穫が得られるでしょうか？それは腐り、萎れてしまうでしょう。もしその木が勇敢にその膿瘍に堪え忍ぶならば、その膿瘍は、どんな害も与えないでしょう。そのマンゴーは熟し、多くの果実を生らせるでしょう。植物としての多くの誕生をした後、その木は人間として生まれるでしょう。多くの誕生の後、人間は識別力をもった人間として生まれるでしょう。賢く知的な人は、多くのそのような誕生の後、帰依者として生まれてくるでしょう。帰依者としての多くの誕生の後、彼は国の正しい統治者となるでしょう。義務に忠実なラジャ（王）としての多くの誕

生の後、彼は神の恵みを求めて働き始める。数多くの誕生の後、彼は神の直に接するでしょう。その時、私達の主、神はこの敬虔な魂にその目の奥から、祝福を与える。その時、神はその足の下の梃子を操作し、この彩り豊かな錯覚の世界の操り人形芝居を、帰依者に見せる。その時、その魂はビスワナタ即ち普遍の魂の中に入る」その時、ベンカンマは思った。「今まで私は数多くの誕生をし、その誕生で多くの苦しみを経験した。この誕生の、この小さな苦しみは巨大なものではない」そして、彼女は膿瘍をもったマンゴーのように勇敢に生きようと決心した。彼女はその時から元気になった。

この考え方は、ギータ第７章３節に説かれている。

ダサイア：私達はどのようにして、サムサーラの海を取り除くことができるのでしょうか？

スワミィ：もし貪欲がなくなれば、全てのものはなくなる。

ダサイア：スワミィ！アシュラムに頼る多くの人がいます。私達はどのようにして生き残ることができるでしょうか？

スワミィ：あなたは全ての収穫の所有者を知っているかね？それは全てに属する。

トゥラサンマ：スワミィ！私達はどのようにすれば、あなたのことを理解し、あなたの真の状態を知ることができるのでしょうか？

スワミィ：マー！バドラチャラムに行き、寺院の扉を開けて見なさい。あなたはそのことを正しく理解できるでしょう。

ある日、スリ　スワミィは言った。

スワミィ：熱心に仕事をするか、神の聖名を唱えながら貴方の時間をすごすか、苦しみを神に授かったものとして忍耐強く辛抱しなさい。

恐らく彼は、人は常にそれら４つの状態で神を思い出すべきことを言ったのだろう。私達が困難や問題やひどい病気で苦しむとか、貧乏に苦しんでいる時、私達の悪い行いの結果が使い果され、そのカルマ　セシャム（バランス）が拭い取られるのである。また、常に瞑想することによって、どんな新しいカルマの付加も、私達の計算書の中に取り込まれない。

別の日、スリ　スワミィは言った。「もし私達が正しく働かないならば、それは雇主の損失となるだろう。私達はよく働くことなしに、給料を稼ぐかもしれない。しかし、その収入は決して私達によいことはないだろう。私達はその怠慢によって重大な損失を招くだろう」

ある時、雛を連れた鶴が、ゴラガムディのプルナシュラマムの建物内の木の巣にいた。ある日、狩人が弓を番えて、その鶴を殺そうとした。それ

を見て、アシュラマムの住人達は狩人を咎め、出て行くように言った。再三の警告にも拘らず、彼は鶴を撃ち落とそうとした。遂に、住人達はそのことをスリ　スワミィに報せた。スリ　スワミィはそっけなく言った。「矢は鶴に当たらないだろう」事実、彼が矢を射ると、的を外れ、鶴は飛び去った。的を外したことのない狩人は、弓を折って投げ捨てた。その時から、彼は生涯２度とどんな鳥も撃たなかった。彼の心に変容が起こったのだった。スリ　スワミィの守りは、鶴に対してばかりでなく、残酷な狩人に対しても与えられている。

グルバイア：スワミィ！私に２・３よい言葉を教えて下さい。

スワミィ：高貴、質素、サドグルへの奉仕を成し遂げなさい。真理とダルマの道から決して迷い出てはならない。

グルバイア：私達はどうすれば怒りを取り除くことができますか？

スワミィ：毎日の日の出と日没を気にしなければ、怒りを克服できる。

ある日、スリ　スワミィは下痢のせいで大変弱っていた。従者達はスリ　スワミィに、薬を飲んで下さいと言った。

スワミィ：私達は、神が与えて下さったことを経験すべきではないだろうか？

ある日、烏が木に止まって鳴き続けていた。グラバイアは烏に石を投げた。スリ　スワミィはすぐにグラバイアを叱った。「スリ　スワミィの前では、私達は犬さえ叩いてはいけない」と、スリ　グラバイアは言っている。サーストラは、私達はダルマの規則と儀式の複雑な問題に精通しているグナニ（賢者）達や他の聖者達から、全てのダルマの複雑な問題を学ぶべきであると告げている。カリユガでは、人々は社会の中でこの原則に従わないので、カースト制は人々の役立たず、国を脅かすものとなっている。現在の社会で、カースト制は誕生とのみ関わりがあると考えられている。しかし本当は、バガバッドギータ（４の１３）の中で、カーストは人自身のカルマと関係していると説かれている。それでも、パンディット即ち学者達は、それを間違って解釈した。このことは、「アートマグナニ」達即ち霊的知者達の教えとして知られている。例えば、シルディサイはこう言った。「私達全ての中に、低カーストの人がいる。私達は彼を追い出さねばならない」ここで低カーストの人とは、私達の中の６つの敵を誘発する無知を意味している。

別の折、彼はそれらを「ワダの中の盗人」と呼んだ。誕生毎に変わる肉体は、ワダ即ち一時的な家と呼ばれる。それは永遠な家ではないから。

サイナスの同時代人で、彼の別の姿スリ　アカルコタ　スワミィは、同じ考え方を表明した。一人のバラモンがスワミィのダルシャンを受けにや

ってきて、水が手に入らなかったので、ハリジャン（不可触民）の家で水浴し、サダナ等を完了し、スリ　スワミィのダルシャンを受けてから、食事をするために、バラモン達の列に座った。スリ　スワミィの従者の一人が彼に気付き、彼を食堂から追い出した。その哀れなバラモンは侮辱を感じた。従者達がスリ　スワミィにピクシャを施す時がきた時、スリ　スワミィは彼に、自分の前から出ていくよう命じた。更にスワミィはあのハリジャンを呼び、地面に７本の線を引いた。スワミィは彼の額にビブチを付け、この線の上を歩くよう命じ、線を歩いている間にその７度の前生について話させた。直ちに、そのハリジャンは自分の前世を語り始めた。前生で、彼は色々なカーストに生まれたが、７度目の誕生で、バラモンの家族に生まれた。彼は、スリ　スワミィに命じられると、ベーダを唱えて、このことを証明した。

それから、スワミィは彼に、なぜ彼は現在ハリジャン　カーストに生まれたのかと尋ねた。彼は、自分はバラモンだった時、他のカーストに人達を不快に思い、清めるために道にマントラ水をかけ、それからその道を歩いたと話した。絶え間なくそのように考えることによって、彼は今生でハリジャンとして誕生した。もし人々が、カースト制は誕生が基礎になっていると考え、他のカーストの人々に対して不寛容であるならば、そのような人々は全く霊的サダナの余裕のない同じ虐げられた家族に生まれるだろう。サーストラの教えは、霊的に忠実な人達にのみ知られるべきである。この秘密を無視して、もし私達が聖典の命令から外れ、生活の中でそれらを誤用するならば、私達はそのような哀れな状態にきっと遭遇するだろう。

アバドゥータ　ベンカイア　スワミィもまた、同じ真理を「もしあなたが間違いを犯すならば、あなたはバディドンダ虫に侵されるだろう。あなたはマディガ（靴直し）の家に生まれるだろう。あなたは数多くの誕生後でも、私に会いに来ることはできない」と表現した。ここでスリ　スワミィは「マディガ」の語を、私達がこの誕生で苦しみ、私達の悪い罪深い前生の誕生中の行いの結果である、無知や霊的盲目を意味して使っている。それが、そのような人々が私達のスワミジのような偉大な人物を認めて、奉仕することのできない理由である。

スリ　スワミィは、他の情況でも同じ意味をもっと明確に表した。度々、彼は従者達に、「マラとマディガの人々があなた達の中に留まらないようにしなさい」と忠告した。時折、他のカーストの人々が彼のダルシャンを受けにきた時、彼は彼らをバラモンと呼んだ。例えば、バカンマはマラ　カースト（ハリジャン）の誕生だった。しかし、スリ　スワミィは「見

なさい。バラモン婦人がきた」と言った。P．スッバラマイア（著者）はバイシャ　カーストだった。スリ　スワミィは彼をバラモンを呼んだ。同じように、アル　バスカールはレディ　カーストだった。スワミィは彼をバラモンと呼んだ。スリ　スワミィの観点では、マハトマに対して大きな敬意やアートマグナニ（アートマの知恵を持った人）への強い願望を持っている人々は、バラモンである。こればかりか、ダルマの聖典の中では、次のように言われている。

「バラモンに誕生した如何なる人も、バラモンに相応しくない人生を送るならば、シュードラやチャンダラ（最低カースト）となるだろう。彼はアウトカースト（カースト外の人）とされるだろう」

換言すると、望ましいサダカの特質を持っている人、即ち救済を志望する人と、この人生でそれらの原則に従う人は、バラモンとみなされるべきである。サーストラは、バラモン　サンスカラ（浄化の儀式）が正当であり、相応しいのは、そのような敬虔な人々にとってだけであると言っている。そのような特質は、バガヴァッドギータの中で、ダイバサンパダ（神々の特質）とサトバグーナ（浄性）と述べられている。更に、シュラダトラヤ　ビバガ　ヨガの中で、そのようなサダカ達によって行われたカルマ、ヤグナ、ヤガ、ダナ（慈善）、タパスは、モクシャ即ち解脱を実現するだろうとはっきり述べられている。

スリ　ベンカイア　スワミィもまた、それらのことをサンパンナトワム、サダラナトワム、サドグル　セバと呼んだ。ここで、サンパンナトワムとは上記のダイビ　サンパダとサトバグーナを意味している。サダラナトワムは、「私はそのような特質を具えており、私は偉大なサダカ、サドゥである」との間違った考えをもった威張った振る舞いをしないことを意味している。彼は自分の仲間達を、非常に低級だとか卑しいと決して思わない。

スリ　スワミィの人生は、このための比類のない模範である。この理由のためにサーストラは、人はそのような偉大なマハトマ達の人生と教えを権威とみなすべきである、と宣言している。仏教、ジャイナ教、パルシー（ゾロアスター教）、キリスト教、イスラム教は、社会の人々を、純粋な霊的生活を送る人達と、そのような生活をしない他の人達の２つの部類に分けた。

ある日、スリ　スワミィはロシ　レディに、「私は楽しみとは何か、また不快とは何か知らない」と言った。時折、スリ　スワミィはロシ　レディに、「アッヤ、村に行って、誰かにぼろきれを貰いなさい。それらは私達には役に立つし、それらを施した人達は病気が治るだろう」と言った。

スリ　シルディサイの伝記で、彼は9ヤードの古いサリーを受け取り、その人達の経済生活が改善する祝福を与えた。帰依者の一人は、「スワミィ！新しく仕事を始めるには、週のどの日が吉兆ですか？」と尋ねた。

スワミィ：もし私達がそのやり方を知っているならば、火曜日が佳い日です。

帰依者：スワミィ！あなたは毎日旅をしていますので、私達が貴方のダルシャンを受けるのは大変難しいです。

スワミィ！：あなたがどこにいても私はあなたと一緒にいるでしょう。

帰依者達の経験は、これらの言葉が本当であることを証明している。

１９８０年、スリ　スワミィは引き付けを起こしていた。彼の頭と四肢は震えていた（跳び上がるような動作をしながら）。従者達はスワミィに注射をして貰うため医者を呼んだ。

従者：スワミィ！

スワミィ：彼はきたかね？

従者：彼はあなたに注射をします、スワミィ。

スワミィ：誰に？

従者：あなたにです、スワミィ。

スワミィ：何のためにかね？

ナガイア：あなたの引き付けを治すためです、スワミィ。

スワミィ：それは治せるかね？

ナガイア：きっと治ります、スワミィ。

スワミィ：では、彼にそうさせなさい。

医者はスリ　スワミィに注射を射った。しかし、スリ　スワミィは少しも手を動かさず、痛いという感情も表さなかった。

３日後、スワミィは再び尋ねた。「アッヤ！あなたは私に注射をしました。それは効きましたか？アッヤ！」

ナガイア：いいえ、効きませんでした、スワミィ、もしあなたが命じるならば、治るでしょう。

スワミィ：どうして治るだろうか？

ナガイア：きっと治ります。どうか、そう命じて下さい、スワミィ。

スワミィ：アッヤ！君はうまいことを言う。

サイナスのように、スリ　スワミィは何の治療も受けずに、痛みに辛抱強く耐えた。更に、彼は従者達に、「痛みを辛抱強く我慢しなさい、そうすれば、あなた達はそれによって利益を受けるでしょう」とよく言った。時々、蒸したニンニク、カルベパク、コエンドロの粉等が、スワミィによって、彼の胃の不調を治すために用いられた。彼はある人達に、彼らの病

気のために木の葉や根を用いるよう、よく助言を与えた。

ネロールのタルル　スリニバスルはナダスワラマム（楽器）を演奏した。彼はスワミジのマハサマディの間、音楽隊に加わるために、車でゴラガムディにやってきた。車の運転手は運賃を２５ルピーでなく、３０ルピー取った。スリニバスルはこのことを知っていたが、黙っていた。帰りの旅の途中で、車のエンジンが止まった。運転手がどんなにしても、車は動かなかった。その時、スリニバスルは運転手に、「アシュラムの人から余分の運賃を取ったせいだ。もし君が、スリ　スワミイにそのことを告白し、許しを乞うならば、車は直り、次の瞬間動きだすだろう」と言った。運転手はスワミイに、自分の間違いを許して下さいと願い、車は故障なく動きだした。

バラプレディ　アウディ　ナラーヤナ　レディ（マタジ　トゥラサンマの息子）はマドラスで車を購入した。免許証の交付のことで、ある問題が生じた。彼は何度もマドラスに旅行したにも拘らず、その手続きはなお未解決だった。３日後、彼はその手続きのためにマドラスに行こうと思った。家を発つ前、スワミジの写真の前に立って、スワミィに、「スワミィ！また私は３日以内に、マドラスに行きます。少なくとも、この旅で、どうか免許証の手続きは完了し、発行されるようにして下さい」と祈った。３日目、マドラスに行こうとして、彼はゴラガムディのスリ　スワミィを訪問し、免許証のことを話した。即座に、スワミィは「アッヤ！君の手続きは既に、３日前に完了している」と答えた。これは、スワミィがナラーヤナ　レディ氏が３日前にスワミィの写真の前に立って、スワミジに祈った日時に、その作業が行われたことを意味している。

ある時、スリ　スワミィは、「私は人の信仰に応じて反応するだろう」と言った。もし私達が、彼の写真を只の肖像であると思うのでなく、スリ　スワミィの広大な恵みにより、彼自身がその姿で私達の家に来て座っていると思い、その写真を尊敬し崇拝するならば、その行為は私達がスワミィの前で礼拝するのと同じ結果を生じるだろう。

ある日、モプル　ダサイアは西洋夾竹桃の花を摘んでいた。スリ　スワミィは彼を呼んで、「一つの花で十分ではないのかね？」と言った。スワミィはそれ以上１言も言わなかった。ダサイアは、神は純粋な心即ち只１つの花だけを望んでいるとのスワミィの注意の意味を理解したのだった。

帰依者即ちバクタが彼の心をサドグルに差し出す時、彼は生涯で１度だけそうすることができる。それは象徴的な表現にすぎない。即ち「只１つの花で十分である」これがスリ　スワミィの言葉の意味である。帰依者がトゥラシ花を沢山摘んでいた時、ラマナ　マハリシもまた非常におどけた

遣り方で、同じ教えを説いた。ある帰依者が何度もババにナマスカール（御足に触れること）をしようとしていた時、ババは、「只１度のナマスカールを、あなたが心の底から捧げるなら、それで十分です」と言った。

ゴラガムディで、私達のスワミィの神聖火は８年間連続して燃えていた。従者達は近くの森の木々を切り倒し、それを牛車で運んできた。当時、国は英国の統治下にあり、村はスッバラオという名の「ソトリヤム　ダール（村の統治者の公式名）」の支配下にあった。スッバラオの部下達は、スワミィの従者達による森の破壊を止めようとした。そのような試みが失敗したある日、スッバラオ氏自身がスワミィの従者達を咎めるために、森にやってきた。彼が遠くにスワミィを見ると、彼の脳内に異状な変容が起こり、「オーレイ！彼は気狂いだ！彼には気を切らせてよい！アッヤ！ニームの木は残して、あなた達は他の木々を全て使ってよい」と言った。このように、彼は確実な許可を与え、立ち去った。

ある日、ナラーヤナ　レディはスリ　スワミィに、彼の車でゴラガムディに帰ることを願った。「天上の神々が認めないだろう。私はそのようにして帰りたくない」とスリ　スワミィは言った。レディ　ガルは少し考えてから、「スワミィ、私はバスで皆と一緒に行きます。どうか、あなたは私の車で行ってください」と言った。即座にスリ　スワミィは承知し、「もしそうするならば、行こう」と言った。もしスワミィが彼と一緒に彼の車で行ったならば、従者達はゴラガムディまで歩かねばならないだろうと、スリ　スワミィは思ったのである。それはダルマの原則に反している。だから、天上の神々はそれを受け入れないだろう。それがスリ　スワミィの考え方だった。

レディ　ガルがスリ　スワミィに、バスで彼の従者達を自分と一緒に連れて行くと請け合うと、すぐにスリ　スワミィは承知した。同じく、ある日、スリサイは床に寝ていた。ある帰依者が簡易ベッドを、サイナスに差しあげようとした。その時、サイナスは彼の申し出を、「どうして私が仲間のマハラサパティを床に残して、ベッドで寝れようか」と言って断った。真のサットプルシャ（偉人、聖者）は、彼と従者達との間にどんな差別もしない。数多くのそのような情況が、スリ　ラマナ　マハリシの伝記の中にも見られる。

ある日、スリ　スワミィはグラバイアに、「もしあなたが神をどこにも一様に見るならば、あなたは神になるだろう」と言った。「金を貸すときでも、人は道理をわきまえ、適度の利子を課すべきである」とスリ　スワミィはアウディ　ナラーヤナ　レディに説いた。

ロシ　レディに対し、「もし私達が有効に使うならば、悟りのためには

１・２言で十分である」と説いた。

ある日、スリ　スワミィが昼食を食べている時、１匹の犬が葉の皿に載っている食物に触れた。すぐにスリ　スワミィは立ち去り、犬はその食事を食べて満腹となった。

スリ　スワミィが犬達に食事を提供した時、犬達は本性の敵意を忘れて、仲良く食べた。

同じく、トゥラサンマが食事を犬と猫達に与えた時、彼らは敵意を忘れ、同時に同じ木の葉の皿の食事を食べた。

ある時、スリ　スワミィは「今はどうか、将来、ベンカイアがカーテンの後ろに行く時、完全な変容が起こるだろう。ゴラガムディは祝祭の雰囲気となり、様々なセバが行われるだろう。誠実な帰依心をもってゴラガムディを訪れる人達は、望みが叶えられるだろう」

5、全ての人の心からの呼び声に反応する

「神」という言葉は、いかなる肉体的姿も電気の流れも何も意味しない。それは、私達の限りある感覚器官の知覚や、現代最高の鋭敏な器械の及ばないものである。それは、世界で今まで、十分に話されたり書かれたりされていない唯一のものである。しかし、神と一体化を成就したリシ達は、神を幾つかの独特の形容詞で述べ表してきた。神は、遍在、全知、全能であると。このことは、神はどこにでも存在していることを意味し、この宇宙のあらゆるものが、神それ自体であることを意味する。

神は、あらゆることを知っている。

神は、どんなこともできる。

人は自分自身の努力によって、マハトマ達の恵みを手に入れ、その恵みを受けて、人は神との結合に、到達する。そのような人達はアートマグナニ（悟りを得た魂、完成された存在）と呼ばれる。シッダプルシャ達の中で、何人かはこの世で福祉事業の才を授かっている。そのため、彼らは人間の姿をしているけれども、幾つかのオカルト　パワー（超能力）を有している。このようなサトプルシャ達はどこにいても、宇宙の中のあらゆる事柄の進み具合を知っているだろう。彼らはまた、帰依者達を危険から助け、守ることができる。私達はサイリーラムルタム（『サイババ、神のアバター』）の中で、この類の最高の奇跡を見ることができる。ここでの、サイナスのアバターであるバガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィもまた、帰依者達のあらゆる呼び声に応えることによって、帰依者達を救う。

幾つか例を見てみよう。

バリガラ　ナガイアは長い間スリ　スワミィに奉仕していた。ある日、彼は右の肋骨の下にひどくて耐え難い痛みを持った。彼は痛みのため、体を捩りくねらせた。友人達は医者に行くよう勧めた。彼は、自分の唯一の医者はスリ　スワミィであると言って、その他の所に行くことを拒んだ。スワミィのナマスマラナ（名を唱えること）にも拘らず、よくならなかった。痛みは耐え難かったので、「スワミィ、このカリユガに、あなたはこの世を去られたのですか、それとも私を忘れたのですか？」と彼は絶望と苦悩で涙を流しながら、金切り声で叫んだ。すぐに、痛みは取り除かれた。スリ　スワミィは彼に夢のビジョンを与え、「私はどこにも行っていない。私はあなたと一緒にいる」と言った。

ある日、スリ　スワミィは、人差し指の先を左の掌に置いて、「棘が刺さっている、アッヤ」と言った。本当は、スワミィには棘は刺さっていなかった。帰依者達は、なぜスリ　スワミィがそのようなことを言ったのか理解できなかった。１時間後、彼らはスリ　スワミィから半マイル離れた距離にいたコラクティ　ブジャイア　ガルが掌をサソリに刺されたことを知った。正確にその同じ時間に、スリ　スワミィは棘に刺されたと言ったのだった。しかし、不思議にも、ブジャイアは、どんな薬も付けずマントラも唱えずに、スリ　スワミィに祈る否や、痛みがなくなった。ある日、チェタイアは畑を耕していて、足を蠍に刺された。すぐに彼は足を掴んで、「オム　グルデーバ、オム　グルデーバ、オム　グルデーバ」と叫んだ。彼はどんな薬も付けずマントラも唱えないで、痛みがなくなった。

ある日、ロシ　レディはスリ　スワミィに奉仕してカリチェドゥにいた。彼は目を動かすと痛んだ。スリ　スワミィは彼に、「アッヤ、あなたはすぐに家に帰らなければならない。もし４０ラークが支払われるならば、『ラーマ・ラクシュマナ』が途中であなたを救うだろう。『アンマニ』があなたの村であなたを守るだろう。明日の朝、私に告げないで、帰りなさい」と命じた。彼は帰途にある時、ラジャムペット鉄道駅のプラットホームを歩いていた。彼は、駅の光のせいで、道幅がはっきり見えなかった。そのために、彼はプラットホームから滑って、４フィート下の鉄道線路に落ちた。しかし、他の乗客が全く驚いたことに、彼は少しも怪我していなかった。彼が村に滞在中の４日間全てに、村の神エランマが現れた。彼は帰途に救われたので、スワミィの言葉「あなたはラーマによって救われるだろう」の言葉が理解できた。

アナンタサガラムのカラナムは、最初の２子を失った。妻が３度目に妊娠した時、夫妻はスリ　スワミィの祝福を受けるためにやってきた。スリ

スワミィは彼に、「子供は生きるだろう。でも、彼女は3年たつと危険に遭うだろう」と請け合った。赤子が3才になった時、滑って牛車から落ち、車の車輪が彼女の頭を轢いた。しかし、子供はスリ　スワミィの祝福のお陰で、無事だった。

トゥピリ　ベンカイアはスリ　スワミィの衣服を洗濯することにしていた。大きな帰依をもって洗濯した。１９８１年の夏、彼は真夜中に目が覚め、ベッドの上で眠ることができなかった。ランプに火をつけようと、彼が家の中に入ると、暗がりの中で、家の真ん中に人が座っていることに気付いた。彼は恐れて大声で叫んだ。盗人もまた恐れて叫んだ。このせいで、皆が松明をもってそこに駆け付けてきた。彼らは、家の中央にその男が座っており、全ての衣類と器具と他の品物が彼の周りに散らばっているのを見た。何の苦もなく、彼らは男を捕まえ柱に縛り付けた。好奇心から、皆は男に、なぜ走って逃げなかったのかと尋ねた。男はこう話した。「私が家に入ろうとしていると、誰かが私の背中を叩いた。私はどうすることもできなくなった。なんとか、品物を毛布に包んだ。でも、何か見えな声が、全ての品物をもとの場所に置いておくように命じた。私は恐くてその『声』に従わざるを得なかった。私は動くことができず、このようにしていた。私の目は見えなくなり、足は力がなくなった。でなければ、あなた達皆が一緒になってきても、この竹の棒で簡単に叩きのめすことができただろう」

ゴラガムディのゴッダティ　セシャイアの牛が病気で大いに苦しみ、死にそうだった。彼は大急ぎでスリ　スワミィの許に駆け付けた。しかし、スリ　スワミィは粥を食べていた。そのため、従者達は彼がスリ　スワミィの近くに行って、窮状を訴えることを許さなかった。しかし、セシャイアは大変心配だった。スリ　スワミィは彼を見るとすぐ、「アッヨ！君が家に帰る時までに、牛は元気になるだろう」と言った。彼が驚いたことに、雌牛の危機は一瞬のうちに解消され、彼が家に帰った時には草を食っていた。

ある日、マカニ　ベンカタラオはマドラスに行こうとして、スリ　スワミィの祝福を求めた。通常、スワミィは、「彼を行って来させようとか、よろしい、幸せに、行って来なさい」と言う。しかしこの日、スワミィは、「あなたはカンチ　ベラダラジャ　スワミィとティルバルル　ベーララガバ　スワミィによって救われるだろう。行ってよい」と言った。マドラスで、ベンカタラオはすし詰めのバスに乗ろうとして、片方の手で把手を掴み、左足を足台に載せた。しかし、彼が右足を載せる前にバスはスピードアップしたので、彼はバスからぶら下って足が道路を引きずった。皆は

、彼は落ちて死ぬだろうと思った。バスの中は大騒ぎだった。しかし、バスは満杯だったので、運転手は後方の叫び声が聞こえなかった。ベンカタラオは望みをなくした。しかし、スリ　スワミィの恵みにより、バスはタイヤがパンクして停止した。乗客皆は、もしタイヤが丁度パンクしなかったら、彼はきっと死んでいただろうと言った。彼は大変幸運だった。ベンカタラオはその時、彼がマドラスに行こうとした時のゴラガムディでのスリ　スワミィの特別な祝福の意味を、理解したのだった。

スワミィの古参の従者ジャヤラマラジュは、ベルル　スッブラマニヤムに彼自身の経験をこのように語った。「ある日、私は去勢牡牛達に草を食わせるため、森に連れて行こうとしていました」

スワミィ：アッヤ！君は牛達を森に連れて行って、ここに帰って来なさい。

ジャヤラマラジュ：どうして私は帰れるでしょうか、スワミィ？森の中で牛達を見る者は誰もおりません。

スワミィ：あなたは牛の心配をする必要はない。帰ってきなさい。

「スリ　スワミィを完全に信頼して、私は帰り、スワミィと一緒に座りました。暫くして、何の理由もなく、スリ　スワミィは杖を取ると、立ち上がり、『デイ、デイ、デイ』と叫び乍ら走りました。実際は、近くに彼が追い払うものは何もいませんでした。スリ　スワミィは戻って来ると、火の前に静かに座りました。私は思い切ってスワミィに尋ねました。『ここには何もいないのに、あなたは誰を追い払っていたのですか、スワミィ？』」

スワミィ：あなたの牡牛だ、アッヤ。

「スワミィは牛のことをそれ以上詳しくは言いませんでした。私はそれを、時折彼が示す怒りの激発だと思いました。

「翌日、牛飼い少年達はこのように話しました」

少年達：アッヤ！親指の押印のスワミィは大変強力です。昨日、虎があたの牡牛に跳びかかりました。親指の押印のスワミは棒をもって虎に跳びかかり、虎を追い払いました。でなければ、あなたの牛は殺されていたでしょう。

「その時、私は昨日スワミィが珍しく怒りを爆発させ、杖をもって立ち上がった理由を、理解することができました」

註：当時、スワミィは神聖火の前に座っている時に、紙切れに彼の親指の押印をしていた。このジャヤラマラジュは、そのような経験を数多くもった。それが、この男がスリ　スワミィの奉仕に身を捧げた理由である。

ある日スッバラオ（ゴラガムディのカラナム〔収税人〕）の息子達は、

ネロールの道路を歩いていた。トラックが後ろから彼にぶつかった。車の前輪が彼の腹部を轢いた。後輪は彼に触れて止まった。肋骨が１本折れていた。彼は、政府の病院に入れられた。医者達は、彼は３ヵ月したら歩けるだろうと言った。友人もトラックの下に倒れたが、少しの怪我ですみ、大丈夫だった。その時、スリ　スワミィはゴラガムディで、こう叫んでいた。「事故だ、事故だ、危険だ、危険だ。オイルランプに火を点けなさい、オイルランプに火をつけなさい」日中、彼は、オイルランプを燃やし続けた。帰依者達は、スリ　スワミィの振る舞いが理解できなかった。

翌朝、カラナム　スッバラオの息子の事故のことが分かった。スリ　スワミィは事故のことを告げられた。スリ　スワミィは言った。「彼は２週間でよくなるだろう。神が彼を救った」スワミィは紙にこれらの言葉を書かせ、自分のベッドシーツの切れ端と一緒にベッドに広げるように、またウディ（灰）を飲むようにと送った。ここでの異常なことは、（1）後輪が彼を轢かなかったこと、（2）医者達は３ヵ月で回復すると診断したのに、息子はスリ　スワミィの祝福を受けて、２週間で歩けるようになったこと、である。

ある日、スリ　スワミィとその一行はティルパティに行った。帰りの旅で、ロシレディが汽車に乗っていないことに、誰も気付かなかった。スリ　スワミィは彼のいないままで、一行と一緒にカリチェドゥに到着した。ロシレディは運賃をもっていなかった。しかし、彼は切符を買わずに、次の汽車でやってきた。ロシレディはこう語った。

「なんとか私は汽車でグドゥールに着くことができました」どうすればグドゥールからカリチェドゥに行くことができるかと、ロシレディは心配し悩んでいた。その時、見知らぬ婦人が彼に１ルピーと皿のバナナを差し出し、「スワミィ、私は貧しい老女です。どうか、このささやかな施しをお受け下さい」と言った。彼はすぐにこれをスリ　スワミィの教唆であると解釈し、その施しを受け取った。彼はその１ルピーを運賃として使い、カリチェドゥに着いたのだった。

タルプールのベルル　スリハリ　ナイドゥは、スリ　スワミィが行きたいと思う所に、彼の牛車でスワミィを連れて行っていた。彼の妻はスリ　スワミィの許にきて、プラナマム（礼拝）を捧げた。スリ　スワミィは、「アンマ！あなたはあなたのパスプ　クムクムが危険に遭う。ティルバルル　ベーララガバ　スワミィがそれからあなたを救うだろう」その夜、スリ　スワミィは彼らの家に行き、彼の神聖火を燃やした。翌朝、彼は近所の雲母鉱山に出かけて行った。スリハリ　ナイドゥはいつものように牡牛にまぐさをやるために、牛に近付いた。いつもは、牛は温和しかった。し

かしその日、牛は角を彼の股間に入れて、彼を放り投げた。彼の皮膚は臍の所まで裂けた。傷は多量に出血した。彼はグドゥール病院に連れて行かれた。スリ　スワミィの恵みがあればこそ、彼の命は救われたのだった。でなければ、彼は即死していたことだろう。今日でも、彼はスリ　スワミィのアシュラマムの活動に、最大の敬意をこめて協力している。

バラプレディ　アウディナラーヤナ　レディは、米国の病院に結核症で入院した。彼の病状は望み薄だった。医者達は望みを捨てた。彼の親戚は皆、最後のお見舞いにきた。彼の母は、ずっと以前に家を離れて、ここ１０年間、スリスワミィの奉仕に身を捧げていた。皆は彼女に、行って彼女の一人息子の最後を見取るよう、強く求めた。彼女はスワミィの祝福のある場所を離れることに気が進まなかったが、他の人達の無理強いで、スワミィにそのことを申し出た。スリ　スワミィは言った。「アンマ！心配いらない。彼は２・３日すればよくなるだろう。あなたが行く必要はない」スリ　スワミィの祝福により、レディ　ガルは死を免れ、数日内に回復した。その後、彼は結婚し、子供達にも恵まれた。

その時まで、アウディ　ナラーヤナ　レディはスリ　スワミィに殆ど関心をもっていなかった。彼はスリ　スワミィの奉仕をしていた母親の帰依心を笑ったものだった。この個人的体験で、彼はスリ　スワミィの堅固な帰依者へと変容した。やがて、このアウディ　ナラーヤナ　レディは、１９８１年に、サマディ　マンディールの建設費（殆ど１ラーク〔１０万〕ルピー）を独力で支払った。

ゴラガムディのカラナム　スッバラオはこう報告している。

曾てある州政府の雇員が政府の彼を非難して申し立てをした。申し立てが実証された時、地方収税官は彼に停職を命じた。スッバラオは（困って）ゴラガムディのスリ　スワミィを訪問し、彼の祝福を求めた。彼が来るや否や、スリ　スワミィは言った。「アッヤ！彼は頭に洗濯物と同じ重さの荷物を頭に載せている。もし彼がここにいるなら、私達は１パイサ失うことになるだろう。だから、彼をすぐに追い出しなさい」彼が動こうとしなかったので、スワミィは命令を繰り返し、彼を追いやった。１時間後、彼は再びスワミィの許に来て、「スワミィ、もしあなたが慈悲を下さらなかったなら、私の窮状はどうなるでしょうか？」と訴えた。「アッヤ！君の住所を神に書きなさい。私達がその紙を送ろう」と、スワミィは言った。彼は言われた通りにした。スリ　スワミィの恵みにより、彼は停職を免れ、転勤だけという軽い罰を与えられた。

Ｋ．ブジャイアは裁判事件でいらいらし、気が動転していた。彼はやってくると、むかむかした気分で離れて立っていた。すぐに、スリ　スワミ

ィは彼に、「アッヤ！心に何も持っていてはいけない。真っすぐあなたの家に帰りなさい。私が全てのことを世話するから」と保証した。スリ　スワミィの恵みによって、２・３ヵ月の内に、彼の全ての問題は太陽の光に当たった霧のように消え去った。

スリ　スワミィは色々な従者に色々の務めを与えていた。彼らはスリ　スワミィの許可なしでは、その務めを交換することはできなかった。神聖火への薪の補給は、Ｙ．ラマナイアの務めだった。ある日の早朝、スリ　スワミィはラマナイアを呼んで、「アッヤ！今日は君はここにいて、ここの水と火の補給の世話をしなさい」と告げた。彼は、スリ　スワミィは自分の務めを変えたのだと思った。少したって、彼はスリ　スワミィの言葉を無視して、薪に使う枝を切り落とすために、木に登った。木から下りる時、枝が彼の胸に当たり、彼は地面に落ちた。彼の鎖骨が折れた。しかし、スリ　スワミィの恵みにより、彼は頭から数インチの所にあった大きな丸石の上には落ちなかった。もし彼の頭が、その石にぶつかっていたなら、きっと彼は即死していただろう。皆は、事故は彼がスリ　スワミィの言葉を無視したせいで、それは罰だと思った。ラマナイアはスリ　スワミィに、自分の情けない状態を報せた。スリ　スワミィは「アッヤ！病院はあなたの避難所です」と言い、そのために書き付けを与えた。彼は政府の病院に入院し、徐々に治った。皆は、それはスリ　スワミィの言葉を無視した罰であり、それは自分達にとっての教訓であると気付いた。

６、アバドゥータの振る舞い

２０才の時、彼は「気狂いベンカイア」の呼び名を得た。彼は膝より上の腰に古びたドバティを巻き、シャツを身に着け、手には土製の壺を、他方の手には「Ｙ」字形の杖を持っていた。彼は寂しい場所をよくぶらついた。彼は若い女を見ると、虎を見た牝牛のように走って逃げ去った。彼は「ドービ（洗濯屋）ヨーガム、バーバー（床屋）ヨーガム、ドゥブダク、ドゥブダク」と大声で叫びながら、通りを走った。彼は５年の間村から姿を消した。この間に、彼はスワミィになった。その後暫くの間、彼は腰に破れドーティを着け、一方の手に火のついた縄とムンタ（壺）をもち、他方の手には「Ｙ」字形の杖をもって、ソマシラ近くのペンナル河の土手をうろついた。彼は頭に古い縄の切れ端を載せていた。彼は寂しい場所をよくうろついた。

暫く後、チャラマナイドゥが彼に奉仕するためにやって来た時、彼はベ

ンナ　バドベル近くの小さい丘の上に小屋を建てた。彼は小屋の中にオイルランプを置き、スワミジは日夜エカタラ（一弦の楽器）を弾き続けた。チャラマナイドゥは、近くの村々からビクシャを貰ってきた。それらの村の農夫達が、彼らの病気や家畜の病気を助けてもらおうと、スリ　スワミィの許にやってきた。スワミジの祝福と与えられた神聖な糸とウディ（灰）によって、彼らはそのような全ての病気から救われた。スワミィは人々に彼らの障害を免れる方法や問題を解決する方法や、彼らが話していない問題（プラスナ）の解決方法まで教えた。しかし、その方法は大変独特だった。もし私達が、子供達の縁組を求めてスワミィの許に行くと、スワミィは各縁組のために、石を１つ持つてくるように言った。もし私達が３つか４つの石を一列に並べると、彼は右側から３つ目の石がよいから、あなたはそれに決めるとよい」と言った。時には、それらは全く考える必要もないものだった。経験により、私達は、スワミィの言葉は百パーセント本当であることを知るだろう。

スリ　スワミィの言葉は間違ったことがない。もしそのような場合があるならば、その原因は、スリ　スワィの言葉を正しく理解して、指示を遂行したかどうかにあるだろう。

ペンナ　バドベルでの後、スリ　スワミィは数年間コティテールタム村のエスワラ神殿に住んだ。ここで、スリ　スワミィは目を閉じ、マハマントラ「オーム　ナラーヤナ　アウディ　ナラーヤナ」を唱えながら、ナツメヤシの枝でエカタラをよく演奏した。彼はそれ以外は何もしなかった。エカタラの弦が切れても、彼は気が付かなかった。彼はマントラを唱えながら、それを弾き続けた。目を開けて、弦が切れているのを知ると、彼は弾くのを止めて、切れた弦を繋ぎ、再びエカタラを演奏し続けた。時折、彼は燃えている火の前で、エカタラの演奏を続けることがあった。チャラマナイドゥのような従者達は、彼のためにビクシャを貰った。

この後、彼は長袖のシャツを着て放浪し始めた。このシャツはインクの汚れが一杯あった。幾つかのシャツには、テルグ語でラーマ　ラーマの大きな文字が書かれていた。これらのシャツは帰依者達によって彼に差し出されたものだった。彼は長いことエカタラを弾くことがよくあった。残りの時間、彼は紙に親指の押印をして、それらは将来値打ちが出る、その価値は数ラーク（ルピーかモンドかシアル〔２ポンド１オンス〕か私達は知らない）になるだろうと言って、帰依者達にその紙を与えた。彼は親指押印の作業に熱中している時でも、絶えず火を燃やし続けていた。毎日、スワミィは５００枚の紙とインク壺数個を必要とした。スリ　スワミィの恩恵を受けた帰依者達は、数袋の新聞紙と白紙とインク壺を供給した。

数年後、彼は親指押印を減らし、殆どの時間を神聖火の前で黙って過ごした。彼は火に荷車の薪をくべることによって、非常に大きな火炎を上げようとした。火の前に座ったまま彼は日夜、私達に理解できない不思議な言葉をよく話していた。時折、彼はそのような言葉を従者達に口授し、紙にそれを書き取らせ、帰依者達にそれらを与えた。彼は１日に３・４台の荷車の薪を燃やした。ある場所では、人々は薪がなかったので、スワミィに居てもらうのが難しいと考えた。しかしそこでも、スワミィの恵みにより、人々は必要とする薪を手に入れることができた。

どんなに太陽が暑く照っていても、天候がどんなに寒くても、雨がどんなに土砂降りに降っていても、彼は決して神聖火の前から立ち上がらなかった。彼は話を終えるまで、決して神聖火から立ち上がらなかった。誰も、その話がどんなものなのか知らなかった。時にそれは１日かもしれないし、別の折は、４日か或いは半日かもしれなかった。私達は、彼の話す期間を予測できなかった。そのような間、彼は、数日間食事も取らず、水も飲まず、用便もしなかった。この地域には、「ベンカイア　スワミィ　パンダル（仮小屋）」と呼ばれる言葉がある。午前１０時に、彼は土に棒を立て、それにパルミラ椰子の葉を縛り付ける。太陽光線が彼に当たらないようにするためである。太陽が昇って、影が長くなっても、彼は横に動きも私達に話しかけもしない。彼は独り言を言い、指を使って何かを計算しており、時々は本当に会話をしているように声をあげた。

ある時、スワミィはゴラガムディに来て、８年間、日夜神聖火を燃やし続けた。毎日、彼は神聖火に荷車４・５台分の薪を使った。

モプル　ダサイアとベンカタイアと他の数人は、近くの森で木々を切り倒した。牛車の所有者ラマナイアは、牛車で森から薪を運んだ。今日でも、このラマナイアはゴラガムディでスリ　スワミィの奉仕をしている。日中、スリ　スワミィも彼らと一緒に森に行き、そこで暫くの時間を過ごした。ここで、スリ　スワミィは従者達から少し離れて、一人でよくぶらついた。数年間、スリ　スワミィは従者達に切るべき特別な木々を指示した。数年後のある日、スリ　スワミィは彼らに、自由に、どんな木でも切ってよいとの許可を与えた。８年間の、この連続する神聖火のせいで、ゴラガムディ近くの殆ど全ての森の木が切り倒された。「この場所全体は野原になるだろう。将来ここは村となり、私達はここの小さな場所も手に入れることができないだろう」とスワミィは言った。今、スリ　スワミィが８年間神聖火を燃やしていた場所には、美しいサマディ　マンディールが建っている。

数年後、スリ　スワミィはもう再び放浪を始めた。スリ　スワミィの放

浪には決まった計画はなかった。彼は気の向くままにあちこちと移動した。１９６０年ー６５年、スリ　スワミィの両足が病気になった。彼は足を伸ばせなかった。両足の膝関節が硬く締まっていた。スワミィは、帰依者達の足を治すために薬を飲むようにとの勧めを拒否した。スリ　スワミィは言った。「前の誕生で、私は牝牛の足を折ったことがある。だから、私はその罪の結果に苦しみ、その悪いカルマ（よくない行為）を取り除かねばならない」と言った。今やスワミィは歩くことも動くこともできず、１箇所に座っていた。ある日、彼はロシレディに、「少し離れた所にあるパルミラ椰子の葉を取ってきておくれ」と言った。彼はそうした。その後、ロシレディは８キロ離れたネロールにまでも、パルミラ椰子の葉の上に座っているスリ　スワミィを引きずって行った。時折、パルミラ椰子の葉が穴に落ちた時には、スリ　スワミィは地面に置き去りにされた。ロシレディはそのことに気付かず、数ヤード進んだ。彼は周囲のことを気にせず、トランス状態にある如く、パルミラ椰子の葉を引っ張った。そのため、彼はスリ、スワミィがパルミラ椰子の葉から滑り落ちても判らなかったのだった。彼は引き返し、スリ　スワミィを葉に乗せ、旅を続けた。

タルプール村のエープル　スンダララミ　レディが、スリ　スワミィに、６インチの高さの小さな４輪車（丁度ハンセン病者が用いる小さな手押し車のようなもの）を差し出した。彼はその手押し車に乗って、村から村へと旅行した。従者達は、スリ　スワミィが行きたいと望む所へ手押し車を引いて行った。それは非常に難儀な困難な旅だった。凸凹道のため、スリ　スワミィの体はひどく揺れ、彼に大きな疲労を与えた。数人の頭のよい帰依者が、２人で運ぶことのできるドリ（運び袋）でスリ　スワミィを運ぶ方法を提案した。ドリはスリ　スワミィには非常に楽で、運ぶ従者達にとっても非常に軽くて容易だった。最後まで、スリ　スワミィは旅のためにドリを使った。長旅では、バスと汽車でも旅行した。彼はバス停から目的地まで、ドリを使った。彼はネロール、ポダラカール、チッテパレム、クルル、ムディゲドゥ、デガプディ、タルプール、チェロパリ、カリチェドゥ、シッダライア　ヒル、ティルパティ、カンチ、ティルバルル、ラジャパドマプラム、ティルバランゲドゥ、ペンチャラコナ、ゴヌパリ、ダチュル、サンガム、ペヌブルティ（ネロールの近く）、マイパドゥ、インドゥクルペット、ゴラガムデその他の幾つかの地を訪問した。

スリ　スワミィが放浪の聖者だった時、多くの人が彼についてきて、彼が森で何をするのか見ようとした。もし彼が、誰かが自分の後をつけていると知ると、茨の多い場所を縦横に横切りながらあちらこちらへと歩いた。追いかける人達は、茨の道を歩くことができなかった。そのため、彼ら

は走って引き返した。

彼は決して歯を磨かず、口も洗わなかった。彼は噛み煙草を吐き出し、パルミラ椰子の葉の皿（レカかドーム）で粥を飲んだ。

全知、遍在、全能の霊スリ　スワミィは、その名声とオカルト　パワー（超能力）をこっそり隠し続けた。物事をやり遂げる彼の方法は常に珍しく、人間的知能の範囲を越えていた。彼は魂に住む普遍霊だったので、全ての物事で、個人の内部で働きを成し遂げた。私（著者）は最初に会った時から、スリ　スワミィの素晴らしい経験をした。アチャリヤ　E．バラドワジャの助言に従って、私は、心の中で「スワミィ、もしあなたがこの世の神であるならば、私が求めなくても、あなたはジャガリーとグラム（豆）を食べ、私があなたの足をオイルマッサージするのを許すべきです。もしあなたが５分以内にこれをするならば、私はあなたがこの世の神であるとのスリ　バラドワジャの言葉を信じます」と祈った。

慈悲深いスワミィは、私の２つの条件を叶えた。それからは、私は彼の堅固な帰依者となった。数日内に、私は彼の周りの帰依者達から数多くの体験を収集し、それらを紙に書いた。それらは全て非常に不思議な（奇跡的な）体験だった。

そのわくわくするような気持ちで、私は母トゥラサンマの警告にも拘らずスワミィの近くでハリダス（職業的乞食）となり、新来者達に、私の持っている資料を話すことを始めた。ある日、スリ　スワミィは非情にびっくりするやり方で私の口を閉じた。その日、スリ　スワミィは「なぜあなたは好きなように、話すのかね？」と言った。実際、私はその前の１時間は口を開いていなかった。私達はその場に２人しかいなかった。彼はこう言ってからは、私のどんな質問にも答えなかった。彼は私の内心で私に話した。それは訪問者達への私の話についての意見だけだった。そのため、私はその後は黙ったままでそこにいた。

同じように、スリ　スワミィはゴラガムディの土着の人に、「アッヤ！人々は私のことにつて色々な話をする。それは誤りではないですか？」とよく話した。

トゥラサンマに、「アンマ！あの人達は袋を開いて、それらを荷車に積んで、配っている。それはよくないのではないですか？あなたは彼らに、そんなことをしないように言いなさい」と言った。スリ　バラドワジャの助言で、M．ベンカタ　ラオは、スワミィが生きている間に、テルグ語のスワミィの伝記を出版したいと思った。その本は、バラドワジャ　ガルによて編集された。印刷する前に、マニカ　ベンカタ　ラオは、それは正しく編集されていない（これは彼の観点にすぎない）とのスワミィの神性メ

ッセージを受け取った。そのため、彼はそれを印刷しなかった。

このように、スリ　スワミィは彼の名声と力を厳しく内密に保った。スワミジのこの指示を破ることを敢えてしたのは、私達の地方のアートマグナニ、バラドワジャ　ガルのみだった。スリ　バラドワジャ　ガルは、スワミィが肉体で生きていた時に、彼の写真を携えてスワミィの偉大さを説いた最初の忠実な霊的勇者だった。彼はビディヤナガールのサイババ寺院の開設の折に出された記念品として、英語とテルグ語での４頁の記事を出版した。このように、１９８４年即ちスリ　スワミィのマハサマディの２年後まで、スリ　スワミィはカーテンの後ろに隠されていた。そして、彼自ら１９８４年８月１４日に出てきた。

今、彼は私をその蓮華の御足の許に引きよせ、私を通して、彼はアチャリヤ　スリ　Ｅ．バラドワジャによる、彼の最初の伝記を出版させた。テルグ語のその本の名は、『アバドゥータ　リーラ』である。

彼はその霊的力と名声を秘密にしておくため、ナタサムラート（守護神）以上の行動をした。彼はコトゥル（クロール）、マヌグル（重量の単位）、パダガル（意味不明）、ナシャナル（意味不明）、パタラ　ロカ（地下世界）、バジラ　カルス（ダイヤの産地）のような言葉を、祝福の口述に使った。彼は誰も聞いていない時、意味のない言葉を叫んでいた。彼は全然火の気のない所で、火を消すために水をかけるよう命じた。彼は土と糞の塊を示して、「これは全て金だ」と言った。ある時、彼はある家の火が燃えているのを指さして、「あれは全て金だ」と言い続けた。彼のそのような行動は、時折、見知らぬ人達と疑っている帰依者達に、彼を気狂いと間違わせた。人々はマハサマディ迄、彼の周囲に集まることを避けた。

彼は気が向いた時にいつでも髭を剃った。全ての人が床屋に半パイサ支払ったのに、彼は１、２ルピー払った。１９８０年以後、彼は頭も綺麗に剃った（グンドゥ）。帰依者達の中で、バリガラ　ナガイアはスリ　スワミィによくこの奉仕をした。彼が若かったもっと以前の写真では、彼は髭を生やし、長い頭髪をしている。

マハサマディの１年前、彼は両方の掌を固く握り、拳を開けようとしなかった。病気の間でも、彼は決してベッドで小便や大便をしなかった。立派な帰依者ロシレディは、スワミィの尿を１滴も残さずに飲み干した。それほど、彼の肉体は天の蜜に満ちたアムルータマヤムになった。彼は死ぬまで決して薬を飲まなかった。

このロシレディは視力を失い、砂糖水のような液状食しか、取れなかった。彼は１９８５年に最後の息を引き取るまで、自分の神聖な務めとビクシャの食物をアネケパリ村から貰ってくるというグルの命令を決して止め

なかった。

献身的な従者達がスワミィに奉仕している時、ロシレディはそれらスワミィの従者達の世話をした。このように、彼の不動の信仰が彼の力だった。スリ　スワミィは、決して決まった規則的な日常行動をしなかった。時折２・３日夜昼、彼は「荷車を止めよ」とか何かそのような意味の判らない言葉を大きな声で叫び続けたり、完全にブラーマナンダに浸って座していた。彼がどんな言葉を発しても、従者の一人はそれを同じ抑揚と速度で繰り返さねばならなかった。彼らが低い声で繰り返すと、彼はもっと大きな声で言うよう求めた。彼は１・２日間眠る時は、肉体を少しも動かさないアサナ（姿勢）で横たわっていた。無知な人々は、スリ　スワミィは老齢のためそのように横になっているから、彼はもうそう長くはこの世にいないだろうと考えた。しかし、彼らは彼がブラーマナンダ即ちニルバ　サンカルパ　サマディ（瞑想の最高の段階）に浸っていることを知らなかった。私は、それがニルビカルパ　サマディ即ちサビカルパ　サマディであることを証言できる。なぜならば、私は彼が３日や５日の瞑想の間に真の帰依者達の発されない思いに反応しているのを見ているからである。例えば、１９７８年のある時、スリ　スワミィは前夜からそのようなヨガの眠りで、横たわっていた。私は午後時にダルシャンに行った。私が行くや否やスワミィは顔のベッドシーツを除けて真っすぐ座り、紙切れに祝福を書かせ、私に与え、再びベッドシーツをかぶってベッドに横になった。

彼はこの２４時間の間断食しており、従者達が再三いつものように粥や水を飲むように勧めても、応じなかった。数分内に、使者が私の所に来て、私の曾祖母が数時間内に死のうとしていると報せた。私は従者達が保管しているスワミィのパダ　テールタ（足を洗った水）を受け取って、家に帰った。曾祖母はパダ　テールタとウディ（灰）を飲んで、肉体の殻を脱いだ。彼女はパダ　テールタを飲んだ後は、口を開けなかった。私達は薬を飲ませようとしたが、できなかった。彼女は最後の数日間、肉体上の苦痛のせいで、サイナスの名を日夜唱えていた。そのため、スリ　スワミィの姿で、サイナスが彼女の霊に解脱即ちモクシャを与えたのだった。

上記の例では、スリ　スワミィは眠っていたが、彼の眠りは私達の眠りとは違ていた。その状態にあっても、彼は私が３マイル歩いて来ようとしているのを知っていた。更に彼は、数時間で私の曾祖母が死のうとしているのも知っていた。彼は又ある人が私をスリ　スワミィの許から連れ帰るために来ようとしていることを知っていた。彼はまた曾祖母の帰依心を知り、祝福とパダ　テールタを与えて　彼女の霊を解脱させる責任を自覚していた。そのため、彼は従者達の勧めにも拘らず、粥も飲まないのに、紙

切れの祝福を私に与えてから、ヨガの眠りを続けたのだった。

「真のヨギは昼も夜もない」と、サーストラ（教本）は言っている。スリ　スワミィの場合、この言葉は何と適切であることか。

別の折、スリ　スワミィは３日間のヨガの眠りの最中、カバリから来た女性帰依者を祝福しダルシャンを与えた。私はその目撃者だった。その時、彼のヨガの眠りは３日目続いていた。一人の貧しい女性帰依者が、スリ　バラドワジャ　ガルの助言に従って、スワミィのダルシャンを受けに来た。しかし途中で、彼女は、彼はベッドの眠っているのでダルシャンはなゴという情報を得た。彼女の悲しみは限りなかった。とにかく、彼女はゴラガムディにきた。彼女が来るまでに、スワミジは水浴し、白い服を身につけ、にっこりしながら白いベッドに座っていた。１０分間のダルシャンの後、彼は何も食物を食べずにもう１度眠りに入った。このような多くの例がある。

もっと以前の頃、人々は彼の無執着を見て唖然とした。もし私達が彼の空腹な時ラドゥを差し出すと、彼はそれを受け取ると、少量の唐辛子粉を混ぜて食べた。時折、スリ　スワミィはジャガリ（粗糖）を要求した。彼は、それを少し噛んだ。ロシレディはひよこ豆と粗糖と乾燥ココヤシ等を混ぜて粉にしたものを作り、スリ　スワミィの手の届く所に置いておいた。ある日、従者達が間違って油浴（頭を洗うため）用の粉シカリの入ったブリキ缶を置いておいた。それは苦い味がした。しかし、その缶は朝には空になっていた。彼がチリの粉をコップで飲んだ時、その粉は彼には別状なかったのだった。

全く不思議なことに、時々彼はあるものを食べようとしなかった。ある日、グルバイアは糊状にしたニンニクを給仕した。それが口に触るや否や彼はそれを吐き出した。彼は１５年前から　冷たい水を飲まなかった。彼が要求した時は、いつも、私達は砂糖を混ぜた沸かした水を出さねばならなかった。彼は選んだ１・２の従者以外は、他人に自分の体や足を触らせなかった。彼は人々が彼を礼拝したりプラダクシナ（周りを回る）することを許さなかった。もし人々が周りを回ろうとすると、彼は「ただ１度で十分です」と言うのだった。

パルミラ椰子の葉は、彼の座席即ち玉座だったし、土の壺は彼には金の壺だった。黄麻布の袋は彼のベッドだった。裸の地面は彼の揺りかごだった。ラギの粥とニンニクのチャツネと唐辛子の粉は彼の最も美味しい料理だった。破れた衣服が彼には絹とビロウドの衣服（パッツ　ピータンバラス）だった。何と偉大な無執着であることか！

彼は気狂いと思われた時の前も後も、生涯を通じて、最後まで、彼は決

して誰のことも、良くも悪くも批評しなかった。同じく、彼は決して誰も誉めなかった。「ナ　アビナンダティ　ナ　ドゥウエスティ（彼は好き嫌いをしなかった）」従者達が彼の周りでいつも世間話をしたり、他人の欠点を見付けたりしても、彼は決して彼らに、なぜ正しくないそのようなことをするのかとは言わなかった。

彼は決してカレーを要求せず、また前以て何か料理を用意するよう命じなかった。アラーが彼にその日何を与えても、彼はそれを神のプラサダムとして大いに美味しく満足して食べた。粥がなく、何かお菓子が出された時には、彼はそれを芥子の粉と混ぜて、その味を消してから食べた。彼は特別なやり方で何かの仕事が行われるように、決して助言も命令もしなかった。外の情況や状態を気にすることなく、ひたすら目標に向かって努力することが、スリ　スワミィの唯一の意図だった。彼は永遠の火を燃やしている時は、太陽の暑さも雨の寒さも、風の冷たさも気にしなかった。

デブドラ　ベンカタイア氏は、スリ　スワミィの食事の仕方をこう述べている。米は十分な量が葉の皿で出されねばならなかった。彼は中程を少し残し、葉の皿の縁の周りに米の壁を作った。彼は中程に残った少量を食べた。その時、もし２度目を出されたなら、彼はその食事をバターミルクと一緒に食べた。葉の皿の縁に壁のようにされた米は、彼の指であらゆる方向に払い除けられた。

彼は米と固形の食物を食べている時は、各食事に米一杯の３枚の葉の皿を要求した。全てのものは彼が食べるためではなかった。更に、私達は彼にスプーンで給仕してはいけなかった。私達はお鉢で米をもってきて、葉の皿に移さねばならなかった。その結果、全ての米は葉の皿に逆さに山盛りになった。彼はインクのついた掌でその米に触り、その米をプラサダムとして家の主人に与えた。私達は２度目も、同じ方法で彼に給仕しなければならなかった。彼は米で小さなお握りを作り、それらを葉の皿の縁の周りに並べた。時々、彼は葉の皿の周囲に小さな米のお握りを２列に並べた。それから、彼は残りの米を食べた。通常、彼は２度目を食べるとは言わなかった。ある人々は、彼は食事の後、他の人達が葉の皿を取り除けることを決して許さなかった、と言っている。彼は自分で皿を、残っているものと一緒に投げ捨てた。彼は誰かがいる所では食べなかった。彼は食事をしている間、一人にして欲しいと私達に言った。そのため、彼が粥を食べる時でも、カーテンのようなものが立てられた。

時折、彼は「アッヤ！少しのセイボリーと芥子の粉を」と言った。もし私達がチリと食塩とニンニクを出すと、彼はそれらに水を加えて掌で混ぜ、それを米に混ぜて食べた。胃の具合が悪い時には、彼はカリベパク　コ

エンドロとニンニクを混ぜたものを要求した。

ある日、彼は従者達に食事をつくるよう命じた。彼らはそれを用意し、スリ　スワミィに差し出した。すると、スワミィは掌で頭に触れ、それから葉の皿の米の山を触れた。彼はそれを３度繰り返した。しかし、彼は少しもそれを食べなかった。彼はそれを一人の帰依者に与え、それを皆に配るようにと言った。更に、彼は、そのプラサダムを食べる人達は病気が取り除かれると言った。この命令は実行された。

時折、彼は「私に早くベテルナット（ビンロウジュの実）を下さい」と言った。彼はそれが与えられるまで、求め続けた。彼はそれを食べると、「もう少しチュナムを加えて、私に下さい」とよく言った。しかし、彼は最初の塊を捨てた。次に、少し多くのチュナムを与えられると、「マ！食べなさい、食べなさい、それを食べるのはよいことだ」と、恰も誰か見えない人に言っているようだった。少しして、彼は「アッヤ、どうか、彼女に行くように言いなさい。私が全ての世話しましょう」と言った。

その見えない人即ち霊は誰だったのか、私達にどうして判るだろうか？

ある日、アンジャネヤ（ハヌマーン）寺院で、彼はタットバル（特別な拍子の詩型）を唄うのを止めてマントラ「オーム　ナラーヤナ　アウディ　ナラーラナ」を唱えるようにと繰り返し人々に言い、自分はそのマントラを唱え続けた。彼は長い間それを行った。

彼が粥だけを食べていた期間、彼はよく蒸かしたニンニクや揚げたニンニクを求めた。彼はそれらを粥と一緒に噛んで食べた。

この粥の給仕はロシレディに任されていた。ある日、彼は薪を採りに行った。他の従者数人がスリ　スワミィに粥を差し出した。スリ　スワミィは拒んだ。やがて、ロシレディが森から帰ってきて、いつもの様に、スリ　スワミィに給仕するため粥を混ぜていた。従者達は彼に、「丁度今スリ　スワミィは粥を拒んだ。なぜ君は再び給仕するのかね？」と言って、彼の邪魔をした。彼は準備を止めようとせず、粥をスワミジに差し出した。すぐにスリ　スワミィは、「君が粥をもってきたから、私は飲む」と言った。彼は躊躇うことなく全部飲んだ。従者達は、スリ　スワミィの許しなしには務めを変えてはならなかった。それが内規だった。

スリ　スワミィが固形の食事を摂っている間は、ロシレディはビクシャを貰いに行って、それをスワミィに差し出すよう、命じられていた。ある日、一人の従者がスリ　スワミィにその奉仕をしたいと望み、ロシレディに、それをしないよう頼んだ。その従者は食物をもってきて、スリ　スワミィに食べて下さいと頼んだ。スリ　スワミィはそれをそこに置いた。しかし、スリ　スワミィは食べなかった。数分して彼はロシレディを呼び、

怒った声で、「もし君が給仕したいなら、給仕しなさい。でなければ、私をアシュラムから引きずり出しなさい」と言った。その日からは、どの従者もレディがその奉仕をするのを邪魔しなくなった。

ある日、スリ　スワミィはロシレディに、「行って、右の掌で２度水を飲みなさい」と命じた。彼はそうした。その日から、彼の水を欲しがる渇きは消えてしまった。

一般に、従者達が神聖火の薪を調整しても、スリ　スワミィは反対しなかった。しかし時折、彼は誰も火に近づくことを許さなかった。トゥラサンマは朝夕いくらかの香を差し出し、火に敬意（ナマスカール）を示すことにしていた。ある日、スリ　スワミィは火の前で腕を横に伸ばし、彼女が火に近づくのを許さなかった。恐らくその時は、目に見えない預言者かリシか神々が神聖火の前にいたのだろう。ある日、ロシレディが薪を調整しようとした。スリ　スワミィは「アッポ（感嘆や驚きを表す）、アッポ、今それはいけない」と叫んだ。

時折、彼はひどくおどけた調子で話した。

スワミィ：アッヤ！十分に薪はあるかね？

従者：薪は十分あります、スワミィ！

スワミィ：もしそうなら、心配ない。

彼は、私達には理解できない言葉を叫んだ。

従者：あなたはなぜ叫んだのですか、スワミィ？

スワミィ：私は叫ばなかったよ、スワミィ！

スリ　スワミィが従者を「スワミィ」と呼んだ時、他の皆は声をあげて笑った。

時折、彼は火の中に湿った灌木をくべた。それらを燃やすため、彼は、その上に干し草をくべ、声を出して笑った。従者達が笑った訳を尋ねると、スワミィは、「湿った灌木は戦っていた、アッヤ！」と言うのだった。

ある日、スリ　スワミィは神聖火の近くの地面に座っていた。スリ　スワミィのことを知らない見知らぬ人が、自分のランプに火を点けようとスワミィに近づいてきたが、エカタラ等を見て、ドゥーニ（囲炉裏の火）から燃え差しをとるのを躊躇した。しかし、彼はランプに火を点けたかった。すぐに慈悲深いスワミィは、「アッヤ！あなたはランプに火を点けたいのですね。どうぞ、つけなさい」と言った。従者達皆はこの言葉を聞いて驚いた。その頃、彼は誰もその火の１本の燃え差しにも触れさせなかったからだった。上記の事情から、彼が他者達の気持ちに応じて反応したことは明瞭である。

毎日夕方、スリ　スワミィは自分が受け取った全ての金額を従者達全員

に分配した。彼は、少しの金額も決して翌日まで残さなかった。祝祭の季節中、彼に差し出された全てのお菓子や他の食物は、訪問者と従者達に配られた。ダサイアとラマナイアとロシレディと他の数人は、他の人達よりも多くの仕事をしていた。そのため、彼は幾らかのお菓子を残しておき、別々に彼らに与えた。ロシレディはスリ　スワミィと一緒に夜じゅう起きていることがよくあった。真夜中、スリ　スワミィはロシレディを呼ぶと、マットの下に隠していたお菓子を渡し、「アッヤ、家の裏に行って、それを食べなさ」と言った。

マハサマディの時、スリ　スワミィの年令は百才以下ではなく、それ以上だった。最後の１２年間、彼は液状食だけで生きていた。しかし私達は、彼の体に老齢の徴候、即ち皮膚の皺を見付けることはできなかった。彼の皮膚はいつも滑らかな肌理と明るいきらきらした色合で、骨にぴったり付着していた。アチャリヤ　Ｅ．バラドワジャのような悟りを得た魂は、即座に、スワミィを偉大なヨギであり、それはヨギの肌であると認めた。

静寂と深みが、彼の目のには全く顕著だった。きらきら輝いた目は、そのマハトマの自然の装飾だった。

最後の日々の間、グラバイアは日夜起きていて、スワミィの頭部の近くに座っていた。彼はスリ　スワミィによって発されるのと同じ音声を繰り返していた。スリ　スワミィは、枕に頭をのせ、体を動かさず、ベッドに横たわり、空を凝視していた。その稀な期間、グラバイアは座って、スワミィの顔から目を離さず、永遠の至福に浸っていた。彼はスリ　スワミィを、そのままにしておきたくなかったのだった。

グラバイアは、その時彼はスワミィの体から「光」が流れ出て彼の体に入る経験をした、と言っている。

マハサマディの３年前から、スリ　スワミィはいつもサマディ　ニシュタ（不動状態）だった。そのため私達が綿のベッドを作った時、彼は嫌がらなかった。彼はグラバイアをひっぱり、自分のベッドに座らせようとまでした。

スリ　スワミィのベッド：従者達は床に広げられた干し草の上にナツメ椰子のマットを広げた。そのマットの上に、パルミラ椰子の葉が置かれた。それから、それは黄麻袋の布で覆われた。それがスワミィのベッドだった。

バカンマはナマジャパ（名を唱える礼拝）をしながら、トウモロコシの殻を集めた。従者達はその殻でベッドを作った。スリ　スワミィはそれを受け入れた。

その後、彼らは綿を詰めたベッドを使った。スリ　スワミィは村に行っ

た時はいつも、１・２日間そこに滞在し、同じ村のどこか他の場所に移った。

従者：スワミィ、あなたがこの世を離れた時、誰が私達を守ってくれるのでしょう？

スワミィ：アッヤ、私がどかへ行く？私は、太陽と月が存在する限り、ここにいるだろう。「ベンカイアは全ての生きものの中にいる」と書き留めておきなさい。

マハサマディの前日から、スリ　スワミィは「サンパンナトゥワム（よい資質）、サダラナトゥワム（質素）、サドグル　セバ（グルへの奉仕）」と叫び続けていた。恐らく、それは帰依者達への、彼の聖なる助言だったのだろう。

ある日、スリ　スワミィは、タルプールのナラヤナダス　アシュラムにいた。

スワミィ：アッヤ、これはどこの村かね？

従者：タルプールではありませんか、スワミィ？

スワミィ：よろしい、オーケー。

ギータ：ナタトバサヤテ　スリヨ　ナササンコ　ナパアカハ
ヤドゥガトワ　ナニバルタンテ　タダマ　パラマム　ママ
（太陽神は太陽よりも明るいところにいられる。もし人々がそこに入るならば、帰って来ることはできない）

このように、スリ　スワミィは太陽と月とアグニ（火）によって明るくされ得ない状態にあった。その状態を獲得してからは、人は２度と無知の態には戻らないだろう。

ある日、スリ　スワミィは言った。「将来、あなた達皆は今あなた達がしているのと同じ奉仕をし続ける。私はそのような奉仕の中にいる。マハサマディの数日前、スリ　スワミィは下着の布切れ、ベッドシーツ、タオルの全てを数え、それらをグラバイアに与え、「これら全てを、大切にもっていなさい」と言った。

時折、スリ　スワミィは食事も水も摂らないで数日間、日夜神聖火の前に座り続けていることがあった。彼は目覚めていても、私達の意識状態ではなかった。彼はよく、「ここはどこかね？」と尋ねた。無知な従者達はそのことを笑い、「タルプールではないですか、スワミィ？」と言った。

別の折、夜１０時だった。数個の灯油カンテラが暗闇に明るく輝いていた。スリ　スワミィは「昼かね、それとも夜かね、アッヤ？」と尋ねた。

無知な従者達は彼の状態を知らないので、そのこと（日中か夜か判らない彼の状態）を笑った。彼らは、それが「ニルビカルパ　サマディ（完全

な平静）」と呼ばれる最高の存在状態であることが理解できなかたった。彼は目をぱっちり開けていても、世俗世界にはいなかった。上記の２つの状態を私は目撃したことがある。スリ　スワミィはそのような偉大な状態にあった。マハサマディの３年前から、医者の助言で、彼は大変熱いミルクに混ぜた葛ウコンのビスケットの粉と砂糖を与えられた。最後の数日も、彼の味覚への驚くべき制御がはっきり見てとれた。時折、彼は１滴も残さず粥を全部飲んだ。別の時には、彼は粥を飲んで、濃い液を残した。一般的に、その濃い液は、溶けていない砂糖とビスケットの粉が入っているため薄い液よりずっとおいしいので、私達ならそれを食べることを好む筈だった。しかし、スリ　スワミィは、強制と説得にも拘らず、１滴でも飲むとか触れることをしなかった。彼は只それを床に放った。彼は王者のようなヨギであり、自分の摂る食事の正確な必要最小量を知っていたのだった。

１９７８年には、彼は歩くことができなかった。そのため、彼は尿を土製の壺（ムンタ）にとり、従者達がそれを処分した。最後の４日間は、ロシレディがスリ　スワミィの尿全てを、彼の非常に貴重なプラサドとして、１滴も残さず飲んだ。そのため、彼の体はアムルタマヤム（アムルータに満ちている）だった。

もしスワミィが大便をしたいならば、私達は、彼をドリに載せ、全く誰もいない且つ以前誰にも使われていない所に連れて行かねばならなかった。従者達はその地面に枯草や木の葉を敷いて、その上にマットを広げ、スリ　スワミィをベッドの上に据え、見えない所に立ち退いた。それから、彼は用便をした。もし従者が水を注ぐと彼は手を洗い、すぐに元の場所に戻った。そして、彼は必ず湯浴した。マハサマディの殆ど１年前は、彼は数日間続けて深いニルビカルパ　サマディに浸っていた。そのような時にのみ、彼は尿と大便をベッドでした。従者達はその体を洗い、彼の知らぬ間にベッドを替えた。

もし湯浴用の湯が少しぬるいと、彼は「寒い、寒い、寒い」と声をだした。もし湯が少し熱いと、彼は「アッバ、アッバ」と叫んだ。もし水が適温であれば、「アディ、アッディ、アッディ（よい、よい、よい）」とスワミジは言った。私達が彼の体を洗っている間、時々彼はサマディに入った。そのような時、従者達は慌ただしく彼の湯浴を止め、タオルで彼の体を拭き、下履きを替えて彼を運んで、他の従者達が用意した新しいベッドに彼を横たえた。下履きの水は、帰依者達によって彼のパタテールタ（神聖な水）として受け取られた。ある人々は、下履きの水を目や他の病気のために使った。スリ　スワミィが通常の意識の時は、彼は湯浴のために石

けんを使うことを許さなかった。そのため、従者達はシカリ粉やマンガチェッカ粉やベンガル豆の粉を、彼の体を洗うために使った。彼は粉の質は気にしなかった。最後の日々の間のみ、彼がサマディ状態だったので、従者達は彼の湯浴のためにマイソール白檀石鹸を使った。

時折、彼は通常の意識になり、私達に胡麻油で体をマッサージするよう求めた。そのような時には、真の帰依者達の強い希望により、彼の許しを得て、彼の体を触る機会を与えられた。ある時には、彼は、体を触りたいと切望している帰依者達に、棘を抜くためを装って、自分の足をもたせた。随行の従者達も１・２人の他は、彼の体に触ることを許されなかった。

１２月、１月、２月は、夜の空気が霞と霧に満ちていた。その時には、スリ　スワミィはいつも風邪に苦しんだ。そのため、数人の従者は彼の囲炉裏の上に屋根を建てた。すると、すぐに彼はパンダル（仮屋根）から出て、霧と霞の中の野外に場所をとった。ある季節には、蚊が厄介な問題だった。蚊が刺すと、彼は、「アッヤ！警察官が沢山つついている。アッヤ、少し掻いておくれ」と言った。彼の体は、櫛で掻かれた。スワミィを蚊が刺すのから防ぐために、帰依者達は蚊帳を張った。すぐに、スリ　スワミィは蚊帳を引きおろして捨てた。彼のマハサマディの１年前の最後の数日のみ、帰依者達はスワミィの体を蚊帳で守ることができた。これら２つの振る舞いは、スリ　サイババのリーラを私達に思い起こさせる。

通常、スリ　スワミィは従者達に５フィート離れているよう命じた。しかし冬の間は、従者達皆は周りの寒い風から身を護り暖をとるために、神聖火の周りのスワミィの近くで眠った。スリ　スワミィはそのような折には、決して彼らを嫌がらなかった。

ある日、スリ　スワミィは言った。「今日は誰も話してはならない。私達は海水浴に行かねばならない。私達はバカンマを連れて行かねばならない」

しかしその日、スリ　スワミィは海水浴に行かなかった。そのため、誰もその言葉の真の意味が理解できなかった。しかし、その日バカンマは、スリ　スワミィと一緒に海水浴をする夢を見た。バカンマの夢が偶然の夢ではなく、スリ　スワミィ自身がその神聖な経験の恵みを与えたのであることを示すのが、前日スリ　スワミィが海水浴のことを話したことの意図であるのかもしれない。誰も、なぜスリ　スワミィがその日黙っているように命じたのか、理由をきかなかった。

７、奇跡的視覚

スリ　スーカのような意外なブラーマ　グナニ達は、不断の深い瞑想の故に、彼らの真の実在は宇宙に遍在するパラマートマそのものであることを悟った。パラマートマは、特別に彼らのためにこの世にアバターを連れてくる必要はない。神がスリ　ラーマとしてこの世に生まれたのは、宇宙的善のために、ヤグナ（供犠の火に悪い性向全てを投げ込むこと）やヤガ（聖地から聖地へ行く、犠牲的活動）を行っていた偉大な修業者達を守るためだけだった。

この世の不吉な重荷である悪漢達を減らすために、バガヴァン（バグワン）はスリ　クリシュナの姿を取り、ひねくれたカウラバ達とその残酷な集団を滅ぼした。このアバターは、ウッダバやアルジュナのような誠実な帰依者達にサダナ（霊的修業）の正しい方法を示し、正しいバクチマルガ（帰依の道）にあるヤソダと他の愛すべきゴーピカ（牛飼い女）達には祝福を与えることを意図した。これらのアバター達は、ある目的を持ち、確かな目標を自覚していた。彼らはナイミティカ　アバター（意図をもったアバター）だった。

これらのアバター達に加えて、神性で不思議なバガワット　タットヴァム（神の哲学）の経験を通して、人類に霊的目覚めを与えるために、バグワット　タットワム（神の現象）は、完全なマハトマ達の姿でこの世に永遠に存在し続ける。それは、プラーナによれば、アバドゥータ　スリ　ダッタトレヤ　スワミィである。バガヴァータムも、彼をヨガナス（ヨガの神）として褒めたたえた。ギータによれば、私達の人生は、そのようなマハプルシャ（至高の人物）の保護を求めることによって、祝福を与えられるだろう（ギータ３：３４）。それらマハトマ達によってのみ、私達はベーダ、ウパニシャッド、プラーナその他のような霊的知識の宝を手に入れた。

ウパニシャッドは、求道者達はそのようなマハトマ達に頼ることが是非とも必要であると説いている。アルジュナとウッダバはスリ　クリシュナに頼った。スリークリシュナはサンディーピニに頼った。彼らは手本を示すことで、サドグルの重要性を私達に教えている。なぜか？何故ならば、彼らは全てのサーストラ（道徳律）の真髄を教えるばかりでなく、私達がある物事を信じられないとか理解できない時、直接体験によって私達に教えるからである。ヴィスワルーパ（宇宙的姿）のビジョンを見せることに

よって、スリークリシュナはアルジュナにウパデシュ（教え）を与えたのだった。

私達は、シルディ　サイババやアカルコタ　スワミィのようなダッタ（シバ神の化身）が、帰依者達に同じような体験を授けていることを知ることができる。『グル　チャリトラ』も又、以前のダッタアバター達の特徴を描写している。バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィも、そのようなダッタアバターの一人である。彼は１９８２年８月まで、私達が身近に接することができた。

本当のことを言うと、私達はダッタの他の化身達の伝記を読まなければ、スリ　ベンカイア　スワミィの十分な霊的栄光を理解することはできないだろう。もし私達がこれらの意見を無視するならば、彼を気狂い男とか乞食、食物の施しを求めるサドゥ（托鉢行者）と思う危険に陥るだろう。この原則は、スカンダ　プラーナのグル　ギータの中に、次のように説かれている。「アートマの知識に関心ある求道者は、花から花へと蜜を集める蜂のように、様々な教師達から知識を集めねばならない」

丁度、他のダッタアバター達のように、スリ　ベンカイア　スワミィもまた、次の様な幾つかの奇跡的体験の恵みを、信奉達に与えた。

ある日、スリ　スワミィはタルプール村のエスワラ　ナイドゥの家にいた。雨の季節だった。スリ　スワミィは親指の押印に没頭していた（彼は紙に日夜親指を押し続けることがよくあった）。家主はスリ　スワミィとアキム　ベンカタ　ラミレディに、夜遅くなったので食事を食べて下さいと言った。その時、スリ　スワミィがベンカタ　ラミレディに言った。「アッヤ！マンダラルが下りてきた。枝は合わないだろう。君は直ぐ自分の村に帰りなさい」しかしその場にいた従者の一人チャラマナイドゥは、スリ　スワミィとの親密さを利用して、「今は真夜中です。こんな夜中に、あなたは彼に故郷に帰れと言うのですか？雨の降るこんな真夜中に、彼は帰ることができるでしょうか？」と言って、斧をつまんで、スワミィの方へ跳んだ。スリ　スワミィは言った。「アッボ！彼はここにいてはいけない、アッヤ」残りの詳細は、次のようにスリ　ベンカタ　ラミレディによって述べられている。

「私はスワミィの命令に反することは決して言わなかった。そして、私はその暗い真夜中に故郷に向かって出発した。私はタルプールの外れを出るまでは、全てのことが分かっていた。その後、自分がどこにいるのか、何をしようとしているのか、どのようにして『ペンネル川』を渡ったのか、どのようにして村に着いたのか分からなかった。我家に近付くと、村人達が『繁殖用牡牛』と叫ぶのを聞き、正気に返った。私は家の門の周りの

情況と牡牛に気付いた。それは不可解な体験だった」この体験は、サイリーラムルタムの中で、シルディサイによってイマンバイ　チョテカーンに与えられた体験に似ている。

同じアキム　ベンカタ　ラミレディは、更に幾つかの体験をこう説明している。「ある日スリ　スワミィはムッディゲドゥ村にやってきた。彼は私の名を変え、私をスッバラマイアと呼んで、『スッバラマイア、私と一緒に来て、タルプール村への道を私に教えなさい』と言った。皆が眠っている時、私達二人はコッケララ　グッタに着いた。彼は私にそこに座るように言った。彼はさらに、もし彼が丘の上を歩いたら、丘は柔らかくなり、仕事をするだろと言った。私はこっそりスワミィの後をついて行き、岩の後ろに隠れた。スリ　スワミィは丘を登り、岩の上に背を横たえた。彼は右足を左足に組んだ。彼は歌を唄っていた。私はこっそり這って彼が横になっている岩の下に隠れた。直ぐに、彼は私に気付き、『巨大な悪霊達のうろついているこんな時、君がこのようにやってくるのは正しいことかね？』と言った。

「私は、しくじったと感じた。直ぐに、スリ　スワミィは、『可哀相な人だ！西の方に牛の群れが見えるだろう』と言った。私は頭を西に向けた。３マイル四方の地域に、牛の群れがいた。明るい日差しがあった。男達はミルクを搾っており、女達は頭でミルクの壺を運んでいた。私はこの情景を見て、自分が天国にいるような気持ちがした。その時、私はその地域に牛と人々の他は何も見えなかった。恍惚とした気分で、私は『スワミィ、私も行って、ミルクの壺を運びます』と言った。

スワミィ：オヤボ、一方で、彼らはそれらをレパリワダに運んでおり、他方では、太陽が昇ろうとしている。君はどこへ行くつもりかね？

「それから、私は目で辺り一帯を見て、観察した。辺り一面は暗がりで、以前の光景はもう見えなかった。スリ　スワミは、『行こう、アッヤ、私達はタルプールに行って、親指の押印をしなければならない』と行った。私達２人はタルプールに行った。

「夕方まで、彼は私と一緒だった。しかし、二人は食物も水も摂らなかった。私はスリ　スワミィの命じた通り、夕方家に帰った。

「当時、スリ　スワミィはよく真夜中にぶらついた。ある日、大雨で雷が鳴り稲妻が閃いた。その暗い危険な真夜中に、スリ　スワミィは頭にパルミラ椰子の葉を載せて火から離れた。彼がどこへ行き、何をするのか見るため、私はこっそり彼の後をつけた。彼はペンネル河の洗濯場に来た。彼は衣服を脱ぎ、増水している河の土手にそれを置いた。彼は水の中に走って入った。彼は沈まなかった。彼は洪水の河の水の上を走り、あちらこ

ちらへと、水を飛ばしていた。彼は、私達には理解できない言語で独り言を言っていった。彼は両岸の間の水の上を歩いたが沈まなかった。

「暫らくして、彼は衣服を身につけ、私が立っていたパルミラ椰子の木の所に来た。彼は『こんな時間に、このように来たのはよいことかね？今は、よくない時間だ』と言って、私を棒で突いた。彼は棒を私の首に当て、私を家に押して行った。私達が我家に来ると、彼は無邪気な少年のように、囲炉裏の近くに座った。時間は４時だった。

「別の折、『私達は丘の周りを歩くべきではない』とスリ　スワミィは言った。彼は８人をペンチャラコナに連れて行った。そこで、ある人達は料理を作り、他の人達は神聖火を用意していた。スリ　スワミィは私に、『アッヤ！彼らにはあの仕事をさせておき、私達はマレンコンダに行って来よう』と言った。私達は、ペンチャラコナの前にいた場所から３マイルの所にある、マレンコンダに着いた。マリスワラと呼ばれる石リンガム（シバ神のシンボル）があった。スリ　スワミィはそのリンガムの前に立つと、私に判らない奇妙な言語で話しかけた。そこから、私達は１マイル歩き、マミラコナに着いた。そこで、スリ　スワミィは非常に狭い『ビラム』と呼ばれるトンネルに入った。私も後について入った。そのトンネルの中には、広大な茂ったマンゴー園があった。２フィートの高さの木々の下にマンゴーの果実が落ちていた。木々からは数多くの熟したマンゴーがぶら下っていた。私達は３マイルほど果実の上を歩いた。そのトンネルの終に着く前に、熊が私達を飲み込みそうな大きな口を開けて、唸りながら私達に向かってきた。その歯の長さは３インチあった。私はスリ　スワミィの後ろを歩いていた。熊を見て、私は走って木の後ろに隠れ、スリ　スワミィを見守った。スリ　スワミィは熊に近付くと、口笛を吹き、飼い犬のように熊に呼び掛けた。彼は手で熊の体を頭から尻尾までさすった。

「すぐに、熊はスリ　スワミィの足元に頭を下げると、丘の近くの穴に走り込んだ。トンネルの最後には、道があり。リンガムと２女性の石像があった。丘の天辺からは、３つの像に３つの滝が落ちていた。ちょっと前に、誰かによってその像が礼拝された形跡があった。そのため、その場はクムクムと木の葉とウコンの匂いに満ちていた。スリ　スワミィは左手に杖（ダンダ）をもち、未知の言語でその像に話しかけた。その間、私は南東隅の池に近付いた。池の近くに、２本のマンゴーの木があった。茂った枝は、マンゴーの実の房をつけ、池の上にたわんでいた。私は北側の木で手を支えて池の中を覗き込んだ。水は非常に深かった。池の底には、金貨と銀貨の山があった。やがて、非常に大きな魚が池の西側から来た。魚の唇とえらには金の輪がついていた。その頭部は象の頭の大きさと同じだっ

た。えらはドアよりも広かった。魚がえらを動かす度に水が外にあふれ出て泡立った。私は大いに恐れて、スリ　スワミィの所に走って行き、「スワミィ、池の水が溢れそうです。私達はどうやって逃げましょう？」と言った。

スワミィ：池の深さは半インチもない。

「私達は半インチの水の中を３マイル歩き、洞穴から出た。石も木々も自然の状態だった。私達はペンチャラコナに着いた。スリ　スワミィは私達にテガチャラ村を経由してクルール村に帰るよう命じた。更に彼は、自分は行ってサダイヤに会ってからクルールに帰ると言った。スリ　スワミィは丘へと登った。テガチャラ村を通ってクルールへ帰る道は、通れる只１つの最短の近道だった。しかし私達がクルールへ着いた時には、スリ　スワミィは既にペッダイヤの家の火の近くで、親指の押印を忙しく行っていた。スリ　スワミィは私を呼ぶと、『君の名は変えられた。君は不当な噂がたった。だから、すぐに家に帰りなさい』と言った。

「トゥラサンマが私にバス賃として２ルピー渡してくれた。私が家に着くと、村の皆が私の家の前に集まっていた。人々は大騒ぎしていた。彼らは私を見ると驚き不思議がった。問いただすと、牛飼い達が、私が誰かに殺され、私の死体はマットに包まれて、森の茂みの中に突っ込まれたという噂をもってきたのだった。皆は私の死体を持ち帰るため、森に行こうとしていたのだった。皆は森に行ったが、古いマットが茂みで見つかっただけだったという。

「ある日、スワミィがゴラガムディにいた時、彼は真夜中に独りで出て行こうとしていた。私は例の如く、こっそり彼の後をつけた。スリ　スワミィはナグララム地域に着くと、ペガドラジュ　グッタに行った。私は茂みの後ろに隠れた。数分後、スリ　スワミィは私の所に来ると、私を叱り、『私が何度も注意したのに、君はまだ私の後をつけようとするのかね？今は危険な時間だ。あちらを見なさい』と言った。周囲が６フィート以上もある非常に大きな蛇が、細切れにされてそこに散らばっていた。『もし神々がそのようにして下さらなかったら、私達はどうなっていたことだろう？』とスリ　スワミィは言った。私は村に戻った。スリ　スワミィは、頭に薪の小束を載せて、朝７時に村に戻ってきた」

ある時、スリ　スワミィとジャヤラマラジュがペンナバドウェル近くのアンカランマ　ポートに近付いていた。スリ　スワミィは空を指差し、「空を歩いている人々を見なさい」と言った。ジャヤマララジュは、自分は見えませんと言った。するとスリ　スワミィは彼の目に触り、もう１度見るようにと言った。ジャヤラマラジュは空を数人の巨大な人々が歩いてい

るのを見た。再びスリ　スワミィが彼の目を触ると、その光景は消えた。

マタジ　バカンマはスワミィの力を見たいと望んだ。ある日、彼女はスリ　スワミィから３０フィート離れた床に横になっていた。２０フィートの所に、彼女はスリ　ラーマとラクシュマナ（ラーマの弟）が微笑んで立っているのを見た。数分内に、スリ　クリシュナがそこに現れた。バカンマは自分の長年の願いが叶えられたので、恭しく頭を下げた。スリ　スワミィはバカンマに、誰にもそのことを話さないようにと注意した。そのため、彼女はスリ　スワミィのマハサマディまで、決してそのことを話さなかった。

同じく、ある日彼女は太陽神に祈りを捧げていた。その時、彼女は美しい体験をした。彼女は一瞬の内に他の惑星へ行った。彼女はそこでも石や岩を見付けた。

ある日、バカンマは、スリ　スワミィが４マイルの長い坂道をすべっている夢を見た。彼は３回あちらこちらへと滑り、彼女の所に来た。スワミィは口を開け、ビスワルーパ（宇宙的姿）を見せた。その内、トゥラサンマが来て、スワミィの口を彼女の手でふさいで、「アッボ！少年は何を見せようとしているの？」と言った。怒って、バカンマは彼女を押し退けた。夢は終わった。スワミィの口を手で塞いでいたトゥラサンマは、どうやらバカンマのプラクリティ（性質）が、スリ　スワミィの恵みを彼女が受けることの妨げとなっていることを、意味していたらしい。

ある日、バカンマはゴラガムディのアンジャネヤ　スワミィ寺院の中にいた時、神々の会見している素晴らしい幻影（ビジョン）を見た。ブラーマ神は玩具を作っており、それらの額に字を書いていた。一人の婦人は泥でそれら玩具の欠陥を直していた。私達はそのようなビジョンを単なる心の投影であるとして、片付けてしまうことはできない。なぜならば、モスリム聖者ヤシン　ババは、そのようなビジョンを帰依者の一人ソマイアに与えたことである。

ある日、バカンマはスリ　スワミィから離れた所に立っていた。スリ　スワミィは彼女に近くに来るようにと優しく言った。しかし、彼女が近付くと、スワミィはいなかった。彼がいた所で、彼女はスリ　クリシュナが空中の電線の上に立っているのを見た。彼はムラリ（フルート）を吹いていた。歓喜の涙で、彼女は暫らくクリシュナ神を見ていた。それから、スリ　スワミィが元の場所に座っている状態で現れた。

ある日、彼女はアンジャネヤ寺院に行った。アンジャネヤ　スワミィが来て彼女の側に立ち、「私に花輪を供えて礼拝しなさい」と明瞭な声で言った。『グル　チャリトラ』の中では、神々はサドグルの恵みを得た人達

に、自発的に現れた。

ある日、スリ　スワミィは平たい板切れをロシレディに渡し、板の事柄を読みとるように言った。しかし、彼は何も見えなかった。スリ　スワミィはもう１度彼に、よく板を見るように言った。２度目に彼が見ると、彼自身の神の像ベンカテスワラ神とラクシュミ　デビ（女神）とガナパチ神が、板切れの上にはっきり見えた。神々は、少し経つと消えてしまった。

ある時、数人の帰依者がバラナシに巡礼に行くことを提案した。彼らはバラブレディ　トゥラサンマに、一緒に行くことを要請した。彼女はスリ　スワミィにも巡礼に一緒に行くよう依頼した。スリ　スワミィは、「行こう。私達は明日出発しよう」と言った。彼は４日同じ解答をくり返した。しかし、巡礼には出発しなかった。トゥラサンマは失望し、失意の気持ちで食事も摂らずに、その夜眠った。彼女は朝８時になってもベッドから起きなかった。帰依者達が彼女を起こした。彼女は目を覚ますと、「ここはどこですか？」と言った。彼女は彼らに、夢の中で自分はバラナシに巡礼をしたと語った。彼女は事細かにそのことを説明した。しかし、帰依者達は、「どうして夢が本当の巡礼でありえようか？」と言った。１ヵ月後、帰依者の１団が巡礼から戻ってきた。トゥラサンマは、バラナシのあらゆる場所を詳しく説明し、その１団がバラナシで何をしたかも語った。彼らはびっくりし、スリ　スワミィが本当に彼女を巡礼に行かせたのだと信じた。

もし私達がこの体験の内的意味を理解しようと望むならば、私達は『スリ　グル　チャリトラ』の中の出来事を研究しなければならないだろう。

ベルル　ラマナイドゥ（ナグラベラトゥールの）と家族は、スリ　スワミィに大変帰依していた。ある夜、彼らは目をさまし、ベッドの上に座っていた。彼の息子は、スリ　スワミィが王冠とシャンク（ほら貝）とチャクラ（円盤）等を身につけて、神聖火の中に座っているビジョンを見た。大いに驚いた息子は、母親にスリ　スワミィを見るように言った。しかし、彼女は何も見えなかった。翌朝、彼女がダルシャンに行くと、スリ　スワミィは無頓着に、「奥さん！昨夜は上界の神々が降臨されて、暫らく神聖火の中に留まり、それから立ち去りました」と言った。このように、スリ　スワミィは昨夜の息子のビジョンは幻覚や想像でなかったことを確信させた。ラマナイドゥはこの確認を妻から聞いた時、非常な幸せを感じ、慈悲深いスワミィに感謝した。

スリ　スワミィは、神聖火のごく近くに横になることがよくあった。グラバイアは、スリ　スワミィの近くに眠っており、他の人達は眠り込んでいた。数人の裸のリシがスリ　スワミィの周りに座り、何かを討論してい

た。グラバイアは目をさまし、神聖火の薪を直そうとした。スリ　スワミィは即座に、「アッヤ！どうして今起きたのかね？」と言った。グラバイアは意識がなくなり、神聖火の所で倒れた。彼はリシ（聖仙）達が姿を消すまで目を覚まさなかった。

８、ダクシナ（感謝の捧げ物）

私達の中で働いている自然の力は、宇宙の中の私達の周りで働いている自然の元素に他ならない。例えば、息することは全ての生き物の中に存在する自然現象である。しかし、私達はそのことで何も特別な努力はしない。同じことは、私達の中の他の全ての生物学的活動に当てはまる。全創造物を保ち、動かす普遍的神性霊も、私達の中で常に働いている。このことを忘れて、私達の行いの原因と結果の責任を認めるのは、単なる無知でしかない。他方、それらをあるがままに受け入れて見守ることは、最も賢明な行為である。

全ての物事は神によって完成され、神は様々な姿のマハトマ達の中に自らを具現するとの実感は、真のバクティ（帰依、信仰）即ちシュラダ（堅固な信仰）を伴う敬虔な帰依と呼ばれる。主サイはこの真理を度々「アラー　マリク（神は全ての物事の所有者である）」と言って、教えている。この型のシュラダは、梵語（サンスクリット）で「ダクシャ」と言われる。行為の姿でのその思いは、私達が、サドグルと神々に捧げるダクシナである。同じ思いは、「プラダクシナ」の語によって、意味されている。スリサイとスリ　ベンカイア　スワミィは、時折、帰依者達にダクシナを要求し、受け取った。それは彼らにこの真理を悟らせるためだった。これに加えて、各帰依者の情況に応じて、彼らが要求したダクシナには、他の多くの意味と特別さがあった。私は次に、その数例を紹介する。

ある日、ＳＫ．マスタン　サヘブ（カリチェドゥ中学の校長）は、スリ　スワミィにダクシナとして２ルピーを差し出し、彼の前に平伏した。即座に、スリ　スワミィは「アッヤ！２６ルピーが彼に支払われると書いて、彼に与えなさい」と言った。従者達はそう書いた書き付けを彼に渡した。３ヵ月後、政府は彼に２６ルピーの追加昇給を認可した。最も驚くべきことは、スリ　スワミィが彼を祝福した月から、政府は昇給を認めていたことである。

同じように、ある帰依者の給料は、サイナスがその帰依者からダクシナを受け取った日から、上げられた。給料の増加分は、彼がスリサイに差し

出したダクシナの量と同じだった。スリ　スワミィは、私達が差し出した品物の価値ではなく、スリ　スワミィに対する真のバクティと愛情を重視する。傍観者達の前で見せびらかすために、もしダクシナが尊敬と真心なしに差し出されたならば、それはスワミにとって無価値であり、彼はそれを牛の糞と見做す。

曾て私（著者）は、スリ　スワミィが私を喘息の大きな苦しみから助けて下さった時、感謝のしるしとして、スリ　スワミィに４個のイドリを差し出した。私はイドリを持っていく途中、スリサイの名を唱えながら行った。その日、私はポケットに１０パイサしか持っておらず、イドリを１つだけもって行こうか、それとも店で掛け買いして４個のイドリを持って行こうか迷った。私はそう考えている内に、ナマジャパのことを忘れてしまった。私は４個のイドリを持って行った。しかし、スリ　スワミィはそれに触れようともしなかった。従者達がスリ　スワミィに、イドリに触ってから私にプラサドとして返すよう懇願した。スリ　スワミィは彼らの再三の懇願にも拘らず、イドリに手を触れなかった。彼は黙ったままだった。第１に、私は途中で絶えずナマジャパを唱えることができなかった。第２に、私は１個のイドリを差し出すのは恥ずかしいと考え、店で借金して４個のイドリを持って行った。そのため、その捧げ物はスリ　スワミィによって容認されなかった。スリサイは「私達は祝祭を祝うためや巡礼に行くために、借金すべきでない」と言った。サイのこの言葉を、私はこの出来事の時思い出した。

スリ　スワミィがカリチェドゥにいた時、私はスワミィを含めて、スリ　スワミィの一行全員にイドリを差し出そうと誓った。私は、手で粉を挽いたり料理したり等のようなイドリ作りの間じゅうずっと、休みなくナマジャパを行った。私は殆ど８０個のイドリを持って行った。

しかし乍ら、沢山用意したせいで、私は予定の時間に１０分遅れた。その時までに、スリ　スワミィはホテルからきたイドリを食べていた。私のイドリの量を見て、従者達は、スリ　スワミィは朝食を丁度済ましたところだと言って、残念がった。私は大変落胆し、「スワミィが食べなかったら、沢山のイドリも何になろうか？私の落ち度は何だろうか？なぜスリ　スワミィはこのように私を罰したのだろう？」と、自分の不運を考えながら、座っていた。私の不運を知った家の女主人が４個のイドリを皿に入れてスリ　スワミィにもって行った。従者達は「彼は朝食を済ましたばかりだから、あなたはそれを持って行ってはいけない」と言って、彼女を止めた。彼女は、「私はスワミィにイドリを食べて下さいと言うつもりはありません。スワミィにその神聖な手でイドリに触れてから、スッパラマイア

に返して下さいとお願いするつもりです」と言った。慈悲深いスワミィは、皿に手を触れるどころか、４個のイドリを全部食べて、私を祝福して下さった。彼は朝食を済ましたばかりだったのに、なぜ２度もイドリを食べたのだろうか？それは、私がイドリを作っている間中、絶えずナマジャパをしていたという、「捧げ物の背後のシュラダと愛情」のせいだった。

他の人達に対し、スリ　スワミィは、「捧げ物を受け取らなければ、声をかけない」とよく言っていた。そのような場合、金銭欲の深い人やけちん坊は、スリ　スワミィは金銭気狂いだとよく思い違いした。もし彼らが彼の無執着をよく観察したならば、スリ　スワミィの目には金銭は何の価値もないと判っただろう。彼は決して翌日まで金を隠して置かなかった。夕方までに、彼は従者達に、彼らの必要と働きに応じて金額を分配し、自分の持ち分を空にした。その上彼は、ある人達が自発的にダクシナを差し出しても、受け取らなかった。

ナグラ　ベラトゥール村のスリラマイアは、ある理由のために数日遅れて畑でラギの栽培を始めた。土が十分に湿っていなかった。そのため、彼は、ラギがうまく育たないかもしれないと心配した。そこで、彼はスリ　スワミィに、収穫のキンタル（１０キロ）毎に５０キロのラギを差し出しますと誓約した。畑は少し多くの作物を産した。彼はスリ　スワミィに約束の穀物のほんの１部だけを差し出した。そして、彼は２年間穀物の残りの支払いを怠った。ある日、彼はスリ　スワミィのダルシャンにやってきた。その時、スリ　スワミィは聞こえるように、「あのラギはあのようだった」と独り言を言った。彼は、２度３度と同じ言葉をくり返した。スリラマイアは、スリ　スワミィのその言葉は、自分の誓った事柄に関わりがあると理解した。直ちに彼はその穀物の代価に利子をつけて差し出した。

丁度サイナスのように、スリ　スワミィもまた帰依者達に要求して、彼らが忘れていた約束の金額を徴収した。丁度スリサイのように、スリ　スワミィもまた何度も要求し、少額の当然支払われるべきものを取り返し、その金額が終わった時には、それ以上１パイサも受け取らなかっ

ある日、クーリー（ある種の肉体労働者）がナイドゥペタ地区からスリ　スワミィの所に来た。彼は２ルピーを差し出し、スリ　スワミィに自分の問題の解決法を教えて下さいと頼んだ。１・２語発してから、スリ　スワミィは、もしダクシナを差し出さなかったら、この声は届かないだろうと言った。スリ　スワミィは何度も同じやり方をくり返し、彼の所持金を全て受け取った。最後に、スリ　スワミィは紙に書いた祝福を彼に与え、彼のバス代のために６ルピーを返した。

9、ムクティ　ドゥワラム（解脱の門）

死は全ての生き物に不可避である。生き物達が最後の息を引き取る時（救済の門口）に、心の中に抱いていた欲望と願望は、彼らのその後の誕生で叶えられる。こう、バガバッドギータと他のサーストラは言っている。通常、人々は生涯を世俗的な思いを抱いて過ごしている。そのため、彼らは息を引き取る時でも、その同じ思いをもつだろう。しかし、前生の功徳のせいで、ある人達はマハトマ達に頼り、マハトマを思うこととマハトマに奉仕することで全生涯を送る。当然、そのような人達は臨終の時にそのようなよい記憶を持ち、それ故、彼らは次の誕生でよい地位を得るだろう。私達がスリ　ラマナ　マハリシとスリサイの伝記を読むと、多くの生き物が、その聖なる親交により、救済即ち解脱に到達したことを知る。ここで私達は、スリ　スワミィの伝記でのそのような例を、いくつか見てみることにする。

ある日、一人の帰依者がサイの許に、彼の恵みによって占星術に熟達したいとやって来た。彼はスリサイに祝福を求めて、占星術の本を渡した。しかしサイはその本をあちこちめくると、それをバブサヘブ　ブーティに渡した。ブーティはナグプールの大富豪だった。しかし、ブーティはその本に少しも興味がなかった。それでも、それがババの祝福と共に渡されたので、恭しくページをめくった。不思議なことに、彼はそのサーストに熟達した。ブーティは、彼の友が選挙に勝つ票の数を、前以て言うことができた。それは、予言通りになった。どうやらサドグルの恵みが、これらサーストラに熟達するには不可欠であったらしい。さて、サイは占星術を価値あるサーストラと認めたのだろうか？スリサイはそのサーストラを誉めることもけなすことも決してしなかった。ある日スリサイは占星術の偉大さを誉める人に「私もあなたの占星術者達に似ている。彼らは惑星の計算をし、ある程度未来を予言することができる。しかし私は何も計算せずに、それより少し多くのことを話すことができる。それ以外に、私は何も特別な力はない」と言って、笑った。

事実、私達の聖典もまた教育をパラ（高等な）とアパラ（低い）教育に分けている。救済即ちムクティを与える教育はパラ教育と称される。最善のサダカ達は、パラ教育に頼るよう奨励される。占星術や文法等はアパラ教育と称される。それらは外向的で世俗的である。だから、それらは解脱のためには必要でない。スリ　ダッタ　スワミィは、『ダッタ　マヒマ』

の中で、占星術の重要性をこのように述べた。「サーストラの中で、占星術は人々の崇敬を得ている知識である。そのため、サダカは占星術によってダルマ的な活動をして人々を助け、金銭と名声を得ることができる。生計を得ることにより、そのような人達は解放（解脱）の道へと徐々に向かうだろう」

もし私達がサーストラを調べるならば、占星術の目的は「アンダ　ピンダ　ブラーマンダ（卵、胎児、宇宙）の間の関係を知って、ヤグナとヤガを行うのに好都合な時を決定することのみである。それゆえ、それはベーダの意味を説明するのに役立つベーダ・アンガの中の１つとなっている。数世紀後、人々は占星術の知識を用いて、運命と未来を予言することを始めた。しかしそれがそのようなことに用いられるならば、サーストラは人を只の迷妄と欺瞞の中に投げ込むだろう。それは人がサドグルの前に全てを委ねるための妨害となるだろう。人はカルマ（行為）の教義が強力であのかそれともムフルタム（吉兆の時間）の力が強力であるのかという役に立たない不確かさの餌食となるだろう。人々はそのような無駄な議論と疑問に陥るだろう。だから、誠実な求道者はこれらのサーストラに触れることなく、サドグルのみに自分の全ての注意を向け続けるべきである。私達は、スリ　スワミィの伝記の中で、非常によい手本を見ることができる。

ソムパリ　ラマナイドゥ（ナグラベラトゥール村）は占星術を勉強し、多年スリ　スワミィの奉仕をしていた。私達は、彼がそのサーストラに熟達するために、スリ　スワミィに奉仕し崇拝したのかどうかは知らない。しかし、時が経つにつれ、彼は非常に正確な未来を予言できるようになった。彼は人々の質問にも答えた。ある日、世帯主がネックレスをなくした。占星術の計算を使って、ラマナイドゥは失われたネックレスがその人の浴室の麦藁の壁の中にあると言った。家の人達が浴室の麦藁の壁を取り外してみると、壁の中にネックレスがあった。ある人が水牛を見失った時、彼は「明後日、もしあなたがあなたの村の北へ３マイルのところで、日の出を見たなら、水牛が見つかるでしょう」と言った。彼がそのようにすると、水牛が道を歩いて帰ろうとしていた。

ある日、スリ　スワミィは他の村に旅をしようとした。ラマナイドゥは、自分の健康がよくないので留まりたいとスワミィの許可を求め、留まった。２日目に、スリ　ラマナイドゥははっきりしない理由で、ゴラガムディのアシュラムで死んだ。帰依者達がスワミィにこの報せを伝えると、スリ　スワミィは彼らに、その死体をアシュラムのある場所に葬るように言った。帰依者達はそのようにした。

このサマディの側には、スリ　スワミィの従者の一人ポリレディ　ガル

のサマディがある。ポリレディは常にスリ　スワミィの教えに従い、奉仕した。スリ　スワミィが泊まった時にはいつも、彼はその区域を探して、葉野菜を集め、それを料理し、スリ　スワミィに給仕した。スリ　スワミィは、野菜のカレーを大変おいしく食べたからだった。彼はこの満足以外に、スリ　スワミィから何も望んでいなかったことが、私達には分かる。

彼の死の４０日前、スリ　スワミィは従者達に、「４０日目に、神が調査に来るだろう。その日は、私達皆は水に触れてもいけない」と言った。誰もその言葉の意味を理解できなかった。その日、スリ　スワミィはマイパドゥ村の海辺にいた。不意に、スリ　スワミィは命じた。「アッヤ！私達がゴラガムディのアシュラムに着くまでは、水にも触れてはいけない。直ぐに、出発しよう」サイクロンのために、道は被害を受けていた。その日、帰路の経路にバスは走っていなかった。彼らは歩いてネロールに着き、そこからタクシーでゴラガムディに帰った。スリ　スワミィがマイパドゥで言った丁度その日に、ポリレディはゴラガムディで死んだ。

彼の最後の儀式をどこでどのようにするかが、ゴラガムディの帰依者達の間で議論の的となた。彼らは、ポリレディの死を報せるべきスリ　スワミィの居場所を知らなかった。しかし、全知であるスワミィは、よい時にゴラガムディに帰って来た。スリ　スワミィは自分の手で、ポリレディの体への最後の儀式を行った。

スリ　スワミィはポリレディの死には大きな関心を示したが、ラマナイドゥの最後の儀式には出席しなかった。「なぜか？」との疑問は、今日でも議論の的である。ポリレディは熱心な解脱の探求者だった。彼はスリ　スワミィの奉仕の他は何も望まなかった。スリ　スワミィは自分の手で彼の体をサマディに葬った。それが、彼が解脱を得たことの証明だった。ラマナイドゥは名声と名誉を求めていて、占星術の熟達を望んだ。それでも、彼はスリ　スワミィのアシュラムの神聖な建物の中で最後の息を引きとるほどに幸運だった。だから、スリ　スワミィは帰依者達に、アシュラムの建物の中に彼のサマディを作るように言った。スリサイは、サイから何も期待することなくサイに仕えたメガのことを、「彼は私の真のバクタ（帰依者）だ」と言った。メガは埋葬地の方へある距離歩いたばかりでなく、彼自身の支払いでアンナサンタルパナ（貧者達への食事の施し）まで行った。「無私の奉仕は真のバクティである」

スリ　スワミィは、最後の数月の日夜サイナム（サイの名）を唱えた私（著者）の祖母パボル　スバンマを解脱させた。慈悲深いスワミィは、祖母の最後の時、彼のパタ　テールタ（神聖水）とウディ（聖灰）を与えた。スリ　スワミィは祖母が神聖なダヌルマサ（敬虔な月）の間に肉体を脱

ぎ捨てる手助けをした。

ある収税吏（ネロール町）が、愛情こめて飼い犬を育てた。その犬が病気になり、医者達が治せなかった時、彼は車で犬をスワミィの所に連れて行った。スリ　スワミィは犬を見、犬はスリ　スワミィを見た。そして、直ぐに犬は息を引き取った。スリ　スワミィの前で死んだその犬はきっとサドガティ（進歩）を得たに違いない。スリ　サイナスの伝記の中でも、虎が慈悲深いサイを見た後で、その肉体を捨てた。

コラクティ　ナラシンフル　ナイドゥ（ゴラガムディ）と妻は、スリ　スワミィの堅固な帰依者だった。彼らは、スリ　スワミィの言葉を大いに信じていた。ある日、スリ　スワミィはナイドゥに１年間ゴラガムディを離れて、ゴラガムディの西のどこかで生活するよう命じた。そのため、彼らはタルプールに藁葺きの家を建て、そこで幸せに生活した。もし彼がスリ　スワミィの言葉に従わなかったなら、彼は何の理由もなく殺人事件に巻き込まれていたことだろう。

１９８３年、スリ　ブジャイアの妻が癌で苦しんでいた。彼らは希望をなくした。彼らはスワミィの助けを求めた。彼らはウディとパタ　テールタを定期的に与えられた。更に彼らはスリ　スワミィの糸を妻の首に括りつけた。K．ブジャイアは夢を見た。妻は棺台に載せられ、花輪で飾られていた。妻の顔は、ビジャヤワダの女神カナカ　ドゥルガーの顔のように輝いていた。翌朝、彼女は実際に死んだ。スリ　ブジャイアと親戚達は、スワミィは彼女の命を救わなかったと思ったかもしれない。しかし、彼女の寿命が終わったから、彼女に何かをする余地はなかったのである。このことを報せるため、スリ　スワミィはブジャイアに夢を見せたのだった。

彼女が天国の輝きをもって彼の夢に現れたので、私達は彼女の霊は解脱を得たと確信できる。

１０、帰依者達の保護

私達のブラーナと聖典は、偉大なアバドゥータの姿をとり、人類を守り正しい方法で導くという、唯一の目的をもって全宇宙に遍在しているのはスリ　ダッタ　スワミィだけであると説いている。もし私達がそのようなマハトマ達の伝記を調べないならば、これらの聖者達の力がどれほど広大であるのか、知ることはできないだろう。

もし私達がそれらマハトマ達の伝記を注意深く調べるならば、少なくともスリ　ダッタ　スワミィの偉大さについて、理解することができるだろ

う。ダッタトレヤ　アムサ即ち私達の中に隠されている特質は、私達が彼らの伝記を読み、スリ　ダッタのリーラ（奇跡）を経験し享受する時、目覚めさせられ、成長させられるだろう。そうして、私達はパラマルダ（私達の目標）に段々近づくだろう。スリ　ダッタ　スワミィに近付くことになった幸運は人達はマハトマ達のダルシャンの祝福を与えられるだろう。彼らはこれあら全てのマハトマ達の中にスリ　ダッタ　スワミィのみを見るようになり、非常に早く霊魂の救済に到達するだろう。

それらマハブルーシャ（偉大な人物）が帰依者達を守る広大さについて知ることによって、私達はバクティとシュラダ（信仰）という、敬虔な態度を養うことができる。幾つかのそのような例を以下に紹介する。

当時、スリ　スワミィがペンナ　バドウェルに滞在していた時、マタジ　バカンマはスワミィの随行者達のために薪と木の葉の皿を支給していた。そして、彼女はよく木々の下に座り、深いディヤナ（瞑想）に没頭した。そのような時、彼女は空腹も喉の渇きも忘れた。慈悲深いスワミィは、「アッヤ！バカンマは食事をすることを忘れている。彼女を呼んで、食事を与えなさい」とよく言った。

ある時、バカンマは家に帰り、長らく戻って来なかった。彼女が戻ってきてスワミィの前に平伏した時、彼は言った。「私はバカンマは死んだと思った。あなたはまだ生きているのですか？」スリ　スワミの機知と優しさはそのようだった。

従者達全員が用事に出かけていた。トゥラサンマはバカンマに、自分はまだ水浴をすましていないので、スワミィに粥を給仕してほしいと言った。バカンマはスリ　スワミィに粥を給仕するような奉仕を決してしなかった。それに加えて、彼女はハリジャン（不可触民）　カーストだったので、スリ　スワミィに給仕してよいかどうか迷った。彼女は粥を取って、びくびくしながらスワミィの後ろに立った。全知のスワミィは、「来なさい、バカンマ！なぜ恐れるのですか？来て、レカ（パルミラ椰子の器）で給仕しなさい」と言った。サットプルーシャに対するシュラダと帰依心のないことが低いカーストの唯一の基本であると、スワミィは思っていたのだろう。

事実、彼の性質はそのようだった。ある日、彼女はネロール　バス停留所で眠っていた。盗人が彼女の右側のカンマ（金の耳飾り）を外そうとした。彼女はそれに気付いたが、盗人に楽に仕事をさせるため動かなかった。それから、彼女は反対に体を動かし、盗人が左側のカンマも盗れるようにした。同僚が彼女にイヤリングのことを尋ねると、彼女は「眠っている時、私と同じ貧乏な人がくすねようとしました。私は彼にそれを持って行

かせました」と言った。

ゴパラム村で、１匹の犬が羊の群れの中に入り、毎日羊を殺した。農夫はひどく怒り、ナイフで犬を殺した。その後、奇妙にも、彼の子供達皆が、犬のような声を出して死んでしまった。彼は自分の窮状をスリ　スワミィに陳情した。スリ　スワミィは、「彼は生まれてくる、彼は生まれてくる、彼は生まれてくる」と３度言って、彼に祝福を与えた。スワミィの祝福どおり、彼は３人の男児をもうけ、無事生きている。

ダラ　プライアの妻Ｓｍｔ．チンナンマは目の手術を受けた。しかし、目が痛んだ。彼女は、手術がうまく行われなかったのではないかと心配し、また視力が戻るのかどうか不安に思った。そのため、彼女は悲しみに打ち拉がれた心でスリ　スワミィに祈った。彼女の夢の中で、スリ　スワミィは、「あなたは恐れる必要はない。手術が行われていた間、私はそこであなたと一緒にいた」と言って彼女を安心させた。スリ　スワミィの恵みにより、彼女の目の痛みは消え、彼女は視力を取り戻した。彼女は６０才である。

パラム　レディとクリシュナレディはスリ　スワミィの前で、ビナーヤカ　チャトールティ（ガネーシャ神の祝祭）を祝いたいと、ゴラガムディにやってきた。彼は１キロの蒸かしたベンガル豆（スンダル）と２キロのポンガル（黒豆）飯と１キロの黒豆料理（バダ）を用意するよう命じた。

毎日、スワミィの従者は３キロ離れた隣村アニケパリからバスでビクシャをもってきた。しかし、その日、その人はバスに乗れず、時間に間に合わなかった。その時、ポンガルは用意されていた。スリ　スワミィは従者達に、彼に食物を持ってこさせるように言った。従者達は、その男はアニケパリから来ませんが、ポンガルはアシュラムで煮えていますと告げた。

スリ　スワミィ：よろしい、私に少し取りなさい。

彼らはスリ　スワミィにスンダルとバダとポンガルを葉のお皿で差し出した。スリ　スワミィは少し食べ、残りはプラサダムとするようにと言った。アニケパリにビクシャを貰いに行った男は、午後４時まで現れなかった。そのため、クリシュナレディによって用意されたプラサダムだけが、集まった２５人に給仕された。しかも、多量が残った。これは、キリストが７匹の魚を７千人の人に配ったが、なお７つの籠に魚が残った出来事と似通っている。

カリチェドゥ村のナラサレディの妻エスワランマは、スリ　スワミィの偉大な帰依者だった。ある日、従者達は彼女に、スリ　スワミィから離れて座るようにと、注意した。彼女は傷つき、心の中で「スワミィ！あなた

は、蓮華の御足に触れないままで私を行かせようとしています」と祈った。すぐに、慈悲深いスワミィは彼女に「マザー！私の足の刺をとってくれませんか？」と言った。そう言うと、彼は足を彼女の方に伸ばした。彼女は暫く棘を探したが、棘は見つからなかった。彼女がそのことをスリ　スワミィに話すと、スリ　スワミィは「棘はない？オーケー、心配ない」と言った。彼は足を元に戻した。こうして、彼は彼女が彼の蓮華の御足に触れたいという望みを、従者達の気持ちを傷つけることなく、叶えたのだった。

このエスワランマは小さな麦藁葺きの家を建てた。彼女は自分がその家に入る前に、スリ　スワミィの蓮華の御足によって清めてほしいと望んだ。彼女は、そのためにスリ　スワミィを招待した。スリ　スワミィは承知したが、３ヵ月間はその区域に来なかった。そのため、彼女は新しい家に鍵をかけ、品物全てを寝棚に入れ、自分はその下で生活した。皆は彼女の気狂いじみた振る舞いと考え方を笑った。彼女の心は村人達の言葉にも動揺しなかった。３ヵ月後、彼女はスリ　スワミィが隣村にいるという情報を得た。彼女は自分の不便さをスリ　スワミィに説明し、家を開けて下さいと懇願した。スリ　スワミィは言った。「明日の日の出が大変縁起がよい。私は来る。あなたは明日家を暖める儀式を行うことができる」

エスワランマ：スワミィ、この短い期間では、私は式のために必要な食料雑貨を手に入れることができません。だから、どうか私にもう少し時間を下さい」

スリ　スワミィ：「全ての物が揃うでしょう。行きなさい」とスリ　スワミィは請け合った。

その夜、彼女は家を洗い、床等をこすってきれいにしていた。彼女の旧い馴染みの人達が、米と少しのお金を、彼女から借りていた返済として持ってきた。こうして、彼女は儀式のために借金をせずに難問を解決することができた。スリ　スワミィは従者達を連れて一晩中放浪し、午前３時にエスワランマの家に到着した。スリ　スワミィは自分の手で樟脳で竈に火を点け、その新しい家に彼の神聖な火を灯した。彼女は米とカレー１０キロの料理を作った。彼女の友は彼女に葉の皿２百枚を贈った。彼女はそれらを式のために使った。スリ　スワミィが彼女の家を開く式をしているとの報せで、多くの帰依者が彼女の家に来た。２百枚の皿がなくなった時、それ以上客人は来ず米もなかった。彼女はポンガルをスワミィからプラサドとして受け取った。１０キロの米で村人２百人に食べさせることが可能だろうか？それは、帰依者達に対するスワミィの奇跡だった。「私の家にはどんな食物の欠乏もない」は、シルディのサイナスの言葉だった。この

ことは、スリ　スワミィの場合も真実であることが証明された。少なくとも今からは、スリ　スワミィに帰依しましょう。彼は、太陽と月が存在する限りそこに、またどこにでもいるのであるから。

トゥピリ　ピチェンマは、帰依心からスリ　スワミィの衣服を洗うことにしていた。彼女はスリ　スワミィに自分の水牛のミルクを差し出した。ある日、彼女は夫の闘鶏と飲酒と子供達の病弱にひどく落胆していた。トゥラサンマの助言で、彼女は家族をアシュラムに近い所に引っ越そうと思った。ある人が、その幽霊の出る場所に家を建てるのは止めた方がよいと言った。彼女がその家の場所のことをスリ　スワミィに相談すると、彼は簡単に、「政府があなたに金を与え、あなたは家を建てるだろう」と言った。しかし、彼はその家が住むのによいか悪いかは言わなかった。数日内に、政府が彼女にサイクロン救済基金の金を与えた。そのため彼女は、その幽霊の出る場所に家を建てることができた。彼女は、もしスリ　スワミィがその蓮華の御足でその家を清めて下さるなら、あらゆることがうまく行くと思った。彼女はスリ　スワミィを彼女の家に招待した。しかし従者達は、もし自分達がスワミィを彼女の家に連れて行くならば、ゴラガムディの全ての人がスリ　スワミィを自分達の家に連れてきてほしいと強要するだろうと思った。そのため、彼らは延期しようとした。他にとるべき方法もなかったので、彼女は全てのことをスリ　スワミィに委ねて、新しい家に入った。

ある日、スリ　スワミィは従者達に再三再四、新しい家に連れて行くよう要求した。彼らは彼をアンジャネヤ寺院に連れて行った。

スワミィ：ここではない。私は新しい家に行きたい。その時、Ｓｍｔ．ピチェンマは洗濯のため村の貯水池にいた。彼女は帰宅して、スリ　スワミィが家にいたので、びっくりした。彼女は、自分の目が信じられなかった。「神はバクティ（帰依心）のバンディ（囚人）なのである」

ある時、スリ　スワミィはマイパドへ海水浴に行った。コラクティ　ブジャイアはスワミィ一行が出発してから２時間後に、その報せを受け取った。マイパドの海岸でスリ　スワミィに会いたいと願い、彼はマイパドへ向かった。海岸で、スリ　スワミィは水浴を終え、砂の上に座っていた。スワミィは従者達の再三の要望にも拘らず、家に帰ろうとしなかった。やがて、ブジャイアが到着して皆に合流し、水浴を終えた。直ちに、スリ　スワミィは帰路についた。その時、帰依者達は、スリ　スワミィがスリ　ブジャイアの旅のことを知っていたことが分かった。そのため、スワミィは動かなかったのだった。

トゥピリ　ピチェンマの娘ウママヘシュワリは、アニケパリ村で結婚式

を行った。ある理由で、夫はその娘を好かず、自分が２度目の結婚ができるよう、離婚手続きの書類を受け取るよう彼女に無理強いした。彼は村の年長者達の前で取り調べまでした。とうとう、落胆した彼女はその書類に署名した。

その時から、彼女はマンガリヤムを外し、アシュラムでスリ　スワミィに奉仕することにした。彼女は自分の全身全霊で１年間スリ　スワミィに仕えた。人々が彼女に２度目の結婚をするように言うと、彼女は怒り、「取り憑かれた」女性のように大声をあげた。彼らがマンガリヤムを首に着けるように言った時、彼女は「夫は亡くなりました」と言うのだった。

トゥラサンマは自分達夫婦の問題解決のためにマンガリヤムをスリ　スワミィのベッドの下に入れておいた。慈悲深いスワミィは、彼女らの悪いかルマ的関係をゼロにし、彼女達夫婦の間に素晴らしい変容を齎らした。少ししてから、彼女の夫は仲介者を通じて、もし彼女が自分の許に帰ってくるなら、彼女と一緒に生きて行きたいという伝言を彼女に伝えた。彼女は、自分は夫が来て自分を連れて帰るなら、夫の許に帰りましょうと返事した。ある晴れた夜、彼女はマンガリヤムをもって、村の外れで待っている夫に会った。今や、彼女達は２人の子があり全く幸せである。人々のいかなる形の心にも、不思議な変容を齎らすのは、サドグルにのみ可能である。

ネロールの食料共同組合のスリ　ジャヤチャンドラ　レディは、スリ　スワミィとの最初の出会いをこう語った。「私はアチャリヤ　スリ　E. バラドワジャ師による『スリ　サイリーラムルタム』の中でスリ　スワミィについて読みました。しかし、スリ　スワミィには会いませんでした。私は彼のマハサマディの年月日も知りませんでした。丁度その日の前夜、私は不思議な夢を見ました。私はネロールのガンジー彫像センターでかなり年配の男に会いました。男は私に、『あなたはゴラガムディに住んでるネロール地域のアバドゥータを見たことがありますか？もし見ていないなら、直ぐにネロールへ行きなさい。そこでは、軍人達があなたを案内するでしょう』と言いました。同じ夢で、私はそのアバドゥータに会いに行こうとしていました。私はベダヤプラム近くの軍隊の天幕で衛兵に会いました。衛兵は私にゴラガムディへの道を教えてくれました。私は歩き続けました。私は、一方の手に縄切れと杖を持ち、他方の手に、土製の壺をもった背の高い痩せた男に会いました。ぼろ服や他の品物は小さな束にされ首の周りに花輪のようにぶら下っていました。私は彼をスリ　スワミィだと思い、すぐその道路上で彼の前に平伏しました。夢は消えました。

「翌朝、友人達が、ゴラガムディのスリ　ベンカイア　スワミィのマン

ダララダナ（４０日間の礼拝）のために行こうと誘いました。私は彼らと一緒にゴラガムディを訪問し、神聖火とスリ　スワミィのサマディを礼拝しました。これぱかりでなく、そこで私は敬愛するグル、アチャリヤ　バラドワジャ　ガルに会うことができました。こうして、スリ　スワミィはその囲いの中にもう一匹の羊（私）を入れたのです」

ある日、スリ　スワミィはペンナル川の対岸上にいた。その情報を聞いて、バカンマはスワミィに会おうと急いだ。友人達は、川が洪水で深くなっているから渡らないよう彼女を説得した。彼女は川を渡ってスリ　スワミィに会うことができず、泣きだした。ついに、彼女はダルシャンを受けたいとの強い願望から家を出た。彼女が川に足を踏み入れた時、水は６インチ程の深さもなかった。彼女は、「何だ、あの人達は嘘を言ったのだ」と思った。しかし、彼女がスリ　スワミィの許に着いた時、彼女の友人達皆は驚いて、「どうやってあなたは川を渡れたのですか？」と尋ねた。その時、彼女は、川は本当に洪水で溢れていたのだと分かった。彼女が洪水の川を渡れたのは、スリ　スワミィの恵みがあったからだった。

サイババの伝記の中でも、私達はサイがどのようにイマム　バイ　カーンの同じような体験で、恵みを与えたかを見出すことができる。

スリ　ロシレディは非常に長くスリ　スワミィの奉仕をしてきた。ある日、不意にスリ　スワミィはロシレディに、急いで彼の３男の名を紙に書いて自分に渡すように言った。スワミィはその紙を太ももの下に入れて真っすぐ座った。ロシレディは、スリ　スワミィは大きな危険から息子を守っているのだと思った。しかし、彼は詳しいことは判らなかった。

３日後、誰も招かないのに、彼の息子がスワミィの慈悲に感謝のプラナムを捧げるため、スリ　スワミィの許にやってきた。彼は驚くべき体験を話した。「私の去勢牛の荷車はマンゴーを積んで、ガート（川への階段）道路を進んでいました。何かの理由で、牛達が乱れ、くびきが押し除けられました。荷車は私がどんなに止めようとしても坂を転がって行きました。荷車と牛と私は４０フィートの深さの谷に落ち込みました。私は死を覚悟しました。しかし、全く驚いたことに、荷車も牛達も私も、少しの損傷もありませんでした。私はスリ　スワミィの恵みに感謝を表すために、ここに来ました」

スリ　スワミィは、丁度事故の時に３男の名を書くよう急がせた。これはスリ　スワミィが遍在、全能、全知であることの、疑問の余地のない証明である。

チェロパリ村のクチ　エスワランマはこのように述べている。「午後９時に、私はスリ　スワミィに差し上げるために、蒸かした緑のひよこ豆を

もって行きました。でも、その時までにスリ　スワミィの他は皆眠っており、従者のラマイアはうとうとしていました。私は遅く来過ぎたことを残念に思いました。その時、スリ　スワミィはラマナイアに手を伸ばして、蒸かした豆が欲しいとおっしゃいました」

ラマナイア：今頃、どうしてそんな豆が手に入るでしょうか？朝、食べましょう。

スリ　スワミィ：いや、私は今それがほしい。

エスワランマはこの言葉を聞いて、ラマナイアに自分が持ってきた蒸かした豆を差し上げたいと願い出た。

この出来事は、スリサイがポンガルを直ぐに出すようにと言った時の同じような事情を、私達に思い起こさせる。

始めに、私達はチェルロパリのセシャイア　ナイドゥが、電気ショックの危険から、スリ　スワミィによって救われたことを見た。

ここでのスリ　スワミィの重要な様相は、彼は非常に正確に将来を予言できるばかりでなく、帰依者達が救助を祈らないのに、彼らの危険を逸らせることができることである。更に、帰依者達が注目すべきスリ　スワミィのもう１つの特徴は、彼が帰依者達の将来を知るためにエカトラを演奏する必要はないことである。彼は宇宙のあらゆる生き物の未来と過去を、いつでも予言し且つ言い当てることができる。同時に、彼は２つの世界の両方で生きることができる。アチャリヤ　パラドワジャの言葉では、「そのようなマハトマ達はいつもドアの通路の途中（敷居）に立って、家の内と外の両方を見ている。しかし、私達はどんな時でも、家の内側か外側に立って、ドアの通路の途中には決して立たない」となる。

スリ　ベンカイア　スワミィは自らの真の正体を隠した、この世の名役者だった。ある帰依者達には、彼は暫くエカトラを弾き、１言か２言発した。しかし、別の時には、彼は数時間もエカトラを弾き続け、最後に、「言葉を得られなかった」と言った。ある時には、彼は男を見るや否や、その男の人のあらゆることを口にした。別の折には、彼はベッドで眠りヨガに入っていたのに、真っすぐ座り、訪問者達に必要なことを書き取らせ、再びヨガの眠りを続けた。これら全ての例から、私達は、スワミィは私達の彼に対する信仰に応じて応対したと推測できる。彼の真の正体は、私達の体験から推し量ることは不可能だった。もし私達が丁度アチャリヤ　パラドワジャのように、「チャイタニヤ（意識）」を彼の「チャイタニヤ」の極近くに合わせることができるならば、その時こそ、私達はスリ　スワミィのことを少しは推し量ることができる。サダナ（霊性修業）とプニヤ（功徳）なしには、スリ　スワミィを十分理解することは不可能である。

ある日、バリガラ　ナガイアはスリ　スワミィに尋ねた。「スワミィ！どうしたら私達は雨を降らせることができますか？人々は海が高まっていると言っています。それはどうしたことでしょうか？」

スワミィ：、もし私達が上の神々に尋ねるならば、神々は話してくれるでしょう。

ナガイア：あなた以外の神とは何者ですか、スワミィ？

スワミィ：私達に雨を与えるのは１０のエンジンではないですか？もし私達がそれらの１つを始動させたなら、世界は引っ繰り返るでしょう。だから、私達は苦心してその出力を５０％に押さえているのです。

ナガイアはそのようなエンジンを見たいと切望した。スワミィはナガイアに、少しの間眠りなさいと言った。しかし、ナガイアはそうすることを拒んだ。スリ　スワミィは、もし君が暫く横になるなら、それでよいと言った。

スリ　スワミィの勧めを断れず、彼は暫く横になった。その時、彼はスリ　スワミィの恵みによって美しいビジョン（夢）を見た。ある丘の上に巨大なエンジンが１０あった。各々は高さ５０フィート、長さ３０フィートで直径６フィートのパイプが取り付けてあった。１台が動いていた。どしゃぶりの雨がそれから吹き出していた。そこの労働者達はナガイアに、「アッヤ、ここに、５００ルピーがあなたの名で登録されており、５０ルピーが私達の給料であると記録されている」と話した。

ナガイア：なぜそうなのですか？１日中働いている人達にはたった５０ルピーしか支払われず、全く働かない私には５００ルピーなのですか？どうして彼らはそのように記録できるのですか？

労働者達：なぜならば、あなたは作業機械を所有しており、それらのメカニズムの知識をもっています。だから、彼らはこのように書いたのです。

ビジョンは消えた。彼は目を覚まし、スワミィの所に行った。

スワミィ：彼らは私達の働き手です。

この言葉でスリ　スワミィは、ビジョンがナガイアの脳の錯覚ではなく、彼自身が与えた神聖なビジョンであったことを報せたのだった。

カンマンパドゥ村のＫ．ライタンマは、結婚して４年たっても、子供がなった。彼女は精神的にひどく苦しんだ。医者の注射も薬も、効果はなかった。遂に、彼女はスリ　スワミィの恵みに頼った。彼女が説明しないのに、スリ　スワミィは、「アッヤ！彼女は病気になった。それは治る。グドゥールのカラナムの息子が亡くなった。私は彼を彼女の子宮に入れよう」と言った。スリ　スワミィは書きつけと糸と、親指の押印のある紙を彼

女に与えた。彼女は薬を使わずに健康になり、その後１年内に男児をもうけた。今日でも、彼女はそのことを感謝して、スリ　スワミィのサマディに来て、礼拝を捧げている。

ある日、ロシレディは毒虫に刺された。彼の足は腫れ、赤くなった。痛くて歩けなかった。彼は「おー、父よ！あなたの他に何の支えがあるでしょうか？」と言いながら、砂で腫れた足をこすり、川で洗った。川で洗ってから、彼はスリ　スワミィの奉仕に行った。夕方には、彼の足は痛みが消え、よくなっていた。その夜、スリ　スワミィは、「もし君が洗い場（川）を見たら、分かるだろう」と言った。この言葉で、スリ　スワミィはロシレディに、帰依者達が願わなくとも救いにくる、全知全能の普遍霊であることを確信させた。その短い言葉で、スワミィは、自分が川での彼の祈願を聞いており、彼の痛む状態を見守っていたことを、報せたのである。スリ　スワミィは更に、自分が即座に病気を治すことができることを示したのだった。

プサラ　メーライアは現在バンガロールで働いている。彼の妻はスリ　スワミィの最初のアラダナ（礼拝）にやってきた。スリ　スワミィの毎日のプージャ（礼拝）には順序があった。その順序に従って、帰依者達は毎月アシュラムにダクシナを送ることを約束した。そのため、彼女も毎月１０ルピー送ると約束し、その登録簿に名を書いた。彼女はスワミィに祈った。「スワミィ！私は夫に許しを受けないで、毎月１０ルピーを払いますと約束しました。どうか、夫がこれに同意し、その金額をあなた様に送るようして下さい」彼女が夫にそのことを話すと、夫はもしスワミィ自身が彼に求めたなら、その金額を出すと言った。

ある日、夫の夢で、スリ　スワミィが物乞い袋をもって彼の所に来て、施しを求めた。彼は、「私は何を差し上げればよいのでしょうか、スワミィ？」と尋ねた。

スワミィ：あなたが持っているものを、何でも下さい。

彼はスリ　スワミィのサマディのダルシャンのために、ゴラガムディに来て、妻の約束した金額も支払った。

ラジャムペットのエラム　ラジュ　エスワララジュは、スリ　アチャリヤ　E．バラドワジャによるビディヤナガール　サイババ　マンディールの開所式の折に出版された記念品「サドグル　ダルシャン」を読んだ。その本の中に、スリ　スワミィの記事と彼の写真が載っていた。彼はスリ　スワミィに会いに、ゴラガムディに来た。彼はスリ　スワミィのパタテールタムを飲んだ時、それが非常に快く、軽い電気ショックのような感じを受け、少しの間彼は「至福」を味わった。その日から、彼は忙しい生活に

も拘らず、毎日ゴラガムディを訪問し続けた。

珍しい祝福：コラクティ　ブジャイアの妹パドマンマの結婚が決まった。スリ　スワミィはブジャイアに、その結婚式はカンチ　バラダラジャスワミィの前で祝うようにと命じた。彼らはそのための用意をし、スリスワミィにカンチでの結婚式に一緒に行って、新しい夫婦を祝福して下さいと心からお願いした。スリ　スワミィは従者達と共にその結婚式に出席した。そして、その神聖な手でアクシンタル（ウコンをまぶしたご飯）、マンガリヤム（新婦の首に着ける記念品）、タランブラル米（新婚夫婦が頭に載せるご飯）に触れ、それらを祝福した。彼は自分で１ルピー出して樟脳を買い、結婚式が行われている間、自分の傍でそれを燃やし続けた。スリ　スワミィは結婚式の一行が町を出発するまで水にも触れなかった。それが、スリ　スワミィが立ち合い祝福を与えた唯一の結婚式だった。ある日、スリ　スワミィは新婦に向って、「マザー、あなたは人生の数多くの困難にぶつかるだろうが、あなたの目を濡らす必要はない」と言った。彼女は人生で大きな困難に遭わねばならなかったが、スリ　スワミィの祝福のお陰で、それらは霧のように消え去った。

ある日、スリ　スワミィはタルプールからゴラガムディに戻ろうとしていた。途中マドラスのバス停で、彼は病院に行くことを望んだ。それは奇妙なことだった。なぜなら、彼は治療のために病院には決して行かなかったからである。それに加え、スリ　スワミィはマドラスのバス停近くにある記念病院への道を教えた。それは帰依者達には謎だった。なぜなら、スリ　スワミィはその頃健康だったからだった。彼らが病院に着くと、コラクティ　ブジャイアと病気の妹がスリ　スワミィの恵みを求めて祈っていた。スリ　スワミィは暫くそこに留まると、「アッヤ！これで、終った。さあ、ゴラガムディに帰ろう」と言った。スリ　スワミィはゴラガムディへと帰って行った。数日内に、妹は回復し、ゴラガムディに来て、スリスワミィに心からの感謝を捧げた。

ナグラベラトゥルのマレ　チェンチャンマは初めての訪問の時、スリスワミィに頼んだ。「スワミィ、どうか今生を私の最後の誕生にして下さい」

スワミィ：アッボ、彼女は「１０番目の視力」をもった人物だ。彼女にはあらゆることがうまく行くだろう。

スリ　スワミィは彼女に、彼の所で生活するように言った。しかし、彼女は家族から離れることができなかった。彼女はスワミィの許しなしに、スワミィから去って行った。その後、彼女が来た時はいつも、スリ　スワ

ミィは彼女に家に帰る許可を与えなかった。しかし、彼女はスワミィの許しなしで出て行った。

ある日、スリ　スワミィは彼女に、夢の中で神聖マントラを教えた。別の時、スリ　スワミィは巨大な輝く月の中に座って、彼女に現れ、「これは別のロカ（世界）ではないですか？」と言った。

彼女が長い間彼の奉仕に来なかったので、スリ　スワミィは彼女の心に突然の変化を起こさせた。そのため、ある日彼女は質素な衣服を着てゴラガムディにやってきた。１９８１年から、彼女はスリ　スワミィと一緒に生活した。「もしあなたが決まり通りに生活し行動するならば、あなたと私の間の距離は『ほんの３インチ』です」と、スリ　スワミィは言った。彼のマハサマディ後、彼女はスリ　スワミィのアシュラムで生活した。彼女はいつもディヤナ（瞑想）に浸っていて、他のあらゆる執着と心配事を忘れていた。

ある日、彼女はスリ　スワミィに、自分の心をまだ統制できませんと祈った。夢の中で、スワミィは「あなたが命令をきかない不従順な馬を持ったとしなさい。それを私に渡しなさい。問題は終るでしょう」このように、スリ　スワミィは今なお「スブラマルガ（全託）」の帰依者達を導いている。何のサダナもしないで、私達はそのような素早い適当な反応を、どこで得ることができるだろうか？それはスリ　スワミィの慈悲だけである。スリ　サイババもまた統制できない心を馬になぞらえた。

ナグラベラトゥールのノテティ　スリラマイアは長年スリ　スワミィの堅固な帰依者だった。彼は家族的責任の全てを息子に譲り渡し、余生をスリ　スワミィに仕えて過ごすためゴラガムディにやって来た。その前の２日間、スリ　スワミィは水も飲まずに沈黙していた。

スリラマイアはやって来ると、スリ　スワミィの前に立って、心の中で「私はあなたの恵みのお陰のみで、この世に生きています。でなければ、今までに私は灰になっていたでしょう」との思いで、プラナム（礼拝）を捧げた。すぐに、スリ　スワミィは目をあけると、笑った。見ていた皆は、スリラマイアを見てスワミィが笑った理由がわからなかったので、びっくりした。私達はその笑いの中に秘められた奇跡的力を知らない。しかし、それからずっと死ぬまで、彼はスリ　スワミィに仕えた。毎日ビクシャを集めるのが彼の務めだった。こうして、スリ　スワミィのあのちょっとした微笑が彼を堅くスリ　スワミィに結びつけ、彼に豊かなプニヤ（功徳）を与えたのだった。

パラコンダ　スッバレディは少年時代から、サドグルに仕えたいという特有の熱望をもっていた。多くの偽グル達がいるのに、どうやって本物の

グルを見分けることができるだろうか？彼は自分で珍しい方法を編み出した。食事毎に、彼は最初の一口を手に取ると、「グルル　ブラーマ　グルル　ビシュヌ（グルはブラーマ神、グルはビシュヌ神、、、）のスローカ（詩句）を唱え、心の中でサドグルの姿の遍在する霊に、その一口の食事を捧げながら祈った。彼は眠る前、サドグルが自分の願いを叶えて下さるように祈った。

ある日、スリ　ベンカイア　スワミィが夢に現れ、ペンナ　バドウェル村近くの「アナカランマ　ボツ」に来て、自分に奉仕するようにと言った。夢の指図に従って、彼はスリ　スワミィに会い、数年間仕えた。

アチャリヤ　バラドワジャの義母とその娘アナスヤンマと彼女の友人達は、スリ　スワミィの偉大さを耳にし、ダルシャンを受けたいと望んだ。彼女達はタルプール村にやって来た。しかし、その時スリ　スワミィは牛車で近道を通ってカリチェドゥに着いた。しかし、婦人達はバスを待って貴重な時間を潰さず、５キロの道を歩いて、カリチェドゥのスリ　スワミィに会った。彼女達の中で、アチャリヤ　バラドワジャの義母は６０才以上の老齢だった。しかし、全く驚いたことに、彼女も５キロの全距離を歩き通すことができた。

この間、スリ　スワミィは親指押印に取り掛からなかった。しかし、婦人達が彼の許に来たその日から、彼は再び親指押印の作業に没頭した。彼は彼女達に、素早く彼の親指の下に紙を置き続けるように言った。その作業を通して、彼女達は彼の体に触れる機会を与えられたのだった。こうして、彼女達が歩いた苦しみは報われた。彼女達のパラヤナ（読んだこと）とサトサングは祝福された。彼女達のサイナスへの帰依と『スリ　サイリーラムルタム』のパラヤナはスリ　スワミィを大いに喜ばせた。彼女達は、スリ　スワミィとサイは１つであり同じであることを信じた。

ネロールのＴ．ラマナンマはスリ　スワミィに会いたいと思ったが、機会がなかった。ある日、スリ　スワミィはネロール町の外れの平野に留まっていた。彼女の数人の友人がラマナンマに、一緒にスリ　スワミィのダルシャンに行こうと誘った。すぐに、彼女は昼食も食べないで午後１時に彼女達と出発した。「時間だから、あなたは昼食を食べてから出発するとよいのに」と、友人達は言った。

ラマナンマは、「スワミィが私に食事を下さらないことがあるでしょうか？」と、スリ　スワミィを強く信頼して言った。

友人達：スワミィの従者達は１２時には食事を済ましているでしょう。こんな変な時間に、私達はどこで食事をすることができるでしょうか？

彼女達は午後２時にスリ　スワミィの許に到着した。その日、スリ　ス

ワミィは場所を変えようとした。昼食の後、従者達は出発しましょうとスリ　スワミィに言った。しかしスリ　スワミィは、「子供達が来ようとしている。子供達がここに着いた時、もし私達が他に行っていたら、どうなるでしょうか？」と言った。やがて、ラマナンマと友人達が到着した。スリ　スワミィは彼女達皆に、紙切れに彼の祝福を書かせた。ラマナンマの番が来た時、スリ　スワミィは、「アッヤ、彼女は私達が食事を与えると堅く信じてやってきた」と言った。

従者達：食事はもうありません、スワミィ。

スワミィ：アッヤ！食事はそこにある。器を見なさい。

その時まで、従者達は器を洗ってなかった。彼らはスリ　スワミィの指示でからの容器をぬぐいとった。２人分のご飯があった。こうして、ラマナンマは昼食を済まし、友人達皆はプラサドとして少し食べたのだった。

ある時、スリ　スワミィは言った。「これは只のベンカイアの言葉ではない」この言葉は、正にスリ　スワミィに相応しいものである。

ロシレディはスリ　スワミィの勝れた従者（信奉者）だった。彼はスリ　スワミィの命令を、少しも遅れず、疑問も疑うこともなく実行した。ある日、スリ　スワミィは言った。「アッヤ、あなたの村に帰り、ライム樹を植えて、帰って来なさい」言われた通りに、ロシレディは村に帰り、ライム樹を植えた。しかし、妻と子供達はその仕事に反対した。「もしあなたが木を植えて、スリ　スワミィの所に行ってしまうなら、誰がそれの世話をし、水をやったり柵をするでしょうか？だから、ライム樹を植える計画は止めて下さい」

しかし、グルの言葉に不退転の信仰をもつロシレディは、借金をしてその仕事をやり遂げ、意気揚揚とスリ　スワミィの許に戻った。しかし、数日して、彼の妻と子供達がスリ　スワミィの許に来て、ライム畑は自分達には耐えられない程の重荷だと苦情を訴えた。スリ　スワミィは妻達を慰め、「マザー！『アンマニ』がその果樹園を守っています。それは価値ある１ラーク半ルピーの財産です。あなたは、その果樹園で生活し、その地区を『シリメラ』と名付けなさい」と言った。しかし、ともかく、彼女達は、不請不請、その果樹園を世話した。しかし、スリ　スワミィの恵みにより、それは地区の最良の果樹園となった。毎年、１度の収穫で１．５ラークルピーを齎らした。

ゴラガムディのマンダラ　ベンカイアはスリ　スワミィと親密な間柄でなかった。１９５６年のある朝、スリ　スワミィは道で彼に会うと、話があるので彼の所に来るようにと言った。彼が行くと、スリ　スワミィは誰かの家に出掛けようとしていた。彼は黙ってスリ　スワミィについて行っ

た。スリ　スワミィはどこの家にも行かないで、ベンカイアの家に来た。スリ　スワミィは彼の家の周囲全体を見て、「ここには、注意するものは何もない。全ては良好です。あなたは白い家を建てるとよい」と言った。スリ　スワミィは地面に線を引いて、「これが家の境界である」と言った。スリ　スワミィは藁葺きの家に入ると、家の北東隅に小さな穴をあけ、少しミルクを持ってくるよう彼に求めた。ミルクを渡すと、スワミィはそれを穴に注ぎこんだ。ミルクは穴から溢れて北東へと流れた。スリ　スワミィは、「これでよい。これでよい。これでよい。ここに何がありますか？全てはよい」と言った。ベンカイアの依頼で、スリ　スワミィはその日彼の家で昼食を食べた。

ベンカイアはこう言っている。「本当に、その頃私は日給稼ぎ人でした。私は土地は持っていませんでした。しかし、スリ　スワミィの恵みにより、やがて土地を購入し、プッカ　ビルディング（白い家）を建てました。ここでの奇跡は、その日スリ　スワミィによって引かれた線のところまで、設計者が家の計画を決めたことです」現在、彼はその村の最も裕福な人達の一人である。彼はこう言っている。「これは全てスリ　スワミィの恵みのお陰であり、私の運や幸運ではありません」

彼のバクタ達に恵みを与える、もう１つの更に興味深い方法を、ここに紹介する。デブダイアはチラカラマリ村の非常に貧しい人だった。しかし、彼は偉大なバクタ（帰依者）であり博愛主義者だった。スリ　スワミィが彼の村を訪問した時はいつも、彼は、スリ　スワミィの随行者全部にもてなしを行った。スリ　スワミィは彼のダルマ的な振る舞いを大変喜んだ。スリ　スワミィはそのような寛大でダルマ的な人達が裕福であるならば、それは非常にこの世に有益であると思っていたようである。

ある日、スリ　スワミィは彼にラギの粥を用意するように言った。スワミィは粥を新しい壺に入れて蓋をし、彼の家の北東隅の３フィートの深さにそれを埋めた。その日から、彼は段々金持ちになって行き、彼の寛大さと博愛主義は、名高いものとなった。彼は今日でも裕福であると言われている。

スッバラオ（ゴラガムディのカラナム〔収税人〕）の息子はスリ　スワミィのよい帰依者だった。彼はスリ　スワミィに中間試験会場の入場券を渡し、祝福して下さいと願った。スリ　スワミィは彼を祝福し、彼は試験に合格すると保証した。彼は更にそのことでメモを与えた。その学生は喜んだ。しかし、新聞に結果が公表された時、彼の番号は見つからなかった。彼の母親はスリ　スワミィに、「スワミィ！あなたは息子は中間試験に合格すると保証しました。彼の番号は新聞にありません」と訴えた。

11、スリ　スワミィを信じない人達

今まで私達は、スリスワミィを信じ、その指示に従った人達の経験を見てきた。しかし今度は、私達はスリ　スワミィを信じず、彼の指示にも従わず、大事なものを失った人達の経験を見てみよう。

ゴラガムディのゴダティ　セシャイアは病気がちで苦しんでいた。スリ　スワミィは言った。「グンタカラガラ（植物）の根の外側を取り、それを潰して小さな丸薬を作り、それを飲みなさい。あなたは元気になるでしょう」彼は丸薬を作ったが、飲んでいる時に心の中で「これらの丸薬で治るのだろうか？」と疑ったが、外見上は飲んだ。翌朝、彼がスリ　スワミィのダルシャンに来ると、スリ　スワミィは、「アッヤ、あの丸薬では治らないから、あなたはネロールの人から薬を貰った方がよい」と言った。全知のスワミィは、宇宙のあらゆる生き物の気持ちを知っていた。

ナグラベラトゥールのベルル　スブラマニヤム　ナイドゥは、こう書いている。「妻の健康がよくなかった。私は医者の治療に大いに苛立った。私は自分の苦況をスリ　スワミィの前に差し出した。スリ　スワミィはこう言った。『あなたはネロールのランガナヤクル　スワミィのプラサドを４分の１ルピーで３日間購入し、妻に食べさせなさい』私はこのやり方が気に入らず、心から大変失望した。あらゆる生き物の気持ちを知っている全知のスワミィは、３度そう言った。更に彼は、『もしあなたが妻にプラサドを食べさせないなら、彼女は２ヵ月間ベッドに寝ていなければならないだろう』と言った。

「スリ　スワミィの親切な助言にも拘らず、私は１度だけプラサドを買って、妻に与えた。私は他の２度は無視した。２ヵ月後、妻は病気になり、マドラスの病院に２ヵ月間いた。医者の治療と大金にも拘らず、妻の健康はよくならなかった」

Ｖ．ラマムルティは次のように、彼の兄の息子の経験を伝えている。最初の３度、彼は女児をもった。４度目の出産の前に、夫妻はスリ　スワミィの許に行き、せめて４度目は男の子に恵まれますよう、祝福して下さいと願った。スリ　スワミィはこう命じた。「あなた達は、もしどこかの寺院で３日間、真夜中に３度プラダクシナをするなら、男の子を授かるだろう」彼らは、真夜中にそれをするのは難しいと思った。それに加えて、彼らはもう９ヵ月だから、胎児の性はもう決まっていると考えた。そのため、彼らはスリ　スワミィの助言に従わなかった。その後、４番目の子も女児だった。彼らがシュラダ（信仰心）をもっていなければ、たとえ神が恵

スワミィ：いや！いや！彼は試験に合格している。

スリ　スワミィは確信のある声で答えた。試験の名簿によると、彼は合格していた。「スリ　スワミィの言葉は何と間違いのないことか！」

１９８２年、カンナバラン　ラジャイアは心臓の弱さと動悸に苦しんだ。彼は自分の窮状を家のスリ　スワミィの写真に訴えた。翌朝、彼はネロールへ行った。医者は彼に注射を打った。彼が家に帰るまでに、注射は副作用を起こした。家族達は彼をスリ　スワミィの許につれて行き、スワミィは彼の体に「ウディ（聖灰）」を付け、少量を口から飲ませた。すぐに、彼らは彼をタクシーでネロールの州立病院につれて行った。

車の前の４０フィート離れたところを、スリ　スワミィは土製の壺と杖をもって進んでいた。彼はラジャイアには見えたが、他の誰にも見えなかった。しかし、ラジャイアは友人達にあそこのスリ　スワミィのところに行きたいと頼んだ。友人達は、彼が注射のせいで精神錯乱しているのだと思った。医者は彼に薬を飲ませ注射をして、「あなたは大変幸運だ。私は、１時間前に帰宅する筈だったのに、あれこれ考え事をしていてここに座っていました。神が私をここに座らせたのです」と言った。

ティルパティのベンカタ　ムニレディは、１９８１年に友人が体験した非常に風変わりな出来事を報告している。「私の友人は、チフスでチトールの州立病院に入院しました。彼は、１８日間固形食を与えられませんでした。医者は望みを捨て、彼に輸血のために、ロヤベルールのＣ．Ｍ．病院に行くように求めました。彼は貧しいので、そのような高価な治療のお金はありませんでした。彼は悲しみに打ち拉がれました。落胆して、彼は友人達から聞いたスリ　ベンカイア　スワミィのことを思い出しました。彼は内心で、自分の窮状をスリ　スワミィに涙ながらに訴えました。その翌朝、スリ　ベンカイア　スワミィは彼の寝台の傍に肉体的に現れ、『あなたは心配しなくてよい。あなたは３日でよくなる』と言うと姿を消しました。次の瞬間、彼の全ての苦しみはなくなり、途方もない元気が湧いてきました。幸福な気持ちで彼は医者の許可を受けずに病院を出て、１８キロの道を歩いて村に帰りました。その後、彼は何の治療も受けずに健康に恵まれました。１９８１年に彼はゴラガムディのスリ　スワミィを訪ね、人の姿でこの世に生きている神に、心からの感謝を捧げました」

これは珍しい経験である。なぜなら、スリ　スワミィはゴラガムディに肉体でいながら、肉体的ダルシャンを授けたからである。そのような経験は、スリ　スワミィが血と肉を持っていた間は、報告されなかった。

みを授けても、それは無駄である。

スリ　スワミィは、バカンマのために紙に書かせた。その中で、彼はこう言った。「バカンマは９９のドアを通らねばならない」これを聞いて、バカンマは気落ちし、悲しみに打ち拉がれた。彼女は涙を流してスリ　スワミィの足元にくずおれ、「スワミィ！もしあなたが私を嫌いでしたら、森の中にムスティ（毒草）として投げ捨てて下さい。でも、私は人間の姿で生まれ変わりたくありません」と哀願した。彼女は２時間、スリ　スワミィの許を動かなかった。その間、彼女はスリ　スワミィの足を涙で濡らした。慈悲深いスワミィは言った。「彼女は再び生まれないだろう。これを『神の約束』であると書きなさい」彼は彼女にそう書いた紙切れを与えた。

ある日、スリ　スワミィは、「バカンマは９つの王冠を得た」と言って、紙に書かせた。それは、９つのバクティがバカンマの身に着くことを意味していた。

ベルル　スブラマニヤムはスリ　スワミィについてティルバルールに行った。そこで、スリ　スワミィはある場所に立ち、手の平を岩に当てて、調べていた。暫く後、彼は１ルピーコインを小さな棒で別にした。スリ　スワミィはスブラマニヤムを呼ぶと、そのコインを渡し、その１ルピーコインで神に樟脳を燃やすよう求めた。しかし、ある理由で、彼はその命令を実行しなかった。彼はそのコインをポケットに入れると、寺院に行き、その１ルピーをトゥラサンマが樟脳と線香を購入するために使った。その夕、スリ　スワミィはスブラマニヤムに、あの１ルピーで神に樟脳を燃やしたかどうか尋ねた。彼は、樟脳を燃やしたと嘘を言った。

ある夜の彼の夢で巨大な樟脳の玉が燃えており、彼はその巨大な炎を見て恐ろしくて目を覚まし、それはスリ　スワミィに嘘をついたせいだと思った。直ちに、彼はティルバルールに行き、樟脳を燃やし、自分の愚かさに対し、許しを乞うた。

ある日、スリ　スワミィは言った。「何も食べずに５日間生きられる人はいるだろうか？」ロシシレディが言った。「なぜ私達は他の人を探す必要があるでしょうか。私が断食をしましょう」彼は水だけをとって約束を守った。その日からずっと、彼は月曜日と土曜日は、完全な断食を行い続けた。そして、他の日には、昼食に最少の食事をとった。

１２、数々の生涯の後での記憶

人はパラタットワ（絶対原理）の本質的部分である。しかし、無知のせいで、人は自分を「肉体」であり、それに関わる責任ある人達は「両親」である、と思っている。人はそのような誤った考えのごった混ぜである。肉欲、貪欲、怒り、嫉妬、高慢等の扇動によって、人は非常に多くの良いことと悪いことをするだろう。これらの行為の結果を経験するために、人は、無知のまま数多くの誕生をするだろう。以前の誕生の功徳により、多数の中の極少数の人だけが、サトプルシャ（聖者）との交際に恵まれる。その交際の力の助けにより、その人達の中に識別力と冷静さが目覚め、自らの努力によって、彼らもまたサトプルシャになる。

人類に恵みを与えるためにこの世にあるダッタ神の霊は、そのようなサトプルシャの姿をとり、この世の生き物達に幸福を齎らす。そのようなサトプルシャ達は、自分達の前生のことと、全ての生き物のカルマの結果に明確に気付いている。私達は多くのサトプルシャの伝記でこのことに気付く。ここでは、帰依者達の前世に関してスリ　スワミィが全知であったことの数例を紹介しよう。

１９７９年、スリ　スワミィはイヌクルティ村にいた。ある日、体にぼろ着を纏い、手にパルミラ椰子の籠をもった女が道を歩いていた。スリ　スワミィは彼女を呼び止め、従者達に彼女に十分食事を食べさせ、サリーと１０ルピーを与えるよう命じた。従者達は言われた通りにし、スリ　スワミィに尋ねた。「彼女は何者ですか？」スリ　スワミィは言った。「アッヤ！前世で、彼女はマイソール　マハラジャ（王）の息子の嫁だった。彼女は、少しもダナ（施し）をせず、ダルマを行わなかったので、今度の誕生では、あのようになった」

ある日、スリ　スワミィはチャラマナイドゥに言った。「アッヤ！前世で、私達はベンカタギリのラジャの邸宅にいて、勉強した。私は統治者コースを、君は裁判官コースを勉強した。その頃、私達は宮殿に住んでいた。私達両人は結婚していなかった。今、私達は藁葺きの家に住んでいる。私達はいつも宮殿をもつだろうか？その後、私達はピタプラムのラジャの邸宅にいた。今、私達はナガラベラトゥールに来た」

初めてグラバイアがスリ　スワミィの奉仕のために来た時、彼は明瞭に話すことができなかった。彼はどもっていた。従者達はスリ　スワミィに、「スワミィ！どうかグラバイアに教育を授けて下さい」と頼んだ。

スワミィ：アッヤ、彼は全てのことを知っている。

ある日、彼は従者達にグラバイアのことを話した。「彼はバンガロールのサウス　ストリートの大工の家に生まれた。その後、彼はビヤサの家に生まれた。次に、彼はマイソール　マハラジャの家に生まれた。その後、私はベンカタギリのマハラジャの家に生まれ、彼（グラバイア）はベンカタギリ　マハラジャの母方の叔父の家に生まれた」

コドゥル　ベンカンマに関して、スリ　スワミィはこう言った。「あなたは『旗を備えた家』の息子の妻だった。あなたは金の装飾品を身につけ宮殿に住んでいた。あなたは空ばかり見て地上を見なかった。ある日、あなたの足が旗に触り、旗は曲がり、あなたはばったり俯せに倒れた。旗はあなたがこの世に生まれ、寡婦の生涯を送るよう呪った。もし呪いがなかったなら、あなたは結婚しなかっただろう。だが呪いのせいで、あなたは子供の頃に結婚し、夫を失った。しかし、私達はあなたを見捨てない」

マリカ　ベンカイアは２５才でスリ　スワミィの許に来て、１９８４年に最後の息を引き取るまで仕えた。神聖火に薪をくべるのが、彼の務めだった。彼は、スリ　スワミィが自分に奉仕するよう招いた只一人の人だった。

ある日、マリカ　ベンカイアはスリ　スワミィのことを偉大な魂であるとの噂を聞いた。彼はスリ　スワミィに会いにやってきた。スリ　スワミィは彼を見ると、近くに来るように言い、「アッヤ！君は私と一緒に生活しますか？」言った。

ベンカイア：いいえ、スワミィ！私はあなたの所には来ません。もし私があなたの所に来るなら、私は食物を乞いに行かねばなりません。その仕事は私にはできません。

スワミィ：アッベ！そのようなことはない。ラメスワラムでは、私は経営者で、君は事務員だった。数多くの誕生の間、私達２人は一緒にやってきた。その役割での君の全てのカルマの義務は終った。だから、私の許にきなさい。

ベンカイア：スワミィ！もしあなたが私に悪霊を追い払うマントラとと家畜の痛む足のためのマントラとカテルマントラとポレランマ　マントラとサソリと蛇のマントラを教えて下さるなら、あなたの所に来ます。

スワミィ：よろしい。もし君が私の許に来るならば、それらのマントラを教えよう。君は私達の薪を集める人達の指導者となって貰う。その人達は君の後ろについて行く」

スリ　スワミィは、そのことを紙切れに書かせ、それをベンカイアに与えた。そればかりでなく、スリ　スワミィは彼にマントラを授け、彼の発

音の誤りも正した（最後まで、スリ　ベンカイアは王冠のない王であり、彼のグル神に真のサダカの如く仕えた）。

イヌクルティ村に、先生がいた。彼の息子は脳の欠陥のせいで手足の力を失っていた。医者は治すことができず、彼らは息子をスリ　スワミィの許に連れてきた。

スワミィ：私達に何ができよう。それは前世で競争馬達を叩くことによって招いた悪いカルマである。前世で、彼は競争馬の騎手で、情け容赦なく馬を叩いた。彼はその悪いカルマを経験せねばならない。

ある日、引付けで苦しんでいるサドゥ（聖者）が祝福を求めてスリ　スワミィの許にきた。

帰依者：スワミィ！この人は敬虔な人生を送っています。どうして彼はその病気を招いたのですか？

スリ　スワミィ：前世で、彼は鳥狩猟家だった。彼は楽しみのために狩りをした。彼はそれに対して償いをすべきではないだろうか？彼は空中を転がって落ちる鳥のように、地面に倒れる。

スリ　スワミィは、カルマの法則が如何にすばらしく働くか説明した。

ナグラベラトゥールで、子供が両の親指の感覚を失った。子供はスワミィの所に連れてこられた。スリ　スワミィは言った。「彼はパチンコで鳥達を面白がってよく打った。彼はそのカルマに苦しまねばならない。

ある日、山岳部族の女性と３人の子供がひどく腹をすかしてアシュラムにやってきた。スリ　スワミィは従者達に、葉の皿で食物をたべさせるよう命じた。子供達は、母親が食べる前に、その食物をがつがつ平らげてしまった。彼らは何度も、満足するまで食事を与えられた。

スリ　スワミィ：これらだけが彼女の子供ではない。家には、まだ４人の子供がいる。前世で、彼女はベンカタギリのラジャの息子の嫁だった。彼女は７人の侍女には少しも与えず、自分だけで何でも食べていた。その７人の侍女が今彼女の７人の子供になって、彼女が十分食べるのを邪魔している。

カルマの法則の作用している状態に関して、スリ　スワミィはこう言った。「あなたは、あなたが蒔いたものを刈り取る」「あなたは与えたものを得る」

ある日、スリ　スワミィはロシレディを呼んで、言った。「アッヤ！君の最後の誕生で、君はスッバイアという名のバラモンだった。君は私に教育を授けた先生だった。今、君はダクシナ（お礼の品）として、このドバティー（衣服）と１０ルピーを受け取りなさい」そして、スリ　スワミィは、彼にドバティーとお金を渡した。

１３、至高の医師

宇宙の中の全ての物は普遍霊の姿である。丁度、私達の心が夢の世界で形をとるように、普遍霊は全ての物の形をとっている。この霊が私達の肉体の中でも働いている。私達の中でその力が完全に働いている状態が、健康の原因である。私達の前世のカルマの影響により肉体の中のその霊が不完全に働いている状態は、病気と呼ばれる。この見方が、全ての古来の医療体系によって言明されている。サトプルシャ達の苦行によって、その力は彼らの中では、非常に精力的で、強力に働く。神がそれらサトプルシャを通して偉大な物事を遂行しようと欲した時には、それは自然力に命令し、奇跡的にことを為す。私達はアカルコタ　マハラジ、サイナス（サイババ神）、スリー　ラマナの伝記と『グルチャリトラ』の中で、そのような奇跡的体験を見ることができる。同じ方法で、彼らは私達の肉体の中の自然力に影響を及ぼし、私達の不治の病を治す。そのような助けを受ける人達は、大きな献身と信仰をもってアートマグナナ（霊性の道）を歩むだろう。このように、サトプルシャは人類の向上のために働くのである。

私はこの章で、幾つかのそのような例を紹介したい。

パラマレディ　クリシュナレディは、頻繁にスリ　スワミィのダルシャンを受けに来ていた。ある日、友人の一人が彼についてスリ　スワミィの許に行った。スリ　スワミィを見て、彼は言った。「彼はどのような類のスワミィかね？彼は乞食のようだ」彼はこのような思いをもって、暫くそこに立っていた。その内、サソリに刺された人が、スリ　スワミィの許に助けを求めてきた。

スワミィ：それが何ができるだうか？それはなくなる。

私達はこの２つの言葉の裏で働く奇跡的力を知らなかった。次の瞬間、彼の痛みは全てとれ、彼はスリ　スワミィに心から感謝して、家に帰って行った。この奇跡を見ていて、上記の人は心から帰依して、スワミィの前に平伏した。彼らが立ち去ってから、スリ　スワミィは言った。「アッヤ！サソリの刺したのは、非常に痛い。恐らく、あのバクタは、どれくらい痛いか分からなかっただろう」

スリ　スワミィは「気狂いベンカイア」の呼び名をおろし、「ベンカイア　スワミィ」という尊敬すべき呼び名をもった。ドンマやネリニや足痛（牛や羊の病気）のような病気やコレラ、天然痘のような人の病気が発生すると、一人か二人が代表でスリ　スワミィの許に来て、そのことを訴えた。スリ　スワミィはその人に彼が触れて祝福した香料と糸を渡し、香料

の煙を牛に嗅がせ、糸は短く切って、牛小屋に縛り付けるように言った。次の瞬間、その村では全く牛が死ななくなった。サソリの刺したのや蛇に噛まれたのが、スリ　スワミィの簡単な言葉で治った例が数えきれない程ある。今日でも、彼のサマディは、困っているそのような人々の訴えに反応している。

サンジーバイアの息子オバイア（ナグラベラトゥール村）はスリ　スワミィの遊び友達だった。彼は非常に長い間喘息で苦しんでいた。あらゆる薬もタントラ術も効果がなかったので、彼はスリ　スワミィに自分の苦しみを話した。スリ　スワミィは掌で彼の体中をマッサージした。その日から、彼はその慢性病が生涯取り除かれた

コラクティ　ハラナトナイドゥは口からの出血で貧血になっていた。彼は逆症療法の薬を飲んだ。それは少しは効いたが、数日すると元通りになった。そのため、彼はスリ　スワミィを頼った。彼はもし病気が治ったら、スリ　スワミィにココ椰子を捧げますと誓った。どんな薬もなしで、彼の苦しみは永久になくなった。

バラプレディ　トゥラサンマはある日ナラサンマにこのように話した。：昔、男が胃痛で大いに苦しんだ。あらゆる薬も効き目がなかった。スワミィのことを聞いて、彼はスリ　スワミィの所にやって来ると数日滞在した。胃の痛みは随分軽くなったが、完全ではなかった。ある夜、彼はスリ　スワミィが神聖火の炎の天辺に座っている夢（ビジョン）を見た。その炎は高さが２５フィートあった。彼は大いに恐れて叫んだ。

翌朝、スリ　スワミィは彼に言った。「アッヤ！あなたの痛みはこれ以上増えも減りもしないだろう。だから、家に帰った方がよい」彼はそうした。

ある日、ナラサレディの牡牛が蛇に噛まれた。牛は腹部を腫らして、まぐさも水も飲まずよだれを出していた。その状態は望みが薄かった。彼らは牛を牛車でスワミィの許に連れて行った。スリ　スワミィは蛇に噛まれた傷に触れると、大きく息を吸って、吐き出した。直ぐに、牡牛は起き上がり、小便と糞をし、秣を食いはじめた。皆はスリ　スワミィのヨガの力を見てびっくりした。

ある日、スリ　スワミィはこのナラサレディ（カリチェドゥ村）に紙切れを渡した。それは、彼は「蛇に噛まれる危険」がある、しかしティルブルルのベーララガバ　スワミィが危険から救うだろう、と述べていた。暫く後、ナラサレディは籾を取るために、ガデ（土小屋）の中に入った。彼は、蛙のような滑らかな物に触った。彼は足を替えてもう１度触ったがやはり同じ物があった。彼はランタンの光で見た。恐ろしい、大きなコブラ

がいた。直ぐに、彼はガデを出て、コブラを殺した。皆は、コブラを踏み付けたのに、彼がどうして生きられたのか不思議がった。彼は、以前スリ　スワミィに与えられた紙切れが、蛇の危険をそらせる祝福を与えていることに気が付いたのだった。

バカンマは悪い虫に噛まれて苦しんだ。彼女の皮膚は、むずむずする刺激により掻き傷だらけになった。彼女は数々のマントラを唱え、タントラを試した。彼女はマントラを唱えながら籠一杯の胡椒を食べたが、効果はなかった。彼女はスリ　スワミィの噂を聞き、救いを求めた。彼女は午前１０時から午後４時まで、スリ　スワミィの前に立っていた。彼女は、彼に一言も言わなかったし、スリ　スワミィも、彼女に尋ねなかった。ついに、スリ　スワミィはチャラマナイドゥに、彼女が何を望んでいるのか尋ねさせた。彼女が口を開く前に、スリ　スワミィは言った。「バカンマは悪い虫に噛まれた。それは一度叩けばよくなるだろう」全く驚いたことに、スリ　スワミィは彼女の名を言った。彼女は初めての訪問だった。そこの誰も、彼女の名を知らなかった。スリ　スワミィは彼女の名を言い、さらに彼女の悩みのことまで話した。彼女のスワミィへの信仰は初めて会った時に、心に深く根付いた。何の薬やマントラもなしで、段々と３日で虫に噛まれた影響は消えさった。その後、彼女はスワミへの身近にいて奉仕することで、多くの時を過ごすようになった。彼女は、誕生と死の輪廻からの解脱の保証を得た２番目の女性である。

５才の子が胃に膿瘍ができて、痛みに苦しんだ。医者と民間医達の治療もタントラも効果がなかった。最後の拠り所として、彼らは幼児をスワミィの許に連れて行った。スリ　スワミィは幼児を連れて井戸まで数歩歩かせた。そして、その女児の顔と腹部を下に向けて抱き、６フィートの高さから井戸水に落とした。すぐに、彼は女児を引き上げると、床に寝させ、足で女児の腹部をやさしく押した。悪いもの全てが女児の口と鼻と肛門から出た。数日内に薬なしで、女児は健康を取り戻した。ババの伝記の中では、アブドルがカカの膿瘍の上を踏んで、悪いものが全て出た。

コラクティ　ブジャイアはある時、首の血管が背骨の下で圧迫されて、全身が痺れた。彼はマドラスの神経外科医ラマムルティの治療を受けた。しかし、完全には治らなかった。ある日、彼は自分の苦しみをスリ　スワミィに話した。スリ　スワミィは掌で彼の首を押した。その日から、彼は生涯それで苦しまなかった。

グタ　ナラサンマは長くスリ　スワミィの奉仕をしていた。時々、彼女は家に帰って親族に会いたいと望んだ。しかし、スリ　スワミィはそれを許さなかった。ある日、スリ　スワミィは彼女に、ナラサンマとトゥラサ

ンマは死んだと書いた紙切れを彼女に与えた。その時から彼女は、スリスワミィの奉仕を止めて家に帰ろうとはしなくなった。こうして、スリスワミィは、彼女の家族への束縛を切り捨てたのだった。

このナラサンマは膝の障害で大いに苦しみ、足を折ることができなかった。彼女は「ウディ」を付けたが、効果はなかった。ある日、従者らは彼女の苦痛のことをスリ　スワミィに話した。スリ　スワミィは彼らに、彼女の痛みは再び起こらないと書いた紙切れを、彼女に渡すように言った。その後、彼女は全くその障害を感じなくなった。

エスワランマ（カリチェドゥ村）は胃に膿瘍があり、妊娠したようになっていた。医者は胃を手術するよう提案した。彼女は以前スリ　スワミィと馴染みがあったので、スリ　スワミィに自分の窮状を訴えた。スリ　スワミィは言った。「マザー！もしあなたが神聖火に百ルピー払うならば、あなたの障害はなくなるでしょう」彼女は家にも帰らず、すぐにお金を借りて、スリ　スワミィにその額を払った。その夜、彼女の夢の中で、スリ　スワミィが彼女の胃を手術した。皆が全くびっくりしたことに、腹の膨れはなくなり、彼女の腹部は正常になった。彼女は、生涯ずっとスリ　スワミィの選ばれた帰依者だった。

１９７５年、若い男が精神病になり、ひどく狂暴になった。彼は綱で縛られ、スリ　スワミィの許に連れて来られた。他のあらゆる医療が効果がなかったからだった。スリ　スワミィは、彼を神聖火の煙の中に入れるよう命じた。４人の男が力ずくで、彼を１時間半煙の中に入れた。１週間以内に、彼は薬の助けなしで、段々正常になって行った。

１９７９年、ある婦人が最近２年間心の平衡を失った２２才の息子を連れて来た。スリ　スワミィは婦人に、息子を数日間ここに置いておくよう命じた。やがて彼の心は安定したので、スリ　スワミィの許可を受けて帰宅した。今日まで、彼の母はスリ　スワミィの写真を礼拝している。

ある日、ハンセン病者がスリ　スワミィの所に来た。その夜、スリ　スワミィは痛みで唸っていた。真夜中、ロシレディは痛みを和らげたいと、スリ　スワミィの足をマッサージしようとした。即座に、スリ　スワミィは言った。「アボ！アボ！今は私の足に触れてはいけない。私から離れなさい」１時間後、ロシレディの足の親指の下が膨れてひびが出来た。それはハンセン病の症状に似ていた。ロシレディは、これはスリ　スワミィがハンセン病者の苦しみを治すために彼自身に受け取った時に、スリ　スワミィに触れた所為であると理解した。彼は数日間強烈なナマジャパを行い、スリ　スワミィの恵みによって、何も薬を使わずにその痛みを取り除いた。このように、慈悲深いスワミィは、自分の体に病気を受け取り、痛み

や苦しみに耐えられなかった帰依者達のために、痛みに苦しんだのだった。彼は全ての人の愛すべき母なのである。

カラナム　スッバラオの妻（ゴラガムディ村）は長年喘息で苦しんでいた。数千ルピーを逆症療法のために費やしたにも拘らず、彼女の状態は改善しなかった。家族は、彼女をスリ　スワミィの祝福を受けるために連れてきた。スリ　スワミィは言った。「あなたのビルをアニケパリにそのままにして、ゴラガムディで生活しなさい。あなたは２０日でよくなるでしょう。私が言うまで、ゴラガムディに新居を建ててはならない」彼らはスリ　スワミィの助言に従った。多年彼女を苦しめていた病気は、２０日以内に治った。

１９８１年、ゴラガムディのカラナムの藁葺き小屋がサイクロンのせいで壊れた。カラナムの家族はスリ　スワミィに報せずに、アニケパリの自分達のビルに入った。すぐに、彼女は寝付き、ネロールで手術を受けた。しかし、それでも彼女の健康は回復しなかった。再度、彼らはスリ　スワミィの前に平伏し、彼の慈悲と救いを乞い願った。スリ　スワミィは言った。「もしあなたがゴラガムディの藁葺き小屋で生活するならば、あなたはよくなるだろう」彼は、上記の言葉の紙切れを与えた。ゴラガムディの藁葺きの家に住むようになって間もなく、彼女の健康は改善し始めた。

毎日、彼女は大きな帰依と感謝をもって、スリ　スワミィのパドゥカ（履物）を礼拝した。サドグルだけが、人にシュラダとバクティの帰依の道の行動の規範を守らせることができるのである！

タルル　スリーニバスル（ネロール市）は血圧と心臓の痛みに苦しんでいた。彼は子供の頃から説明しがたい恐怖があった。スリ　スワミィの祝福を受けた時、彼はこれら全ての苦しみがなくなった。そのため、今日でも感謝の心で、彼はゴラガムディのスリ　スワミィの全ての催しに、仲間達と来て、無料でナダスワラム（楽器）を演奏する。

マディネニ　カマクシャンマ（デガパディ村）は非常に長くスリ　スワミィに仕えた。ある時、彼女は腰の痛みに苦しんでいた。スリ　スワミィは多くの葉のジュースを処方したが、痛みは治らなかった。ある日、スリ　スワミィは彼女に、「明後日までに、あなたの体から痛みはすっかり取り除かれるだろう」と書いた紙切れを渡した。長年たった後も、彼女は２度とその痛みをもたなかった。ある日スリ　スワミィは彼女に言った。「！ベーララガバ　スワミィはあなたの兄で、バジャンを指導する。あなたはどんな病気にもならないだろう。魚と羊肉を食べないようにしなさい」彼女の息子は結婚して１０年たっても、子供に恵まれなかった。夫妻は、スリ　スワミィにこの問題を訴えた。スリ　スワミィは彼らに３人の子を

約束した。彼女は言った。「スワミィ！夫婦は長いこと子供ができませんでした。どうして、今恵まれるのですか？」スリ　スワミィは答えた。「マザー！私は子供達が他のカーストに属していたので、止めていたのです。今、私はベンカタギリ町のビヤーサの子供達を託すつもりです」さらに、彼はその趣旨の紙切れを与えた。１年内に、息子は男児をもった。しかし、母親は乳が出なかった。夫妻はスリ　スワミィに祈った。その夜、彼女の夢で、スリ　スワミィは彼の簡易寝台の端で縄をない、それを赤子の母親に触れるよう言った。翌朝、彼女は乳が十分出るようになった。家族皆が、スリ　スワミィに大いに帰依した。

ある日、スリ　タルル　スリーニバスは腕が恐ろしく痛んだ。妻と姉は彼をネロールの病院のドクター　マツゥラの許に連れて行った。彼は病院に近付いた時、薬は効かないだろうと思った。そこで、彼はスリ　スワミィの慈悲に縋ろうとゴラガムディにやってきた。不思議なことに、彼がバスに乗ると、腕の痛みは消えた。この現象は、Ｐ．スッブラマイアがゴラガムディのサマディのダルシャンのためにバスに乗るや否や、彼の喘息の苦しみが消えた体験と似ている。「信仰は山をも動かす」

ある日、スリ　スワミィは誰かにマントラを授けるようにしていた。誰も、この振る舞いの訳が分からなかった。数分すると、トゥピリ　ピチェンマが蛇に噛まれてスワミィの許に来た。その時、人々はスワミィの先程の振る舞いの原因を理解したのだった。彼女は口からと傷にウディを与えられて、簡単に救われた。

バラプレディ　トゥラサンマは腎臓癌のため、ネロールのアメリカ病院に入院した。数週間の治療後、医者は、１時間半で彼女は死ぬから、死ぬ前に病人をすぐ退院させなさいと家族に言った。家族は彼女をゴラガムディのスリ　ベンカイア　スワミィの許に連れて来た。スリ　スワミィは家族に３日間彼女を家におき、それからゴラガムディに連れて来るよう命じた。彼らはそうした。何の治療もしないで、彼女は回復し、堅固な帰依者になった。その翌日から、彼女は家を出て、殆ど３０年間の生涯をスリ　スワミィの奉仕に捧げた。スリ　スワミィは言った。「アッヤ！あのような母親がいるだろうか（ボンマ　パトゥ）？」スリ　スワミィはいつもトゥラサンマを「マザー」と呼んだ。ボンマとは母親の性質を意味する。神に与えられた新しい人生は、神の前で、神の奉仕のために使われるべきである。これが、スリ　スワミィの考えかもしれない。

記憶すべき大切な事は、彼女はスリ　スワミィがしたように、決してチャペル（インドの草履）を履かず、パルミラ椰子の葉をベッドとしたことである。私達の脳はそのような事柄に賛成しないかもしれないし、私達の

肉体はそのような物に適応しなかもしれない。しかし彼女は、心をスリ　スワミィに捧げていたので、それがスワミィの恩寵によって可能だったのだろう。

曾てスリ　スワミィは、トゥラサンマが非常に長い間スリ　スワミィの近くでスワミィの奉仕に人生を過ごすという幸運を得た理由を、説明した。「アッヤ！マザーは過去の４度の誕生で食物を施してきた」幾つかの誕生の間、愛と献身をもってサドグルに仕えた人達は、この誕生で、ずっとサドグルの近くで、奉仕する幸運に恵まれるだろう。

ある日、アトマクル　ベンカイアの牡牛を見て、スリ　スワミィは言った。「アッヤ！この牛は荷車の危険があるから、売ってしまいなさい」彼は牛を売りたいと思ったが、牛に適当な値がつかなかった。時間が過ぎて行った。ある日、牛は荷車の車輪に対して、痒い頭を擦り付けようとした。牛は頭を車輪の車軸受けの間に挿入し、頭が抜けなくなった。牛は長い間、頭を押したり引いたりしていたが、朝までに死んでしまった。

コラ　ジャヤラマ　ラジュは、チフス熱で苦しんでいた。彼がスリ　スワミィに救いを求めると、スリ　スワミィは彼に落花生を１キロ食べさせ、バターミルクを飲ませた。スリ　スワミィは、行って河の水に頭まで浸かるよう命じた。彼はスリ　スワミィの命じた通りにした。次の瞬間、彼のチフス熱は下がった。

全てのアバドゥータは、病気で禁じられている食べ物を用いて、帰依者達の病気を治すという奇妙な方法をもっていた。

スリ　スワミィは数多くのやり方で、彼の囲いの中に彼の羊達を引き込む。招く夢を見せることは、そのような引き込む方法の１つである。

マヒマルル村のムニクティ　ラマイアは胃痛、動悸、病弱で苦しんでいた。医者達のあらゆる試みも効き目がなかった。ペンナ　バドウェル生まれの人が彼に、ペンナ　バドウェルに滞在しているスリ　スワミィの許に行って救いを求めなさいと助言した。同じ日の夜、彼の夢の中でスリ　スワミィが、病気を治すからペンナ　バドウェルに来るように言った。翌朝、彼はスリ　スワミィの許に行き、夢に現れたのと同じ人物に会ったのでびっくりした。

スリ　スワミィは彼に、完全に治療するために１ヵ月間いるようにと言った。数日で、彼は薬なしで完全に回復した。その時からずっと、彼は屋敷内にスリ　スワミィのための藁葺き小屋を作り、貧しいにも拘らず、大きな帰依心をもってスワミィに仕えた。

ある日、スリ　スワミィはラマイアに少し米を持ってくるように言った。スリ　スワミィはその米を飲み水の壺の近くに撒き散らし、「白いビル

が立つだろう、アッヤ」と言った。スリ　スワミィの言葉通り、間もなくこの貧しいラマイアは金持ちになり、白いビルを建てた。心から感謝して、彼らは現在でも月に１度ゴラガムディを訪問している。

サンガム村のＰ．クリシュナ　レディの只１匹の牝水牛が、生きるか死ぬかの瀬戸際になった。絶望して、彼は思った。「スリ　スワミィへの信仰を保持するために、彼は私の只１匹の水牛を殺そうとしている」悲しみに打ち拉がれて、彼はベッドに入った。夢の中で、スリ　スワミィが水牛の近くに座っていた。彼が目覚めて、見に行くと、水牛は小便を一杯出して、草を食べていた。

ある日、スリ　スワミィは別の地へ行こうとしていた。カバンと荷物が旅行のために用意された。スリ　スワミィは出発せず、「痛みがきた。私達は行かない」と言った。１時間以内に、一人の女が背中に息子をしょってやってきた。息子はひどい腹痛で身をよじっていた。スリ　スワミィは彼のために紙切れに書かせた。すぐに、彼は痛みがなくなった。スリ　スワミィのヨガの力はそれ程に強力だった。

ゴラガムディのゴウニ　ペンチャランマは体中がひどく痒くなった。痒い所を強く掻いたので、彼女は体中傷だらけになった。彼女は治療のために出来る限りのことをしたが、効果がなかった。遂に、スリ　スワミィに救いを求めた。スリ　スワミィは彼女に、神聖火に千ルピー捧げるように言った。彼女は、そんな大金は持っていませんと言った。スリ　スワミィは、せめて１０ルピーを差し出しなさいと言った。彼女は、１０ルピーも持っていませんと言った。慈悲深いスワミィは、１０分間彼の前に立つように言った。その後、彼は彼女に行きなさいと言った。次の瞬間、彼女の体中の痒みは消え去った。しかし、次の瞬間、スリ　スワミィは３・４日間、体中の痒みに大いに苦しんだ。スリ　スワミィは従者達に、櫛で自分の体を掻いて欲しいと言った。

同じペンチャランマが、非常に長い間酷い喘息で苦しんでいた。医者や薬では、永続的効果がなかった。ある日、彼女はスリ　スワミィに救いを求めた。スリ　スワミィは彼女に、６ルピーをダクシナとして差し出しなさいと言った。しかし、彼女はその小額を差し出すことができないことを表示して、長いこと黙って立っていた。スリ　スワミィは言った。「マザー！もしあなたが苦しみを取り除きたいなら、どうか千ルピーを神聖火に差し出しなさい」彼女は黙ったままでいた。ある日、彼女は５ルピーのダクシナを差し出し、慈悲深いスワミィに自分の惨めな窮状を訴えた。スリ　スワミィは、「私はあなたを癒す人ではない。マザーの所に行きなさい」と言って、その５ルピーを彼女に返した。それを聞いて、トゥラサンマ

は笑い、「時々、スリ　スワミィはそのようなことを言います。本当に、あなたの病気は癒される」と言った。２週間以内に、彼女の喘息は段々と永久に消え去った。

ある時、コドゥル　ベンカンマは食欲がなくなった。彼女は何か食物を見ると、吐きたくなった。彼女は酷く弱り、寝付いた。その時の彼女の年令は２５才だった。医者のあらゆる治療も偽医者の治療もマントラもタントラも、効果がなかった。スリ　スワミィはベンカンマの家をよく訪問していた。家族が彼女のことを話しても、彼はいつも黙ったままだった。ある日、スリ　スワミィはベンカンマの母親に、娘をペンナ　バドウェルに連れて来なさいという手紙を送った。手紙に従って、母親達は彼女をスリ　スワミィの許に連れてきた。彼女がスリ　スワミィのダルシャンを受けるや否や、ひどく空腹を覚えた。彼女は、食事毎にご飯を２キロも食べた。昼も夜も、スリ　スワミィは彼女を自分の近くに置き、親指の押印を手伝わせた。３日目、彼は彼女が食事を摂るのを許さなかった。その夜、スリ　スワミィは彼女に、１本のバナナと１口のペラピンディ（揚げたトウモロコシ）を与えた。その時から、彼女は正常な食欲になった。このベンカンマは現在、ゴラガムディ　アシュラムでスリ　スワミィに奉仕している。

ベルル　ラマナイドゥ（ナグラベラトゥル村）は、ネロールの医者が見捨てたので、結核症の治療のためマドラスに行こうと思った。マドラスに行く前に、彼はスリ　スワミィの祝福を受けに来た。スリ　スワミィは言った。「あなたの肺には、チンナダブ（１ルピーコイン）の大きさの斑点がある。それらは、あなたに何の害もないでしょう。あなたはマドラスに行く必要はない。もしあなたがボンタゼムドゥの汁を飲むなら、病気は治るでしょう。ボンタゼムドゥの汁は非常に強い毒です。それは森に生えている。もし牛が体をそれに擦り付けるなら、その汁が体に付き、火傷のような傷をつけるでしょう」彼が家に帰って、スリ　スワミィの指示のことを話すと、家族は、「その有毒な汁を飲んではいけない。もし飲むなら、目が見えなくなるだろう。それは、胃を焼き、死をもたらすだろう」と言って反対した。彼は「もし私がマドラスの医者にかかって胃を手術しても長く生きられないだろう。どうせ死ぬのなら、スリ　スワミィの助言通りにして死んだ方がましだ」と考えた。彼はゴラガムディのスリ　スワミイの許にやって来ると、そのボンタゼムドゥの汁を本当に飲んだ。その後、何も治療しないで、彼は現在まで健康に恵まれている。

スリ　スワミィはベンカタレディ　パリ（村）にいた。バパナ　パリ（バドェル近く）の住民が酷い腸チフスで苦しんでいた。藪医者の治療は全

く効果がなかった。彼はスリ　スワミィの慈悲にすがった。スリ　スワミィは彼に、半キロの落花生を食べるよう与えた。彼はそれに従うかどうか迷った。「アッヤ！あなたの全ての病気はなくなるでしょう。あなたは食べなければならない」とスリ　スワミィは命じた。彼がそれを食べると、スリ　スワミィは１リットルのプラネール（バターミルクの代りに使われた発酵水の１種）を与えた。彼は恐れながらその水を飲んだ。スリ　スワミィは、彼を河の濡れた砂に、１時間首まで埋めるよう命じた。従者達は、もし彼がそのような高熱なのに砂に埋められたなら、死んでしまうだろうと思った。しかし、スリ　スワミィは彼らに命じて、砂に彼を埋めさせた。彼が、その穴から出された瞬間、高熱も体の痛みも消えてなくなり、普通の食事をした。私達は、『グルチャリトラ』とスリ　サイババとアカルコタ　スワミィの伝記の中で、同じような体験を見ることが出来る。

ある日、スリ　スワミィはV．ラマナイドゥに、ティルパティや他の地に１５日間巡礼に行くよう命じた。スワミィは言った。「アッヤ！あなたは、この２つの物を腰に結びつけなさい」スワミィはその２つの物の名を言った。彼はその物の名を、私には明かさなかった。「もしあなたが病気に出ていくよう命じるなら、病気は治るでしょう」と、スワミィは保証した。汽車の中で、乞食が腸チフスのせいで、ひどく震えていた。彼がその乞食の腸チフスに、消えるよう命じると、全く驚いたことに、乞食は次の瞬間よくなった。同じようにして、彼は１５日間の旅の途中で数多くの患者の病気を直した。彼は予定の日日の後、スリ　スワミィの許に帰ってきた。１時間半以内に、牡牛の命が危なくなり、その所有者がスリ　スワミィの祝福を求めてやってきた。そこにいたラマナイドゥは、すぐに牡牛の所に行って、病気に牡牛から出て行くよう命じた。しかし牛は死んでしまった。彼はどうして自分の癒す力がそこでは失敗したのか理解できなかった。彼はスリ　スワミィの所にきて、そのことを話した。スワミィは言った。「今後は、そのようなことは、あなたの言葉では働かないだろう。そような時間は、巡礼の完了と共に終わった」巡礼の後、彼がスリ　スワミィのダルシャンを受けた時、彼に授けられていた力は、消え去ったのだった。私達は、病気はスリ　スワミィの言葉により癒されたのであり、彼の腰の２つの物によってではなかったことに、注目しなければならない。

ある日、スリ　スワミィは従者スリ　ナラヤナイアに、自分が病人にマントラを授けるために使った布を与え、これらからは苦しんでいる人々ににマントラを授けるよう命じた。彼は１３人の蛇に噛まれた人とサソリに刺された人に、マントラを授けた。すぐに、それら全ての痛みが消えた。その後、痛みは直ぐには鎮まらなくなり、少し時間がかかった。彼はスワ

ミィの許に行き、その有様の理由を尋ねた。スリ　スワミィは言った。「アッヤ！百万の罪のために、私達は１度蠍に刺されるだろう。少なくとも１度は、その痛みを味わわなければ、もしあなたがすぐにその痛みを取り除いても、天界の神々は、あなたがその罪人から離れている時、もう１度蠍に彼を刺させるでしょう。その時、彼は大いに苦しまなければならない。だから、彼が今それで少し苦しむのはよいことなのです」この説明は私達に、カルマの法則はどのように働くのか、またサドグルはその痛みから私達をどのように救うのかを、教えている。

スリ　スワミィはムディゲドゥ村にいた。白いものを吐いて苦しんでいる婦人がスリ　スワミィの許にやってきた。その時までに、彼女はあらゆる事を試して、駄目だった。彼女は３日間スワミィの助けを待ったが、彼は何も言わなかった。３日目の夜、彼女は苦しむよりもスワミィの所で死んだ方がましだと決心した。皆が眠っている時、彼女はスワミィの神聖火の中に飛び込んだ。しかし、驚いたことに、彼女の体ばかりか衣服も髪の毛も火に焼かれず、無事だった。それと共に、彼女の病気も永久に治っていた。

パラコル　スバンマは、甲状腺癌のため、ラヤベルル病院で手術を受けた。彼女は手術を恐れ、手術中にスリ　スワミィの助けを求めた。彼女は、スリ　スワミィが手術中ずっと彼女の傍にいるビジョンを見た。

１４、罪人達の浄化

全ての人が平安と満足を切望している。人は、どんな悲しみにも悩まされない状態を達成しようとする。多くの人がそのような状態を達成することに失敗し、時間と共に過ぎ去る娯楽による喜びで、自分たちの心配や悲しみを忘れようとする。彼らの中の数人は、何かの悪業と弱さの奴隷になるだろう。彼らはそれらから束の間の気休めを得たとしても、次の瞬間から、もっと多くの不安と自暴自棄に遭遇するだろう。

それらから逃れるために、彼等は何度も自分達の弱さに頼るしかないだろう。事実、健康の衰えと不安のせいで、彼らは大いに苦しむ。そのような無力な生き物達は、スリ　スワミィのようなサットプルシャのダルシャンと祝福によって変容するだろう。彼らの生活はその日から、新しい輝きをもつだろう。そのような変容を心の底から切望していない人達は、それを得られないだろう。私達の心からの願望を叶えてくださるその方達は、サットプルシャと呼ばれている。この章で、私達はスワミィによって変容

した人々のことを見てみよう。

ベツ　ジャヤ　ラマイアは大酒飲みだった。ある日、彼はスリ　スワミィの２本の足を抱き、自分を酔っ払い状態からずっと遠ざけさせて下さいと懇願した。スリ　スワミィと従者達がくり返し言っても、彼は長い間スリ　スワミィの足を離さなかった。遂に、スリ　スワミィは彼を祝福して言った。「よろしい、行きなさい」私達はその簡単な言葉の背後の力を知らない。その日から、彼の人柄は全く変わった。彼は酒を飲むことを止めた。彼は全ての自分の時間を沈黙して過ごした。以前には、彼は理由もなく怒ったり、喧嘩をしかける口論好きな性格だった。今や、彼は全く変容した人になった。彼は殆どの時間を誰もいない場所で過ごした。

ある日、銀糸のサリーを身に着けた３人の婦人が、スリ　スワミィのダルシャンを受けに来て、立っていた。スリ　スワミィは彼女達に座るように言った。彼女達は、埃の中に座るとサリーが汚れると思った。そのため、彼女達はスリ　スワミィの言葉に従わなかった。スリ　スワミィは３度座りなさいと言った。やっと、一人がパルミラ椰子の葉の上に座った。スリ　スワミィは全ての訪問者と、彼の指示に従ってパルミラ椰子の葉の上に座ったその婦人に祝福の紙切れを与えた。彼は、「いや、上界の神々はあなた達に紙切れを与えることに賛成しない」と言って、他の２人の婦人には祝福の紙切れを与えようとしなかった。スリ　スワミィは慈悲深い神ではあったが、その恵みを受けるためには、私達は愛と帰依と完全な委ねの気持ちで、彼の指示に素直に従わねばならない。もし器に水槽から水を入れようとするなら、私達は、その最上部を傾けねばならない。

バドウェルのスッバ　レディは、大分前に目撃したすばらしい体験をこのように報告している。

スリ　スワミィの薪の荷車を牽く２頭の牡水牛が、近くの畑に入り、作物に損害を与えた。畑の持ち主は、水牛をバンディラ　ドッディ（村の警官）に引き渡そうとした。スリ　スワミィの従者達は、水牛はスワミィのものだと言って、水牛を解放してほしいと彼に頼んだ。地主は酔っていて、耳を貸さなかった。スリ　スワミィは途中で彼に会うと、「アッヤ！あなたは水牛をどこへ連れて行くつもりかね？」と尋ねた。彼はなんとも答えず、道を進んだ。スリ　スワミィはじっと彼を見つめると、恰も彼に止まるよう求めるように手で合図した。即座に、酔っている彼と水牛は、足を縛られたかのように、立ち止まった。スリ　スワミィは言った。「これは私の仕業だろうか？これは神の業である。もしあなたがそう望むなら、あなたは神聖火に取り分を要求するがよい。これからは、このようなことをしてはいけない」酔った男は、水牛を返した。彼はスリ　スワミィの手

助けをしたばかりでなく、スワミィと一緒に生活した。彼は毎日水牛達に草を食わせた。

ゴラガムディのトゥピリ　ベンカイアは飲んだくれであるばかりか、闘鶏博打好きだった。これらの悪業により、彼は土地財産を全て失った。彼の妻はスリ　スワミィの偉大な帰依者だった。彼女はスリ　スワミィと従者達の衣類を、シュラダとバクティ（不動の帰依心）をもって洗濯した。彼女は夫の行為による自分の窮状のことを話したが、スリ　スワミィは黙ったままだった。毎日、ピチェンマはスリ　スワミィにミルクを差し出すことにしていた。ある夜、彼女は夫を通してミルクを差し出した。スリ　スワミィはミルクを求めた。すぐに、従者達がそのミルクをスワミィに差し出した。スリ　スワミィはそのミルクを飲むと、「コケコッコー（コッコロコ）」と叫んだ。皆はスワミィのその振る舞いを笑った。彼らは、スリ　スワミィはミルクが闘鶏（コディ　パンデム）好きの男によって齎らされたことを示すために、そのように振る舞ったのだと思ったからだった。しかし、全く驚いたことに、その日からベンカイアは酒を飲むことや博打、闘鶏などの全ての悪業を止めた。

ネロールのティルパティ　ジャナキラマイアの娘ラマナンマは、妹の娘と一緒にスリ　スワミィの許にやってきた。彼女達が百メートルの所にきた時、スリ　スワミィは従者達をやって、彼女達に自分の許に来ないようにと言わせた。その時、スリ　スワミィは大変怒っていて、怒りの激発で火に何でも放りこみ、彼自身まで火の中に飛び込みそうだった。スリ　スワミィの従者達は、彼女達を離れた所で止めた。

ラマナンマの妹の娘は、そのような情況を見ると家に帰って行った。暫くしてラマナンマは、「自分はスワミィと一言も話さないで帰りたくありません」との伝言をスワミィに伝えた。慈悲深いスワミィは彼女に、６０フィート離れた所から話すように、要求した。彼女は、「スワミィ！私はあなたが与えるどんな罰でも受けますが、あなたに会わないで帰ることはできません」と言いながら、泣いた。スリ　スワミィは言った。「アッヨ！彼女は罰を受ける覚悟があるようだ。よろしい。４人でマルティ寺院に行って、バジャンを行い、明日は彼女をアンマ（マザー）の所に連れて行きなさい」彼女はそのようにして、スワミィの祝福を受けた。ここでの罰とは、アンジャネヤ（ハヌマーン）寺院でバジャンを行うことに過ぎなかった。

１５、スリ　スワミィは謎

神が自らを、私達のような無知な世俗的な心の物質主義者達の間に、スリ　スワミィのようなサットプルシャとなって顕現するのは、神の御意志でしかない。それは、スワミィをグナニ（賢者）と認めた人達にとって全くの神秘である。他の人達にとっては、彼は気狂いと見えるだろう。このような理由により、アディ　シャンカラ（古代の賢者）は、マハトマ達は子供のようで又気狂いのようだろうと言った。もし私達が『ダッタ　マヒマ』を読むならば、それら全てのマハトマ達の中には、アバドゥータの霊、ダッタ神（ダッタトレヤ神即ちブラーマ神とビシュヌ神とシバ神の融合神）が働いていることを知るだろう。

もし私達がアカルコタ　スワミィやシルディ　サイやマニキャ　プラブ等の伝記を読むならば、そのようなマハトマ達は人間の限度と人間的能力での理解力を超える、自然を支配する力を有していることを知るだろう。これらの奇跡の幾つかの意味は、その後に起こる出来事によって理解される。しかし、他の奇跡は永遠に理解され得ない。ここで、私達はそのような幾つかの、私達の理解力を超えているリーラと意味を見てみよう。

スワミィは周りに大きな集団を持った時、時折、ある人達に家に帰るように命じたり、座っている場所を変えるようにとか、ある特別な所に歩いて行って、帰って来るよう命じたりした。

１９８０年、スリ　スワミィはタルプールのナラーヤナ　ダスのアシュラムにいた。彼は従者達に、「アッヤ！あなた達の４人はあの小さい丘に登って戻って来なさい」と命じた。２人がその命の通りにした。しかし、スリ　スワミィは承知しなかった。それで、４人全員がその丘に行って、同じ道を戻ろうとしていた。スリ　スワミィは、彼らが北の方に曲がるよう伝言を送った。誰もこの指示の意味が判らなかった。

時折、スリ　スワミィは独り言で奇妙な言葉を発し大声で笑った。誰も、その声をテープに採ることはできなかった。

ある日、スリ　スワミィはグラバイアに病気の人にマントラを教えるように言った。彼がそうすると、今度はスリ　スワミィがグラバイアにマントラを教えた。

ネロールでは、交通量が非常に多かった。従者達は他の地に移動する時には、いつもスリ　スワミィだけをリキシャに乗せた。ある日、従者皆がスリ　スワミィをベンカタ　ラオの家に残して、映画を見に行った。翌朝、彼らがバス停に行くために、スワミィのためにリキシャを持っていくと

、スリ　スワミィはリキシャに乗ろうとしなかった。彼は彼らに、ドリを持ってくるように言った。交通量が多いにも拘らず、彼らはスリ　スワミィをドリでバス停まで運んで行った。彼らはそれを、自分達が映画を見に行った罰だと思った。

もし従者達がスリ　スワミィの指示した方法とは別の何かの奉仕をしたならば、スリ　スワミィは暫く黙っていた。従者長は相応の罰を受けたばかりでなく、スワミィは更に彼に、その罰はどのような失敗で与えられたのか、内心で気付かせた。

ペンナ　バドウェルで、一人の婦人が羊を捜して、スリ　スワミィ一行の許に来た。彼女には、スリ　スワミィは神聖火の真ん中で燃えているように見えた。そのため、彼女は恐れて逃げ、スリ　スワミィはもういないのだと思った。翌朝、彼女はスリ　スワミィが河の土手で衣服を乾かしているのを見た。彼女は面食らった。彼女は皆にこの体験を話した。

ある晴れた朝、従者達はスワミィの体に、非常に大きな火傷とできものを見付けた。特に、右肩と右膝のは大きかった。時々、スリ　スワミィは引き付けを起こした。そのため、ある人達は、彼が引き付けた時に、神聖火の中に落ち込んだのかもしれないと思った。他の人達は、彼は丁度サイババがしたように、誰かを火の事故から救って手を火傷したのだと考えた。彼らがスワミィにその火傷のことを尋ねると、彼は言った。「アッヤ！上界の神々がある酸をかけたのです」

長い間、彼は治療を受けることを拒んだ。なんとか、従者達はスリ　スワミィを医者の許に連れて行き、注射を打ち、傷に包帯をして貰った。しかし、夜皆が眠っている間に、彼は包帯を全て外し、放ってしまった。傷が癒えようとしている時、彼は刺で皮膚を剥がし、傷から血を流れ出させた。どうやら、時の経過と共に傷は癒えた。ある夜、彼は肩の傷の皮膚と肉の小部分を切り取った。朝には、それは血をにじませた新しい傷になっていた。ベンカンマは、スワミィが切り取った皮膚片をスズ容器に入れて隠した。それは暫く特別な芳香を放った。ある日、彼女はそれをある友に見せた。その瞬間から、芳香は消えてしまった。

ある日、ナガジェムドゥ（棘の多い植物の１種）の棘がスワミィの足に刺さった。従者達全員が抜こうとしたが、出来なかった。最後に、コドゥル　ベンカンマが抜こうとした。彼女は２インチの長さの棘を抜こうとしたが、スワミィはびくともせず、叫び声も出さなかった。やっと、彼女はスリ　スワミィの足から２インチの長さの棘を抜いた。彼はそれ程の長い棘が足に刺さったまま、どのようにして歩いたのだろうか？棘を抜くために、スリ　スワミィは彼女に、剃刀の刃と針とナイフを提供した。

スリ　スワミィが歩いていた頃のことである。ある日、彼はムディゲドゥのアッキム　ベンカタラミ　レディの歓待を受けていた。午前１０時、従者全員は自分達の務めにいそしんでいた。誰かが、スワミィが神聖火の前のいつもの席にいないことに気付いた。あらゆる所を捜し、彼らはスリ　スワミィが床に置かれた空のジャラ（籠）の中に横たわっているのを見付けた。この光景は従者達を恐れさせ、数人は恐怖で泣きだした。

スリ　スワミィは体重を肋骨にかけて、横になっていた。１２インチの長さの腸が、彼の肛門から出ていた。一羽の烏が嘴でそれをつついていた。腸はおびただしく血を流していた。彼らはその恐ろしい光景に耐えられなかった。しかしスリ　スワミィは全く落ち着いたものだった。帰依者達は烏を追い払おうとした。しかし、スリ　スワミィは彼らにそれを許さなかった。「アッボ！アッボ！烏は罪を取り去ろうとしている。もしあなた達が烏を追い払うなら、どうなるだろうか？」スリ　スワミィが気付かない内に、ベンカタラミ　レディが空中で棒を振り、烏は飛び去った。数分の内に、腸は自然に中に入った。従者達はスリ　スワミィを手で持ち上げて、彼の座席に連れて行こうとした。しかし、スリ　スワミィは運ばれるのを拒んだ。彼はゆっくりと這って進み、座席に戻った。

歩いていた頃、時折彼は食事も水も飲まずに３・４日間、昼も夜もエカタラを演奏し続けた。その時、もしうとうとすると、彼は棘で自分の歯茎を刺し、血を吐き出した。彼は水を口の中に入れて、吐き出した。再び、彼はエカタラの演奏を続けた。こうして、彼は眠気を覚ました。

ある日、スリ　スワミィは牛車に乗っていた。彼は牛車で横になっていた。暫くすると、彼はサマディの状態になった。牛車の急な動きで、スリ　スワミィの体は少し動いた。彼の膝が走っている牛車の車輪に触れた。誰もそのことに長い間気付かなかった。やがて従者達が気付いた時には、彼は多量の失血で気を失っていた。彼らは車を止めた。彼らは、深いサマディ状態にあるスリ　スワミィに触ることを、恐れてしなかった。長時間後、スリ　スワミィは元の状態に戻った。彼らが血を拭こうとすると、彼はそれを拒んだ。私達は、ビベカナンダが師スリ　ラマクリシュナ　パラマハンサのサマディの真実性を確かめるために、師の太ももに燃えさしを載せ、スリ　ラマクリシュナは太ももがひどく焼けたのに、じっと座ってたことを本を読んで知っている。しかし、今の帰依者達は、同じサマディの状態にあるスリ　スワミィの似たような奇跡を見ることができたのだった。

カンダヨガム：偉大なヨギ達は、彼らの手足を切り離し、暫くの間それらをそのままにしておく。暫く後、彼らは再び完全な人間の姿で現れる。

これはカンダヨガムと称されている。

スリ　スワミィは、このカンダヨガ以外は、スリ　サイナスのような全ての奇跡を示した（と私は思っていた）。遂に慈悲深いスワミィは、スリ　スワミィのカンダヨガを目の当たりにした人に私を会わせて下さった。

Ａ．Ｐ．ネロール地方、オグール村近くのバカマダのシャイク　ラハムトゥラは、慢性の足の痛みを治して貰おうと、ペンナ　バドウェルでスリ　スワミィを訪ねた。スリ　スワミィの命じた通りに、彼は２０日間、スリ　スワミィと一緒にいた。ある夜、彼が小用を足そうと目を覚ました時、スリ　スワミィの手と足と頭と胴体が、別々に神聖火の光の中で転がっているのを見付けた。当時は、電灯はなかった。彼はその光景に大変びっくりし、藁葺き小屋に走り込んだ。しかし、スリ　スワミィはそこにもいなかった。数分後、彼はスリ　スワミィが神聖火の近くに座っているのを見た。ラハムトゥラは数分前に目撃した光景との違いに、呆気にとられた。スリ　スワミィは彼に近付くと、「ラハムトゥラ君！君はロカム（他の世界）を見たのだ。翌朝、君はここにいてはいけない。君の村に帰りなさい」と言った。翌朝、スリ　スワミィは４日間の外泊費用を渡して、彼を見送った。

ラマムトゥラは次のように話を続けた。「私は右足の膝下の骨が大変痛くなりました。私は治療のために数千ルピー使いましたが、治りませんでした。友人の助言で、私はスリ　スワミィを訪ねました。スリ　スワミィは、私に２０日間彼の許に留まるよう命じました。毎日、スリ　スワミィは少しの間私の足をマッサージしました。何も薬を使わずに、私の足の痛みは数日でなくなりました。こうして、スリ　スワミィは私に新しい人生を与えて下さいました。そのことで、私は彼に大変感謝しています」

１６、太陽と月が存在する限り

普通の人達は、自分達は肉体に限定されていると思い違いしている。誕生と死の輪廻を経験しながら、彼らは自分達の肉体の誕生が自分達の誕生であり、肉体の死が自分達の死であると思っている。サットプルシャ達との交際によってのみ、少数の人はその誤った考えから目覚め、識別力と冷静さによって、その誤った考えを克服する。彼らは、自分達が永久に続く「アートマ」である、と認識している。彼らの力は、その肉体を脱ぎ捨てると共に終わらないだろう。スリ　ベンカイア　スワミィによって言われているように、「太陽と月が存在する限り」彼らは精妙な姿で生き続け、

彼らの帰依者達を守るだろう。

この理由の故に、シルディサイは、「私のマッティ（魂）は返事し、私の名は話しかけ、私の墓は帰依者達がどこにいても帰依者達と一緒に動き、彼らを守るだろう」と言った。それがどれほど長く続くかを尋ねるのは、適切ではない。それは、私達が彼らに頼る限り続くだろう。自分達自身を完全に委ねることのできる人達は、完全に「アートマ」と再融合するまで、彼らによって導かれ、守られるだろう。だから、サイババは言った。「私はどんな肉体も途中で放って置かない。私はそれらを最後の目的地まで連れて行くだろう。私は、自分に任されたどのパイサ（１ルピーの１０分の１）も無視しない」スリ　ベンカイア　スワミィもまた、そのマハサマディの後でも、帰依者達を守っている。

１９８３年３月、ゴラガムディのカク　ラガイアの牡牛が道に迷い、１ヵ月間捜したが見つからなかった。彼らは牛の行方を辿ることができなかった。ある夜、彼はスワミィに助けを祈り、眠った。夢の中で、彼はスワミィの後ろを歩いていた。両人はゴラガムディの東側の村へ真っすぐ行った。その村の中で、彼らは牛小屋に行った。彼の牡牛はその小屋の糞の山の上に立っていた。夢の中で、彼はそこでスリ　スワミィと別れ、ゴラガムディに帰った。彼は夢から覚めた。

夢のことを確かめるため、翌朝彼はゴラガムディの東側にある村ペヌバルティに行った。彼は、夢で見た牛小屋に行った。全く驚いたことに、彼の牛が昨夜の夢で見た通り、糞の山の上に立っていた。

ゴヌパリ村近くのペヌバルティ村のライ　ラクシュミ　ナルサレディは１ヵ月前に、２匹の牡牛がいなくなった。１ヵ月間捜したが、見つからなかった。彼の妻はスワミィの写真の前で泣き、「スワミィ、どのようにして耕作し、家族を養えばよいのでしょうか？」と祈った。彼女は涙を流して祈り、眠った。夢の中で、彼女はスワミィを見た。彼の両の前脚は棘の掻き傷で血が出ていた。スリ　スワミィは言った。「私があなたの牡牛を連れて来た時、私の脚に血が出ている訳が判るでしょう」彼女が全く驚いたことに、自宅の戸口に牛達が立っており、その体は掻き傷で血が出ていた。

ある日、スリ　スワミィはネロール近くのポテパレム村のペンネル河の砂地で、神聖火を燃やした。その地方の南瓜畑の農夫達は、畑の見張りをする必要がなくなったので、大変喜んだ。その日、雨がふり、河の水嵩が段々ふえてきた。農夫達は言った。「御老人！河の水が増えてきました。村に入りましょう」しかし、スワミィは動かなかった。翌朝、農夫達はやってきて、スワミィが神聖火の前の場所に以前の通りいるのを見付けた。

彼らはまた、土手の木の目印を見て、河の深さが２０フィートになっていることを知った。しかしスリ　スワミィの周り１０フィートの砂は乾いていた。農夫達はスリ　スワミィのヨガの力に仰天し、心からの帰依心でスワミィの前に平伏した。

エドゥル村のウッパラ　セシャンマは１９８１年に、両足の膝から足指までは腫れ、堪え難いほど痛んだ。彼女は何日間も食事も睡眠もとれなかった。医者もマントラもタントラも効果がなかった。彼女はゴラガムディのスリ　ベンカイア　スワミィのことを聞き、１９８３年にゴラガムディにやってきた。彼女は２年間眠れぬ夜を過ごしてきたが、その夜は痛みから解放され、安らかに眠った。３週間以内に、彼女の病気は完全に治った。その後、彼女はゴラガムディを毎週訪問するようになった。暫く後ある理由で、彼女はゴラガムディに来ることができなかった。そのため、彼女は家でスワミィの写真を礼拝することを始めた。それが始まった時、再び痛みと苦しみが始まった。彼女は祈った。「スワミィ、私はあなたのダルシャンを受けることが出来ませんでしたが、いつもあなたのことを思い、、祈っております。どうか、私に慈悲を与えて下さい」その夜、スリ　スワミィが彼女の夢に現れ、「マザー！頭の上の重しを除けて、脇に置いておきなさい。もしあなたがどこに滞在しても、私を呼ぶならば、それで十分です」翌朝、彼女は痛みにも拘らず、バス停まで歩いて行き、ゴラガムディに到着し、痛みがなくなった。このように、スリ　スワミィは、私達は彼のサマディで、サダナを行うべきであることを教えている。そこは、他のどんな所よりも効果があるのである。

上記の女の娘が酷い下痢で苦しんでいた。それは薬では治らなかった。彼女は、もし病気が治ったらスリ　スワミィのダルシャンを受けに行くと誓った。その日からずっと、彼女のその病気の症状はなくなった。彼女はスワミィにした誓いを守った。

ペヌバルティ町のポル　マスタナイアは、スリ　スワミィの初めてのアラダナ（年１度の礼拝）のために野菜を買い、リキシャで持って行こうとしていた。数ヤード進んでから、彼は店に袋を忘れたことを思い出した。そのため、彼はリキシャを道路上に止め、歩いて店に引き返し、数分で戻ってきた。しかし、そこにリキシャはなかった。彼は辺りや全ての街路を１時間も捜したが、見つからなかった。彼は全く失望し、沈んだ気持ちで腰を下ろした。どうしたらよいか、判らなかった。１時間半後に、リキシャの男が同じ場所に戻ってきて、手を合わせ心から悔い改めて、「私の心は少し揺り動かさせ、間違った方へ導かれました。少し進んだ時、私はリキシャを引く力がなくなったことに気付きました。どんなに努力しても、

駄目でした。そのため、私はあなたを捜して戻ってきました。どうかお許し下さい。済みませんでした」と言った。このように、スリ　スワミィは帰依者達が祈る気持ちがない時でも、彼らを守っているのである。

１９８３年、コラクティ　ナラシンフル　ナイドゥの牡牛が病気で苦しんでいた。彼らは牛を３日間スリ　スワミィのサマディ近くに置き、牛にウディを付けた。しかし病気の酷さはゆれ動き、完全には治らなかった。ある日、彼らは涙ながらに、「私達のスリ　スワミィへの信仰にも拘らず、彼は牛を治して下さらない」と感じた。

その夜の夢で、スリ　スワミィが明るく照り輝いた謁見の間の玉座に座っているのを見て、ナイドゥは行って、スリ　スワミィの前に立った。即座に、スリ　スワミィは、「あなたの牡牛は大丈夫です。行きなさい、アッヤ！」と言った。彼は目を覚まして、牡牛が多量の尿を出し、草を食っているのを見た。

１９８３年9月、トゥピラ　シャマラ（３才）はもう一人の子と遊んでいて、神聖火の猛烈な炎の中に落ち込んだ（当時、火は柵を設けずにサマディの正面にあった）。彼女は炎の中にばったり倒れた。彼女の両手は燃え差しと熱い灰の中に入った。すぐに、ナガイア（プジャリ即ち担当の聖職者）が駆け付け、彼女を火から救い出した。見ていた人達皆が全くびっくりしたことには、子供の髪の毛１本も華奢な掌も焼けていなかった。彼女の衣服も焼けていなかった。スリ　スワミィは子供達のために、何と素早く働かれたことか！

１９８４年、ゴラガムディのトゥピリ　ベンカイアは頭に衣類の大きな束を載せて、バスのはしごを登ろうとした。彼がその束をバスの屋根に放り上げる前にバスが動きだし、彼は８フィートの高さからアスファルトの道路に落ちた。バスは６０フィート進んでから止まった。皆は、ベンカイアは頭が割れて死んだと思った。しかし、驚いたことに、彼は衣類の束をもってバスの方へ走ってきた。妻のピチェンマだけが、夫がバスの事故で生き延びたのは、スリ　スワミィの恵みのお陰であることを知っていた。なぜならば、この事故の３日前、彼女の夢の中で、スリ　スワミィのサマディ　マンディールの聖職者ナガイアが、彼女の額にクムクムを付けにやってきたからである。ピチェンマは彼からクムクムを受け取ると、それをスリ　スワミィのプラサダムとして、自分の額に付けた。もしスリ　スワミィが彼女にこの夢のビジョンを与えていなかったら、私達世俗的な心の人々は、ベンカイアはスリ　スワミィの恵みによってではなく偶然に命取りの事故から助かったのだと思っただろう。このようにスリ　スワミィは、夢を通じて恵みを報せ、彼女のスリ　スワミィへの帰依を堅くしたのだ

った。

チェムドゥグンタ　アウデイアは麻痺のため寝台に寝ていた。彼は他人の介助なしでは寝台に座ることができなかった。彼は日雇い労働者だった。数百ルピー使ったのに少しもよくならず、彼は寝台に寝ていた。ある夜、彼は自分が以前スリ　ベンカイア　スワミィと知り合いであったことを思いだし、「もし私が誰の助けも受けずに、寝台に座れたなら、あなたのダルシャンに行きます」と祈った。彼が驚いたことに、翌朝誰の助けもなしで、座ることができた。そこで、彼は２人に連れられてゴラガムディに来た。彼らは彼をバスから寺院まで手で支えて連れてきた。３日たつと、彼は杖を使って歩けるようになった。３日目の夜、彼の夢の中で、スリ　スワミィは彼に、杖なしで歩くようにと言った。翌朝から、彼は杖なしで歩き始めた。現在でも、スリ　スワミィは帰依者達に、最も象徴的で、厳かで、神秘的なやり方で話しかけ、正しい方向に人々を導いている。

ゴヌグンタ　ラマンマ：彼女は悪霊に取り憑かれ、非常に衰弱した。彼女は食物を食べなかった。彼女は体の痛みに苦しんだ。医者も民間医もヤントラもタントラも効果がなかった。彼女はスリ　スワミィの噂を聞き、ゴラガムディにやってきた。その夜の彼女の夢で、１人の男が、「チ！ばかめ、お前はなぜここに来たのだ。出て行け」と言った。翌朝までに、彼女の健康は回復し、正常な食事をした。

サイナスは、ひっぱたいてハムサラジの悪霊を、１言でシャーマから毒を追い出した。アカルコタ　スワミィは同じやり方で、ある婦人の無知を追い払った。

１９８３年、彼女の牝牛が子宮の中で死んだ子牛を分娩できなかった。牛は瀕死の状態になった。ベテランの獣医がきて、言った。「牛は、もし子宮の中で死んでいる子牛が取り出されなければ、死ぬだろう」そして、彼は牛の子宮から死んでいる子牛を引っ張り出した。彼は全ての胎盤、羊水、その他胎児と一緒に出た悪いものを取り除き、その場をきれいにしなさい、そうすれば母牛に注射を打つことができるからと言った。彼女は言った。「私のスワミィは、私を子牛なしにはさせない筈です。３時間待ちます。それから、母牛から子牛を取り除けます」こう言うと、彼女は死んでいる子牛に濡れたタオルを掛け、子牛の上にウディを振り掛け、子牛の近くに座って黙って祈った。ベテランの獣医はその女性のスワミィへの深い信仰心を見て、呆然としていた。２時間後、子牛は動きを示し、目を開け、生き返った。獣医は彼女の信仰心とスリ　ベンカイア　スワミィの奇跡的力を褒めそやした。このような危機状態で、彼女はスリ　スワミィに誓った。「もし子牛が生きているならば、私はそれをスワミィにさしあげ

ます、又１日に１度ミルクもさしあげます」

３ヵ月が過ぎたが、彼女は約束を守らなかった。ある日、彼女の夢の中で、スリ　スワミィは言った。「マザー、あなたはミルクのことを完全に忘れている」翌朝、彼女はゴラガムディのスリ　スワミィにミルクを差し出した。

彼女の経済状態が非常に悪くなった。夫はベッドに寝ていた。彼女は夫の治療費捻出のために、牛を売らねばならなかった。子牛はミルクを飲んでいた。誰も子牛のいない牝牛は、買おうとしなかった。そのため、仲買人は子牛に５０ルピー、母牛に５００ルピーの値をつけた。そして、牛はその値で売り払われた。しかし、その貧しい女性は子牛をスリ　スワミィに差し上げると誓っていた。なのに、彼女はそれを売ってしまったので、せめてその金額をスリ　スワミィに差し出すべきであった。彼女はそれを怠り、５０ルピーを自分の経費に使った。６ヵ月後、全知のスワミィが彼女の夢に現れ、こう言った。「あなたは私に１５０ルピー支払わねばならない。ゴラガムディ　アシュラムに行って、あなたの親指の押印のある約束手形を作りなさい」彼女はすぐにそうした。スリ　スワミィは自分の貸し金を利子と罰金をつけて徴収しようとしたのだった。

「人は死ぬと灰になるが、私達が彼に来るよう命じると、彼はくる」とスリ　スワミィは言った。スワミィは彼のマハサマディの後でさえ、この言葉の正当性を証明する。

グンドゥボイナ　ナラサイア（アナパラパドゥ村）は２人の子を誕生後数日で失った。１９８３年、３番目の子の女児が、誕生して５日目から高熱と引きつけを起こした。女児はミルクも薬も吐き、ひどく弱った。７日目、彼女の熱は、目玉が上に上がり手足が動かなくなると共に下がった。皆は、この子も先の２人の子のように死ぬだろうと思った。皆は悲嘆の声やうめき声をあげた。

ゴヌグンタ　ラマンマが来て、その子を抱き上げ、スワミィに祈った。彼女はバサ（薬用植物）をもってきて、その汁を母親の乳に混ぜて、その動かない子の口の中に入れた。その子はそれを飲み込んだ。ラマンマは赤子を寝台に寝させ、家からもってきたウディを赤子の脚にふりかけ、口にも入れた。赤子は生き返り、スリ　スワミィに因んでベンカンマと名付けられた。

サドグルは脚不自由者に丘を跳び越えさせ、口のきけない人に全能神の栄光を歌わせる、と言われている。しかし、サドグル　スリ　ベンカイア　スワミィは、目の見えない人に視力の恵みを与えた時、もう少し多くのことをした。

クドゥムラ　ジャヤンマの家は、ネロールのストンハウスペット、ビジャヤラクシュミ　タルク（地区）の北に３０軒ほど離れていた。彼女は花を売って、４人の娘と１人の息子を養わねばならなかった。約３才の息子が、赤痢で苦しんでいた。３ヵ月間の同毒療法にも拘らず、幼子はいつも目を閉じてベッドに寝ていた。彼女は、息子は赤痢のせいで弱っていて目を開けないのだと思っていた。息子はくさい臭いを放つ骸骨のようになっていた。ある日、母親が幼子の顔に天花粉を付けていると、角膜液の固まりが左目からぽろっと落ちた。

眼科医は目を調べて、両目がウイルスに完全に冒されていると言った。両目は黒い部分がなく、白くなっていた。それに加えて、両目に小さな色素の白い固まりがあった。目の角膜液が最後の１滴までなくなっていた。眼科医は、子供をマドラスに連れて行っても無駄だろうと言った。悲しみに打ち拉がれた母親は、４日目に同じ医者を訪ねて、もう１度診察してほしいと頼んだ。医者は彼女の怠慢を叱り、送り返した。

隣人パッブ　セシャイアの助言で、彼女は子供をゴラガムディに連れて行った。彼女はスワミィに、２０ルピーの値段の樟脳を捧げますと誓い、５日間サマディで眠った。なんという驚異であろうか！次の土曜日までに、子供は視力を取り戻した。子供を２ヵ月間苦しめていた赤痢も、完全に癒された。このようにして、スリ　スワミィはその囲いの中にもう１匹の羊を入れ、愛と信仰心を授けた。視力は少しの薬も使わずに回復されたのだった。

ネロール地方、北ペンナル橋、ベンカテスワラ貯水池近くのラマナイアの妻イラガ　スリデバンマはこう報告している。

私の一人息子イレンドラ　バブは１９８９年のディワリ祭の時に３才だった。彼はその日は元気だった。ディワリ祭から、彼は５日間高熱に苦しんだ。５日目に両足の感覚がなくなり、脚を伸ばすことができなくなった。ネロールの医者は、ポリオだから治療はマドラスの病院に行くよう勧めた。治療のため、数千ルピーが使われたが、効果がなかった。用便をする時、彼の脚は、体の重みを持ち堪えられなかった。そのため、私達はその時には、息子の腋の下に手を入れて支えてやらねばならなかった。私は悲しみのせいで食事も眠りもとれなかった。神のみが、息子の窮状に苦しむ私の内心の苦痛をご存じだった。当時、私はスワミィのことを知らなかった。

兄は私に、バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィだけが息子を救うことができると保証した。私はスワミィの写真の前に平伏し、長いこと啜り泣いた。

心が我に返った時、私はスリ　スワミィに花輪とお米を捧げますと誓い、息子に脚を与えて下さいと熱烈に懇願した。その夜、夢の中で一人の医者が息子の両足に注射針を刺すと、医療器具を携えて立ち去った。翌朝、全く驚いたことに、息子は歩き始めた。私はその時の嬉しさを説明できない。

息子は歩いていた、しかし完全な歩き方ではなかった。私はもう１度スワミィに、涙を流しながら訴えた。ある日、夢の中で、私は老人が息子の背中を軽く叩いているのを見た。彼は、息子に自分の腕をもって歩くように言った。翌朝、息子は上手に歩き始めた。私は、ゴラガムディで４０日間奉仕し、誓った通り花輪とお米を捧げた。私は生涯スリ　スワミィに大きな恩恵を受けている。

信仰心は山をも動かす。グルや神へのそのような強力な信仰は、過去の数々の生涯で為された多大の功徳によってのみ可能である。ここで私達は、スワミィが私達を、彼の活動の広報の手段として利用していることを知るだろう。

テナリ　コダンダ　ラマイア（バドウェル　Ｐ．Ｏ．、マヌボル　マンダル、ネロール地方）は次のように書いている。

１９８６年、私は心臓の発作で昏睡状態になり、Ａ．Ｐ．ネロールのシンドゥラ私立病院に入院した。２日目に、私は意識を取り戻した。１週間の治療後、病状が深刻だったので、私は手術のためマドラスに送られた。マドラスへ行く途中、兄は私をゴラガムディへ連れて行き、私達はサマディ　マンディールに１晩泊まった。翌日、私はビジャヤ私立病院に入れられた。検査の後、ドクター　ガネシュは言った。「心臓を開く手術をしなければ、生きる望みはありません」そして彼は、すぐに８万ルピーを払うよう言った。私は率直に手術を受けることを断り、薬での治療を求めた。医者は１２日間薬で治療し、私を退院させた。彼は言った。「心臓弁の２つが完全に損傷しているから、取り替えが必要です。ひどい発作がいつ起こるかも知れません。あなたは緊急の場合に注射をする医者の管理が必要です。あなたはバスルーム付きの部屋のベッドにいなければならない。あなたは数歩も歩いてはいけない」

私は家に帰り、１週間に１度スワミィのサマディのダルシャンに行くことを始めた。私はスリ　スワミィに自分の全てを委ね、ゴラガムディのスリ　スワミィのダルシャンのために毎週１０キロの道を歩き始めた。最も驚くべきことは、毎週１０キロの歩行にも拘らず、医者の予測に反して、私に全く心臓の障害が起こらなかったことである。

３ヵ月後、私がマドラスに検査に行くと、医者は私が歩いていることを心配し、私の奇妙な振る舞いをひどく怒った。再び、彼は処方箋を与え、ベッドで安静にしているよう注意した。

この時までに、私は一層熱心になり、毎週歩いてゴラガムディのスリ　スワミィのダルシャンを続けた。私は、自分がスリ　スワミィの恵みによって、どんな心臓障害も起こらないことが十分わかった。そして、私は、その後どんな薬も飲みませんとスワミィに誓い、毎週ダルシャンのために歩いて行くことを続けた。

２ヵ月後、私はいなくなった牛の捜索のために、１日２０キロも続けて歩かねばならなかった。しかし、心臓の発作は全く起こらなかった。

２度目の検査のためにマドラスに行くと、医者は９０％よくなっていると言い、同じ薬と休息を続けるようにと言った。医者は、私が錠剤全てを見せて、ここ３ヵ月間薬を飲んでいないと告げると驚いた。私の薬なし休息なしでの治癒は、医者には不思議だった。彼は私がスリ　スワミィのダルシャンに行っていることを聞くと、彼も又スリ　スワミィの偉大な力のことを確信した。

２週間後、スワミィは夢の中で、こう言われた。「私はあなたを広報道具として利用する。隣接の村々の人々に、あなたの体験を報せなさい」そこで、私は自分の素晴らしい体験を述べた小冊子を配った。更に、私は自宅でアカンダ（２４時間連続）ナマジャパ、バジャン、ドゥニを４０日間、昼も夜も行った。私はその間、大勢の人にどのようにすれば食事を出すことができるか考えつかなかった。訪問者達全ては、各自の費用で自発的にあらゆることを行った。それは全て、スリ　スワミィの仕事の１部として、スワミィの恵みによって行われたのだった。私達はただ彼の命に従うだけである。

私達は、前世の誕生の因縁により、私達のサドグルに引きつけられるのである。

私の友人の妻は、出産の以来始まった、７年に及ぶ出血で苦しんでいた。彼女は非常に弱り、悲しみに打ち拉がれていた。夫妻はあらゆる名高い医者かかった。しかし誰もその病気の原因が分からなかった。ハイデラバードの専門医は、治療には途方も無い費用が必要で、もし治療を始めたら、どれくらい長くかかるか分からないと言った。もし途中で治療を止めたなら、全ての治療は無駄となるのだった。夫妻はその治療を始めるのがよいかどうか、迷った。

ある日、細君の友人の１人が彼女に、バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィについての小冊子を与えた。その冊子は非常に興味深かったので

、彼女は何度も読み返した。スリ　スワミィが彼女の心の中で話しかけた。彼は言った。「もしあなたがここにいるなら、どうして私はあなたを癒すことができるでしょうか？ゴラガムディにお出でなさい。私はあなたを癒しましょう」彼女は冊子の中のスワミィの写真に心からのプラナム（お辞儀）を捧げ、「スワミィ！私は過去７年間苦しんでいます。どうしてゴラガムディに行けるでしょうか？もしあなたが私に今日の夕方迄に、少しの癒しを与えて下さるならば、私はゴラガムディに行くと約束します」と懇願した。

全く不思議なことがその夕までに起こった。出血が全くなくなった。彼女は７年の間、出血がそのように完全に治ったことがなかった。その大きな喜びの中で、彼女達は祈りとスリ　スワミィの偉大さを話し合うことで一晩を過ごした。１週間様子を見て、彼女達はそれが明らかにスリ　スワミィの恵みによると確信し、ゴラガムディのスリ　スワミィのサマディマンディールを１０８回廻る礼拝を捧げた。こうして、彼女達は適当な時に、自分達のグルに会ったのだった。

トゴル　ベンカイア（鉄道郵便受け取り人で大統領から表彰された人：ネロール地方）の報告

友人が巡礼に行って、長いこと帰って来なかった。私はゴラガムディにきて、スワミィに、友人を家に帰らせて下さいと祈った。その夜、夢の中で、友人が私にすぐに帰ると話した。リシケシにいた友人はその夜強く家に帰りたいと感じ、家に帰ってきた。

１９８９年２月２日、私はプラヤグのクンバメラに旅した後、ゴラガムディに行った。その夜、私は夢で、スリ　スワミィが寺院のシータとラーマの神像にアラチを行っているのを見た。彼は私に、アラチの皿にコインを差し出すように言った。私が１つのコインを置くと、すぐにそれは２つの金貨に変わった。スワミィは私にマントラを教え、その意味を説明した。更に彼は私に、ドゥニの近くで眠るよう命じた。このように、慈悲深いスワミィは私に目標と道を教え、又いつも私を導いて下さっていることを示されたのだった。

ある日、私はスワミィのスプラバータ（目覚めの讃歌）のカセットテープを、私達のラーマラヤ聖職者に使って欲しかったのであげた。彼はスリ　スワミィのことを何も知らなかったので、カセットをかけなかった。スワミィは聖職者の夢の中で、朝の時間にカセットをかけるよう命じた。

１９９１年、私の背骨に何かが起こり、首が回らなくなった。ベッドに寝る時、どちら側にも横になることができなかった。ハイデラバードの専

門医は、手術が必要で、それには４・５万ルピーを必要とするだろうと話した。その手術は、患者が歩けない場合にのみ行われていた。そのため、私はゴラガムディにきて、スワミィに祈った。その夜、スワミィが私の頸骨近くに小さな孔を開け、私にその孔の近くを押すように言った。練り歯磨きのようなものが２度出た。翌朝には、私は元気になっていた。

スリ　スワミィは、私達が祈った時ばかりでなく、私達が呼ぶことを忘れている時でも、応えて下さる。夜も昼も、スワミィは私達の幸せを守るためにずっと注意を怠らない。曾て彼は「私は糸が切れない限り、あなたといつも一緒にいるだろう」と約束した。スリ　スワミィがここで言っている繋いでいる糸とは何か？「彼は全ての生き物の中にいる」との途切れのない思いと、そのような理解をもっての他の生き物達への私達の態度こそが、繋がりの糸である。スリ　スワミィのことを何も知らない人達が、スワミィによって救われた数多くの事例がある。その後、彼らはスリ　スワミィの堅固な帰依者になった。

ラッカクラ　クリシュナイア（薬剤師：クルル　Ｐ．Ｏ．カルボイ　マンダル、ネロール地方、Ａ．Ｐ．）は、息子をアポロ病院に入院させたが、次のように書いている。

１５才の息子スリニバスルは、健康で元気だった。１９７８年１０月１７日午後３時、彼は家でチャパティを食べ、頭痛を訴えて吐いた。彼は引き付けも起こした。すぐに、私達は彼をカルボイの病院に入れ、リンゲルと注射を打ったが、効果がなかった。翌日、私達は彼をネロールのラマクリシュナ　レディの病院に入れた。３日間の治療後、彼は息子をマドラスのアポロ病院に入れるようにと言った。私達が彼をマドラスに連れて行く迄に、息子は揺れのせいでも苦しんだ。精査と頭蓋エックス線検査の後、医者は私に、脳の手術のために大きな出費が可能かどうか尋ねた。私は、ある程度しか余裕はないことを訴えた。医者は私の同意なしで息子を退院させ、公立病院に差し向けた。私達は入院して数日以上は公立病院に居れなかった。私は息子をタクシーでネロールに連れ帰り、そこの病院に入院させた。

医者は、私達がそのようなひどい状態にある息子を動かしたことを叱り、ビサカパトナムかハイデラバードに行くように言った。ネロールに２日いた後、彼は１９８７年１０月２３日に再びアポロ病院に入れられた。２度目の精査とエックス線撮影にも拘らず、医者は病気の正確な診断を下すことができなかった。医者は、脳の手術が必要で、それには４万ルピーかかると言った。私は医者に、仮令７万ルピーかかっても、手術しないで薬で治療してほしいと頼んだ。その時でも医者は病気について特別な考えは

もっていなかった。

１９８７年１０月２６日、彼の祖父が息子の夢に現れて、大丈夫だと言った。実際は、彼はよくない状態にあった。次の夜、私の夢の中で一人の老人が、息子は大丈夫だと言った。しかし本当は、息子の状態に何の改善もなかった。日毎に、彼は弱って行った。次の夜、私の夢にバガヴァン スリ　ベンカイア　スワミィが現れ、「少年は大丈夫だ。彼を病院に入れておいてはいけない。すぐに家に連れて帰りなさい。私はペンナ　バドウェル（スリ　スワミィが多年修業をした私達の村近くの場所）にいるから、少年をそこに連れて来なさい」と言った。夢の中のスワミィは、私が１０年前にダチュールで見た時と同じ姿をしていた。

翌朝、全ての医者は会議を開き、このことについて討論した。最近の検査結果から、彼らは息子は全く健康であるとし、退院させた。その日から、息子は元気になった。私達は彼をスリ　スワミィの指図通り、ペンナ　バドウェルに連れて行った。１９８７年１２月と１９８８年１月に、息子はマドラスで検査を受けた。どこも悪いところはなかった。彼は１９８９年に、マドラスの公務員試験に合格した。

この重大な危機に、私はどんな神やスリ　ベンカイア　スワミィにではなく、医者に頼った。なぜならば、私は薬剤師だったからである。しかし、慈悲深いスワミィは１０年前にダチュールで捧げられたささやかな奉仕の故に、私を救助にきて、息子を救って下さったのだった。「仮令あなたが私を見捨てても、私はあなたを見捨てない」とスリ　スワミィは言われた。マハサマディの後でさえ、彼はなお生きており、その言葉に忠実である。だから、私が衷心から訴えたいことは、スワミィに解決して貰うような問題が何もなくても、私達はゴラガムディの彼のドゥニとサマジを礼拝すべきである、ということである。それは神への無私の奉仕となるだろう。全ての生き物の中にスリ　スワミィを見、敬意をもって振る舞いなさい。このことが、スリ　スワミィの永遠の守りを私達にもたらすでしょう。

ネロールの副財務官Ｖ．バラクリシュナイアの妻Ｓｍｔ．Ｖ．ビマランマは、スリ　スワミィの体験をこう説明している。私はスリ　Ｅ．バラドワジャ　ガルからスリ　ベンカイア　スワミィのことを聞いた。しかし、私はゴラガムディに行かなかった。１９８９年、私はスリ　スワミィにこのように祈った。「スワミィ！私は３度帰依心をもって『アバドゥータ リーラ』を読みます。この後、あなたは私の家を１２時半から１時半の間に訪問し、私が牛の糞を塗り、ランゴーリで飾っておくパリジャタ樹の下に座って下さい。そして、私が差し出す食物を食べて下さい」私は帰依の

読書を済まし、食物を用意して彼の到着を待っていた。午後１時になっても、彼は見えなかった。私は大いに落胆し、「スワミィ、私の落ち度は何でしょうか？私のパラヤナは無駄だったのでしょうか？」と言った。私の状態を見て、隣人が乞食達を呼ぼうとした。しかし、私はそれに同意しなかった。私がプジャルーム（礼拝室）に座るや否や、道路側のドアで「アンマ」と私を呼ぶ優しい声を聞いた。私は心配してそこに行った。膝まであるドバティ（男性用衣服）を着けた老人が、肩にタオルをかけてカキシャツを着て、一方の手に杖を持ち、他方の手にアルミの鉢をもって、食物を求めて立っていた。疑いもなく、彼はスリ　スワミィだった。私は喜びに震えた。私は狼狽しながら、昼食を食べて貰うために家の中に案内し、彼の前に立った。その嬉しい状態の中で、私は自分が地面を歩いているのか、空中に浮かんでいるのか分からない程、ぼーっとなっていた。

私がポンガルとご飯をもってくる迄に、スリ　スワミィはもう１度嬉しい驚きを与えて下さった。私は彼がそこにいると思っていた。しかし、彼は私が彼のためにランゴーリで床を飾ったパリジャタ樹の下に座っていたのだった。もし彼が普通の乞食であったならば、決してそこに座らなかっただろう。彼は私に、アルミの鉢に食物を入れて欲しいと言った。しかし、私の頼みで彼は葉の皿の食事を食べた。彼は手にギーをとって食べた。彼は２度食物の上で手を振ると、葉の皿の周囲に米で堤防を作った。１・２分して、彼は皿の中央部から少し食べると、両手を洗った。立ち去ろうとする時、彼は私に、「私にダクシナかククシナ（食費）はありますか？」と尋ねた。私はダクシナを差出し、彼の足元に平伏した。彼は私の頭に手を置いて祝福を与えた。私は至福を味わい、暫くの間この世のことが分からなかった。私は数日間そのような至福の状態にあり、その後徐々に通常状態に戻って行った。私は彼に別れを言いながらついて行き、道路上の家を３軒通り過ぎた。彼は私の目の前から姿を消した。

彼はパリジャタ樹の下に座り、全ての願いを叶え、１２時半と１時半の間に来たが、彼はスリ　スワミィに似た人物なのかもしれない可能性がある。彼はこのことを知っていたので、スリ　スワミィであることを証明するために、あのように姿を消したのだった。２つ目の事柄は、彼が私に与えた無上の幸福だった。私は生涯ずっとスリ　スワミィの恩恵を受けている。

ある時、スリ　スワミィは言った。「私は人の信仰心に応じて反応する」彼はまたこう言った。「私は太陽と月が存在する限りそこにいる」彼は、マハサマディの後も、そのことを文字通り証明している。

ドクター　Ｓｍｔ（スリマティ）．ナガマニ　Ｍ．Ｂ．Ｂ．Ｓ．（ポン

ディチェリ市）はこう書いている。

「私達夫婦は医者です。小冊子で、私はスリ　ベンカイア　スワミィのウディと神聖糸の超能力のことを読みました。私はゴラガムディに行き、それらを持ち帰り、ポンディチェリの家で毎日それらを礼拝しています。ある日、慈悲深いスワミィが夢に現れ、私を祝福して下さいました。彼はまた、私が男児を産むだろう、その子にスリ　スワミィの名に因んだ名を付けなさい、と言いました。

「私はスリ　スワミィの写真をもっていません。私は妊娠９ヵ月を完了し、出産しそうになりました。毎日、私はスリ　スワミィに世話をお願いし、彼の神聖ウディを飲みました。これは私の初めての出産だったので、私は大変心配し夜じゅう泣いて、やっと眠りました。

「その夜の３時に、スリ　スワミィは私に夢のビジョンを与えて下さいました。スリ　スワミィが私達の家の神々の写真の下の燃えている神聖火の中に座っていました。彼は、『なぜあなたは、私が一緒にいるのに恐れているのですか？』と言いました。その瞬間から私は大胆になり、１時間毎にウディを水で飲みました。スリ　スワミィの恵みにより、私は男児を正常分娩しました。私は彼をスリ　スワミィの命じた通り『ハリ』と名付けました。このことばかりでなく、必要な時にはいつでも、彼は夢で私の兄弟達にも指示を与えて下さっています。スリ　ベンカイア　スワミィはこの世の信仰深い帰依者達を助けて下さるマハビシュヌ神です」

走っている汽車の下に倒れた人が、生き残れるだろうか？

スリ　ベンカイア　スワミィの信心深い帰依者には可能であることが証明されている。

ゴラガムディ村のウダタ　ラマナイアはスリ　スワミィの祝福によってのみ、ＳＣ鉄道局に入った。彼はいつも感謝の心でスリ　スワミィのことを思い、指にスリ　スワミィの表象の指輪を嵌めている。

１９９２年６月１６日、彼は点検員として働いており、ベダヤパレムとベンカタチャレムとの間の鉄道線を点検しながら、ネロール方面へと帰りつつあった。マドラス行きの汽車がネロールへ呼び返された。そのため、その汽車はベダヤパレム方面へと進められていた。そのような時には、汽車は汽笛を連続で鳴らし、時速１５キロの速度でなければならない。しかし、運転手は汽車の別の仕事に没頭していたので、汽笛を鳴らさなかた。運転手は、線路を戻ってきているラマナイアが見えなかった。その時、別の汽車が別の線路を進んでいた。そのため、ラマナイアは自分の後ろに近付いてくる汽車の音が聞こえなかった。時速１５キロの汽車が背後からラマナイアにぶつかった。汽車がぶつかるや否や、彼は無意識的に「スワミ

ィ」と叫び、２本のレールの間に倒れた。汽車は彼の上を走り、彼のドバティやシャツ、下着を剥ぎ取った。線路の小石が彼の額と頬に小さな傷をつけた。右の踵の筋肉は削ぎ取られた。彼は鉄道病院に入れられ、運転手は逮捕された。１０日間で、彼は退院した。鉄道局は彼に、暫く有給休暇をとるよう勧めた。しかし、彼は健康だったので、休暇をとることはよくないと思った。そのため、多くの検査の後、彼は仕事に復帰した。

スリ　スワミィ自身が彼をこの危機から救った。でなければ、彼は死んだか障害をもつようになっただろう。鉄道局の幹部達は皆、走っている汽車の下に倒れて生き残るとは、全く驚異であると話した。彼と家族は、生活全体を通じてスワミィのお陰を受けている。

ティルパティ、サロジャニ　デビロード５－１－７５Ｂのスリ　カマサニ　チャンドラ　セカール　レディはこのように書いている。

１９９１年、私の顔に出来物がいっぱいできた。小さな膿も出来物からにじみ出た。私は膿を造る食物を避けたが、それでも出来物は膿を出し続けていた。顔中が堪らないほど痛かった。私は顔を水で洗うことができなかった。

マドラスの公立病院やバンガロールのドクター　Ｋ．Ｓ．プラカシュやティルパティのルイー病院やティルパティの他の３人の専門医にかかったが、少しもよくならなかった。私はあらゆるタントラや民間医にもかかったが無駄だった。このために、１万ルピー以上も使った。私は、顔を外に出すことができなかった。私は日が沈んでから、やっと自宅の外に出られた。堪え難い痛みのせいで、夜も眠ることができなかった。睡眠剤も効果がない程だった。私は自殺しようと決心した。この重大時機に、慈悲深いスワミィが救いに来て下さった。

私の家の向かい側に住んでいるＳｍｔ．サロジャンマは、スリ　スワミィの堅固な帰依者である。彼女は私にスリ　スワミィの油を付けるように渡し、私の首にスリ　スワミィの糸を着け、アビシェカ　テールタ（スリ　スワミィの水）をくれた。全く驚くべきことに、２日の内に、私の最大の痛みは軽減した。そのため、私は自殺を思い留まった。Ｓｍｔ．サロジャンマは、バリガラ　ナガイアに私が暫くスリ　スワミィの奉仕ができるようにしてほしいと依頼する手紙を私に手渡した。私はゴラガムディにきた時から、睡眠薬を飲まないでもぐっすり眠れるようになった。その上、痛みはすっかりなくなった。１ヵ月以内に、私の出来物は全部なくなった。スリ　スワミィは、私を自殺の瀬戸際から救い出して下さった。私は、生涯スリ　スワミィのご恩を忘れない。

ネロール地方、コブルの電気局のスリ　グッデイ　アンジャネヤルは、こう書いている。

１９８５年１２月、アニケパリ・バスが、私が乗っていた馬車（ジャトカ）にぶつかった。馬車の乗客達は皆あわてふためいたが、馬を含めて、誰も大きな怪我はなかった。何事かが私の背骨に起こった。背骨が大変痛くなり、ベッドに横になれなかった。マドラスやハイデラバードやグントゥールの医者も治療できなかった。私は殆ど１０万ルピーを使ったが、痛みは少しも軽減しなかった。このようにして、私は２年間苦しんだ。

とうとう医者は、私は長く生きられないと診断した。この診断のせいで、私は食事が咽を通らなかった。当然、家族も食が進まなかった。このため、私は少しは食べることにした。肉体上の苦痛に加えて、精神的苦痛が私を大きく苦しめた。その苦しみと情況は言葉では言い表わせない。この危機的情況に、ゴラガムディのスリ　ベンカイア　スワミィが友人達を通じて、彼の苦行の地、神聖アシュラムに来るよう私に伝言を送ってきた。

友人達の助言で、私はゴラガムディに行った。全く驚くべきことが、奇跡の中の奇跡が起こった。スリ　スワミィの恩寵が私に与えられた。私の痛みの７５％が、何もはっきりしたサダナをしないのに消え去った。誰もこの変化を信じられなかった。慈悲深いスワミィは、死の爪の中でもがいている私に新しい命を下さった。今や、私はスリ　スワミィのダルシャンを毎週受けている。痛みは９５％消えた。残りの５％はまだある。過去の悪いカルマから考えて、私は最後の時まで５％の苦痛を持って行かねばならないと思う。今、私は自分の務めに戻り、全てをうまく果たしている。私は毎日の振る舞いの中で、スリ　スワミィに、私をあなたの息子にして下さい、と祈っている。

ハイデラバード、バナシュタリプラムのＳｍｔ．ソバは彼女の珍しく且つ素晴らしい体験をこう書いている。

１９９２年、私の顔が皮膚病になった。顔中に黒い斑ができ、醜くなった。斑はひりひりした。斑は体中に広がった。あらゆる専門医にかかり、あらゆる薬を付けたが、効果はなかった。私の２人の兄弟は医者だった。彼らも私のために尽力してくれた。しかし、効果はなかった。この重大時機に、スリ　スワミィ自身が『クルパカルドゥ（慈悲深い方）』の小冊子の姿でやってきた。即ち兄のセシャギリ　ラオが私にこの小冊子の証言をどう思うか尋ねた。私はその帰依者達の体験を読んで、スリ　スワミィに「スワミィ！どうか私の悪いカルマを償い、あなたを深く信仰できるようにして下さい。私は、１週間あなたのウディの他は何も薬を使わないこと

にします」と祈った。私はスリ　スワミィのウディを体中に付けることを始めた。４日の内に、顔の斑ばかりか体中の斑もなくなった。スリ　スワミィは、彼がこのカリユガにおけるこの世の神であることを証明したのである。私は生涯彼に対する感謝を忘れない。

一人の無学な帰依者の体験は、真の帰依と心からの祈りはスリ　スワミィの心を涙で溶かし、祈りに応えてくれることを証明している。

ゴラガムディ（エルカラパレム）の住人N．スッバラマイアの妻ナルボイ　シッダンマは、結婚して８年たっても子供に恵まれなかった。医者やヤントラでの様々な試みも効果がなかった。彼女はタルナボイ村の聖者マスタン　バリのダルガ（埋葬所）に行った。しかし、彼女はそのサマディに長く留まって奉仕することができなかった。１９８２年、彼女は高熱でネロールのドクター　インディランマの私立病院に入れられた。１週間の治療にも拘らず、彼女は高熱から回復できなかった。嘔吐のため、彼女は食事がとれなかった。医者達は、彼女が死ぬと恐れ、家に帰した。彼女はスリ　スワミィの許に行き、池で沐浴してからスワミィの周りを廻ろうと願った。彼女は重湯も飲めなかった。彼女は人の手助けで、池で沐浴し、１度だけプラダクシナ（周りを廻ること）を行った。その夜、彼女はアンジャネヤ（ハヌマーン）寺院で眠った。翌朝から、彼女の高熱は下がり、普通の食事が食べられるようになった。

これと共に、彼女のスリ　スワミィへの信仰は深く根ざすようになった。彼女はスリ　スワミィから子供のことで保証が得られるまで、スリ　スワミィの許を去るまいと決心した。彼女は全ての人との接触を避け、樹木の下で自分で食事を料理しながらの生活をし、スリ　スワミィに奉仕することを始めた。彼女は目に涙を溜めて、絶えずプラダクシナを行った。

ある日の夢で、ゴラガムディの農夫達が、彼女の豚が作物を荒らしたと、豚を叩いていた。彼女は彼らに豚を叩かないようにと頼んだ。そのうち、スリ　ベンカイア　スワミィがその場にやってきて、「あなた達の災難はこの生き物のせいだ。私達はそれを生かしておいてはいけない」と言った。彼は、その豚を海に放り投げた。

３５日後も、スリ　スワミからの応答はなかった。悲しみに打ち拉がれた心で、彼女は食事も飲み物も摂ることができなかった。その日、彼女の夢の中で、スリ　スワミィの従者の一人K．ブジャイアが彼女に腕輪を与えた。「私はスリ　スワミィに３５日間仕えてきたけれども、スリ　スワミィは私に直接一言も話してくれない。私の人生は無駄だ」と思い、彼女は３６日目には食事ができなかった。その日、慈悲深いスワミィが彼女の夢に現れ、ベテルナットを与え、優しい声で、「私はあなたに子供を与え

た。だから、食事を食べなさい」と言った。

１年後、彼女は男児を産んだ。彼女はスリ　スワミィに因んだ名を子供に付けたいと望んだ。しかし、スリ　スワミィは彼女の夢の中で、子供には家族神に因んだ名を付けるように、そして、２番目の女児に彼に因む名を付けるよう命じた。今日でも、彼女はやってきて、心の中に問題をもって黙って座る。慈悲深いスワミィは彼女の夢に現れ、彼女の問題の解決法を話す。彼女のスリ　スワミィへの深い信仰を、誰が測ることができるだろうか？

真の帰依と涙が、スリ　スワミィの心を溶かし、彼らの問題を救った。パトナム　カダル　マスタンはネロール、Ｓ．Ｐ．バンガロウの側に住んでいる。１９８５年２月、彼は下痢になった。彼は自分の体験をこう報告している。

「マドラスの癌センターは、病気は癌であり直腸を直ちに手術する必要があると診断した。彼らは私に、病院に１０ヵ月入院しているように、さもなければ、死は免れないと告げた。私は死の方が病院でのあらゆる心配よりも気楽だと思った。そのため、私はネロールに戻った。私はオンゴルで民間治療を受けたが、効果がなかった。

「ある夜、私はスリ　スワミィが生きていた頃、私の哀れな状態に涙を流したことを思い出した。その夜の夢で、私はスリ　スワミィがビロードの布で私を扇いでいるのを見た。私は夢から目を覚まし、実際にスリ　スワミィが私のベッドから立ち去るのを見た。全く驚いたことに、私は誰も呼ぶことができず、スリ　スワミィの方に走った。翌朝、下痢は完全に治っていた。１週間以内に、私は健康を回復した。２年後も、私は健康に恵まれている。私は生涯スリ　スワミィのご恩を忘れない」

ハイデラバードの銀行員ラクシュミナラーヤナの妻Ｓｍｔ．Ｃｈ．シータ　ラマラクシュミは、彼女の命がスリ　スワミィによってどのように救われたかをこう説明している。これは、スリ　スワミィは私達が助けを求めて祈る前でも、私達を守って下さる１例である。

１９９２年１月、夫は銀行検査のためにドゥルガプールに配置された。それ迄１５日間、私は高熱に苦しんでいた。私はホテルで寝ていた。夫は夕方にやっと仕事から帰ってきた。私達は医者を３度変えたが、よくならなかった。その日、私は大変弱ってベッドに寝ていた。私は自分が夢を見ていたのか正気にあったのか分からない。痩せた老人が私のベッドの側のマットに横たわっていた。私は彼に、「どうしてあなたはここにいるのですか？」と言った。彼は、「あなたが独りぼっちなので、私はあなたの友達としてここに横になっているのです」と答えた。

次の場面では、私はどこかに行こうとしていた。ヤーマダルマ　ラジュ（死神の王）が玉座から下りて、私の方に来ようとしていた。「あなたはどこへ行くのですか？」と私は尋ねた。彼は、私の所に行こうとしていると答えた。次の場面では、ヤーマ（死神）の２人の従者がヤーマパサム（死者を縛る綱）をもって私に近付いてきた。私の側に寝ていた老人は彼らを止めると、「お前達はどこへ行こうとしているのか？」と尋ねた。彼らは、私を連れて行こうとしていると答えた。老人は言った。「もしそうなら、まず私を連れて行き、それから彼女を連れて行きなさい」と言った。ヤーマの従者達は、その老人を足先から首までヤーマパサムで縛り、引きずった。彼らは全力で引っ張ったが、疲れてしまい、どうすることも出来なかった。ついに彼らは謝り、立ち去った。ヤーマパサムの摩擦で、老人の肩の周りに傷ができていた。彼の傷にココヤシ油をぬろうと老人に近付くと、彼は、「あなたはこれに耐えられないだろうから」と言った。そして、彼の姿は消えた。私は眠りから覚めた、高熱はなくなっていた。このように、スリ　スワミィは私が祈らないのに、私の命を救って下さった。

ある日、Ｊ．Ｃ．ペンチャライアの母親がスリ　スワミィの祝福を受けるために元気な息子を連れて行った。スリ　スワミィは言った。「私達は彼に３百万のプニヤム（徳）を与えた。彼は偉大な人となる」と言った。そのように、彼は息子に祝福を与えた。現在、彼はアラビアにいて、夫婦で１ヵ月２万５千ルピー稼いでいる。たとい私達が何も問題をもっていなくとも、スリ　スワミィの神聖ドゥニ（火）にココヤシを捧げ、私達の将来のために彼の祝福を受けるべきである。

私達が正しい方向で、自分達の全ての時間を役立てる時、スリ　スワミィの直接の祝福を受けることができる例が、ここにある。

Ａ．Ｐ．ネロール地方のマヌボル村のナッテティ　ラクシャンマは、夢でヤーマの従者達を見て、夜も昼も恐怖に捉われた。彼女はいつも誰かが側にいなければならなくなった。彼女はスリ　スワミィのサマディのダルシャンを受けにゴラガムディに来た。彼女は朝と夕、５回プラダクシナ（周囲を廻る礼拝）を行い、雑談しながら時間を過ごした。彼女は１ヵ月間このようにしたが、状態に改善はなかった。スリ　スワミィの恵みにより、彼女は私（著者）に助言を求めてきた。私は彼女に３つのことを守るよう強く言った。即ち、１）彼女は１日中厳密に沈黙を守るべきである。２）毎日１０８回のプラダクシナを必ず行う。３）彼女は１日中ナマジャパ（名を唱えること）を続ける。

私達はこれらの助言の効果を想像することはできない。彼女は朝夕１０

８回のプラダクシナを行い始めた。彼女は他の２つのことも几帳面に実行した。３日目の午後１時頃、１２才の少年がサマディ　マンディールで彼女にウディを渡し、即座に姿を消した。疑いもなく、その少年はスリ　スワミィである。なぜならば、その瞬間から、彼女は恐怖心と他の心配がななったからである。このように、スリ　スワミィは３日以内に、彼女の誠実なサダナに応えられたのだった。

スリ　スワミィの慈悲は火のように私達の罪を燃やす。私達のサダナは空気に似ている。空気がなければ、火は何物も燃やすことはできない。

次の体験は、上記の陳述を証明している。

自分の名の公表を好まないある帰依者が、体中陰部までも出来物ができて苦しんでいた。彼女はその痛みのせいで、食事も睡眠もとれなかった。手足を動かすこともできなかった。床を這うこともできなかった。彼女は便通の障害を避けるために、流動食のみで生き伸びていた。医者や民間医やタントラも効果がなかった。彼女の世話は、夫だけしかできなかった。とうとう、夫は彼女をタルプール村のナラーヤナダス　アシュラムにいたスリ　スワミィの許に連れて行った。スリ　スワミィは彼女に、健康に戻るために、１週間自分の許にいるよう命じた。

彼女のサダナとその間に彼女が苦しんだ体の痛みが、スリ　スワミィの心を溶かした。彼女は２個のガンニー袋を持っていて、それを使って動いた。そのようにして、彼女は日夜休みなくスリ　スワミィの藁葺き小屋の周りをプラダクシナし始めた。それは暑い夏だった。彼女は水浴をしなかった。彼女は埃まみれだった。私（著者）は彼女にガンニー袋の上に座るように言い、彼女を連れて小屋の周りを回ろうとした。彼女は他人の助けを受けることを罪として、私の申し出を断った。

３日目に、私がスリ　スワミィのダルシャンを受けに行った時、自分の目を信じることができなかった。今や、彼女は普通の人のように歩いていた。彼女は、「昨夜、私はガンニー袋の上で少し眠りました。私が目を覚ました時、痛みは体中の出来物も一緒に消えていました。それからは、他の普通の人と同じように歩くことができます。私はスリ　スワミィに大きなお陰を受けました」と話した。このように、彼女は目に一杯涙をためて、感謝の気持ちを表していた。

クルヌール地方、アドニのテルグ語教師スリ　N．スリー　ラムル　M．A．（人文科学修士）、B．O．L．はこう書いている。

１９９１年、スリ　M．K．アナンダ　ベンカテスワルルが私に『アバドゥータ　リーラ』の書を渡し、読んでみるように言った。それを読んで

から、私はスリ　スワミィに、「私は、あなたがマハサマディの後でも非常に多くの人々を助けていられることをこの本で読みました。もしそれが本当ならば、どうか私に体験を与え、ゴラガムディのあなたのマハサマディに連れて行って下さい」と祈った。私の夢の中で、友人が私にスリ　スワミィを勧めていた。スリ　スワミィはレスリングの試合のレスラーのように、私の方にやってこようとした。私は大変びくつき、スリ　スワミィに、「スワミィ！私は高血圧と心臓病のある糖尿病者です。私は１発殴らってれても死ぬでしょう。どうかぶたないで下さい」と祈った。

翌朝、私は夢のことをスリ　アナンダ　ベンカテスワラルルに話した。彼は私に、スリ　スワミィは私の病気を脅しているのだと話した。

翌日、私は自分の血糖値と血圧を調べた。全く驚いたことに、その値は過去３年間なかった値だった。私は何でも食べている。スリ　スワミィのお陰で、私は何も薬を飲まないでも健康である。

パドゥーカ（偉大な聖者の木製の履物）の呼び声：パドゥーカはダッタ信仰の伝統では最重要物である。私達の国でも州でも、ダッタ　パドゥーカは大切にされている。ダッタ神の化身ナルシンハ　サラスワティが暫く住んでいた地ナラソババディでは、そのパドゥーカは（人間の手によらず）自然に出現した。この化身の聖地ガンガプールでは、彼のパドゥーカは、マット（寺院）に安置されている。又、スリサイラムのアッカ　マハデビ洞穴にも、彼は自分のパドゥーカを置いた。ダッタ神の第４の化身スリ　アカルコタ　スワミィは自分のパドゥーカを最愛のチェラ（弟子）に与えた。それらのパドゥーカはダッタ神の直接的形見である。ダッタ神の完全な化身サイババは、自分の足に平伏しているある帰依者に、「この足は永遠であり、最も神聖なものである。あなたはそれに頼ることで目標に到達するだろう」と言った。その理由で、シルディでは今日彼の最初の住まいであるニームの木の下と、殆ど５０年間の住まいだったドゥワラカマイ　マスジッドには、彼のパドゥーカが写真と一緒に祀られている。木曜日毎にダッタ神の全ての聖地で、パドゥーカは輿に載せられて、行列が行われている。スリ　スワミィはそれらのパドゥーカに対してのみ、大きな声をあげた。これもまたグルの伝統である。このように、普遍的なグルのパドゥーカは、スリ　スワミィにとって非常に大切である。彼はそれを誰にも渡さず、長い間胸に抱きしめていた。彼がそのように欲しがり、それほど長く胸に抱いたものは他にない。

そのため、彼は私達に、彼もまたダッタ神の伝統の信奉者であり、私達帰依者も忠実にパドゥーカに頼るべきであると説いた。もし私達がそれに

頼らないなら、彼は他に何をすることができるか？「もし彼らが行くことを望むならば、私は彼らを行かせるだろう」が、彼の大原則である。彼はシルディのサイナスの兄弟であるので、それらパドゥーカを大変好むのである。

マハサマディの前、彼はしばしば、「太陽が沈もうとしている」と大きな声で叫んだ。彼は一方で私達に、彼の直接的存在が終ろうとしていることに気付かせ、他方では、私達の寿命もまた時々刻々短くなっていることに気付かせたのだった。ある時、彼は自分のベッドシーツと衣類を数えて、グラバイアに与え、それらを注意深く保管するようにと言った。１９８０年、レンガを積んだトラックがサマディ　マンディール建設のために、ある夜やってくることになった。彼は、現在のサマディ　マンディールが建設される場所に、従者達全員が寝るよう決めた。さらに彼は、「ここに、ペンチャラコナの大きさのマスジッドができるだろう」と言った。私達はもし彼のパドゥーカの意味を理解していたならば、この言葉を理解できるだろう。私達の伝統即ちモスリムの伝統では、私達は聖者のサマディをマスジッドとは決して呼ばない。私達の国では、マスジッドと呼ばれる唯一のマンディールは、シルディにあるだけである。それはモスリムにとってのマスジッドであるばかりでなく、ダッタ神伝統のサイナス神の住まいでもある。彼の伝統はまたスリ　グル　パドゥーカの伝統だった。彼はスリ　ベンカイア　スワミィの兄である。無数の帰依者が、スリ　スワミィは、全てのサドゥ（聖者）と一体であるスリサイの姿の１つであったことを証言している。

サマディ　マンディールの建設とスリ　スワミィのマハサマディの後、スリ　スワミィの誘導のせいで、人々はシルディ　サイナスの写真をスリ　スワミィの写真と共に安置している。そのことは、そこがスワミィの住まいであるばかりでなく、サイナスの住まいでもあることを意味している。これらのことは、スワミィの意志はサマディ　マンディールにスリ　ダッタ　スワミィのパドゥーカとスリ　シルディ　サイの大理石像が安置されることであることを、示している。その伝記は、サイ帰依者である私によって書かれ、その資料はもう一人のサイ帰依者ペサラ　スッバラマイアによって集められた。スワミィの許に彼がいることがこれを証明している。これら２人の聖者の類似は、彼らのリーラにも見られる。スリ　ベンカイア　スワミィは紙切れに、「私は全ての生き物の中にいる」と書いて与えた。しかし彼はこの真理を、この世の生涯の最後に、口頭で宣言した。しかし、彼の兄弟サイナスはこの真理の体験を、生きている間もマハサマディの後でさえも与えている。全ての生き物の中にいるもの（霊）は、只

１つである。だから、スリサイとスリ　スワミィは別々ではない。それら２つの姿は、ダッタ神の２つのパドゥーカなのである。ダッタ神の全ての帰依者は、それらのパドゥーカを胸に抱き締め、且つ心の中に安置している。だから、スリ　スワミィはそれを胸に抱き締めた。彼は長い間それを恋い焦がれ、声をあげて求めた。

マハサマディの２ヵ月前、スリ　スワミィは喘息に苦しみ、「私は死のうとしている」と紙に書いて宣言した。彼の意識がなくなった時、皆はスリ　スワミィは肉体を脱ぎ捨てようとしていると思った。しかし数時間後、彼は起き上がって真っすぐ座り、「上界の神々は私が行くのを許されなかった。神々は私がもう暫くこの世にいて、それから行くよう望まれた」と言った。この点でも、彼は７２時間肉体を去っていて生き返り、神々が自分がこの世を去ることを許さなかったと言った兄弟スリ　サイナスと似ている。

現在、毎日数百の人々がスリ　スワミィのダルシャンを受けている。彼らは悪霊や病気を取りのぞき、訴訟問題を解決してもらう。ある子のいない夫婦は、スリ　スワミィの祝福で子供を授かった。人類のあらゆる問題が、ここでスリ　スワミィのダルシャンによって解決されている。遠方の帰依者達は書物と友人達の言葉を通してスワミィと接触することができる。スリ　スワミィはある人々には、夢の中でゴラガムディのスリ　スワミィの許に来るよう指導する。彼は数多くの方法で、自分の顕現の仕事を行っている。スリ　スワミィ自身の手で灯された神聖火は、今日でも燃やされており、永久に燃え続けるだろう。彼のサマディには２つの燃え続けるオイルランプがある。１つはサマディに、もう１つは彼が肉体を去った藁葺き小屋の中にある。主な収入はフンディ（賽銭箱）と直接寄付の受領書からである。それは１ヵ月に１０万ルピー以上ある。サンスタン（聖所）は１日に２度の無料の食事を、全ての訪問者に提供している。土曜日には、数千人が１２時から午後５時の間に食事の世話を受ける（土曜日の夜は有料の食事）。スリ　スワミィに関する７冊の本がサンスタンによって出版されており、もっと多くの書が他の人達によって出版されている。

私は読者諸兄に訴えたい。スリ　スワミィの超能力とこの顕現での彼の活動の有効性を諸兄自らが見出し、スリ　スワミィの忠実な帰依者となり、誕生と死の輪廻からぬけだして下さい。今日も、スリ　スワミィはスブラ　マルガ（神聖な道）へと誠実なサダカ（求道者）達を導いている。あらゆる階級や宗教の人がスワミィの帰依者となっている。彼はあらゆる人を、その人々自身の宗教の原則に基づきながら導く。彼は決して人々の宗

教やグルや神を変えるよう要求しない。スリ　スワミィのダルシャンを受け、祝福を受けられんことを。

オーム　タット　サット　シャンティ、シャンティ、シャンティ
（オーム、それは真理なり、平安であれ、平安であれ、平安であれ）

17、スリ　スワミィの神聖火に仕え、祝福を受けなさい

スリ　スワミィは生涯を通じて、食物や飲み物その他の何ものよりも、神聖火を愛した。このドゥニ（神聖火）に、ココヤシ、線香、薪などを捧げましょう。

ゴラガムディで、ある子供が道に迷い、４日間家に帰らなかった。母親は目に涙を浮かべてスリ　スワミィに、「私の毎日のパラヤナとナイベディヤの供物に何かあったのでしょうか？息子を食事もなしで、暑い日差しの下で苦しめるとは、あなた様は正しいのですか？」と訴えた。すぐに、彼女は意識を失ったようになり、神聖火とその中の永遠のジョーティ（光）を見た。夕方までに、息子は無事家に帰ってきた。このように、スリ　スワミィは私達に、今も彼が神聖火と永遠のジョーティの姿でいて、私達全ての捧げ物を受け取っていることを確信させた。スリ　スワミィに奉仕し、祝福を受けましょう。

１８、帰依の道のための生活信条

1、スリ　スワミィは私達に口をあけないよう求めた。少なくとも、デークシャ（神に願い事をする）の間は、沈黙（モウナ）は不可欠である。食物や飲み物のような是非必要な場合以外は、私達は口、耳、心での沈黙を守るべきである。私達はスリ　スワミィのことだけを思って、時間を過ごすべきである。
このためには、パラヤナとリーラの要旨を繰り返すことが役立つ。

2、日中に眠ることを避けることが不可欠である。このためには、最少限の食事量が重要である。

3、虚偽と喧嘩を避けること。

4、神聖火に薪、ココヤシ、ギー、線香、その他をナマジャパと共に捧げること。

スリ　スワミィは慈悲を示したけれども、私達の悪いカルマはやってくる。だから、私達はそれをナマジャパを唱えて無くしなければならない。「もし私達が深い鍬のような傷をもつ運命にあるならば、強烈なナマジャパで、それは小さな刺し傷になるだろう」

5、プラダクシナを行う：1日に108回以上。

6、スリ　スワミィの伝記のパラヤナは最も大切である。それを聴くことが、字の読めない人には望ましいことである。

7、完全な信仰と忍耐が不可欠である。

19、バジャナ（バジャン）

：霊的バジャンを歌うことで神との一体化を求めること

無数の偽グルとサドグルを見分けることは、非常に難しいことである。サドグルの真の状態を理解することは、生易しいことではない。もし私達が大きな献身とバクティとシュラダをもっていなければ、サドグルに不動の信仰を持ち、その指導に従うことはできない。もし私達がその指導に従って行動しないならば、どんな恩恵も受けられないだろう。サドグルの存在と奉仕によってのみ、私達は献身とバクティとシュラダを成長させることができる。もしサドグルの存在に直接接することができないならば、その伝記のパラヤナは、直接の接触と等しいだろう（ラマナ　マハリシの言葉）。サドグルに接触するとかパラヤナを行う能力は、どのようにすれば得られるのだろうか？

私達のプニヤの力を増やす行いとは、どのようなものだろうか？「デバ（神）、ドゥウィジャ（神実感のために努力する人）、グル、プラグニャ（聖典を勉強する人）のプジャナム（礼拝）」とナマジャパが、私達のプニヤを増やすための最善のサダナである。

だから、スリ　スワミィはいつもナマジャパとバジャナを奨励した彼自身はエカタラを演奏しながら、マハ　マントラ「オーム　ナラーヤナ　アウディ　ナラーヤナ」をよく歌った。時折、彼は帰依者達にタットワ（神の原理）を歌うことを止めさせ、「オーム　ナラーヤナ　アウディ　ナラーヤナ」のマハ　マントラを歌うように言った。

スリ　スワミィは心の底からの帰依と愛を込めて神の名を歌う人達を祝福した。ある日、ボンタ　ラジュ　パレムの帰依者達が、足にくるぶし飾りを付け、手に楽器をもち、有頂天になってバジャナを歌っていた。見物人達皆は、神のことを忘れ、誰が上手か決めることに没頭した。バジャナプログラムの出演者皆は、観衆を自分達の演技に引き付けることに熱中し

た。

暫く後、スリ　スワミィは無邪気に、「彼らは何をしているのかね？」と尋ね、声を出して笑った。私達は、なぜスリ　スワミィがそのように笑ったのか理解できる。だから、私達は神に対して、心からの帰依と愛をもってバジャナに参加し、スリ　スワミィの恵みを得たいものである。

２０、スリ　スワミィの言葉

１、空腹の人に（げっぷをしている人ではなく）、食事を施しなさい。

２、もしあなたが十分な信仰をもってここに来るならば、あなたが何を望もうと、それは叶えられるでしょう。

３、ベンカイアは全ての生き物の中にいることを、当然のことと思いなさい。

４、たといあなたが私から離れて行っても、私はあなたから離れない。

５、マイソールのマハラジャ（王）のダルシャンを受けて得るものは何ですか？あなたは、あなたが蒔いたものを刈り取るでしょう。

６、私は、人の信仰に応じて応答するでしょう。

７、私は、自分の小羊を、それが千匹の群れの中にいても選りだす。

８、全てに対する平等な愛が、あなたが神を実感できるようにする。

９、私は、私の名で１口の食物をもってきて与える全ての人の幸福の責任をもつ。

１０、ある帰依者がマントラを求めた時、スワミィは言った。「マントラもタントラもない。ビチャラ（識別力）をもって、前進しなさい」

１１、もし聖職者がダルマを守っても、それは立派なことではない。もし世帯主がダルマを守るならば、それは立派なことである。

１２、私達は、たとえ利子を得るために金を貸す場合でも、ダルマを守らねばならない。

１３、私達は、気高さと質素とサドグルへの奉仕を成し遂げねばならない。

１４、あなたが４分の１ルピー盗むなら、１０ルピーの損失を招くだろう。

１５、もし私達が利益の分け前を欲しがるのならば、その罪も共有すべきである。

１６、他人に立ち去るよう求めるよりも、私達自身の方が去る方がずっとよいことである。

１７、もし欲張りの気持ちが無くなれば、全てのことが無くなる。
１８、もしあなたが、私との糸が切れないように注意しているならば、私はずっとあなたと一緒にいるでしょう。

２１　グル　スマラナ：グルの思い出

私の父エッキララ　アナンタチャリヤはベーダ、ヨガ、アユルベーダ、占星術に精通していた。私の兄もまたその分野で父の写しだった。１９５７年、私のためのウパナヤナム（聖糸の儀式）を行うことが決められた。父への敬意から、ビジャヤワダの精通した占星術師達は儀式のための縁起のよい日時を決めた。私の兄がグントゥールからビジャヤワダに到着するまで、私が大変可愛がっていた兄の次男は日射病で苦しんでいた。丁度私のウパナヤナムの時に、その少年は息を引き取った。それと共に、父と兄の霊的力と占星術師達が定めた縁起がよい時という力は、少年の命を救うことができなかったことで、私にとって意味のないものとなった。事実、神と霊性の存在そのものが、私にとって大きな疑問となった。

１９６１年まで、私は熱心に数多くの書を読んできた。私はこの問題点について深く考えた。多くの人達と議論もした。私は失望してその努力をあきらめ、毎日深く考えることを始めた。ある日、全く突然、私の思考はまとまった。頭脳に大きな平安が訪れた。もしあらゆるものが神の意志に従って進行するのであるならば、私の霊的向上のために私が努力する余地はない。もしそうでなく、私が自分自身を高めなければならないのである

ならば、そこに神の役割はないことになる。このような思いは、私の前進にとって妨げだった。

そのような状態で、予想もしないで、１９６３年年２月８日に次兄と一緒に、シルディに行った。私はそこで素晴らしい経験をした。それと同時に、私はマハトーマ（偉大な魂）に会うことによって沢山の霊的効果があることを確信した。そして、名高い聖者達に会って祝福を受けようと決心した。永遠に生き続けている霊であるスリ　サイナスが、私にそのような機会を与えてくださった。グントゥールのスリ　ランガンナバブ　ガル、マザー　アーナンダマイ、チバタムの隠遁聖者、パカラパティ　グルブガル、ラカディ　ババ、カンチのサンカラチャリヤ、パラドシンガのマザー　アナスーヤ、チェーララやシュリーカラハシュティやクッダフその他に住む聖者達が、私がサイナスの恵みによって訪れることのできた聖者達の幾人かである。私は全ての聖者と一体であるサイナスのことを思いながら、聖者達に会い、特別な祝福を受けた。別の方法でも、私はスリ　サイナスの恵みを経験した。非常に手に入れ難い霊的書物の多くが手に入った。それらは私の考え方と着想を改正しつつある。バガヴァン　スリ　ベンカイア　スワミィは、私が会ったそのような聖者の１人である。

これらの旅で、私は数多くのアシュラムと寺院を訪問したが、シルディで受けた程の永続する平安は得られなかった。１９６９年、私はスリ　サイナスの命に従って、英語講師としてインド、アンドラ・プラデシュ州ネロール地方ビジャヤナガールにきた。１９７２年から私の家でサトサング（集会）がもたれた。これに参加していた全ての人が数々の仕方で、スリ　サイナスの恵みを経験しつつあった。

ある日、私は言った。「もし私達全員がサトサングとバジャンを心を込めて行うならば、きっと皆がシッダ　プルシャのダルシャンと祝福を受けると確信しています」この点について、どのようにしてババが私達に祝福を与えたかの１例を紹介したい。

１９７１年のシバラトリの日、私はムンミディヴァラン　バラヨギのダルシャンを受けるために出掛け、ランガンナバブ　ガル（聖者）に会うためにグントゥールで下車し、彼をビジャヤナガールに連れてゆこうとした。私の願いを聞いて、バブ　ガルはこう言った。「私のグル、コダンダ・ラマスワミィの許しを受けてからでなければ、行けません。でも、師はそう容易には承知されないでしょう。何度も多くの人が私をハイデラバードとマドラスに連れて行きたいと、訪れました。でも、スリー　ラーマはお許しになりませんでした」

私はムンミディヴァランを出発した時、「サイ！あなた様は全ての聖者

とサットプルシャ（超人）の中にいられます。だから、どうかあなたのお恵みによって、バブ　ガルがビジャヤナガールに来るようにして下さい」

帰りの旅でバブ　ガルに会った時、彼はこう言った。「アイッヤ！スリ　コダンダ　ラマスワミィが私に行ってよいと許可を下さいました。更に師は、『ランガンナ！ビジャヤナガールの人達は帰依心をこめてバジャンを行っている。だから、あなたは行って、その人達に会って帰りなさい』とおっしゃいました」彼は私と一緒にビジャヤナガールに来て、３日間滞在し、私達全員に会った。彼は私が購入した区画にきて、美しいマンディールがそこにできるだろう、またアシュラムもできるだろうと話した。彼の祝福の通り、ビジャヤナガールには奇跡的にサイババ寺院ができあがった。

１９７５年のシバラトリ（シバ神夜祭）の日、私は毎日の礼拝を終えた時、不図ゴラガムディ村のスリ　ヴェンカイア　スワミィに会いたい思った。私の生徒でスリ　スワミィの帰依者であるチ　ラマクリシュナ　レディに一緒に行こうとさそった。ラマクリシュナは、「行く前に、スリ　スワミィがゴラガムディにおられるかどうか調べてみる必要があります。なぜなら、師は隣村をよく訪問されているからです」と言った。午前８時３０分きっかりに、私はスリ　サイに線香（バティ）を捧げ、出発する前に、「サイ、あなた様は全ての聖者の姿の中にいられます。私はスリ　ヴェンカイア　スワミィの姿のあなた様のダルシャンを受けに行こうとしています。どうかスワミィの尊い御前で祝福が受けられるようにして下さい」と祈った。

１０時頃、私達はゴラガムディ行きのバスに乗った。バスの中でチ　ラマクリシュナ　レディはスリ　スワミィのエカ・タラ（お守り）をもった行者を見付け、スリ　スワミィのことを尋ねた。行者（サドゥ）は言った。「スリ　スワミィは４日前にネロールにおいでになり、ダッタムットに滞在されました。師はそこに１０日間滞在すると約束されました。そのため、師の神聖火のための薪も、帰依者達によって用意されました。でも、今日午前８時３０分に突然、師はすぐにゴラガムディに行きたいと言われました。そこで、師はトンガ（馬車）でゴラガムディに行かれました。半時間前に、師はゴラガムディに到着されました」

数分内に、私達は師の許に着いた。師の訪問は突然であったので、誰も師のダルシャンを求めてそこに来なかった。私とチ　ラマクリシュナ　レディは師の許で６時間非常に平安な時をすごした。スリ　スワミィは私達両人とビジャヤナガールのサッツァンを大いに祝福して下さった。

スリ　サイはスリ　ダッタ（最高３大神）の完全な化身である。スリ

サイがスリ　スワミィもまた彼の自身であることを私のために証明して下さるよう、私は願っている。時折、私はスリ　スワミィのダルシャンを受けた。そして私達のサッツァンの全ての人がスリ　スワミジを訪問した。

２２、サダナの秘訣

私達は世俗的な物事を重視すべきかそれともサダナ（霊的修業）を重視すべきかは、全ての無神論者の共通の疑問である。世俗的な物事を重視する人々は、境遇のせいで自分達が世の中に拘束され随分苦しんでいると思っている。老齢になればパラマルタ（霊的目標）を達成できると思っている人達の場合、そのヴァサナス（願望）は日毎に強まり、彼らは霊的目標に向かっている。もし人生の始めから霊的目標を重視する人がいるとすれば、その人は世俗上の責任と義務を忘れ、困難に直面し、妻や子供達が自分の霊的目標達成の邪魔になると思う。彼は修業の名目で自らを苦しめ、無執着（バイラギャ）の名目で妻子を無視する。これは人生の謎である。

社会は、全ての人が義務を自覚し、他者達のためにダルマ（正義）の助力で欲望を制御するようにさせるだろう。しかし、個々人は自分達自身の欲望を重要視する。これが人生に直面している人のもう１つの謎である。この謎に対する人工の方法は文化（サンスクルティ）と呼ばれている。自然の目的は、人間の肉体的精神的能力を開花させることと、人類の進歩のために、そのような能力を用いて子供をもうけることである。

もし私達がこの真理を理解せず、この真理のために活動しないならば、個人も社会も混乱するだろう。全ての宗教は、マハトマ（偉大な魂）達は天性の本能に従って開花する、全ての人は彼らからこの理解力と修養法を学ぶべきであると説いている。これはヒンズー教では「ダルマ」、仏教とジャイナ教では「シーラム」、キリスト教徒と道教では「道」、モスリム（回教徒）達によって「シャリアス」と呼ばれている。

ブラーマチャリヤ（独身期）その他の４つのアシュラマ（人生の段階）は、マハリシ（大聖仙）達によって定められた修養的生活の方法である。この場合、世俗的関係とサダナは決して矛盾しない。世俗的生活はパラマルタのための１手段となり、霊的生活は国家のためになる良い生活法となるだろう。このような理由で、インド文化は全ての西欧文明がすたれたのに何千年も存在してきたのである。私達の文明は、完全なグル（霊性指導者）やアチャリヤ（教師）達から訓練を受ける伝統を無視するようになってから衰退しはじめた。調和し啓発された展望（グナナドゥルシュティ）

なしに、私達は個人的エゴ（利己心）でカルト（流行、憧れ、信仰）に走り、宗教の名の下に大きな荒廃状態におちいる。

数多くの悟った魂達が同じ時代に生きていたのに、彼らの間に何の論争もなかったことは驚きである。この訳は、最善のカルトだけが当時広まっていたからである。『グルギータ』は、知識を誠実に渇望する学徒は色々な花から蜜を集める蜂のように、色々な教師から知識（グナナ）を集めるべきであると明言している。スリ　クリシュナはアルジュナにギータ（４章３４節）の中でこのように命じた。ラグー家系の師バシシュタはダサラタ王に、王子スリーラーマをビスワミトラ師と一緒に送り出すよう命じた。スリ　ビヤーサは息子スリ　スーカ　マハリシを、十分な知識を身につけるようジャナカ　マハラジャ（王）の許に派遣した。スリーラーマは森の中で全てのリシ（賢者）達を礼拝した。バガヴァンタムの１１番目のスカンダの中で、アヴァドゥータは２４人のグルから知識を集めた。このことによって、学ぶ者は、グル達は様々な姿をし、方法は異なっているけれども、その知識は色々な植物の色々な花の蜜のように同じであるという真理に気付くのである。

その時こそ、私達は崇拝の的や議論の違いがなくなるだろう。「最善の知識があらゆる方向から私達に訪れますように」が、ヴェーダのリシ達の祈りである。「アノ　バドラ　クラタヴォヤストゥ　ヴィスワタ」。

もし私達が多くのマハトマに仕えることになるならば、まず始めに、その原則の真の価値を知らねばならず、又、私達はその原則に関心をもたねばならない。その時、私達はどのように真のギナニー（智者）達が出現するかを知るに違いない。でなければ、私達は間違った道を歩み、完全な聖者のような装いをして現われる全ての人に仕える危険が生じる。私達にこのことを銘記させるために、スリ　ビヤーサはバガヴァータムの中に数多くの完全な聖者達の伝記を書いた。私達はペリヤ　プラナムの中で６３人のサイヴァ（シバ神崇拝者）聖者の伝記を、タミール語で読むことができる。同様に、１２人のアルワール（聖者）の伝記も読むことができる。真のシッダプルーシャ（超人）達は死を超越しているので、もし私達が帰依心をもってその方達の伝記を読むならば、超人達の祝福を受けるだろう。７日で死ぬと運命づけられたパリクシット王は、スリ　スーカヨギによって、バガヴァータムを信仰心をこめて聴くよう助言を受けた。シルディサイも又、その最後の日々に、ビジャヤナンダにバガヴァータマを読むよう命じた。

もしこの偉大な真理を認めないならば、私達はスリ　スーカやシルディ

のサイババよりも自分達の方がよく知っていると考え、帰依心をもって偉大な聖者達の伝記を読むことなどのサダナの手段を一向に重視していないのである。スリ　ラマナ　マハルシもまた、マハトマ達の伝記やその教えを読むことはその方達に直接会ったことになると言った。スリ　ベンカイア　スワミィもまたある帰依者に、スリ　ポトゥルリ　ベーラブラフマンの伝記を読みなさいと言った。スリ　ベーラブラフマン　ガルはカラグナナム語で自分はダッタの顕現であると書いた。ダッタの第２の顕現スリ　ナラシンマ　サラスワティもまた、自分は「スリ　グル　チャリトラ」の姿の中にいるから、帰依心をもってそれを読むことは読者に肉体的精神的高揚と自分の祝福を受けるだろうと約束した。

私達は他の宗教にも同じ伝統を見出す。聖書とコーランの中で、私達はその宗教に生きた「プラバクタ（至高信者）達」と呼ばれる偉大な聖者の伝記を読む。このように、それらの宗教は、信者達に信仰心をもって彼らの伝記を読むことを命じている。

偉大な聖者達の間に存在する愛と思い遣りは、彼らの帰依者達にも示されている。いつも白いコラ布を身につけていたスリ　サイババはある日従者達に、カシャヤ色の布を持ってくるよう命じた。しかし、彼はその日は、従者達によって渡されたカシャヤ布を着なかった。少したって、グル　ゴラフ　スワミィの弟子スリ　ムレサーストリがやってきた。しかしムレサーストリは、サイババはモスリムではないかと疑った。その時、スリサイは、いつもカシャヤ色のローブを着ていた彼のグルの姿で彼の前に現われた。こうして、スリサイは彼の頭脳を改心させたのだった。グル　シッダローダの弟子がシルディサイの許を訪れた時、サイは皆に果物を配り、その弟子を指差して、「彼は偉大なダルバール（聖者）に所属している」と言った。

スリサイはアカルコタ　スワミィ、タジュディンババ、ハジャラト　ババジョン、ナラシン　マハラジャ等のような同時代人に、大きな敬意と好意をもって対応した。アカルコタ　スワミィの弟子アーナンダナス、ガンガギール、ハジャラト　バンネミア、シャムシュディン　ミア、アメールディン（ナンデド）、ラーマ　ムルティ　マハラジャ、ガジャナナ　マハラジャ、ドゥニバラダダ等は、シルディのサイナスのダルシャンを愛と思い遣りをもって受けた。マハトマ達の間の愛と彼らのサイナスに対する尊敬はそのようである。

この原則は今日でも当てはまる。シルディサイの伝記の中で、私達はチバタム　アンマ、スリ　ベンカイア　スワミィ、マイー　アンマ、ラミレディ　タタ、アナスーヤ　マタのようなアヴァドゥータとブンディ、チ

ララ、クッダパのアバドゥータ達、スリ　グナバリ　マハラジ、アカルコタのスリ　ガジャナナ　マハラジ、ランガンナ　ナブ　ガル、スリ　パカラパティ　グルブ　ガル等が、いかにスリ　サイナスと彼に仕えた私や他のサイ帰依者達を尊重し、思いやりをもって処遇したかを知ることができる。アッタールと呼ばれるスーフィ教のマハトマは、マハトマ達の伝記の中で、その伝統を書いている。

この点、私達はスリ　ベンカイア　スワミィがビジャヤナガールのサイババ寺院を訪ねた時に行った霊的原則についてよく考えなければならない。読者はこのことの詳しいことをこの本で読むだろう。『グルチャリトラ』と『サイリーラムルタム』を尊重し信仰心をもって読むことで、スリスッバラマイアはスリ　ベンカイア　スワミィに直接会うことになり、彼に仕え、スリ　ベンカイア　スワミィの伝記を収集するための絶好の機会を与えられた。そのことはまた私（サイババの召使）にもこのような霊的不思議を含むスリ　スワミィの伝記を著す機会を齎した。これはひとえに、彼の帰依者達は他の数多くのマハトマ達の伝記と教えを読み、最善のサムスカーラ（浄化的作用）を受けるべきであるとするスリ　スワミィの御意図に他ならない。でなければ、なぜ彼は私にこのような好機を与えられたのだろうか？アッカルコタ　スワミィ、ハジャラト　タジュディンババ、スリ　ガジャナナ　マハラジャ、チバタマ　アンマ等のような他のマハトマ達でさえ、これらの理由の故に私に彼らの伝記を著す機会を与えられている。

2

全ての宗教の真髄は、神への堅い信仰をもち、いつも神を忘れず、私達の全人生を最善の満足感をもって過ごすことである。このことを十分に成就している人達はマハトマと呼ばれている。全てのマハトマと全ての聖典は、その状態を達成して始めて、私達は永遠に悲しみから解放されると述べている。全ての生き物は、生涯を通じていかなる悲しみや不満もなく生きることを望んでいる。しかし、そのことを達成する方法は非常に精妙である。もし私達がその精妙な方法を知りたいならば、その状態に到達した人達に頼らねばならない。たとい私達がその方達が私達に与えたいと望む全てのことを受け取るために、その方達に頼るとしても、私達はその方達に仕える方法を知らねばならない。それは、私達が相応しい態度でその方達に近付き仕える時、その方達によって教えられるに違いない。もし私達がその方達に仕える方法を知らないならば、私達は丁度木々から落ちてしまう花々のように、私達のグルから離れて行く。それは、私達が頼りにしたマハトマが私達の奉仕に満足しなかったことを意味するのである。

私達は、サダカが完全なアートマグナニ（アートマの知者）に頼ることがいかに重要なことか書き留めてきた。全てのブラーナ（神の解説書）は、カリユガの時代には必要な知識ももっていないのに、自らをサッドグル（真のグル）と宣言して、名声と金を追い求める数多くの人々が出現するだろう私達に警告している。たとえ私達が以前の数々の誕生での善行によってサドグルのダルシャンを受けるとしても、もし彼がすぐ前の前世で獲得された私達の浄化程度に相応しい場合にのみ、私達はよい結果に到達できるのである。

これらのサドグルの中で、最高級に属する方々のみが、「誰それはあなたのグルであるから、彼に近付きなさい」と求道者にはっきり助言を与えることができる。例えば、アッカルコタ　スワミィはある帰依者達にシルディのサイナスに頼るようにと言い、別の帰依者達にはスリ　ラマナマハルシの許に行くように言った。ある時、タジュディンババはバブ　サヘブ　ブーティに、「あなたのグルはシルディにいる。早く彼の許に行きなさい。どうして私があなたの邪魔をするでしょうか？」と言った。もしマハトマや神が私達に助言を与えてくれなければ、私達の過去の浄化程度に相応しいサドグルが誰であるか分からない。ラマクリシュナ　パラマハンサはカーリマタ（崇拝する女神）に、アドバイタ（一元論）の体験を与えてくださいと懇願した。しかしカーリマタは、「私はあなたのためにここにベーダンタ哲学のグルをつれてきました。あなたは彼から必要な伝授を受けなさい」と言った。ラマクリシュナ　パラマハンサはスリ　トタプリから伝授を受けるや否や、深いニルビカルパ　サマディ（最高の瞑想）状態を３日間体験した。

しかし私達は世俗的な心の状態であるので、私達の選んだ神のダルシャンを得るよう求める資格をもたない。その資格は恐らく前世でのサダナによるのだろう。例えば、ラマクリシュナ　パラマハンサは７才の時、雲とその下に鶴の群れを見た。彼はその雲はスリ　クリシュナで、鶴達はバラクリシュナ（少年クリシュナ）の首の周りの真珠であると思い、深いサマディ（三昧）状態を味わった。このような偉人も、マザー　カーリ（カーリ女神）のダルシャン（見ること）を得るために１２年間の連続するサダナが必要だった。

もし世俗的な心の私達が『グルチャリトラ』を信仰心をもって読むならば、ダッタ神は夢のビジョンを与え、「私達が頼るべきサドグル」を告げて下さる。例えば、サダカ（求道者）達が『グルチャリトラ』を信仰心をもって読んだ時、ダッタ神はあるサダカ達にはシルディサイに、他のサダカ達にはアッカルコタ　スワミィに頼るよう命じた。神はマンガブ（マハ

ラシュチラ州）のバスデバ　サーストリに「あなたはナラソババディのスリ　ゴビンダ　スワミィの許に行きなさい」と命じた。このバスデバ　サーストリはそのサドグルの恵みによりマハトマになった。ダッタ神は、『グルチャリトラ』を信仰心をもって読んだスリ　ランガバドゥータにスリ　バスデバナンダ　サラスワティに頼るよう命じた。

これらの神聖な指示に従った全ての人がマハトマになった。私達はサドグルへの仕え方を知るようになるだろう。私達は『グルチャリトラ』を信仰心をもって読むことによってのみサドグルに仕える資格を身につけるだろう。それがサドグルを選ぶ唯一のよい方法である。私達はその幸運をつかむ前に、マハトマ達のダルシャンの祝福を受けるだろう。

もし私達がマハトマ達に仕える方法を知らないならば、次の２点で間違いを犯すだろう。

１）常にマハトマ達の恵みによって、私達は自分達の願望を叶えることができ且つ全ての障害を取り除くことができる。しかし私達は、彼らから知識を得る必要はなく彼らの教えに従う必要もないという誤った考えを抱きがちである。私達は生涯で行った行為に応じて、次の誕生で苦しみと喜び得る。私達は心の好き嫌いに従って善悪を行う。全ての生き物、全ての物の中には唯一なる神が存在している。私達はこの真理を認識することができない故に、ある物事は好み他の物事は嫌う。ということは、好むのと嫌うのは私達の無知のせいであるということである。これらを通じて、私達はプニヤ（善）かパパ（罪）を獲得する。私達は死と誕生の輪廻に入り、各誕生で喜びと悲しみを味わう。無知のせいで、私達は喜びを得た時、より多くの罪を犯す。そうして、私達の善行の量は段々と減少し、罪の量は増加する。人が勘違いするように、私達の善行は、悪業を容認しないだろう。私達は、カルマの量と質に応じて、別々に必ず、その結果を刈り取る。

もし私達がマハトマ達に頼るならば、彼らはこの誕生に他の誕生でのプニヤを持ってきて、現在の誕生での悲しみを次の誕生に移して、私達に平安を齎して下さることができる。しかし、もし私達が永久にどんな悲しみもない平安を得たいと望むならば、知識で無知を追い払い、プニヤもパパもしないままでいなければならない。マハトマ達がそうするのは、私達がニシュタ（落ち着き）とサブリ（識別力）をもって彼らに仕えることで、彼らが１時的に私達の悲しみを取り除き、喜びを与えることを感謝すると思うからである。そのようにする帰依者達は、自分達の責任を知って父親を喜ばせる子供達に似ている。彼らは、サドグルには最愛の者となる。でなければ、帰依者はその責任を知らない子供達に似て、父親の笑顔を奪い

取るだろう。ある時、シルディサイは「私はあなたに１度か２度は言う。もしあなたが私の言うことを聴かないならば、私はあなたをあなたの運命に任せるだろう」と言った。

スリ　アバドゥータ　ベンカイア　スワミィもまた「私は、もし彼らが行こうとしているなら行かせる」と言った。アバドゥータ　ピッチェンマは「もしあなたが牡牛のように食べ、丸太のように寝転がるならば、どのようなよい事をあなたは得るでしょうか？」と言った。

２）もし私達がサドグルに仕える方法を知らないならば、なにか他の道でも間違いを犯す可能性が高い。神は、姿も名ももたずどこにでも存在されている。その姿と名を認めることしかできない私達のために、神はサドグルのような姿と名をもって私達に現われる。私達はそれを「グルタットバム（グル神）」と呼ぶが、そのグルタットバムはダッタ神である。スリーパダ　スリーバラバ、ナラシンマ　サラスワティ、マニキャプラブ、アッカルコタ　スワミィ、スリ　シルディ　サイババその他のようなその顕現は、サドグルと様々なダッタ神の姿として常に人類に貢献している。

彼らは姿と名をもって現われているが、彼らはそれらのみに制限されてはおらず、遍在であり、そのリーラによって知られている。もし私達がこのことを認識しないならば、私達はグルも私達と同じに姿と名をもった人間であるという誤解をもつようになり、他のマハトマ達に不敬を表すならば、そのことは、私達が他のマハトマの姿で現れている神を拒絶することを意味する。その時、私達は、サドグルの真の実在を拒絶することになるだろう。

もし私達がこの欠点を克服したいと望むならば、幾人かのマハトマの伝記とその教えを読無とよいだろう。私達は多くのマハトマを知った方がよい。もし私達が、金の本当の性質を知らなければ、金の指輪（サドグル）の真の性質を見分けることはできない。蜜を知ることのできる蜂は、行って蜜をもっている全ての花から蜜を吸うことができる。蜂は花の形や名を気にせず蜜だけを吸い取る。そのように私達は彼らの伝記から、色々のサドグル全ての姿の中の、唯一なる神の存在に気付くようになるだろう。私達は彼らに教えられた通りに、私達のサドグルに仕えなければならない。バガバータム（１１章）で、アバドゥータは２４人のグルから知識を得たと言っている。ギータの中で、スリークリシュナはアルジュナに、宇宙との一体化を経験したことのあるサドグルに会って仕え、彼の疑いを晴らすようにと言った。もし彼がそうしたなら、グル達は彼に教えを説くだろう。彼は、複数で言っている。この中に、もう１つの原理が隠されている。

たとい私達が数多くの教師に会い、その教えを受けたとしても、それは私達が自分のグルとしているマハトマの恩寵によっているということである。ナグプールの住人バブ　サヘブ　ブーティは長年サイナスに仕えた。

ある時サイババは、彼はシェガオンのガジャナン　マハラジの姿で恵みを受けるだろうと言った。実際、ある時シェガオンのガジャナン　マハラジャがナグプールに来て、数か月間ブーティの家に滞在し、彼に奉仕する機会を与えた。同じくサイの言葉で、レゲはタジュディンババのダルシャンを受けるためナグプールに行った。当時タジュディンババはラジャ（王）の宮殿で生活していたので、ダルシャンを受けるのは非常に難しかった。それに加えて、何千もの人が宮殿の前で彼のダルシャンを待ち受けていた。レゲは夕方４時の汽車で発つ予定にしていたので、３時までそこで待とうと思った。３時数分前、タジュディンババの１人の帰依者がレゲの許に来て、ババが彼に別に特別なダルシャンを与えると言って、彼をババの所に連れていった。

別の折、プーナのある家族がカカ　マハジャニ　マハラジャに会って、自分達の家に来て下さいとお願いした。しかし、彼は彼らの願いを拒んだ。その家族は彼らが長年崇拝しているシルディのサイナスの許に行って、カカ　マハジャニのことを話した。サイは家族に祝福を与え、「心配いらない。カカ　マハジャニは、あなた達の家に来るでしょう」と言った。その後、カカ　マハジャニが奇跡的に彼らの家を訪問し３、４日間滞在した。サダカ達はこのことを忘れないだろう。いかなる女性もその貞節ゆえにのみ尊敬される。もし私達がこの原則を知らず、又、このことを覚えていないならば、数多くのマハトマに会ったとしても、動揺する気持ちしかもてないだろう。悟りを得た魂であるサドグル達は、全ての人を彼ら自身の姿と見る。そのため彼らは、自分達はグルであり他の人達は自分達の弟子であると思わないだろう。そのため彼らは私達に、決してどのように仕えるべきか言わないだろう。彼らはよい帰依者達をもった時にはいつも、彼らがどのようにグルに仕えていたか話すだろう。それが私達にとって唯一の方法である。それが彼らの恵みを得るための唯一の方法である。

マハトマ達の伝記の全てを読むことは非常に難しいことなので、私達は少なくとも『グルチャリトラ』と、シルディ　サイババの伝記と『スリサイ　プラボダムルタム』を読むべきである。私達は、サドグルに仕える方法を知るだろう。もし私達が、料理の仕方とプジャの仕方を知らないならば、サドグルにナイベディヤとセバを、捧げることができないだろう。もしラジャの息子が自分の責任を自覚しないならば、彼は父王から王国を受け継ぐことはできず、父王の他の全ての子供達と同じに、王から食物と

衣服を受け取ることができるだけだろう。その責任を知っていて、才能のある他の王子が王国を得るだろう。同じように、グルに仕える方法を知っている者だけが、グルから最善の結果を得ることができるだろう。

私達はゴラガムディを訪問した時、時間を浪費してはならない。私達のスワミィの前で、スリ　スワミィの伝記を読み、神聖な火の場所（アグニグンダム）とサマディ　マンディールの周りを回ってする礼拝（プラダクシナ）を行うべきである。私達は自宅でも毎年８月２４日のアラダナの日が始まる１週間前に、スリ　スワミィの伝記を読むというパラヤナを始め、アラダナの日に完了することができる。グルプールニマの間に『グルチャリトラ』を信仰心をもって読むことと、ダサラ祭からビジャヤダサミの日まで「サイリーラムルダム』を読むことは、肉体的霊的の両面で私達に多くの利益を齎すだろう。

２３　スリ　サイとスリ　スワミィ

この両者はあらゆる面で同一である。両者は独身である。両者はカースト（社会的階級）と宗教上の信条を超越している。両者はもえ続ける神聖火の崇拝者である。両者はアニケタ（永住する住まいを持たない人）である。彼らはバクタ即ち帰依者達を救うために同じような手段を用いた。彼らの教えとリーラ（奇跡）は同じである。事実、一方の伝記を読まないでは、他方の伝記は十分に理解できない。

ある時、スリ　スワミィは私に「北方に私の血縁者がいた、彼も火の崇拝者だった」と話した。両者は謎のような言語を話す。彼らは自分達のマハサマディ（肉体的死）の日を予告したばかりでなく、マハサマディ後でさえ帰依者達を救っている。その伝記を書くよう私（パラドワジャ）に霊感を与えたサイババは、さらにこのアヴァドゥータの伝記も書くよう霊感を与えた。

この本の中で、私はスワミィのような他の聖者達とそのリーラに関して言及をした。それには強い理由がある。もしある帰依者が、１人の聖者の伝記だけを読むならば、そのような聖者の恵みを得ることに夢中になり、盲目的に聖者に従うだろう。しかし、シルディサイは「真の聖者は非常に稀である」と言っている。バガバッドギータもまた同じ事を言明している。このように、無邪気なサダカ達が偽グル達の餌食になる危険性がある。だから、まずサダカ達はスリ　ベンカイア　スワミィやスリ　サイナスの

ような完全な聖者の伝記を読むべきである。そうすれば、いわゆる籾と籾殻を見分けることができるようになるだろう。バガバッドギータはサダカ達に、そのような完全なグナニー（知者）達に頼りなさいと助言している。ブラーナとバガバッドギータは、サダカ達が偽のグルと完全な聖者とを判別できるよう、そのようなグナニー達のことを説明している。

そればかりでなく、もし私達が『グルチャリトラ』と『スリ　サイリーラ　ムルタム』を帰依心をもって読むならば、きっとそのような完全な聖者達のダルシャンと祝福を得ることができるだろう。読者はこれら２つの本でばかりでなく、『サドグル　ジョーティ』の中でもその証明を見ることができる。

これらの本を読むことには、もう１つ重要な利点がある。前生のプニヤ（功徳）によって、私達はそのような完全な聖者に奉仕する機会を得るのかもしれない。しかし、無知故に、人は聖者に奉仕するという自分の幸運を軽く見積もり、聖者によく仕えて祝福を十分に受けることができなくなりがちである。しかし、これらの本を読む人達はそのことを十分に知るだろう。

これらの本のことに言及しまたそのような本を著すことにはもう１つの動機がある。そのような本を読む人々は、そのような偉大な聖者達に会いたいと望む。そのことは、様々なサドグルの姿をとるグルタットワ（グルなる神）に帰依することを意味する。もし多くの人々がある国で多年そのようなサドグルのダルシャンを望むならば、多くのそのような真のグルがきっとその地に生まれるだろう。もし赤子が母親を求めて泣いているならば、赤子の許にすぐに来て、あやさない母親があるだろうか？

この原理を理解すれば、全ての人が自分達自身のためにそのような書を読むばかりでなく、それらを他の人達にも読ませることが義務でなければならない。自分自身を高めるとともに社会に幸福を齎すには、これ以外に方法はない。このような理由で、そのような偉大な聖者の伝記をもったバガバータムは、学者達によって霊的文献中の最善の書とされている。

エッキララ　バラドワジャ

用語解

アンマニ:Ammani:インドでは女神はアンマニと呼ばれる
アウディナラーヤナ:Audi Narayana:不変霊の名
アッボ:Abbo:驚きや驚異を表す言葉
アハ:aha:よい気持ちを表す語
アンダ ピンダ ブラフマンダ:Anda Pinda Brahmanda:卵と胎児と宇宙
アンナ サンタルバナ:Anna Santharpana:貧者達に無料で食事を与えること
アクシンタル:Akshintalu:ウコンをまぶした米
アベ:Abbe:否定的意図を表す語
アビシェカ テールタ:Abhisheka theertha:毎日墓石(サマディ)は水で洗われるが、その洗った水のこと
アボ:Abbo:痛い時に発する語
アラダナ:Aradhana:1年1度の礼拝
ベンガル グラム:Bengal gram:ベンガル豆。この粉は石鹸の代りにも用いられる
バガバット タットバム:Bhagavat Tatvam:神の原理
ビレム:Bilem:トンネル
ボンマ バツ:Bomma patu:その型の彫像
バンディラ ドディ:Bandila Doddi:畑に侵入した家畜を入れる政府設置の施設。家畜の持ち主は罰金を払って家畜を受け取る
バニアン:Banian:男性の胸に着る下着

コッド ピース:coad piece:陰部を隠すために着る下着に使われる布
チャベルズ:chappels:インドの履物
ダイビ サンバダ:Daivi Sampada:よい資質に対する名
ダナ:Dana:何かを無料で与えること
デイ:Dhey:牛を追い立てる時にハッスル言葉
ドバティ:Dhovathi:男がズボンの代りに腰につける衣類
ドービ ヨーガム:Doby yogam:洗濯人の職業
ドゥブドゥク:Dubuduk:口で演奏される楽器でつくられる音の1種
ドリ:Doli:ガンニー袋で作られた担ぎ輿籠。歩けない人を運ぶ輿籠。
ディビヤム ダダミ チェシュル:Divyam Dadhame Cheshuhur:奇跡的な視野。目を喜ばせるもの

ドンマ:Domma:牛や羊の病気
デークシャ:Deeksha:人々が神の恵みを得ようとして行うある種のサダナ(修業)で、その期間はデークシャ期間と言われる
デーバ ドゥイジャ プラグナヤ プジャナム:Deva, Dwija, Pragnaya, Pujanam:デーバは神、ドゥイジャは神実感を

しようと努力する人、ブラグナヤは聖典によって神実感しようとする人、ブジャナムは礼拝
ギンギリ オイル:gingilly oil:小さな粒から得られ、頭の油浴に用いられる
ジャイアント ラグナム:gaiants lagnam:よくない時間
グラムーバダーポンガル:gram-vada-pongal:豆とひよこ豆の入った米料理
ゴッド ヘッド:God head:主神
ギリジャン レディ:Girijan lady:山岳民族の女性
ハリダス:Haridas:額にマークを付けている職業乞食
ハンプティーン:humpteen:多くの
フンディ:Hundi:参拝者達によって捧げられる金銭を入れるための鉄製の箱
ジョギ:Jogi:人々の階級の名
ジャンガム:Jangam:上記と同じ
カンチ:kanchi:都市の名
クムクム:kumkum:インドの婦人達が額に付けている赤い色の粉
コトル:kotlu:クロール、10万
カンダ ヨガム:khanda yogam:体から手足、頭を取り外し、その後、再びそれらを集めて完全に正常な体になる超能力
カキ シャツ:kaki shirt:男性用の衣服で、腰の上に着けられる
ククシナ:kukshina:人の空腹を満たすために支払われるお金
クルパカルドゥ:Krupakarudu:慈悲深い人
マンダララダナ:Mandalaradhana:40日間の礼拝
マンダラム:Mandalam:40日
アラダナ:Aradhana:礼拝
マラ:Mala:インドの階級の名
マヌグル:Manugulu:インドの重量の単位
マンガチェカ:Mangachekka:根の粉は石鹸の代りに用いられる
マハプルシャ:Mahapurusha:自らの努力によって神を実感した人達
ムラリ:Murali:竹製の楽器で、口で演奏する
ムクティ ドゥワサム:Mukthi Dwasam:束縛から解放する天国の門
マンガリヤム:Mangalyam:結婚式の時に花婿の首の周りに着けられる金製の記念品
マスティ プラント:Musti plant:森に生える毒のある木
マスタン バリ ダルガ:Mastan valli Darga:マスタン バリは人の名。彼は偉大な聖者である。彼はずっと以前に肉体を去った。彼の体が保存されている場所がダルガと呼ばれている
ナダスワラム:Nadaswaram:口と指で演奏する楽器
ナタットバラ エテ スリヨ:Natatbhara yethe Suryo:スリヨは太陽神。そこは太陽よりも明るい所である。もし人々がその場所に入るならば、帰ることはできない。
ナイミティカ アバタラ:Naimithica Avatara:ある目的をもったアバター(神の化身)
ネリニ:Nerini:牛や羊の病気

ナガジェムドゥ ソーン:Nagajemudu thorn:刺が一杯ある乾燥地の植物で、山羊や牛は刺のせいで食べない
パスプ:Pasupu:ウコン(黄色である)
パディガル:Padigalu:マシェナルと共にスリ スワミィの言葉で、私達には判らない言葉である
パタラ ローカ:Patala loka:インド神話で、地下にあると信じられている世界
パンダル:Pandal:太陽光をさけるための日除け
プラガム:pulagam:ボンガル。ひよこ豆
パタ テールタム:patha theertham:足を洗うこと
ペラピディ:Pelapindi:トウモロコシで作られた料理
プッラネール:Pullaneeru:今日のご飯の残りは翌日のために、幾らかの水を注いで保存されるが、そのご飯の中の水
パドゥカ:paduka:偉大な聖者の履物はパドゥカと呼ばれる
レディ カースト:Reddy cast:インドの宗派の名
ラギ:Ragi:穀物の名
サンパンナトバム:Sampannatvam:よい資質に対する用語
シュラダトラヤ ビバガ ヨガ:Sradhatraya Vibhaga yoga:インドの神聖書の1つはバガヴァッド ギータであるが、シュラダトラヤ ビバガ ヨガはその本の1章
サトリヤム ダール:Satriyan dar:その村の公的支配者(村長)
サトプルシャ:Satpurusha:偉大な人、聖者
サイリーラムルタム:Saileelamrutam:偉大な聖者サイババの伝記の本の名
サダラナトバム:Sadharanatvam:質素
サドグル セバ:Sadguru Seva:グルや教師に対して行われた奉仕
シカヤ パウダー:Shikaya powder:石鹸の代りにこの果実の粉を体に擦り付ける。
スポット レシート:spot receipt:寄付金に対してその場で出される受領書
スブラマルガ:Subramarga:純粋な道。神聖な道
ティルバルール:Tiruvallur:都市の名
タットバル:Tatvalu:特別な韻律をもつ詩型の名
タランブラル ライス:Talambralu rice:結婚式の時に花嫁とと花婿が互いの頭の上に載せる米
バディドンダ ワーム:Vaddidonda Worm:害虫の1種の名
バラダラジャ スワミィ:Varadaraja Swamy:カンチで崇拝されている神の名
ベーララガバ スワミィ:Veeraraghava Swamy:テルバルールで崇拝されている神の名
バジラ カルル:Vajra Karur:インドで、ダイヤモンドを採掘できる都市の名
ビスワ ビャビ:Viswa Vyapi:遍在の霊
ビスワ:Viswa:宇宙
ビヤビ:Vyapi:宇宙中に広がった
バストゥ:Vasthu:家の建築に関わる理学
ヤグナ:yagna:ギーやココヤシ等を神聖火に規則的に捧げて、何かをすること
エラム:Yellamm:各村は神によって守られていると信じられている。その村を守る神はエランマと呼ばれている

ヤーマ パサム：Yama pasam：死神ヤーマが死者の霊魂を連れて行くのに使うためにもっている綱
ザリサリー：zari sari：銀の糸で作られているサリー

日本サイババ研究会出版図書目録（TEL０８９８－５４－３６１０）

１、サイババは世界の危機を救う：ペギー・メイソン、ロン・レイン夫妻：渡部訳　1600円
３大神格サイババアバター：シャクンタラ・バルー：渡部訳　１８００円
４、神の化身サティアサイババゴッドアズマン：Ｍ．ラオ：同１７００円
５、夢のサイ体験：ラーマラオ：同　１５００円
７、プッタパルティ：Ｖ．バルー：同　１４００円
８、サイババ　ザ　マスター：Ｅ．バラドワジャ：同　１５００円
１０、大聖サイババと心霊科学紹介：渡部英機　４００円
１２、シルディ　サイババ　アバター：Ｄｒ．Ｓ．Ｄ．ルヘラ：渡部訳 450円
１３、スリ　シルディ　サイババと生きた私の生涯：シバンマ・タイ：同　350円
１５、ペギーの２つの世界：ペギー・メイソン：同　３００円
１６、生まれ変わり：ジャナキ・バラブ・パッタナイク：同　７００円
１７、クリシュナ物語：　８００円
１９、インド霊性教育まんが　３５０円
２０、あなたと私へのサイ　メッセージ：ルーカス・ラリ：渡部訳　600円
２２、聖なる使命、神性ビジョン：サイ・ウシャ：同　７００円
２３、ババ、サティアサイ：Ｒａ．ガナパチ：同　１５００円
２５、スリ　ベンカイア　スワミ：Ｐ．スッバラマイア：同　３００円
２６、尊愛の母神サイババ：ジャヤンティ・クマリ：同　１５００円
２７、サイババ　アバターとの３０年：ハワード・マーフェット：同 1200円
２８、スリ　サティアサイの奇跡と霊性：サロジニ・パラニベル：同 1200円
２９、神愛の９つの宝石：リトル・ハート：同　１０００円
３０、スリ　ベンカイア　スワミィの生涯：Ｐ．スッバラマイア：同 1000円

アバドゥータ　リーラ

バガヴァン スリ ベンカイア スワミィの生涯

平成１４年７月７日　　定価　壱千円
（キリスト生誕２００２年）
著者　Ｐ．スッバラマイア
訳者　渡部　英機
発行所　日本サイババ研究会　〒７９９－２３０２
愛媛県越智郡菊間町種３１４５
TEL　０８９８－５４－３６１０
郵便振替口座番号　０１６３０－０－３５２７５

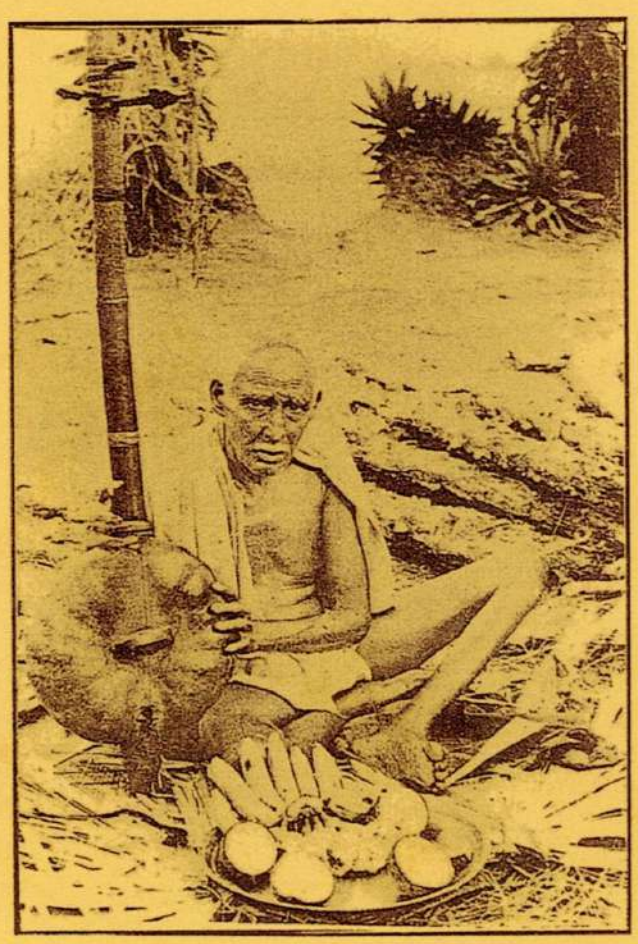
印刷所　社会福祉法人　白鳥会　東予希望の家
TEL　０８９８－６６－４６５６
FAX　０８９８－７６－５０６０

紹介したい団体名

ﾗﾏﾗｾﾝﾀｰ:THE RAMALA　CENTRE:The old stables, dod lane, glastonbury,
サティア　サイ　オーガニゼーション　ジャパン出版部　sumerset, BA6
〒１５３－００４３　東京都目黒区東山１－３０－８　8BZ, U.K.
TEL　０３－５７２１－０４６８　FAX　０３－５７２１－０４５９
サイ　ビルディング（５階）〒１０６－００３１
東京都港区西麻布３－１－８８　TEL０３－３４０８－３１８８
（財団）日本心霊科学協会：新宿区上落合１－１２－１２TEL03-3367-4095

AVADHUTA LEELA

LIFE HISTORY OF
BHAGAVAN SRI VENKAIAH SWAMY



P. SUBBARAMAIAH